
オレが異世界で獣とランページ

高羽 忍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

オレが異世界で獣とランページ

【Nコード】

N4585T

【作者名】

高羽 忍

【あらすじ】

異世界転生モノ。

よくある転生モノと同じように転生してなんかよくわからんけど懐いちゃった獣とファンタジーな異世界で色々やるお話。

超安心の主人公最強物です。チート、ご都合主義、ハーレム等の要素も含まれます。タグをよくご覧の上、暇潰しにでもお読みください。

追記：この作品はわりと生々しい性描写があります
そういったものが苦手な方はご注意ください

登場人物紹介（第30話時点）

ご希望もありましたので、簡単に登場人物紹介です。
ある程度増えてきましたら随時更新しようと思います。

現在第18話までの主な登場人物を記載。18話まで読んでないと、微妙にネタばれになることが書いてあったりするので、ご注意下さい。

アベル・アルベルト：転生者。猿。

現代日本で死んで、異世界にて記憶を持ったまま生まれ変わる。
顔立ちはよくあるギャルゲ、エロゲの主人公のように顔が影で隠れている人。ご想像にお任せします。身長は170程度。

やたらとハイスペックな身体に、実は英雄だったヨーゼフの教えと、
魔物とのエンカウント率激高な森での生活が組み合わさり、超強い。

王天虎と呼ばれる白虎。ジンを従える。

性格は中庸。良い意味でも悪い意味でも自分本位。

ヨーゼフ・アルベルト：アベルの育ての親。ハイパー爺さん。元英雄。

訳あって魔物が跳梁跋扈する森で相棒である狼グルと過ごしていたが。ある日森の中で捨て子のように放置されていた赤子のアベル

を拾う。

見捨てるのも忍びなく育てるうちに情が移り、アベルの筋が良かったのもあって、冒険者時代の自分の全てをアベルに教えた後、死去。

ジン：虎。白虎。がう。

全長3mほどの巨大な白虎で、”地を統べる皇狼、天を駆る王虎”などと称される、後者の方の王天虎という種族。

人間並み、もしくは人以上の知恵を持つ賢獣という獣の中でも特に有名かつ強力な獣。

幼い頃にアベルが干し肉を与えたら、何でか懐いてしまった。猫族や虎族の獣人に崇拜されている。

幼い頃は真っ白けで猫みたいだったが、大きくなるにつれて立派な虎模様のついた白虎に成長した。

本気出すと嵐を纏うらしい？

グル：狼。もののけ。

”地を統べる皇狼、天を駆る王虎”と称される前者の方。地皇狼という種族。でかい狼。

ヨーゼフの相棒であり、若い頃は暴れまわったものじゃよ。

体毛は白く。陸上では最強の種族なんじゃと言われるくらい強い。

犬族や狼族の獣人に崇拜されている。

本気出すと雷を纏うらしい。角無いジン ウガみたいなん。

カザネ・ケイロン：鬼。角。素直クール。

肩ほどまでの黒髪と黒い瞳。やや切れ長の目。スタイル良し。

鬼族と呼ばれる頭に角が生えた一族の女性で、鬼族では中々珍しい冒険者。

鬼族は、高い身体能力を持つものの、大陸の他の種族から魔物との合いの子の種族だと言われ忌み嫌われている種族であり、殆どの鬼族は鬼ヶ島という鬼族のみの国家に引き籠もっている。

カザネは鬼族では珍しく、鬼ヶ島の外の世界に興味を持った鬼族で、冒険者として各国を見回っている途中、色々あつてアベルに助けられる。

角の数は一本で。鬼族には一本角と二本角の鬼族がいる。差は特に無い。

マーカス：猫族。ニヤ。黒猫。

アセナル王国の王都で魔獣、賢獣連れの宿泊客向けの宿屋『遙々亭』を営む、猫族の男性。

身長は人の小学生高学年ほどであるが、これで充分成人している。

二足歩行して喋れる巨大猫。といった風貌であり、身体も黒い体毛に覆われている。

アベル達が話す人々の共通語とは異なつた猫語を喋ることができ、

ジンと会話できる。

ジンを崇めている。

マーカスの奥さん：猫族

マーカスの奥さん。旦那の宿屋の手伝いをしている。名前はまだ無い。

シエナ：猫族。

マーカスの娘っ子。まだ幼い。

二足歩行で歩けるただの猫。共通語は不慣れで、よくジンとニヤンニヤン会話してるのが見かけられる。

ジン大好き。

クルツ・ロベイロ：ギルドマスター。シャキッと爺さん
アセナル王国王都アルハイムの冒険者ギルドの長。ギルドマスター。
冒険者時代のヨーゼフと面識があったらしい。
超偉い。

マール・アスペリア：エルフ。眼鏡。知的美人。
王都アルハイムの冒険者ギルドの職員。紫の髪と瞳で、長い髪をア
ップにしている身長170cm程のお姉さん。
色々あってアベルの担当官みたいな役割につく。
背が高いことを気にしている。ナイチチ。

フィリップ・フォルケ・アセナル：アセナル王国国王。金髪碧眼。
偉い。

アセナル王国の王様。若い頃は騎士団と共に魔物の討伐に行くく
らい武に偏りがちな人だったが。
歳を経るにつれて、知恵と落ち着きを併せ持つに至った。
善政を敷き、国民からの評判もいい名君と呼ばれている。

マルグリット・ティル・アセナル：王国の第二王女。金髪碧眼。な
のじゃ。

アセナル王国の第二王女様。王族らしい気品に溢れるが、淑やか
さはない。

英雄ヨーゼフの逸話が大好きで、子供の頃はヨーゼフみたいになる
のじゃ。とか言っていたらしい。

フィオリとランスロットとは、幼馴染のような関係。

フィオリ・グリム：宮廷魔術師。三つ編み。おっとり。

銀髪に銀の瞳。長い髪を三つ編みにした、見た目大人しそうな感じの、宮廷魔術師。

大人しそうな印象ではあるが、他の人からの話を聞く限り、大人しいだけの人ではなさそう。

マルグリット、ランスロットとは幼馴染のような関係で、幼馴染三人の中では一番年上。

ランスロット・オリガ：近衛騎士。イケメン。

マルグリット王女付きの近衛騎士。 宮廷魔術師のフィオリと共に、王国の次代を担うと噂される逸材。

マルグリット王女様超大事。 それ以外はわりとどうでもいい人。 剣と盾を用いた、堅実な戦い方をする。

マルグリット、フィオリとは幼馴染のような関係で、マルグリットと同じ年。

マリス・アルバ：宮廷魔術師見習い。 狐耳。 尻尾。

宮廷魔術師のフィオリに師事を受けている宮廷魔術師見習いで、狐色の髪をショートカットにして、黒のローブとワンドを持つ魔法使い。

人族ではあるものの、祖先に狐族の血が混じっている為、狐のような耳と尻尾が生えている。

上司であるフィオリの命令で、現在アベル達と共に行動を共にしている。

魔力量だけなら宮廷魔術師の中でもそこそこのものらしい。

ナーディア・レフリウス：ダークエルフ。娼婦。初めての人。
褐色の肌に、赤い瞳、銀髪、長耳といった風貌のダークエルフと呼ばれる種族の人。胸がでかい。

アベルの初めての人で、王都アルハイムの花街で娼館に務めていたが。

現在はアベルと契約を交わして、アベル専用の娼婦となっている。
夜の技術も凄いが、家事能力も凄い。

ゲオルグ・ハックマン：冒険者。無精ひげ。おっさん
人族とは思えないほどの頑丈な身体と身体能力を持つ、Aランクのチーム「バリエッタ」のリーダー。

彼が全力で大槌を振るうと、周囲が炎の魔法で爆撃したような有り様になるため、ついたあだ名が「爆心地」

そろそろ30近い年齢ではあるが、逆立った金髪に無精ひげ、言葉遣いの荒さにガラの悪さと、大人っぽさはあまり見られない
面倒見はかなり良い

ケイムス・シーケンス：冒険者。エルフ。魔法使い
さらさらの金髪に白い肌、エルフの特徴である長い耳に、整った顔立ちの美青年。Aランクのチーム「バリエッタ」の参謀兼副リーダーのような役割を務めている

魔法使いとしての技量もさることながら、物事の本質を見抜くことに長けており、そこに組み合わさった冷静な判断力と豊富な知識に裏打ちされた見識の深さがチームの窮地を幾度も救ってきたことから、「慧眼」とあだ名される

実はチームで最年長

ミア・ココット：冒険者。ニヤ。三毛猫

Aランクチーム「バリエッタ」の一員で、猫族の女性。他の猫族と同様、人族の子供と同程度の身長ではあるが、充分成人している
チーム内では偵察や情報収集が主な仕事であり、王国内のことならば中々の情報通。

他の猫族と同様、ジンに敬意を持っている

ドルトムント・サーヴルフ：冒険者。人狼。ふわもこ

Aランクチーム「バリエッタ」の一員で、人族と狼族のハーフ。狼族の方の血が濃いようで、屈強な人族程の体躯を銀色の体毛が覆っており、顔立ちも狼のもの

チームの中では俊敏な身のこなしを活かした機動型前衛としての役割を担っており、彼が敵をかき回したところにゲオルグの一撃を叩き込むのが、バリエッタの主な戦闘パターン
人見知りで、初対面の人とはほとんど喋らない

ローザ・エルセリア：冒険者。人族。弓使い

Aランクチーム「バリエッタ」の一員。魔力を矢とする、特殊な魔弓を用いる弓の名手

元々は剣と補助程度の魔法を併用したドルトムントと似たタイプの戦士であったが、チーム内でのバランスを考慮して、とある依頼で魔弓を手に入れたのを契機に弓手としての道を選ぶ

前衛が苦手としがちな対空戦が主な役割で、魔力が尽きぬ限り無尽蔵に矢を射ることができる

ゲオルグとは幼馴染の関係

クラウドス・レクスリー：冒険者。人族。糸目

Aランクチーム「バリエッタ」の一員。細い目をした、アベルと同じ年頃の人の良さそうな青年。チームメンバーのどの役割もこなせる万能戦士

バリエッタの中では一番年下で、チーム全員のことを兄や姉と呼び慕っている

ローザ同様元々は魔法使いであったが、チームのバランスを考慮して、どれも満遍なくこなせるような戦士となった
器用貧乏と言われるのを少し気にしている

プロローグ

転生モノ。というジャンルがある。

主にネット小説などにて扱われるジャンルで、まあ、知っている人は知っている。程度のジャンルだろう。

そこまでメジャーなものではない、と思う。

あるところで生きていた人間が、死んで、生まれ変わる。死ぬ前の記憶を持って。

大雑把に言ってしまうえばこんなところだろう。

子供の頃にああしておけば、こうしておけば、という悔いを、やり直すことができる。一番の成長期である子供時代を無駄無く使うことができる。

人ならば一度は夢を見て、そんなんでできるわけねー、と諦めるような夢物語。

そんな感じのジャンルだ。

本屋で扱われるような本の中ではそんな有名ではないけれど、何故かネット小説ではそこそこ散見する機会の多いジャンル。

何故文庫化すると駄目なのか気になるもの、それはさておき。

唐突に何故こんな話をしたかという。もう大体の人は察しがついていると思うが、その転生というものをしてしまったからである。

オレが。

海外旅行に行った先で起きたテロに巻き込まれて、オツ。

超痛い、来なきや良かった。とかぼろぼろ涙と血を流しながら意識を失って、気付いたら赤ん坊になって生まれ変わっていた。

なんかもう色々ワケがわからな過ぎて、オレという意識があることに喜んだり、全く説明のつかないこの状況に困惑したりと色々あったけれど、数ヶ月もすれば落ち着いた。

状況に慣れた、とか諦めた、とも言えるけれど。

頭の中で色々わたわた考えたり焦ったりしても、身体は赤ん坊。

何も行動に移せやしなないし、喋れもしないのである。 終いには数時間も経たないうちに眠くなってくるので、まわりの情報の収集や整理もできやしない。

とりあえずこの数ヶ月でわかったことは。

オレには両親がいないっぽいこと。

何故かというと、オレが赤ん坊になってからこれまで、母親と思しき人に一度も会ってないのだ。父親も同様に。

ならばどうやって今まで生きていられたのかというと、答えは単純に、育ててくれる人はいたからである。

最初はその人が親なのかなー、と思ったりもしたのだけれど、どう見ても50歳は超えてそうな、初老に入ったお爺ちゃんと呼ぶに相応しそうな年頃の男の人が育ててくれてるのだ。

このくらいの歳になると流石に子供は作れ　いや、元気な人はいける人もいるのかもしいけれど。

だとすれば奥さんが居ないのもおかしいし、何より時折オレを憐れむような視線で見つめているのがね。なんとなくではあるが、感覚でこの人はオレの親じゃあ無いんだらうな、とわかった。

それでもオレの世話はしつかりしてくれるし、腹が減って泣き声をあげれば、ミルク的なものを飲ませてくれた。

オレを産んだ人ではないのかもしれないが、オレの『親』であろうとしてくれていた。

最悪この人が育ててくれなければ、転生、後即死亡。 という可能性もあつたと考えれば、オレはこの人に感謝はすれど文句などあるうはずもない。

それにこんなちゃんと意識がある状態で、母親の母乳吸わされるとかいう羞恥プレイをせずに済んだのもありがたいっちゃ、ありがたい。 下手に美人だったらきつとオレは死にたくなる。

その他に分かったことは、ここはとりあえず、現代日本じゃなさそう。 ということだ。

なんかオレが育てられる部屋を見る限りでも、木造、手作り、獣の皮など、やたら自然に合わせた生活っぷりだし、オレを育ててくれる人とか、蒼い髪に蒼い瞳なんだぜ。

蒼い瞳はまだしも蒼い髪の人なんか今まで一度も見たことないわ。

染めてるようでもないし、地毛なんだらうな、と思う。

最低でも日本のオレの知りうる環境で、アニメとか空想の世界じゃない、リアルに蒼い髪の人なんて見たこともないので

少なくともオレの知る日本じゃないんだらうな。 …恐らくはファンタジーな異世界なんだらうな。

今後、常識外の何が起こつても不思議じゃないぞ。と己の心に言い聞かせた。

…現状、そんなところかな。

如何せん身体が動かないので、出来ることも分かることも少な過ぎる。

どうなんのかなあ、オレ。

などと思いつつながら、やってきた睡魔にオレは身を委ねた。

第1話 出会い

七歳になった。

オレを育ててくれていた人は、ヨーゼフという名前で、自分のことをわし、と言っていたからなんとなくじーさん、と呼んでいる。

この世界はやはり異世界だったようで、しかも魔法とかあるファンタジーモノ。じーさんも魔法とか使ってる。

魔物、とかもいる。……というか、オレの周りはじーさん以外は魔物とかしかない。

そうなのだ。赤ん坊の頃からじーさん以外見かけないナ。とか思ってたなら、見かけない、じゃなくていねえんだよ！人間オレとじーさんだけ！

オレの居るところはグルガの森、というらしい。あたり一面木、木、木。超広い森 その森の中、ぽっかりと開いた更地にログハウスみたいなのが建てられている。

そのログハウスに、オレとじーさん。あとじーさんが飼ってるでっかいオオカミの3人？暮らし。

歩けるようになった頃、うっかり家の外に出たらいきなりでかい熊に喰われかけた。間一髪じーさんに助けてもらえたけれど。

どうやらじーさんは世捨て人、みたいな人らしく。何か事情があって世間から離れねばならない為、こんな森の中に住んでいるらしい。森中に様々な魔物が蔓延っていて、人が森に入ると一人も帰ってこないことから、別名帰らずの森。とも呼ばれているらしい。

なんでじーさんとオレはそんなところで生きてられんだよ。というこ
とになるのだが。 そのへんはじーさんの言葉を借りるならば、「

わし、強いし」ということになる。

…実際オレが熊に襲われた時は、眼光だけで熊が逃げ出したりしてたし、強いことは強いのだろうけれど。　じーさんの飼ってるオオカミ（グルという）も普通に自分より大きな魔物仕留めてメシにしてるし。

そんな中々に物騒な森暮らしではあるのだけれど、水はじーさんが魔法使って精製してくれるし、メシもじーさんが森の中から狩ってきたり、グルが褒めて褒めて、と尻尾ぱたつかせながら森の中から狩ってきたり。

日々の生活はそんなに困らなかった。　かといってオレがじーさんにおんぶに抱っこで暮らしているかというところ、そんなことはなく。働かざるもの食うべからず。を地で行くじーさんは、オレが五歳になる頃から家事をオレに仕込み始め、炊事、洗濯などは専らオレの仕事となっている。

最近は薪割りなどもオレの仕事となっている。　全てこの環境で生きるには必須なスキルなので、オレも覚えることに異論は無い。

それと平行して、魔法の使い方や戦い方。なども最近習い始めた。これはガチでこの森でのオレの生死に直結するスキルなので、オレ必死。

どうやらこの身体は中々にハイスペックな身体のように、教わるものがめきめき身に付いていく。

大概こういう鍛練というものは、はっきりと力が身につくまでにとどめても時間がかかり、一朝一夕には成長の様子が分からないから途中でだらけてしまいがちなだけだ。　…どうやらオレは天才、とかそういう類いのものなんだろう。

教えているじーさんですら驚くほどの早さで力が身に付いていくので、鍛錬するのが楽しい楽しい。

そうして鍛え続けて。 やがて10歳になる頃には、じーさんには未だ勝てないけれども、森に住んでる大概の魔物に引けをとらないまでの強さになっていた。

「ガアアツ……………グウツ」

「……………つ。 ……、 ……。 …… つしやー！ ……とつやつてやつたぜ
こんちくしょう！」

どおん、と大きな地響きの音を立てて、3メートルはあろうかという、巨大な熊が大地に倒れ伏す。

構えていた杖を油断無く熊に向けたまま、完全に熊が沈黙したことを確認すると、万感の思いを込めて声をあげた。

この巨大熊は、レッドベアといい。巨大な体躯に名前の通りの赤い体毛。そしてその身体に似合わぬ俊敏な動作をすることで、この森の中でも中々に有力な魔物だ。

ちなみにオレが初めて外に出た時襲ってきた熊と同種でもある。

鍛え始めてからの目標としていた相手をとつと倒してのけて、思わず拳を握り締めながら咆える。

小躍りしたり騒いだり。一頻り喜んでから杖を下げると、腰に備えていたナイフを取り出して手早く熊の血抜きをする。

魔物とはいえ、生き物は生き物。この森に住む殆どの魔物はちゃん

と食えるらしく。最初は魔物って語感になんとなく拒否感があったが、十年近く生活していると嫌でも慣れた。完璧狩猟民族な生活だしな、オレ。

最早手馴れた血抜きをさくつと終えて、魔法で身体能力を強化してから熊を杖に吊るす。

「よっこいしょ……つと。さてさて、今日は熊鍋　　おお？」

じじ臭い声をあげながら。熊を吊るした杖を肩に担いで家路へと向かっていると、帰り道に猫を発見した。

白い体毛の、まだ子猫なのだろう。ふわっふわな体毛に、短い足が可愛らしい。

この森にこんな魔物いたっけなあ、と首を傾げながら観察していると、猫はこちらに気付いているのかいないのか、全く身動きせずに小さくなっている。

なんだか気になって近くまで寄ってみる。すると、億劫そうにこちらを見上げ、また目を閉じる。

「なんか、明らかに生存競争に生き残れなさそうなヤツだなあ。」

もつと警戒しとけよ、とは思うものの、こんなナリで実は強いとかなのだろうか。とも同時に思う。

この世界に来てから、見た目大したことなさそうな狐が火い噴いてめちゃくちゃ強かったり、見るからにのろまそうなウシ型の魔物が大木薙ぎ倒すような突進してきたりと、見た目がアテにならないことが多いので、眼の前の子猫もその類いなのだろうか。と考える。

とはいえ、そういう強い魔物に感じるような充溢した気配は感じないし、寧ろどこか弱っているような雰囲気すらある。

レッドベアーを倒し、少し気が大きくなっていたオレは、なんとなくいいことがしたくなって、間食ように持ってきていた干し肉を子猫に差し出した。

「ほれ、今日は特別だ。やるよ。」

オレが声をかけると、じっと干し肉を見上げる猫。次いで干し肉とオレを交互に見上げて、差し出した手が引かれる様子が無いことを確認したのか、かぶ、と干し肉に齧りついた。

そのままもしかやもじゃ干し肉を齧る猫の可愛らしい姿に、暫し癒されるオレ。

この娯楽とか癒しの全く無い森での、清涼剤のようなその姿にほかほかと優しい気分になる。

今の生活に文句があるわけではないけれど、同居人はジーさんでつけえオオカミ。外に出れば遊び相手は魔物たちとか、中々にしんどいものがあるわけさ。うん。

そんな荒んだ生活をしていると、こつこつ可愛らしい動物の食事風景を見てるだけでもとても癒された気分になる。

猫が干し肉を食べ終えるのを見届けて。ほっこりした気分満足しながら立ち上がると。それじゃあな、と猫に声をかけて再び家へと向かう。

血抜きしたとはいえ、早めに肉を切り分けた方が良さな。熊肉って臭み強いし。

この熊どうやって調理しようか。などと考えながら歩いていると、背後から草をかき分けこちらに近付いてくる気配を感じる。

「……………」

なんだなんだ、と振り返ってみると。そこには先ほど干し肉をやった猫。

こちらが振り返ったのに気付くと、びく、と足を止めてオレを見続けてくる。

「……………」

少し見合い続けてから、再び前へ向けて歩き出す。

…一拍置いて、再びこちらを追ってくる気配。

「……………」

振り向くと、またまた猫と目が合う。

じい、と見詰めると、少し気まずそうに前足で顔を洗う猫。

なんだろう。これは噂の、なかまになりたそうなめでみている。というやつなんだろうか。さっきの干し肉は魔物のエサって感じか。もしかして。

「…一緒に来たいのか？」

ちよいちよい、と手招きすると。少し迷ったように左右を見てから、とことこと足元に寄って来る。

…まあ、じーさんもペット飼ってるし、連れてっても元の場所に戻して来い。とは言われないだろう。

今までずっと3人暮らし、という物寂しさもあったので、まあいいや。と猫を連れて帰ることにする。

家に帰って、じーさんに事情を説明すると、じーさんが何か凄い複雑そうな顔で猫を見詰めてた。

じーさんと一緒にいたグルも、オオカミなのでよくわからないけれど、何となく複雑そうな目をしてた。

オレがこの猫飼いたいと言うと、暫く黙考した後で、面倒は自分で見るんだぞ。と言って許可してくれるじーさん。

なんでこんな悩んでるんだろう、と首を傾げながらも、大丈夫、と頷いて猫を飼うことにしたのだった。

猫の名前はジン、と名付けることにした。

じーさんの飼っているグルと同じく、人の言っていることをなんとなく理解できるくらいの知恵があるようで、オレの言うことちゃんと聞くんだぞ、と告げると。なう、と小さく鳴くのだった。

第2話 学習

猫が猫じゃなかった。

どうやら、オレが猫だと思って飼いだめた猫。ジンは、王天虎、と呼ばれる虎だったらしく。その日の夕飯の時にじーさんが説明してくれた。

“地を統べる皇狼、天を駆る王虎”などと称される、魔物、魔獣などとは別の、賢獣と呼ばれる知恵を持つ獣の中でも特に強力な種族らしく。

話によるとじーさんが飼ってるグルが地を統べる皇狼、地皇狼と呼ばれる種族で、オレの拾ったジンは後者の、天を駆る王虎。王天虎の子供だとのこと。

賢獣というのは、そこらに暮く魔獣などと違って、人語を理解する知性を持ち、人間と敵対していない獣のことを指すらしい。

敵対していない、とはいつでも別に味方というわけではなく。彼らのテリトリーに入れば襲われるけれど、基本無害で、場合によっては協力して魔物を追い払うことがある。くらいの関係らしい。

そしてその中でも、グルやジンは最強種の一つに数えられる種族であるとのこと。

地皇狼であるグルは、地上戦では敵無しと言われるくらいの飛び抜けた身体能力を持っており、王天虎であるジンは、その脚で大気を掴み、自在に空を駆るらしい。

マジか、と思いながらジンを見たら、とことこ階段でも昇るように宙を歩いて、オレの肩に乗って来た。この猫マジパネエ。

本来ならこんなとこに居るはず無いんじゃないかのう。と呟きながら説明してくれるじーさん。グルに目を向けると、こちらも気付かなかった、と言いたげに首をふり振り振った。

というかグル。お前そんな凄いオオカミだったのか。オレてつきりじーさんのペットのちよっとでっかいオオカミぐらいにしか思ってたなかったよ。

「グル達地皇狼は、その身体能力もそうじゃが、本気の戦闘になると体毛が魔力で覆われて帯電するからの。魔力で覆われた体毛は生半な剣じゃ刃が立たんし、帯電した体で突進するだけで大抵の生き物は黒焦げじゃ」

「うわあ……」

「王天虎も、似た感じらしいぞい。その身に嵐を纏う、とかなんとか」

「こんなちっこい猫がなあ……」

オレの傍で、小さいお椀に盛った熊鍋の具を啄ばんでいるジンの姿を見ながら、しみじみと呟く。

拳動から何からどこ見てもただの猫だったのに。というかこいつもそんな最強種がこのこ干し肉程度で餌付けされてんじゃないやねえよ。

「その王天虎のこともあるし、そろそろ森以外のことも教えた方が良さそうじゃのう。」

今まではとにかく、魔物だらけのこの森での生きる為の知識、力を

ひたすら教え込まれてきたが、ジンのことを切欠に、その日から少しずつ、日々の鍛練にこの世界についての授業が加わっていった。

簡単に説明されてはいたのだけれど、じーさんからこの世界についての説明を受けていく度に、元居た世界との違いっぷりに軽く眩暈がしてくる。

オレたちがいるこの大陸は、クラルカというらしく。人や魔物のみならず、エルフヤドワーフといった亜人、更には賢獣や竜等等、雑多な種族が入り乱れる大陸らしい。

やっぱ人間が一番幅利かせてたりするのかしらん。とか思ってたら、どうやら素直にそうとは言えないようだ。

なにやら、この大陸の中心部は、魔物達によって支配されており。その大陸の中心部を囲むようにして様々な国家が点在しているらしい。

魔物領、と呼ばれるその領域からは、幾ら討伐を繰り返しても底が見えないくらいに魔物が居るらしく、魔物領の中枢には神代に封印された魔神が眠っているとか、魔物を統べる魔王がいるとか言われているが、真相は確かめたものがないため、不明。

魔物領と面している国家は日々国境近くで魔物と小競り合いを続けていて、時折起こる魔物の大規模侵攻の際には国を挙げて応戦するほどらしい。

とはいえ、ここ数十年はそこまでの争いはどこの国家でも起きてお

らず、小康状態が保たれているらしいが。

そんな世界だからして、必然的に国は保有する騎士団に力を注いでありするのだけれど、強力な魔物の討伐や、村や都市への魔物の襲撃やらならまだしも、常に魔物領からの侵攻について一定の余力を残しておかなければならない国の軍では、街から街へ移動する商人の護衛やら、突発的に発生する、魔物が生息する区域への貴重な薬草の採取やらには一々対応できない。

ので、そういう痒いところに手を届かせる為に発足したのが、冒険者ギルド、と呼ばれる組合らしい。　　異世界で定番のヤツやね。　　じーさんも昔はこのギルドに所属していたらしい。

騎士団は街の治安維持等といった、警察的な役割も兼ねているので、魔物の大規模侵攻もない昨今では大概の魔物が関わる問題はこの冒険者ギルドがこなしているらしい。

ギルドは国からは独立した機関として扱われていて、大陸中の街に設置されているそう。　　だのでギルドに登録しておけば、身分証明もできるし、大概の国にも冒険者としてさして税もかからず入れるらしい。

…が、権利があれば義務もあり。　　もし冒険者が滞在する国が、魔物の大規模侵攻に襲われた場合、彼らは国の防衛戦に参戦しなければならぬ義務があり、それを怠った場合、そいつは永久に冒険者ギルドから追放されてしまうらしい。

まあ、その代わりに色々国からの援助も受けてる特権階級らしいし、そんなもんだわな、と納得するオレ。

特に冒険者になる為の資格、とかはいらないらしいので、いずれこの森を出るのだとしたら、冒険者になっておくのが無難じゃの。と、じーさんは言っていた。

：じーさんに向かって、面と向かってこの森を出たいと言った事など一度も無かったオレだけでも、じーさんも薄々気付いていたんだろうし、分かっていたんだろう。オレの外の世界への欲求と、この人間がたった二人だけ、という小さな世界の歪さを。

この世界の知識の他にも、文字や簡単な算数等といった、外の世界で必要となるであろう知識を教わっていく。

ぶっちゃけ算数の方は楽勝だったけれど、文字は苦戦した。

言葉は日常的に使うものだから慣れたけれど、文字は未だにうっかりすると日本語を書こうとしてしまう。

書くべき文字を、一々この世界の言葉 日本語 日本語の文字 この世界の文字。 といった感じに頭の中で面倒臭い変換をしてみようのだ。

無駄に前世の知識が残っているものだから辛い辛い。 こちらはひたすらに反復練習をすることで身体に刻み込んでいった。 ちゃんと文字を習得するのに2年くらいかかった。

そんなこんなで、またかれこれ数年の時が経った。

ようやくしつかりとした身体が出来上がったオレは、じーさんから教えを全てモノにして、最早この森では敵なしになっていた。

それでも未だにじーさんやグルには勝てないのだけれど。

拾った猫、ジンも大きくなった。拾って最初の一年くらいは、それでもまだ猫：かな？と言えるくらいに体格だったのだが、それも過ぎるとみるみる大きくなり、今ではグルに迫るほどの巨躯を誇っている。

王天虎、の名前は伊達ではないのか、こいつも森の中では最早対抗できる存在がいなくなっていて、最近ではグルとも良い勝負をするようになった。

最初の頃の、突っかかっては前足でぺちよりと叩き落とされていた頃とはえらい違いだ。

この頃になると、森の中の魔獣もオレとの力の差というものが分かってきたのか、最近では森を歩いていても魔物に襲われることが殆どなくなった。

たまに活きの良い魔獣が襲いかかっては来るものの、本当に稀にで今まで小屋を出れば即エンカウントだったオレとしては多少物足りなさすら感じている。

「なので、当面の目標はじーさんなわけなんだけど。勝てる気しねえよ！」

「老いたとはいえ、まだまだ10を過ぎた程度のひよっこに負ける気はせんのお。魔法も加えたら別としても」

「ちくしょー」

ぐったりと、大の字に伏して呟く。

今日も今日とてじーさんとの鍛練として、組み手をやっていたわけだが。あっさり柔良く剛を制されて、完敗だった。

オレとじーさんでは、魔法を絡めた組み手をするとどうしても森に少なくない被害が出てしまうので、最近は専ら格闘戦となっているのだが。じーさんが言うように魔法を絡めたとて、正直勝てる気がしない。

良くて5回に1回くらいは勝てるんじゃないかなもんだらう。

じーさんが言うには、魔法というのは魔力とイメージ、らしいので、前世で無駄に魔法に対するイメージのストックだけはあつたオレは、このハイスペックな身体に宿る魔力と併せて、単純な魔法の威力やバリエーションだけならば、既にじーさんを上回っていた。

が、その魔法の使い方となるとまた話は別で、咄嗟の判断力や、状況に対応した適切な魔法を選ぶ感覚なんかは、魔法を使ってきた経験がモノを言う。

殺意の波動に目覚めたリュウでも、プレイヤーがへっぽこだと熟練者のダンに負けてしまっつてわけだ。

「ふう……さつさとワシを超えて、安心させてくれんもんかのう」

「ぐ、ぎ、ぎ……っ！ ……つらぁー！ もう一本！」

両腕に力を込めて、やれやれと言った風にこちらを見下ろすじーさんを睨み付け、立ち上がる。

そこまで言うなら、とっとと追い抜いてやるぜこんちくしょう！！

第3話 巢立ち

石を削り自らが建てた、やや不恰好な墓の前で黙祷する。

両脇に控えるジンとグルも、まるで祈りを捧げるかのように伏せている。

「…。後は頼むな、グル」

立ち上がり、未だ伏せたままの巨大なオオカミに声をかける。

こく、と小さくグルが頷くのを確認して、オレは今や立派な白虎へと成長した、ジンの背中へと跨がった。

じーさんが亡くなって一ヶ月。

その日、とうとうオレは外の世界へとその第一歩を踏み出した。

“その日”は唐突にやってきた。

幼い頃からの積み重ねはマジ重要というか。オレの身体はまるで躓くことなく成長し、最近ではじーさんとの鍛練もばちばちの勝率で勝てるようになってきていた。

それは、オレの成長と同時にじーさんの衰えもあつたのだろう。とは今になっては思うのだけれど。

ともあれそんなある日、いつものように朝起きて朝食を作り、いつまで経つても起きてこないじーさんを起こそうと、じーさんの部屋に入って……

寝室で、眠るように安らかに天に召されたじーさんを見つけた。

その顔は、苦しそうなところがまるで無い穏やかなもので、オレはじーさんが死んだことを確認するとぼろぼろみつももなく泣いてしまったけれど、不思議とそこまで悲しくはなかった。

その後は、元々人はオレとじーさんしか居ないこの森の中。この世界の葬式の形式なんてまるで分からないので、オレの泣き声に反応してやってきたグルやジンと共に、小屋の近くに墓を作りそこにじーさんの亡き骸を埋めて、弔った。

ジンはじーさんを弔う間、普段の無邪気で闊達な様子かなりを潜め、酷く落ち込んだ様子で。

オレ達の中で最もじーさんと付き合いの長かった、じーさんの相棒グルは、己の相棒の死期が近いことを悟っていたのか。落ち着いた様子で、事あることに泣くオレの頬を舐めては、慰めてくれた。

じーさんを墓に埋葬し終えて、暫くすると、グルがどこからか一通の手紙を銜えて持ってきた。

中身を確認すると、それはじーさんからの手紙で、そこには自分が死んだ時のことについて、書かれていた。

曰く、家の物は好きにして構わない。とか、グルはグルの好きにさせてやれ。とか。残されるオレに対して、教える限りは教えたが、それでも心配する言葉や、自分が居なくても怠けるな、等といった小言。

オレは知っていたが、そこにはオレがじーさんの子供ではない、この森の中で拾った子供であることなども書かれていて。家族を持ったことのない自分が、家族らしくしてやれたかどうか、気にするよくな内容が記されていた。

手紙でこんなこと書いてもしょーがねえじゃねえか。そう呟いて、またぼろぼろ泣いてしまふ。

文の中にあつた今後の指針については、森の外に出ても、留まつてもどちらでも好きにしろ、といった旨が書かれており。もし森の外に出たいのなら、と最寄の国への行き方と、ギルドへの紹介状。金貨や銀貨などの貨幣の置いてある場所についての説明もあつた。

じーさんの厚意をありがたく受け取って、その日から時間をかけてオレは旅立ちの準備を整えた。最早じーさんが居ない以上、オレがこの森に留まる意味は無かつたし、それを予期していたのか、じーさんが旅立つのに必要なものがある程度整えていてくれたので、特に手間取ることもなく旅立ちの用意は整つた。

家の整理に、保存食作りなども終えて、旅立ちの準備が全て整つた日、オレはジンとグルに、オレが森の外へ出るつもりだということを話し、二匹はどうするかを尋ねる。

王天虎のジンはオレについてきてくれるようので、地皇狼のグルは、相棒の眠るこの地に留まることにしたようだった。

どちらの決定にも否やは無く。その日は3人で、この森でのめいっばいの贅沢をした晩飯を作り、この家での最後の一日を過ごした才しだった。

そして明くる日の朝、

オレはじーさんの墓前で旅立ちの挨拶を済ませて、今に至る。

「よっし、最後の確認だ。ジン、思い残しや忘れ物はないな」

「がっ」

「グル、じーさんのことは任せたぞ」

「わふ」

「オレ、忘れ物はないな」

確認する。じーさんのお下がりの服である麻の布の服に、紺色のフードの付いた外套。

右手に持つは、これまたじーさんのお下がりである杖で、杖というよりは棒と言った方がよさそうな、オレの身長ほどの長さの細い杖で、中心部に埋め込まれた宝玉に手を添えると、魔法のブーストと、障壁の展開ができる。あとめっちゃ硬い。

肩に提げたバッグは、じーさんが冒険者であった頃に手に入れて重

宝していたという、小屋一つ分くらいの容量があるという魔法のバッグ。名付けてワンダーバッグというらしいが、ネーミングセンスに疑問を感じたのでそのまま、バッグと呼んでいる。

バッグの中にじーさんの遺してくれた、ギルドへの紹介状やら金貨やらが入ってるのを確認し、続いて家に保存しておいたありったけの干し肉やら果実、木の実などの確認もする。

「オレも忘れ物無し、と」

二メートルは余裕でありそうな、ジンの背中に乗ったままそれらを確認すると、一つ頷いて見送るように顔を上げ、こちらを見るグルに手を振る。

「そしたらな。グル。たまには顔を出すから、元気でな！」

「がう！」

「わふ！」

それぞれの別れの挨拶とともに、ジンがのっそりと歩き出す。

グルの姿が見えなくなるまでオレはグルに手を振り続け、グルはオレ達が見えなくなるまでオレ達を見送っていた。

グルが見えなくなる間際に、森中に響き渡れとばかりに響いたグルの遠吠えに、ジンも景気良く咆えて返す。

二つの最強種の声に、視界の中にちらほら見える魔物達が一々びくついているのが見受けられる。

グルはともかくとして、出会った頃は子猫と見間違える程だったジンも、今では森中の魔物から畏怖される存在となり、オレ一人では今でも森の中で魔物にちょっかいかけられることはあるのだけれど、ジンが一緒だと魔物達も全く襲ってこない。潜む魔物の多さに帰らずの森、とまで呼ばれているグルガの森を、ジンと二人でエンカウント率ゼロの状態で歩いていると、転生した当初の、家を出て一歩でエンカウントだった頃を思い出し、どこかしんみりとした気持ちになり、空を見上げた。

「……？ がう？」

「……いや。 なんでもない。 行こうぜ、ジン。 森の外の 世界
を見に」

「がう！」

少し気にしたようにオレを見るジンに、何でもない、と首を振る。声と共に駆け出し始めたジンから振り落とされないようにジンの毛を掴み、ぐんぐんと森の外へ駆け抜けていく。

目指すはじーさんが冒険者時代を過ごしたという国、アセナル王国へ。

第4話 森の外

アセナル王国とは、大陸の東方、グルガの森と呼ばれる広大な森に面接する国の一つであり。

はるか昔にこの地を平定したアセナルという王と、その仲間達によって築かれた歴史ある国であるらしい。

建国時からじわじわと領土を広げていき、魔物が次々に押し寄せてくる大陸中央に面接する部分と、中央から突出するように突き出ているグルガの森以外は、魔物に襲われることもさほどない、大陸の中でも比較的安全で、有力な力を持った国である。

そんな大きな国でも、大陸中央からやってくる魔物の大侵攻は完全に受け切れないというのだから、どんだけとんでもないんだろう、と思う。大侵攻。

ともあれ。そんなアセナル王国へと、じーさんの勧めで向かうオレと、巨大な虎、空を駆る王天虎であるジン。

地を統べる皇狼、空を駆る王虎などと呼ばれるだけあり、ジンはその足で大気を掴むことが可能であり、大地を走ると同じように空を駆け抜けることができる。

じーさんの遺書にて、とりあえずは王都へと向かい、ギルドに登録すると良いと教わったオレは、そんなジンの背に乗って、空を駆け抜け王都へと向かっていった。

乗っかっていて思っただけれど、正直空を飛ぶことができる、ってのはとんでもないことだよな、と痛感する。

オレが旅立ったグルガの森からアセナル王国の王都までの道程は、

地図を見るとさほど険しくは無いけれど、それでも大きな川があったり、道が碌に整地されてないのも当然として、少ないとはいえ魔物も出る。

が、空を飛ぶとそれらの問題の殆どが解決されてしまう。

道とか関係無しに一直線で行けるし、川だろぅが湖だろぅが関係無しにその上を飛べる。更には魔物も空を飛べる魔物以外は手が出せない、といった感じで一週間ちよいかかる、とじーさんの手紙に書かれていた道程をジンの速度も相俟って、三日で殆ど走破してしまった。

そんなわけで普通に旅するよりは圧倒的に快適な旅であったのだけれども。最初は初めて見る森の外の世界に感動して、前世でも見れなかった広大な草原、雄大な自然やらといった風景にスゲースゲー言いながらジンとはしゃいでいたのだけれど、それもずっと見続けていると飽きてきてしまい、空からぐんぐん変わる景色を見続けるだけ、という状況にそろそろ退屈さを感じ始めていた。

急ぎの時は果てしなく便利ではあるけれど、別に今は急ぎなわけでもないしのんびり歩いても良かったかな、と今更思う。ジンの上だと、あれなんだ、と思ってもすぐ通り過ぎてしまっただけ確認できないんだ。

王都ではない街や村つばいのも幾つか確認してはいたけれど、とりあえずは無視。世の中に出た以上、とりあえずは、何よりも先に身分証明となる何か欲しい。前世ほどではないのかもしれないけれど、自分の身分を証明できるもの、というのはいつの世も非常に大事だろぅと思う。

ので、観光するにしろなんにしろとりあえず身分証明できるものを作ってからにしようと思っていた。

そしてそれが更に退屈さを増す結果になっていた。

「暇だ……」

「……がつ」

ジンの背に乗り、突っ伏しながらそう呟く、森の外は、もっと、こう、どきわくアドベンチャー！って感じだと思ってたのに、今からでも地上に降りるべきなんだろうか。いや、わざわざ危険増やすのもアホらしいし、ここまで来たらさっさと王都に着いてしまった方が……。

うだうだ考えながら、ジンの白い体毛を噛んでもにゅもにゅ口に含んで遊んでいると、しょうがねえなコイツ、と言ったような声音と共にジンがこちらへと振り向いた。

しょうがないじゃないか！ファンタジーな世界への期待が前世から今までの生活で凄まじく膨れ上がったんだ。そんなイベントばっかじゃないよね、とは分かかっていてもね、いてもね！

「……がつ？　がつッ」

自慢の毛を、退屈凌ぎに噛まれ唾液塗れにされて迷惑そうにしていたジンが、ふと何かに気付いたように声を上げた。

オレもその声に反応して、顔を上げてジンの見ている方向を見ると。

「……おー、魔物か」

「がつ」

「んで……ああ、人が襲われてんのな。馬車で逃亡中、と」

視線を向けた先には全速力で逃げている馬車と、それを追う黒い犬の魔物の集団だった。

魔物の方はハウンドドッグ、と呼ばれる魔物で、一匹では大したことはないのだけれど、鳴き声で仲間と意思疎通をして、常に集団で連携して襲ってくるタイプの魔物だ。

見た感じ30頭くらいの集団で、馬車と追いかけてっこをしているが魔物の方が僅かに早いのか、じりじりと囲むように追いつかれている。

馬車から疎らに矢が放たれてはいるが、捕まってしまうのは時間の問題だろう。

上空から速度を落として様子を観察し、ジンに跨ったまま腕を組む。まあ、助けでもいいし助けなくてもいい。助けられるだけの力がオレにはあるし、助けねばいけないほどの義理もない。

丁度退屈してたところではあるし、魔物に襲われている人を助けるデメリットは見当たる限り無い。見捨てても気分が悪くなりそうだし、助けよう。

さくつとそう結論付けてジンを窺つと、こちらも異論は無いのか、一鳴きして承諾。

さて、行きますか。と、ジンを急降下させようとした、その時。

ぼろっ。と、まるで零れ落ちるよつに馬車から人が放り出された。

「　　つちよ!?　　ッ、ジン!」

ジンの背を叩き、一気に放り出された人の元へと急降下する。近づくにつれ見えてくるそれは、どうやら女性のようで、手と足を縄で縛られた状態で放られた勢いのまま地面を転がっている。ハウンドドッグの群れは、目前にふと現れた獲物に注意を奪われたのか、向かう先を馬車から放られた女性へと変えて、一気に迫っている。

恐怖に歪む女性の顔と、まるで脚を緩めることなく走り去っていく馬車を視界に捉え、小さく舌を打ち左手で振り落とされないうようジンの毛を掴み、杖を握った右手をハウンドドッグの群れへと向ける。

「そお　　りゃ!」

杖に魔力を込め、右手の先に魔方陣が浮かび上がり、放たれる白光の魔力砲。

それが今にも飛び掛ろうとしていた群れの先頭を走る一頭に降り注ぎ、周囲の幾つかを巻き込み炸裂する。

唐突に出現した光の一撃に、ハウンドドッグの群れが怯んだ隙に、ジンが女性の元まで駆け降りた。

「つぶねえ　　ジン。　　オレがやるから、お前はその人護ってやれ」

「がっ!」

振って湧いたように　文字通り降ったのだけれど　現れたオレ達に警戒するように唸り声をあげるハウンドドッグと、驚いたように目を白黒させる手足を縛られた女性。

女性の対応はとりあえず後回しにしようと思視することにして、オレ達を包囲するように集まってきた群れの対処を優先することにする。

「グルルルル……」

「同じイヌ科とはいえ、グルとは似ても似つかないな……」

口から涎を垂らしながら、牙を剥き出しにしてこちらを睨むハウンドドッグに、思わず呟く。

こんなことを言ったと知られたらグルに齧られるんだろうな、と思いながら。杖を持った右手を手近なハウンドドッグへと向ける。

「消える！」

声と共に放たれる、先ほどと同様の白光の魔力砲。

ビームをイメージしながら作ったコレを、思った以上に使い勝手が良いのでオレは重宝している。

じーさんに見せた時は、この世界の人にはそういうイメージが思い浮かばないのか、中々驚いていたのが面白かった。

そんな魔力砲を受け、数頭を巻き込み焼き消えるハウンドドッグ。今を受けてじっとしているとやられる、とても感じたのか、群れ全体が一斉にオレとジン達の下へと襲い掛かる。

上下左右から襲い掛かってくるそれらに、杖の宝玉へと魔力を送り込み、障壁を展開。べちり、と見えない壁に突っ込み勢いを止められたそれらに再び魔力砲を放つ。

放った隙に横合いから飛び掛ってきたハウンドドッグを飛び退いて避けて、ちら、とジンの方へと目を向けると、言った通り女性を護りながらハウンドドッグ共を噛み千切り、爪で引き裂くジンの姿。その大きさ故にハウンドドッグもジンに噛み付いているのだけれど、王天虎の体毛はその牙を全く通さない。

アレ、オレが今みたいに適当に放ってる魔力砲を放つても、焦げ目一つつかないのだ。

あちらは問題無さそう、と判断して、オレは改めて群れの掃討に意識を集中させることにした。

十分程で、あっさりと戦闘は終了した。

半数ほどを蹴散らすと、あちらが逃げ出し始めたので放っておくことにした。追っかけてまで殺す状況でも無さそうだし。

軽く辺りを見渡し、見える範囲に誰もいないことを確認して、ジンと放り出され、手足を縛られたまんまの女性の下へと向かう。

「よしよし、よくやったぞ、ジン」

オレ活躍したぜ！とばかりに尻尾ゆらゆら振りながら、おすわりの状態で待っていたジンの喉元を撫でながら褒めてやる。ゴロゴロ喉を鳴らしながら目を細める姿は、昔から変わらずこんなナリになつても可愛いものだなあ。

それから、今まで呆然とオレ達を見ていた女性へと目を向ける。

肩ほどまでの黒髪に、黒い瞳がやや切れ長で釣り上がっていて、普段は涼やかな印象を与えるのかもしれないけれど、今は驚きに見開かれている。

歳はオレより上っぽげで、20歳より上、くらい。

簡素なチュニックとズボンに、服の上から見ても分かる体型の良さ。

まあ、どこに出しても恥ずかしくない美人さんに見える。

…が、普通の美人さんとは違う点が一点。彼女の頭部に、なんか頭頂部の分け目あたりからひょっこりと、缶ジュースの缶くらいの長さの一本角が生えてた。

ざっと見て。流石はファンタジー。とか思いながら馬車が走り去っていった方角を見る。

馬車はあのまま走り去って行ってしまったようで、向かった先には何も無い。

空を見上げると、そろそろ日が暮れ始めていた。

はふ、と息を吐いて、女性に近付いて縄を解いてやることにする。女性は近付いて来たオレを凝視していて、縄を切る為にバッグから取り出したナイフを見るとビク、と身体を震わせたが、結局何も言うことはなくされるがままにされていた。

「ジン、今日はここらで休むことにしよう。 テント張るから適当に夕飯でも探してきてくれ」

「がっ」

両手足の拘束を解かれた女性は、ぺたんと座り込んだまま、こちらを見ていたが、とりあえず無視することにして、バッグからナイフをしまつてテントを取り出して、その場で組み上げていく。

ジンが一鳴きして、獲物を探して駆け出していくのを見送りながら、黙々と組み立てる。組み立てる。

その間も、女性はどこか所在なげにしつつも、この場を去るわけでもなく、ぼーっと黙ってオレがテントを組み立てるのを見ていて、オレも特に話し掛けることもなくテントを組み立てた。

テントが出来上がった頃に、ジンが鹿のような獣だか魔物だかを銜えて戻ってきた。流石ジン、仕事が早い。

干し肉とかの保存食のストックもまだ余裕があるけれど、出来れば美味しいメシが食べたい。ので、オレ達の野営はこんな感じの役割分担になっていた。

オレ、野営の準備、メシの調理。　ジン、狩りと周囲の見張り。と　いった感じだ。

オレが鹿を捌いている間に、ジンが再びこの場を離れて何処かへと駆けていき、しばらくすると一本の木を銜えて帰ってくる。

それをオレが鹿の腸等を抜いている間に、爪でサクサク木を切って焚き木にしていくジン。

…うん。　王天虎マジばねえ。

その様子を見続けていた女性も、ジンのしていることにはあんぐりと口を開けて驚きを露にしていた。

こいつと居るとサバイバル生活楽勝過ぎる。

そんなこんなで野営の準備が整い、ジンが作った焚き木に魔法で火を付け夕飯を作ることにする。

といっても、捌いた鹿の肉を火で炙って塩を振っただけだけれども、王都につけば待望の、様々な“料理”と言うべき物が食べられる

のだろうか。とても期待が膨らむ。

「ほら、出来たぜ。ねーさんも食べなよ」

ジンが持ってきた木の枝を串に、良い具合に焼けた肉を女性へと差し出す。

何か意外だったんだろうか。ぱちぱちと瞬きながらこちらを見て、ゆっくりとオレが差し出した串を受け取る。

少しの間、じつと串を見詰めていて。それを他所にオレが自分の分の肉に齧りつこうとしたところで、勢いよく顔を上げて、彼女がこちらへ向けて声をあげた。

「あ、あのッ。助けてくれて、ありがとうっ」

「はい。どういたしまして」

「がっっ」

肉を齧ろうとした口を一旦閉じて、返事をする。ジンも、ジン用に用意した、オレ達が食う以外の肉を全部刺した巨大な肉串が炙られるのに視線が釘付けではあったが、返事をする。

良い具合に焼けたジンの串を片手で持ってはい、とジンに差し出すと、がじがじ肉にむしゃぶりつくジンの姿を横目に、まだ何か喋りたそうな女性へと目を向ける。

「……何も、聞かないんだな」

「まあ、色々興味はあるけれども」

「それに、私は鬼族だというのに、分け隔て無くご飯を分けてくれ

る」

「……………」

キゾクってなあに？ 貴族？違うつばいな、とか考えながらも、女性性は話を続ける。

「幾らその虎が賢獣とはいえ、何故君は鬼族をそんなに」

「なあ、ちよつといい？」

「つ。…なんだ？」

「キゾク、って何？」

「……………知らないのか？」

オレの無知っぷりに、またも目を見開いた女性は、ぱくぱく、と何度か口を開いては閉じてから、キゾクについて説明してくれた。

鬼の種族。を略して、鬼族。 亜人の一種で、総じて戦闘能力が高く、頭に角が生えている。

基本的に鬼ヶ島という鬼族が治める国に住んでいるらしい。

島にあるの？と聞いたたらそういうわけではないらしい。 周りを山と魔物に囲まれた陸の孤島みたいなところにあるから、鬼ヶ島だとかんで、この鬼族や夜族、魔族等といった人種は、他の獣人などといった亜人も違つて。魔物から生まれたヒト、と言われて恐れられ、見下されているらしい。

彼女は勿論違う、と否定した上で言ったけれど。 まあ、そう思い

込まれているってことだろう。

んで、鬼ヶ島や鬼族の住む集落以外で鬼族を見かけるのは奴隷か、極稀にはあるが冒険者ぐらいで。どちらにしてもその噂される出自から、鬼族は忌避の目で見られるのが普通であるらしい。

ぼそぼそと肉を頬張りながら喋る彼女をこちらももぐもぐ肉を頬張りながら聞き、なるほどなー、と得心する。

十年以上じーさん以外の人型生命体に出会ったことがなかったオレとしては、そんなもんなんだ。くらいしか感想が浮かばない。前世含めてもホモ・サピエンス以外会ったことねえし。

「……だから、最初君が何も話し掛けてこないのも、そういうことなんだと思っていたのだけれど。様子を見てるとそういうわけでもなさそうで、それで」

「……ああ、オレさー」

「……?」

「オレ、三日くらい前まで、ずっと育ての親以外誰も居ない森で生活してたんだよね。だからそういう、世の中の風習、とか慣習みたいなのは、分からないんだ」

「は?」

「一応、オレを育ててくれたじーさんからある程度世間のことについて学んでるんだけど、まあ、そういうわけ。だから話し掛けなかったのも、別に鬼族だからとかじゃなくて、初めてじーさん以外の人と話して緊張してたからなんだよね」

もっしやもっしや串に刺した肉を全て胃に納め、腹を掌で撫ぜつつ。この歳までじーさん以外の人との接触ゼロ。前世の記憶があるオレでも何話していいかわかんなかったんだから、これ、普通に前世の記憶が無いやつだったら絶対性格歪むよな。

一番大事な少年時代に人と全く触れ合わないとか。人格形成に多大な問題を残しそうな。

「そつ、か…」

オレの話を聞いて、最初は有り得ない、といったような顔をしていたが、オレが嘘や冗談を言ってる様子もなく、淡々と事実を話す様子に、訝しみながらも理解はしたのか。肉の最後の一口を頬張って、考え込むように俯いた。

「うん。だからオレはねーさんが鬼族だから如何こう、ってのは無いし、ねーさんはねーさんの好きにするといいさ。食後のデザートだってあげる」

ほれ、とバッグの中からリンゴを取り出して、彼女に放る。少し慌てた風に受け取るのを確認してから、とっくのとうに自分の肉を食べ終えていたジンにも一つ。シャクッと口でキャッチと同時に一口だ。

自分の分のリンゴも取り出して、皮のついたまましゃくしゃく食べる。彼女もオレ達に倣うようにして、シャク、と。

「すまない。ありがとう」

「どついたりしまして。…んで、お互い緊張も解れたみたいだし、

差し支えなければ聞いてもいい？　なんであんな格好で放り出されてたのか」

「ああ。構わない。…といっても、そんな複雑な話じゃないんだけどな」

「ふむ」

「鬼族は基本鬼ヶ島に住むといったらう？　私もそこに住んでたんだけどね、でも私は外の世界ってヤツが見てみたくて、国を飛び出たんだ」

「　ああ、ちょっと分かる」

「だろう？　それで、冒険者として世界を廻ることに決めただけだけどね。割合順調にいったんだけど　　昨晚、野宿していたところを襲われてね」

「襲われたって　ええっと、あの馬車の連中？」

「そう。奴隷商人とその護衛、だったようだね。　ヤツらが言うには、鬼族で、自分で言うのもなんだが容姿が整っている私は、奴隷としてとても価値が高いらしい。お金持ちの物好き垂涎だとか」

「うわー」

「寝てた所を襲われてまあ、成す術無く気絶させられてしまってたね。目が覚めたらこの状態さ。私を襲った連中が男だけだったこともあり、さあ拙いぞ。　　と思ったところで、例の、ハウンドドッグの群れに襲われてね」

「ざらっと話すなあ」

「まあ、結局無事に済んでるしね。それで、馬車で群れから逃げたんだけど。あの犬共の方が馬車より少しし速い。積んでた食料とかを放って注意を逸らそうとしてはみたものの、逸らしきれない。そこで」

「でっかい圏を放ることにしたわけか」

「彼らも迷ってたけど。大金掴めるチャンスだったのだろうし。でも命には代えられなかったようだね。あとは君も知っての通りさ」

「はあん。成る程なー」

「流石にアレばっかりは私も終わったと思ったからね。だから君には、とても感謝している」

「いいよいいよ。大した手間でもなかったし」

「そういうわけにはいかない。けれど、そうだな。今の私では、君に返せるものが一つも無い」

沈痛な面持ちで顔を伏せる彼女。　　そういや、荷物とかもかっぱがれたのか、衣服以外持ち物ゼロなんだよな、この人。
気付いたらこの状態、だとか言ってたし。

「まあ、助けた責任もあるし、王都までで良かったら送ってってあ

げるよ
「よ」

「重ね重ねすまない」

「いいよいいよ」

「……ええと、その。ここまで世話になっておいて、更に言っのも申し訳無いんだが。その」

「あん？」

「私を、雇ってくれないだろうか」

「はあ？」

何故？

第5話 雇用

彼女が言い出した言葉の意味が分からなかった。別に商人でも何でもない旅人のオレに、何故？と。ので、素直になんて？と聞いてみると。

「さっきも言ったが、鬼族は他の種族から忌み嫌われているんだ」

「ふむ」

「だから、基本的に私は、単独で受けられるギルドの依頼を受けて生計をたてていたんだが」

「あー。 ああ」

「そうだ。今の身包み剥がれた私では、王都に送って貰えたとしても何も出来ない。頼れるツテがあるわけでもないしな」

「成る程ね」

「君みたいなの、鬼族に対して何の感情もなく接してくれる人、というのには本当に少ないんだ。だから、どうかお願いだ。私を」

雇ってくれないか。

縋るようにそう言われて、リングを銜えながら腕を組む。

面倒だなあ というのが、正直なところではある。

そりゃ、こんな美人のねーさんの頼みではあるし、応えてやりたい

とは思う。…けれど、話を聞く限りじゃ、世間の鬼族に対する偏見ってのは相当なモンなのだろう。

美人だとはいえ、そんな鬼族と行動を共にすることは、これから王都で活動する上で、対人関係を構築する際にデメリットしか生まない気がする。

いじめつてのは、いじめられてるヤツを護ろうとするヤツにもその牙を剥く。

規模は違つがこれも似たようなもんだろう。正直、今日会つただけの人に対して負うにはでかいデメリットだよなあ。

「うーん」

「や、雇われる以上はつ、そりゃもう懸命に働かし、君の指示に何でも従おう。…君に断られてしまったら、それこそ奴隷か、娼婦にでもなるしか…」

「ううん…」

中々断り辛いことを言ってくれぬぜ…！これでオレが断つてほつたらかしたら、絶対罪悪感に苛まれるじゃねえか…ッ！

芯だけになつたりリングを焚き火の中に放り投げ、ちら、とジンの方を見る。

ジンにも会話の内容は聞こえているのだろうけれど。こいつは全てオレに任せる気なのか、伏せて我聞せずとばかりに目を閉じている。

「き、君にだけつ、であるのなら、夜の世話だつてしよう。…その、だから」

「何が出来るの？」

「私をやと　　は？」

「だから、オレが雇ったとして、何が出来るの？　ねーさん」

「え、ええと　　夜のお世話と…」

「それはいいから。　他には？」

「…鬼族だからして、戦闘には自信がある。　そこそこの武器さえ貸して貰えれば、ギルドでそれなりに稼いでみせよう」

諸経費はまた別、だけれど。　とぼそりと告げる彼女に、ふむ、と腕を組んだまま考え込んで。

「他には？」

「多少の読み書きと　　計算、とか」

「家事とかは？　　主に料理面」

「鬼族風のものになるが、出来る。　他の家事も、一通りは」

「成る程。　　よし。　　いいよ。　　雇うよ、ねーさんのこと」

「本当か！？　　ありがとう！」

「いっよいっよ」

不安そうにこちらを窺っていた表情を、ぱあつ、と明るくさせて彼女は笑みを浮かべる。

こちらに彼女を見捨てるって選択肢が選べそうにない以上、こうするしかないだろう。これが男であつたならばともかく。美人の女性の、しかも森を出て初めて出会つた人物なのだ。

無碍に扱うつてのはなんか、縁起が悪い感じもして、出来なかつた。

「名乗り遅れたけれど、オレの名前はアベル。アベル・アルベルト。こつちの虎はジン」

「がっ」

「ああ、よろしく頼む。私の名前はカザネ。カザネ・ケイロンという」

「よろしく」

「がっ」

オレが右手を差し出して、彼女がその手を掴み握手をし。何時の間にか目を開けていたジンがオレ達の手の上に肉球を重ねる。

まあ、最悪都合が悪くなりそうだったら国出るなりすりゃいいや。と適当に考えながら、雇つたことの弊害を頭に思い浮かべることを止めた。

この日はそのまま簡単に雇用条件について話し合い。

とりあえず彼女が自立できるようになり、世話になつた金額の2倍を払い終えるまで、ということまで話がついた。

正直倍にして返さなくてもいいよ。とは思つただけけれど、雇われ

る以上は雇い主にちゃんと利益がなければ、と彼女が断固として主張した。

損するわけでもないし、まあいいや、と受け止めて、夜も更けて来たので休むことにした。

早速不寝番をする、といったカザネを組み立てたテントの中に突っ込んで、オレとジンが外で寝る。

雇われの身でこんな待遇を受けるわけには、と抗議する彼女を、ジンという寝床の快適さと、自動警報機としての高性能っぷりを説明ぶっちゃけジンが気付けなけりや夜間のオレらじゃ起きてても気付けない。それくらい気配に敏感であることを説明すると。

ならば私がジンが、とジンと一緒に寝ようとして、オレ以外を眠る時に寄せ付けないジンの尻尾にはたかれ、テントに押し込まれた。

そんなこんなで、明くる日。

設営したテントを畳んでバッグにしまい、バッグから取り出した果物を三人で食べて朝食代わりにした後。

旅の道連れも出来たことだし、さっさと王都に向かってしまおう。ということ、早速出発することにした。

ちなみに、昨夜はなんだかんだで疲れが溜まっていたのか。テントに放り込まれたカザネはその後直ぐに熟睡して、特にイベントというべきものは起きなかった。

「というわけで、何にせよ王都につかなきゃ話にならない。巻きでいこう」

「そうだな。ここからならば王都まで一日もあれば着くだろう。上手く行けば今日中に着けるかもしれない」

「お、そんなに近くまで来てたのか。よしや、ジン！」

「がっ！」

ならさつさと着いてしまおう。いい具合に話が運べば、今日は宿屋で異世界の本格料理が味わえるかもしれない。

そう考えてジンに声をかけると、オレが乗りやすいよう、少し身を屈めてくれるジン。その背中にひょいっと乗りつつ。ジンの上からカザネに手を差し出す。

「ほら」

「えっと……私も乗っていいのか？」

昨日、一緒に寝ようとしたのをにべもなく拒絶されたのを気にしているのか。カザネがちらちらジンを見ながら尋ねてくる。

「がっ」

構わない、といった風に返事をするジンに、少し考えたあと、意を決してオレの手を掴み背中に飛び乗るカザネ。

オレの背後で拳動不審チックにオレの服とジンの毛を掴んでるのがなんか面白い。

「よし、出発だ、ジン。カザネは、オレでもジンでも良いけ

ど、振り落されないように気をつけとけよ」

「がっ！」

「わ、わわっ」

むっく、と起き上がり。のそのそ、と背に乗った重みのバランスを確かめるように幾らか歩いてから、駆け出し始めるジン。いきおい加速し始めると同時、ふわり、とジンの脚が大気を掴み、空へと舞い上がる。

「…………。なあ、アベル。昨日助けてもらった辺りから、薄々気付いてはいたのだが…」

加速するにつれ、強くなってきた空気抵抗にそれを軽減させる魔法を唱えながら、背後でオレの背中をがっしと掴むカザネに意識を向ける。

「その、この虎　ジン、は、もしかして。空を飛べるのか」

「飛べるよ」

「…………私が知る限り。普通の虎は空を飛べない　というか。空を飛べる虎、というのは一つしか思い当たらないのだが」

「ああ」

「…………王天虎なのか」

「うん」

「……そうか」

なんでこんなところに居るんだ。とか。伝承でしか聞いたことなかった。とか、どうやって王天虎と…とか。なんか後ろでぼそ呟いてる声が聞こえてくる。

その疑問はまあ、じーさんに説明されてたし、オレにも多少は分かる。孤高の存在とか言われる賢獣の最強種が人間に懐いてるとか、意味わからんよね正直。

けど、そんな最強種が干し肉あげたら懐いたとか。考えてみるとオレも意味がわからないのであえて背後の呟きは無視することにした。

どうやら、カザネが言っていた王都に着くまでにかかると予想した時間は、普通にオレたちが歩いての時間だったらしく。

軽く前世の車並の速度で走るジンに乗っていたら、昼過ぎ頃には王都と思しき都市の姿が見えてきた。

このまま空を突っ走って王都に近付くと、門番の騎士達に要らぬ警戒をされるかもしれない。とカザネが伝えてきたので、王都が見えた辺りでジンには大地に降り立ってもらい、そこからはのっしおしと歩いて向かう。

「はあ……ここが王都。か。」

アセナル王国の王都アルハイム。遠目からでも見える広大な、そして堅牢そうな城壁と、その城壁に囲まれてよきつと先端だけが見える王城と思われる建物。

オレと出会う前はこの王都を拠点に活動していたというカザネの話

によると、この城壁は40年前の魔物の大規模侵攻以来、一度も魔物の侵攻を許していないらしい。

「すげー、とオレが素直に感心して。カザネも周りが魔物だらけの鬼ヶ島でもあそこまでの城壁ではない、と言う。」

と、王都で活動してた。ってことは。

「…カザネが泊まってる宿屋に戻れば、幾らかの備えは残ってるんじゃないの？」

「いや。私は別の国に向かってみようと思って、宿を引き払った後だったのな。宿には何も残っていない」

「なんかさー。王都に居た頃から狙われてたっぽくね？カザネ」

拠点を移そうと都市を出て、その直後に偶然奴隷商人に寝込みを襲われるとか。偶然にしても出来すぎている気がする。

そう告げると、有り得ない話じゃない。と言って、顔を顰めるカザネ。…マジか。鬼族ってだけでそんな危険度増すもんなのか。

実際はどうか知らんけど、なんかグルガの森とは別の意味で気をつけた方が良さそうだな。そんな危険なのは鬼族だけかもしれんだけど、人族だから安心して保障も無いし。

そんなことを考えながら気を引き締めていると、気付いたら門の近くまで着いていた。

巨大な虎に跨って現れたオレ達に、門に並ぶ人々やら門番っぽい騎士達やらが驚いたような目を向けている。

そろそろ降りた方がいいかな。と感じたので、カザネと共にジンの上から降りて、周りに倣って門を通る順番待ちをしている人の列に並ぶ。

ジンの威容に、ビビりつつも興味を抱いているのか、周囲から向け

られる視線の数が凄まじい。　努めて気にしないようにしつつ。

「そついや、王都に入るのって金とかかかんのか？」

「ああ。国民は無料だが、それ以外は銀貨2枚。冒険者であるなら銀貨1枚。私は冒険者なのだけれど、今は証明書が無いから申し訳無いが…」

「銀貨4枚か。　備えはわりとあるから構わな　と」

カザネと話ながら順番が来るのを待っていると、白色の騎士甲冑に身を包んだ二人の騎士が、こちらへと近付いてきた。なんだなんだ、と多少身構えながら視線を向けると、騎士の片割れが話し掛けてくる。

「申し訳ありませんが、冒険者の方ですか？」

「ええつと、はい。…あ、いえ。冒険者志望です。ギルドに登録しようと思ってきました」

少し言葉遣いを正す。TPOを弁えるというか、わざわざ生き難い人生を送るつもりはない。

「そうですね。それで　その、そちらの賢獣…ですよね？　賢獣殿と、鬼族の人はお連れさんで？」

「はい。こっちの　ジンというんですが。こいつはオレの相棒です。こちらの女性は、訳あってオレが雇っている鬼族の冒険者です」

オレが騎士の言葉を肯定すると、周囲の人々がどよめく。賢獣と共に行動してるのって珍しいことなんかなあ。

「成る程。わかりました。申し訳無いのですが、魔獣・賢獣使いの方々はこの都市でもそれなりにいますが、こんな強力そうな賢獣殿は珍しく、周りも多少混乱していますので、あちらの方で手続きとさせて頂いてよろしいですか？」

「ああ、成る程。わかりました」

「でかい！つよそう！こわそう！の三拍子揃ってるもんな。そりゃ普通は怖いかな。」

騎士に促され、他の審査を受けている人とは別の通用口みたいなのところに案内される。

通用口の前に簡易な椅子と机が用意され、案内してくれた騎士のもう一方がそこに座り何かの書類を作っている。

そこで名前やら年齢、出身地。身分証明できるものの有無などを聞かれ、正直に答える。出身地の辺りで騎士の二人が引き攣った顔を浮かべていたが、それでも一応大丈夫らしく。銀貨二枚を渡すと許可証が発行される。

カザネも同様の質問をされ、冒険者ギルドのギルドカードを失ったことも説明していたが、やはりギルドカードが無いとダメらしく。

大人しく銀貨二枚を肩代わりして支払った。

「はい。大丈夫です、お二人に関してはこれで終了です。こちらのカードが一週間の滞在許可証となりますので、それ以上滞在する場合は役所にて許可証の更新なり、ギルドで冒険者登録をするなりして下さい」

それぞれ騎士の人から手渡されたカードを受け取る。

冒険者になり、ギルドに届出をしておく、冒険者はそのギルドのある都市に滞在している間は以降通行料が取られないらしい。他の都市に拠点を移したらリセットされるそうだけど。やっぱり便利な冒険者。」

「それで、次は賢獣殿についてなのですが。アベルさんは都市に賢獣や魔物を連れて滞在することに対する規約はご存知ですか？」

首を横に振る。 知らん。

「それでは説明させていただきます。 都市に魔物や賢獣を連れて同行する場合、その全ての責任は連れ込んだ同行者 つまりアベルさんに課せられます。」

都市内を連れ歩かれるのは構いませんが、宿泊される施設は、その都市の魔獣、賢獣同行者用の設備に宿泊して頂きます。これは無用な問題の発生を防ぐ為ですのでご理解下さい。 宿泊施設については、施設の情報を載せた冊子を後ほどお渡ししますので

頷く。 泊まれるところが限定されるのはアレだが、考えてみればお隣に猛獣が住んでるとか、一般の人からすれば結構な恐怖だろうし、むしろ都市側でちゃんと対応を考えてくれてるのは助かる。

「また、賢獣殿が都市内で問題を起こした場合、同じ魔獣、賢獣同士であれば、同行者同士での解決を。 それ以外の被害が及んだ場合は同行者に厳罰が下されます。 場合によっては都市外退去。 死罪なども有り得るのでご注意ください」

「正当な防衛の場合は？ …例えば、コイツが攫われたり襲われそうになった場合」

「その場合は問題ありません。ただ、出来る限り相手は殺さず、捕縛するよう伝えてくださると助かります」

だって。とジンの方を振り向き見遣る。がう、と一声鳴いて、了承の返事を返すジン。

正当防衛が許されるなら大丈夫そうだ。ジンなら自分の身は余裕で護れるだろうし。

「こんなところですかね。それと、冒険者ギルドに登録されるのであれば、あちらでも伝えられると思いますが、アベルさんが冒険者となり、その滞在する国家が魔物の大規模侵攻に晒された場合、賢獣殿にも参戦の義務が生じますので、そちらもご注意ください」

「わかりました」

これも問題無い。その時は一緒に戦うつもりだったし。

「それでは、以上で説明は終わりです。賢獣殿にも、こちらのプレートが滞在許可証となりますので、都市に滞在される間はこちらをどこかにつけておいて頂けますか？」

鉄製のプレートを手渡される。なんかペットとかの首輪についてる鑑札のアレみたいなんだった。

後で適当に首にでも提げさせておこう。

ようやく王都へ入ることが許可されて、立ち上がった騎士に都市内へと案内される。

ジンが手続きの間に暇で眠くなってきたのか、少し眠そうな顔をしてオレの後に続く。

カザネは騎士から質問された以外は何も喋らず、黙々とオレの後に

ついでくる。鬼族だし雇われの身だしとかで、色々気を遣ってるのかもしれない。

ともあれ。騎士からジンを連れて宿泊できる宿のリストが載った冊子を受け取り、ペこり、と頭を下げる。

「それでは、色々とお世話になりました」

「いえ。 我らが王都でよき時間をお過ごしになられますよう。

ようこそ、王都アルハイムへ」

第6話 宿探し

王都に入ったオレとジンとカザネ。

空を見上げると着いたのは昼を少し過ぎたくらいだったのに、今は結構日が傾いている。

とりあえずは宿を決めておこうと思い、土地鑑もあるであろうカザネと共に渡された冊子をパラパラとめくる。

「結構少ないなあ、泊まれる宿。カザネはこんなかでお勧めとかある？」

「ふむ。予算はどれくらいなんだ？」

「ざっと見たところ、どれでも問題無いかな。今ある分でも宿代だけなら3ヶ月くらいは大丈夫そう」

「少し疑問なんだが。君は今までグルガの森の中で生活してたんだよな？　なんでそんなにお金があるんだい？」

「別に疚しいことをしたわけじゃないよ？　金も服も道具も全部、育ててくれたじーさんの遺産っただけ。じーさん昔はそこそこの冒険者だったらしいし」

「成る程な。わかった。それで、お勧めの宿だったか」

「うん」

「私もずっと同じ宿で生活していたし、他の宿の評判とかは分からないんだが……そうだな。この宿は止めておいた方がいいかもし

れないな。安いが、町外れだから冒険者ギルドのあるところから遠く、他の場所に行くにも時間がかかる。その代わり静かなところかもしれないが。他には」

そんな感じで、主に地理的な面でのアドバイスを受けつつ、泊まる宿を考える。あとは冊子に載っている紹介文とかも参考にしつつ。最終的にギルドにそこそこ近く、割高だけど広くてジーンと一緒に使える部屋がある宿、『遙々亭』に決定する。

1階に大型の魔獣・賢獣も入室できる部屋があるのが決め手だった。他の宿だと大型の賢獣は泊まる場所を分けたり、交通の便が悪かったりするのだ。

その分、他に比べても結構高かったが、仕方ない出費と割り切ることにする。

「よし。オレの宿屋はこれでいいかな。カザネはどうする？前泊まってたところ？」

「え？」

「え？」

「私も一緒じゃないのかい？」

「いや、流石にカザネは魔獣連れでもないわけだし。こんな高いところに泊まったら借金返済すんの大変だろ」

「え？」

「え？」

あれ？オレがおかしいのか？

どうにも話が噛み合わない。じ、とカザネの黒い瞳を見てみると、あちらも困惑したような表情でこちらを見詰めている。

ジンの方を見てみる。ワカンネ、とばかりに首を傾げた。

「あれ？ だから、カザネはオレ達と違って宿の制限とか無いんだから、普通の宿屋に泊まった方がいいんじゃないの？」

「部屋も余裕がありそうだし、アベル達と一緒にではいけないのか？」

「いけないわけじゃないけれど、余計なお金がかかるじゃんか」

「？ 何故余計なお金がかかるんだ？」

「いやいやいや あれ？」

不思議な顔して尋ねてくる彼女に突っ込もうとして、気付く。あれ？

「もしかしてオレ達と一緒に泊まるつもり？」

「??? 当たり前だろう。雇用主に余計な負担をかけるわけにはいかないしな。幸いワンルームだがかなり広そうだし、寝床の用意は簡単にできそうだ」

「あれ？ いや あれ？」

「どうしたんだい？」

「いや、ええと……いいの？それで」

「ああ」

.....
あっちがいいならいいのかなあ。

正直オレこの歳まで女つ気皆無の生活してきて、今ぼん、と眼の前に据え膳置かれたら我慢する気無いんだけどな。

精神的な年齢はともかく、身体とか猿みたいなティーンエイジャーだし。

カザネも昨夜夜伽だとかなんだとかの話をしていたし、幾ら信用されてるとしても、男女が同室で泊まることの意味は理解しているだろう。

うん、よし。

「よしわかったおーけーりかいした。そしたら、ちゃきちゃき向かうとするか」

「...? ああ」

「がっ」

あっちが気にしてないのにオレが気にするのもアホくさい。

脳裏にふわふわ浮かぶ疑問を纏めて畳んで仕舞いこんで、オレ達は冊子に紹介されている『遙々亭』に向かうことにした。

「いらつしゃいませニヤ」

『遙々亭』にて、オレ達を迎えたのは喋る猫だった。

いや違う。猫みたいな人だった。猫型の獣人、だろつか。人の子供くらいの身長で、顔はまんま黒猫。ホテルマンみたいな服をビシツと着こなす姿は様になっているが、猫。

そんな猫が、カウンター越しに、丸椅子に立ってオレ達を迎えてくれた。

「、ああ、えつと、しばらく　とりあえず1ヶ月くらい1部屋借りたい。　部屋はこいつが入れるところで」

本当にファンタジーだよなあ、とか内心で思いつつも、これ、と指で後ろから入ってくるジンを指差す。

猫は、指の先を追ってオレの背後へと目を向けて。

「……………ニヤ、？」

両目を見開いた。

一分くらいそのまま硬直していたかと思うと、行儀悪くカウンターを踏み越えて、ジンの下まで近寄っていく。

なんだなんだ。と顔を付き合わせるオレとカザネ。

「……………にゃ？　にゃにゃー……………にゃにゃにゃにゃ？」

「がう」

「ニヤニヤ！？　にゃ、……………にゃーにゃにゃ、にゃにゃー！」

「がうがう」

「にやにやーッ！」

猫がひれ伏した。

全く意味が分からなかったオレとカザネは、ぽかーんとそれを見て、目が点になる。

ジンの方を見てみると、なんかドヤ！みたいな顔してるのがイラついた。

「えーと　　すみません？」

「ハッ、失礼いたしましたニヤ。　まさかジン様のようニヤ方が私めの宿に来て頂けるニヤンて！お連れ様のアベル様とカザネ様ですニヤ？どうぞ、歓迎させて頂きますニヤ」

ハッと我に返ったように立ち上がり、両手で服の汚れを払ってからそう言う猫。なんかとんでもない歓迎っぷりだった。

「あれ？何でオレの名前？　　っーかジンがどうかしたんですか？」

「先ほどジン様に教えて頂きましたニヤ！　　ニヤ！どうしたもこうしたも、ジン様達王天虎の方々は、我々猫族や虎族の獣人にとつては神様のような存在ですニヤ！　古来より我らを守護してきた下さった王天虎の方に、こんなところでお逢いできるニヤンて感動ですニヤ…！」

「はあ…」

ははー、と再びジンにひれ伏す猫。

あまりの感動っぷりに少し気後れする。　　っーか、にゃーにゃー
がうがう言ってたアレ、会話だったのか。

とりあえず、放っておいたらいつまでたっても崇めてそんな猫を促し立たせて、部屋に案内してもらおう。

猫の名前はマーカスというらしい。この『遙々亭』の店主だそうだ。マーカスに案内をしてもらって、宿の中へと進む。魔獣・賢獣を連れてる人向けの宿泊施設だけあって、宿は全体的に広く作られてあって、廊下もジンが充分に歩けるだけの広さがあった。

「ジン様に泊まっていたただくには、ちと恥ずかしい部屋でありますニャ……」

そう言っつて案内された部屋は、成る程冊子の紹介文通りに広い部屋だった。

ワンルームではあるけれど、オレ達人が使う分のベッドやソファ、テーブルなどが占領するスペースを除いても、ジンが歩き回るには充分なスペースがあり、例えゴロゴロ寝転がったとしても窮屈な思いはしないだろう。

床にはなんか上質そうな毛皮が敷いてあり、寝心地もよさそうだし。

「なんかめっちゃくちゃ良さそうな部屋だけれど、これって高い部屋なんじゃないですか？」

「はいですニャ！　ジン様に滞在して頂ける以上、最大限のお持ち成しをさせていただきますニャ！」

勿論値段は通常料金で構いませんニャ。なんでしたらタダでも構いませんニャ」

「いやいやそれは流石に。 分かりました。 お言葉に甘えて通常料金で」

「かしこまりましたニヤ。 ちなみにお食事についてニヤのですが、朝食は9時までで食堂の方に来て貰えれば提供させていただきますニヤ。 昼と夕は別料金とニヤりますが、こちらも食堂に来て頂ければ作りますニヤ。 こんニヤ所ですが、何か質問はありますかニヤ？」

「了解です。 オレは特にないな。 ジンとカザネは？」

「がっ」

「私も無いニヤ」

「」「」

三人の視線がカザネに集中する。 移ってしまった口調に、恥ずかしそうに顔を赤らめながら俯くカザネ。

「……。 ……えーと、そしたら、先払いでとりあえず一カ月分。 払っておきたいんですが」

「……。 かしこまりましたニヤ。 銀貨50枚にニヤりますが、宿帳への記帳ニヤどもありますので、お手数ですが一度カウンターまで来て頂いてよろしいですかニヤ？」

「分かりました。 二人は楽にしといてくれていいぞ」

「がっ」

「……何も突っ込まないと、それはそれで恥ずかしいんだ……」

マーカスの後に続いて部屋を出ながら見たカザネは、顔どころか角まで真っ赤になっていた。

思わぬイベントが起きた『遙々亭』だが、悪くないどころか寧ろ良いイベントだったのでよしとする。

宿代の支払いや記帳を終えて、部屋に戻った頃には外の景色はすっかり暗くなっており、旅の疲れもあるしギルドへ向かうのは明日にすることにした。

オレもカザネもジンも、荷物と呼べるような荷物も無いので。 厳密には、オレにはあるけれどバッグのお陰で荷物の整理をしたりという作業をする必要が無いので。

しばらく部屋でだらだらとジンの毛繕いを手伝ったり、うるちよると興味深そうに室内を見て廻るカザネを眺めたりして休んでから、夕飯を食いに行くことにした。

折角食堂があるってのに外に出るのも面倒臭かったので、今日は『遙々亭』の食堂を利用することにする。

ジンとカザネの二人を連れて、部屋を出る。 受付のどこまで行くと、オレ達が来た廊下とは反対側のスペースが食堂になっているよっうで、そちらへと向かう。

着いた食堂は、オレが勝手に想像していた冒険者と荒くれ者がきつたない感じに酒飲んでワツシヨイ。といった感じではなく。なんか閑静なレストラン、って感じのところだった。人も疎らで、食事している人の殆どが傍に鳥やら犬やらの、恐らく魔獣だか賢獣だかっぽいものと共にいた。

「なんか、意外」

「うん？ 何がだい？」

「いや、勝手な想像ではあるんだけどさ。こういう宿屋に付属した食堂つてのはもつところ、きつたない感じの冒険者のおっさんとかがワイワイ居て酒かつくらって騒いでるイメージがあつたから」

「ああ、成る程。…多分それは、ここが魔獣や賢獣の使い手専門の宿のような感じになってるからじゃないかな？」

「うん？ …ああ、そうか」

「そうだ。安心しろ、私の知る宿の酒場は、概ね君の言ったような酒場だったよ」

恐らくではあるけれど、一般の客はこういう、得体の知れない猛獣がうるつくところなんか来たがらないのだろう。

普通の食堂とちょっと怖そうな食堂だったら、みんな普通の食堂選ぶよね。

納得がいつてスッキリしたところで、適当なテーブルに座ったら厨房からマーカスがやってきたので、料理をお任せで頼む。

料理が出来上がるまでの間、カザネやジンと適当に喋りながら待っていたのだけれども、この食堂にいる使い手達からしてもオレ達の存在　　というか、ジンの存在は珍しいのか、ちらほら視線を感じる。

でっかい虎っただけで、王天虎だと確信するのはマーカスみたいな猫族くらいかもしれないけれど、どことなく溢れる気品やら風格みたいのがジンにはあるので、気になるのだろう。でけえし。

注目されているジンの方はと言えば、特に気にしてはいないようなので、オレも一々気にしないようにする。人の世に出た以上、こっつうのはこれから日常茶飯事になっていくだろうし。

やがて運ばれてきた料理の数々は、オレの十年以上に及ぶ手の込んだ料理へ対する高い期待というハードルを超えて、非常に素晴らしきものだった。

今まで食べてきた塩と出汁で適当に焼いたり煮込んだりした雑な料理とはまるで違い、しっかりと計算された味わいというものが味覚を楽しませる。

食用油が手に入らなかったので作れなかった鶏肉の唐揚げや、どこか懐かしさを感じさせる魚の煮物などを食べた時には不覚にも涙が滲んだ。

がつつくように食いながら追加注文等もしてしまって、対面のカザネに少し呆れたような目で見られつつ。ジンの方にも視線を向けてみると、香草で包まれた巨大な肉をガツガツ骨ごと食ってるのを見て、しょーがねえなコイツら、って目で見られた。

…うつん、ジンの食ってる肉もめちゃうちゃ美味そうだなあ。

腹がぱんぱんに張るまで食い漁って、ジンもしっかり二度程肉のお代わりをして、ようやく食欲が落ち着いた。

「私もそこそこ食べる方だという自覚があったんだが。大きさを考えるとジンはともかくとしても、二人共凄まじい食べっぷりだな……なんだか、安心したよ」

食後のお茶を飲みながら、感心したようにカザネが呟く。

流石にオレは調子に乗って食いすぎた感がある。胃が苦しい。

「ずっと森暮らしだったからさ、こういうちゃんとした料理って初めてなんだよ……。次はもう少し落ち着くと思う」

「ずず、と茶を啜りながら言い訳を吐く。いつも食いしん坊万歳してるわけじゃないんだ。」

ちら、とジンの方を見ると、あいつも食いすぎたのか。床に寝そべってごろごろしてた。少し苦しそうだけれどそれ以上に幸せそうだからいいだろう。

王天虎を崇めてるっただけあって、こいつらが好きな食事とかもわかるんだろうか猫族。ご満悦だ。

「ゲルガの森で育ての親と二人きりか……。本当によく生きてこれたな、今まで。まあそうでもなければあれほどの強さは身に付けられないか……」

「そうは言っけれどさ。数は多いってもハウンドドッグの群れだぜ？ カザネでもちゃんと装備が整っていれば対処できたんじゃないか？」

「そうだね。恐らく対処出来るだろう。けれど、10回やったから1回は失敗するだろうとも思うよ。あんなに早く、そつなく、対処することは出来ない」

ギルドの依頼であっても、一人で受ける気にはならない。とカザネは言う。

そこそこ出来る人に見えたけれど、そういうもんなのか、と思う。

まあゲームと違って1回失敗したらやり直しなんざできないわけだし、慎重に慎重を重ねるくらいの方がいいんだらうな。

「そついやカザネって冒険者としてはどんなもんなん？」

「ふむ。どうせ明日ギルドで詳しい説明を聞くだらうし、その時でいいと思っていたが まあいい。簡単に説明すると、冒険者にはGからAまでのランクがあつて、その上にSとSSであるのだけれど」

「ふむふむ」

「私は今Cランクだね。格付けで言えば、大体一人前、中堅、ベテランとかそんな具合のランクだ」

「なるなる。なんか詳しく聞き出したら明日二度手間になつちゃいそうだから、明日にした方がよさげだな」

「そうだな。ジンが居るから大丈夫だらうけれど、居なくても魔

法使いの君の前衛くらいは務められると思うよ」

「……。 あいよ、期待してる」

…：そっぴや魔法しか使つてなかつたなあオレ。典型的な後衛タイプの魔法使いだと思われてるのか。

まあでも、周りの油断も誘えそうだし、暫くは魔法使いとして活動してみるかな。

明日充分説明されるだろうし、とギルドの話はそこで打ち切つて、暫く胃が落ち着くまでカザネと雑談を続ける。

王都の美味い露店の場所とか、武器屋やマジックアイテムを扱つている店についての話の他。

王都以外にも色々なところを廻つてきたカザネの旅の話に花を咲かせて、話題は尽きることがなかった。

ジンの方はジンの方で、食堂の客がオレ達以外居なくなつた頃、マーカスが奥さんと子供らしき猫族の人を連れてきて、にやーにやーがうがうなんか楽しそうに喋つた。

子供の頭にジンが前足を乗つかけたりすると、マーカスと奥さんがなんか凄い感動してた。というか興奮してた。鳴き声すげえ。

結局夜が更けるまで食堂で過ごし、部屋に戻つた頃には日付け超えてたんじゃないかな。

いざ寝ようとした時にベッドが一つしかないことに気付き、そっぴやマーカスにベッドをもう一つ用意して貰えるか頼んで無かつた、と思ひ出したが。

こんな時間からカザネとどっちがベッドに寝るとか譲り合つのも面倒臭かつたので、二人で仲良く一緒に寝た。

特に何も起こらず夜が明けた。

第7話 冒険者ギルド（前書き）

ふとランキンググチェックしたら日刊ランキング2位：！
嬉しさのあまりもう少し寝かしておこうと思っていたストックを放出してしまいました。

こうしてちゃんと小説を投稿するのは初めてですが、感想を頂けたり、お気に入りとして登録して頂くのってすごい嬉しいですね。拙作を読んでいただきありがとうございます。

第7話 冒険者ギルド

明けて翌朝。

至極当たり前のようにカザネと一緒にベッドで目覚めて、ふっつーにおはようございます。と挨拶を交わす。

オレ達が起きたことに気付いたのか、むくりと起き上がりこちらに擦り寄ってきたジンも、わしゃわしゃ撫でておはようと挨拶。

それからそれぞれ顔を洗いに行く等して身なりを整えると、三人で連れ立って食堂へと向かう。

食堂でせっせと働くマーカスと奥さんに挨拶して、三人分の食事を運んでてもらいながら、今日の予定について話し合う。

「メシ食べたら早速ギルドに登録しに行こうと思うんだけど。そ
ういやギルドって営業時間とかあんの？」

「いや、基本どこのギルドも常にどの時間に行ってもやっているな。
緊急の依頼というのも少なくないし」

「したら食べ終わったら一旦部屋に戻って、準備整えたら早速ギル
ドに向かおうと思うんだけど」

「ああ、それで構わない」

ちやつちやと今日の指針を纏めて、食事に専念する。

朝食はトーストとコンソメ系のスープにサラダといったあっさり系
のものだった。今まで狩猟民族バりに肉食メインの生活をしてい
たからか、サラダがめっちゃくちゃ美味しく感じる。野菜は大事だな。

ジンの方もサラダと軽く炙った牛肉のようなものを食べていて、傍で昨日紹介されてたマーカスの子供らしき娘っ子が、にやんにやん楽しそうにジンの毛をブラッシングしている。
なんか至れり尽せりだなおい。

朝食を食べ終えても、ジンの方はまだせつせとブラッシングされており、ジンも気分良さそうにされていたのでジンは食堂に置いてカザネと二人で部屋へと戻る。

ぶつちやけあいつ準備もクソも無いしな。

オレもバッグから杖を取り出して多少身形を整えるくらいだし、カザネも持ち物が無いので、オレの外套羽織るくらいで準備完了。

そついや、登録終わったらかザネの服も買いに行かなきゃな。下着とかも必要だろうし。 ああ、あと武具もか。

爺さんの遺してくれたお金が、金貨だけでも10枚はあるし、足りると思うのだけれど。

ちなみに、ちよくちよくお金の話が出ていたけれど、この国の貨幣は銅貨、銀貨、金貨が使われており。

じーさんからの説明から推測するに、銅貨が大体1000円程の価値で、銅貨が百枚で銀貨1枚。銀貨が百枚で金貨1枚といった風になっている。

つまり、銀貨は日本円に換算すると大体一万円で、金貨は百万円となるのだ。

ひやくまんえん！

じーさんはオレに、約一千万円の遺産を残してくれたわけである。冒険者って儲かるんだなあ！。

バッグの中から財布代わりの布袋を取り出し、中身の確認などをし

ていると、カザネが興味深そうにバッグを見ていた。

この4次元ポケットみたいなバッグ。それなりに持っている人はいるらしいけれど、今の技術で作れるものじゃないので、めっちゃくちゃレアいバッグらしい。それこそ金貨10枚は下らないよ
うな。

ので、盗まれないように気をつける、と昨晚話している時に注意された。

なるべく肌身離さず持ち歩いておこう。確かにこれ無くすと地味に辛すぎる。

「と。 そうだアベル。そのバッグの中に、アベルが羽織っているようなフード付きの外套みたいなものはないかい？」

「ごめん無い。 なんで？」

「そうか……。 いや、街の外や昨日までは兎も角として、このままで街をうろつくと面倒に巻き込まれやすくてね」

そう言って、自分の頭に生えている角を指差す。

ああそうか。 鬼族って丸分かりだもんな、それ。

「んでも、フードしたってシルエツトでバレるもんじゃねえの？」

「まあそうなんだけどね。 それでも、あからさまに見えないとそんなに気にならないのか、フードをしてるのとしていないのと同じや問題が起こる割合が全然違うんだよ」

「そういうもんなんか。 ああじゃあ、今日はオレの外套貸し上げるから使いなよ。別に寒いわけでもないしな、今日」

ふうん。と頷いてから、羽織っていた外套を脱いで彼女に差し出す。オレが外套してたのって冒険者っぽい外見つてのと、じーさんが旅してる時は外套便利じゃぞ。って言うてたからって理由なだけだしな。

カザネは、葛藤するように半端に外套に手を伸ばしたまま、瞳を揺らして考えていたが。少しするとありがとう。と言って外套を受け取った。

どうせ、オレのを借りるなんて。とか、でもこのまま街に出てオレにも面倒を吹っ掛けるわけには。とか。そんなことを考えていたんだろつ。

麻の服の外套に、肩に提げたカバン。右手に持った杖はともかくとして、このナリだと自分でもガキっぽく見えそうでやだな。

弱そうに見られるのはいいけど、幼く見られるのは面倒臭い。オレも服何着か買おうかな。などと考えつつ。外套のフードを目深に被ったカザネと、ジンを呼びに食堂へと再度向かう。

食堂に着くと、マーカスの娘っ子がやーにやー楽しそうに伏せているジンの身体を昇り降りして遊んでいて、傍でマーカスが凄い恐縮そうにニヤーニヤー言いながら頭を下げていた。

「おい、ジン。今日はギルドに登録してから買い物するくらいだし、ここで留守番してるか？」

この状態で娘っ子引き剥がすのも心が痛いし。

「がう。 がうがう」

「ニヤニヤッ！ 申し訳ありませんニヤ！ ほらシエナ！ジン様は

これからお出掛けだから離れるニヤー！

「にやにやー！ にやにやにやーにや、にやー。なーうー！」

「がっがっ」

「にやにやにやっ！？ にやーにやーにや、にやにやにやー！」

「にやー！ にやにや、にやーにや？」

「がっ」

「にやにやにやにやっ！？ にやにや……ッ！」

「にやー！」

「がっがっ」

マーカスの娘っ子 シエナというらしい がジンから降りて、のっそりと立ち上がったジンがこちらに歩いて来る。オレ達に着いてくるらしい。

にやーにやーどんな会話をしたのか少し気になってしまおうオレ。

なんかシエナが愚図ってたっぽいことと、マーカスが慌ててたこととは分かるが。何故最終的にはマーカスがまたジンにひれ伏しているんだろう。ジンは何言っただ。

ともあれ。付いてくるなら付いてくるで一向に構わないので、ジンに昨日ジン用に門番の騎士から渡された許可証のプレートを、紐で括って首に提げる。こうすると本当にドッグタグみたいだった。

「よし。これでいいだろ。　　したらマーカスさん、行って来ます」

「行って来ます」

「がっ」

「はー！　行ってらっしゃいませですニヤ！」

「ですよー！」

マーカスとその娘っ子に見送られて、『遙々亭』を出る。猫族ってみんなジンに対してこんな感じなんかな…。

『遙々亭』を出ると、カザネに案内してもらって冒険者ギルドへと向かう。アセナル王国のギルドを統括する本部のような場所でもあるらしく、街の中心地の王城にも程近い。

フードを目深に被った怪しげなカザネと、杖持ったパンピーのガキっぽいオレ、巨大な虎であるジンの組み合わせは、どこに行っても人々の興味を惹くらしく。やはりここでも様々な視線に晒される。

時折見かける猫族の獣人なんかは、すげー、といった風にこちらを眺めた後、驚愕したように目を見開いてジンを二度見したりしている。

なんか普通の虎と王天虎の判別法。とかあるんだろうか。

地面歩いてる限りじゃちょっと大きな白虎と違いが無い気がするんだけども。

「？」

まじまじとジンを眺めながら歩いていると、視線に気付いたのか不思議そうな顔をしてこちらを見返すジン。

…やっぱり違いが分からん。いや、ジンと他の虎を見間違える気はしないけれど、ジンが他の虎とどう違うんだ。と聞かれると、うん。

「見えてきたな。あれが王都の冒険者ギルドだ」

「……………お？」

ジンと他の虎の違いについて、うんうん考えていると、先頭を歩いていたカザネが顎でしゃくって前方の建物を示す。

思考を打ち切ってそちらに目を遣ると。なんか、でっかい区役所みたいなんがあった。

「でかつ」

もっところ、もうちつと小ぢんまりとしてきつたなくて雑い、けどそれが逆に雰囲気ある。みたいな建物をオレはまたまた勝手に予想してたんだけれど。

王都のギルド本部は綺麗だった。外観もちゃんと整えられていて、建物の落ち着いた色合いというか雰囲気というかが、入る前からここでガヤガヤ騒いだりとかし難そう。という思いをオレに抱かせる。

「他の村や町はもつと小さいんだがね。大抵どこの国も首都だけはギルドの建物はこんな感じだな」

「はあー」

その国のギルドの本部も兼ねてるつつつてたし、だからなんだろうか。あとなんか見栄とかもありそうだけどさ。

思わず溜息をついたりなんかしちやいつつ、その建物へと向かっていく。

そうしてギルドに近付いていくと、なんだか近付くにつれてオレ達に向けられる視線が急増していく。 んん？

視線の元を探してみると、何やらギルドの入り口付近や、周りの通りにやたら多く人が居て、そいつらの大半がオレたちに視線を向けていることに気付く。

なんだなんだ、と気になりカザネに近付いて問いかけてみることにする。

「どこらっていつもこんな感じなん？」

「…いや。そんなことは無いんだが…… ああ」

「うん？」

「君だろ多分」

「オレ？」

「ああ。 巨大な賢獣を連れた冒険者なんてのは、早々いるもんじやない。その一部の冒険者にしたって、殆どが有名な冒険者だから噂とかで今どこで何をしてるのか。っていうのは把握できる。」

けれど君は、今まで私達に知られることなく、昨日突然現れたわけだ。それも特別強力そうな賢獣のジンを連れて。 別に城門を通る人の情報は、秘匿されるわけじゃないから 」

「耳聡い奴ならその情報を得て、一目見てみようか。って感じか。冒険者ギルド張ってりやすぐ見つかるだろうしな」

ジン超目立っし。

「だろうね。観察して有望そうならチームに誘ったり、縁を作っておこうってとこじゃないかな」

「まあ嫌いじゃないけどさそういの」

視線を向けてくる連中を見ると、冒険者っぽい身なりのヤツらの他にもいるんなヤツらがこっちを観察していることが分かる。

まあここで見てる連中は興味本位つてのもあるだろうけれど、殆ど全員情報の大切さが分かってる連中ってことなんだろうし、波のようにぶつかってくる視線は正直にうざったいけど、気にしないことにする。

「こつこつのは時間に解決してもらっしかなさそうだし　まあいいや。さっさと入ろう」

「そうだな」

「がっ」

いつの間にか止まっていた足を再び動かして、さっさと建物の中に入ることにする。

「あ、そうだ。カザネ」

「うん？　　なんだこれっ!？」

カザネに向かつてはい、と金貨を投げる。　　ぱし、と危なげ無くキヤツチして、掴んだ物を確かめて驚きの声をあげるカザネ。

「お小遣い。常にオレが居られるわけじゃなし。カザネもお金持ってた方がいいと思ってさ」

「だからって金貨は高すぎる!」

「無駄遣いすんなよ?」

「しない!」

そんな掛け合いをしつつ。ギルドの中へ入る。入り口はジンが三匹くらい同時に入れそうなくらい広かった。

外観と同じく、室内も整然としていて、働いている人たちもピシッと清潔そうな制服を着ていて、本当になんか前世の役所とか銀行みたいな雰囲気だった。

まあ扱ってるのは魔物の身体だったり、薬草っぽげなものだったりなんだけれど。

登録はどこに行けばできるのかと、一旦立ち止まってカザネに尋ねようと口を開きかけたところで、近くにいた職員がオレ達に近付いてくる。

長い髪をアップにして、紫の髪と瞳が艶やかな、女性の職員の制服であろう落ち着いた黒のドレスワンピースを着たお姉さんだった。澄ました顔にかかる眼鏡が、理知的な印象を与えてくる。　　背が高

くてオレくらいあり、170くらいか。耳が長く先端が尖ってるので、ファンタジー定番のエルフってやつなのかもしれない。数歩の距離まで歩み寄ってくると、綺麗な姿勢で一礼し。

「ようこそ冒険者ギルドへ。本日はどのようなご用件でしょうか？」

「ああと」

「私が紛失したギルドカードの再発行で、こっちが冒険者の登録だ。この賢獣は彼の連れ合いになる」

「かしこまりました。どちらも右手の階段から二階に上がっていただき、受付にて番号札を受け取ってから御待ち下さいませ。順番が来ましたら対応する者が番号札の番号をお呼びしますので、そちらの方でご用件をお伝えください。賢獣殿に関しましては、こちらでお待ちになられても、一緒に二階に上がられても構いません」

手で示された階段を見る。一段が浅く広く作られてるので、ジンでも充分昇れそうだ。

職員のお姉さんに感謝を告げて、二階に向かおうとして思い出す。

「 そうだ。一応オレの親みたいな人から、推薦状みたいなのが貰ってるんですけど」

「 推薦状 ですか？ 書かれた方のお名前を伺ってもよろしいでしょうか」

ギルドに行くならば渡すよう書かれていた、じーさんの手紙をバッグから取り出す。 あったあった。

お姉さんの様子からして、推薦状を出す慣習なんてあんま無いんだ
ろうか。 まあ確かに登録に誰かの紹介が必要なわけじゃなさそう
だし、何でじーさんこんな渡せとか言っただらと思いながら、
手紙を差し出すと共にじーさんの名前を告げる。

「はい。 ヨーゼフ・アルベルトです」

「「……………は？」」

「は？」

手紙を受け取ったお姉さんだけでなく、カザネまで変な声をあげる。
なんだ。 なんなんだ一体。

「……………え、ええと……………中身を確認させて頂いてもよろしいですか？」

どうぞ、と首肯する。

手紙を見てオレを見て、手紙に書かれてあるじーさんの名前を見て
オレを見て。

手紙に封がされてあるのを確認すると、封を解いて中に入っていた
紙を確認している。

カザネもなんだか、固唾を飲んで手紙を読んでいるお姉さんを凝視
している。

「……………」

「……………」

「……………？」

沈黙している二人を見て、ジンと顔を付き合わせて首を傾げる。
じーさん。あんた一体何やってたんだ冒険者時代。

「少々こちらでお待ちくださいませ」

お姉さんは唇をきゅっと引き結び、緊迫した表情でオレ達にここで待つよう告げると、手紙を持ったまま奥の方へと歩いて行く。
なんか拙かったりするんだろつか。同じく緊迫した表情を浮かべているカザネに聞いてみることにする。

「…なんか拙かったの？オレ」

「…いや。なんとというか…… 本当に君は、ヨーゼフ・アルベルトに育てられたのかい？」

「そうだけど？」

「……まあ、色々と納得がいったよ。あのグルガの森で十年以上過ごせたわけもわかった」

「うん？ どういうこと？」

「そうだね。ヨーゼフ・アルベルトが語らなければ君が知らないのも当然か。いいかい、彼、ヨーゼフ・アルベルトは」

「お待たせしたのう」

カザネが、オレの知らないじーさんについて説明しようとしてくれたところで声をかけられる。男の声だった。

男性職員用の制服である、灰色のシャツに黒いベスト、黒のスラッ

クス。髪は総白髪で、髪と同色の豊かな髭を生やしており、顔に刻まれた深い皺が木の年輪のように眼の前の人の深みを感じさせる。恐らく歳はオレのじーさんと同じか上くらいだろうけど、背をピン、と伸ばした姿はまだまだ全然元気そうだった。

そんな爺さんの後ろに控えるようにして、さっきオレ達の対応をしてきていたお姉さんがいる。

爺さんはじい、とオレの顔を見つめて。

「お主がヨーゼフ・アルベルトの子、でいいのかなの」

「ああと 厳密には父親じゃなくて、育ての親なんですが。」

「アベル・アルベルトと言います」

「ふむ。成る程の。 わしはこのギルドの責任者をやっておるクルツ・ロベイロじゃ。 すまぬがアベル君、色々と聞きたいことがあるので、そちらの賢獣殿と共に付いてきてくれぬかの？」

「ああと」

オレはカザネの方を見る。
ひら、と彼女が手を振る。

「私のことは構わない。ギルドカードの再交付が終わったら、ここで待っているよ」

「 分かった。 行きましようクルツさん。 ジン！」

「がっ」

「うむ。 じつちじゃ」

このでっかい冒険者ギルドの責任者。つまりはギルドマスターのクルツ爺さんに案内されて、受付を越えて奥の方へと案内される。オレ達とは別に階段を昇っていくカザネに手を振り挨拶しながら、なんだかただ登録するだけで終わりそうにないな、と思った。

第8話 ギルドマスター（前書き）

毎度、読んでいただきありがとうございます。

多数の感想とても嬉しく思います。

今後もここを伸ばした方がいいと思われる良い点、ここをこうした方がいいなどといった悪い点。

それらに応えられるかは分かりませんが、どちらも全て読んで参考にさせて頂きますので、どうぞ宜しく願います。

さしあたっては、登場人物の簡易紹介についてですが、他にも希望される方が多いようでしたら、作ってみようと思います。
ご意見よろしく願います。

第8話 ギルドマスター

ギルドマスターのクルツ爺さんに案内されて、やってきたのはギルドマスターの執務室のようだった。

オレのようなのが来た場合のことを考えてか、来客用にソファとテーブルもあり、そこに座るよう勧められる。

遠慮なく座ることにして、オレの背後にジン、対面にギルドマスターのクルツ爺さんが座る。

少しすると、最初にオレ達の対応をしてくれたエルフっばげなお姉さんがお茶を運んできて、オレと爺さんの前に置かれる。

ジンの飲み物をどうするか聞かれたので、ミルクでもあげてくれ、と伝えた。

ジンの元にお姉さんがミルクの入った器を置くと、退出するわけではなくギルドマスターの後ろに控える。 同席するらしい。

美人だし構わないけれど。

「さて。わざわざこんなところまですまんの」

「いえ。それで、あの　　じーさんの紹介文が何か問題だったんですか？」

「問題といえば問題かのう…。 お主は、お主の親、ヨーゼフ・アルベルトが冒険者だったことは知っておるかの？」

「はい、一応。 ぼちぼちな冒険者だったと、詳しくは話してくれませんでしたけど」

「ぼちぼち、のお…。 あやつめ、よう言ったもんじゃわい」

「……じーさんの知り合い、なんですか？」

憎たらしそうに、舌打ちでもしそうな様子で呟くギルドマスターの口調は、それでも旧知の間柄故の、親しさみtainなものが含まれていて、思わず尋ねてしまう。

「そうじゃの。 ヨーゼフが冒険者だった頃、わしはこの冒険者ギルドの一職員として働いておつての。 特別親しいわけではないが、親交はあつたの」

「成る程」

「今度はこちらから聞かせてもらいたいんじゃが、ヨーゼフは今、どうしておるんじゃ？」

「……じーさんは。 一ヶ月程前に亡くなりました」

「……そうか」

亡くなった頃のことを思い出してしまい口調が自然と暗くなってしまう。

「ずず、とギルドマスターが神妙な顔で頷きお茶を啜り、後ろの職員のおねーさんも驚いた顔に落ち込んだ雰囲気滲ませており、なんだか場の雰囲気も暗くなってしまう。」

それから、気を取り直してざっと今までの経緯を話す。

オレがグルガの森でじーさんに拾われ育てられたこと。 じーさんの墓を建てて森を出てきたこと。 死んでから見つかった遺書にこ

こちらに渡した手紙を届けるよう言われたこと。

それらを一度も口を挟まず聞き終えたギルドマスターは、もう一度茶を啜ると、成る程のう。と呟いた。

「その杖のこともある。お主がヨージェフに育てられた、というのは間違い無さそうじゃの。種族は違うとはいえ、賢獣まで従えているなどどんな巡り合せかとは思うがの」

「杖ですか？」

オレはじーさんの形見の杖を見る。

棒のように細長く、硬く、中心に宝玉が埋め込まれた杖を。

「うむ。そのような特徴的な杖を使っておったのはヨージェフくらいじゃしの。わしが見てそれはヨージェフの持っておったのと相違無い」

まあ確かに、杖って言うより棒とか、棍って言った方が正しいような杖だしな、これ。珍しいっちゃん珍しいのか。

「それに手紙の内容からしても、嘘を騙る意味なんて殆ど無いしの。自分の首を締めるだけじゃろ」

「手紙にはなんて書いてあったんですか？」

「うむ。“この手紙を持ってきた者に己の全てを教えた” とだけ書いてあった」

それは また。

よく意味のわからんことをするなあ、じーさん。

免許皆伝の証みたいなんかも知れないけれど、そんなのギルドの人に渡したってだからどーした関係無いわ。だろう。

なんでそんな推薦状でギルドマスターが出張ってくるような大事になってんだろう。

「……よく分からないですね。一介の冒険者であるじーさんの太鼓判なんかあったって、幾ら親交があったとはいえ、今やギルドマスターである貴方が出てくるほどのことだとは思えないんですが」

「ふむ。一つずつ説明していくとしようかの。…まず、アベル君は一つ勘違いをしておるの。ヨーゼフは一介の冒険者などではない。」

40年前の魔物の大規模侵攻から王国を救った大英雄。

SSランクの冒険者じゃ」

……マジでか。

ギルドマスターの話によると、オレを育ててくれたじーさんは、40年前にあった魔物の大規模侵攻から王国を救った超が付くほどの一流の冒険者であり、英雄であつたらしい。

話によると、40年前にアセナル王国を襲った魔物達の大規模侵攻

は、今までの歴史から見ても類を見ないほどのものであり、当然王国は騎士団と国に滞在する冒険者を全て動員して迎撃するもの、まるで大津波のように押し寄せる魔物の群れに、為す術もなく蝕まれていった。

王国は魔物の勢いを押し留めることが出来ず、やがて魔物達は王都にまで至り、城壁は破壊されこのまま王都まで陥落されてしまうかに見えた、その時。

当時一介のCランクの冒険者であったヨーゼフが、賢獣最強種の一つである、地皇狼のグルと共に魔物達の前に現れたのだという。

それまではグルが地皇狼だということも知らず、ヨーゼフの実力もランク通りのCランク程度だと思っていた人々の制止の声も聞かず、魔物達に向かつて飛び出したヨーゼフとグルは、多くの騎士団と冒険者達が為す術なく飲み込まれていった魔物の海嘯を、押し留めるどころか一時とはいえ彼らだけで押し返したのだという。

これを契機に、士気を取り戻した王国の騎士団と冒険者たちは、王都を護るため軍を纏め直しヨーゼフたちが押し留めている魔物の群れを側面から攻撃。

王国は態勢を立て直し、絶望的な数であった魔物の群れはヨーゼフとグルを中心に、人類側の勝利で戦いを終えることが出来たらしい。

「雷光を纏い魔物の群れを引き裂く地皇狼と、杖を手に魔物を殴り飛ばし焼き尽すヨーゼフ。あの戦を知る者で、ヨーゼフを知らぬ者は誰も居らぬ。溢れかえる魔物の前に、屈辱に塗れながらこの国の象徴である王都を放棄せねばならないと、誰もが思い知らされ、絶望しておった。魔物には勝てない」と。

そんな我らの前に光明の如くヨーゼフは現れたのじゃ。忘れよう

とてその恩義は忘れられぬ」

そうして、アセナル王国から魔物達を追い払った後、じーさんは救国の英雄として冒険者としてSSランクの称号を得て、褒賞とかも色々もらったらしい。

じーさんの遺産である、オレの持つてるバツグもその一つだとか。民衆はじーさんを知らぬ者はおらず、国もギルドもじーさんという、強力な力の存在を知り、一躍じーさんは時の人となったらしい。が。

「その後が問題での。ヨーゼフの凄まじい力を知った王国が、ヨーゼフを召し抱えようとしたり、力を恐れたものが陰謀を張り巡らせたり。静かな暮らしを求めていたヨーゼフは、そんな己の環境に嫌気がさしたようでの」

冒険者ギルドも、国を左右する戦争の直後で非常に慌しくじーさんを護ることが出来なかったとか。

…で、そんな国に愛想が尽きたのか。じーさんはある日、グルと共にふつと姿を消して、王国からいなくなってしまったらしい。

それを知り王国もギルドも慌てて国中で搜索し、ギルドも他国の支部に連絡を回して探し回ったが、結局終ぞその姿を見かけることはなくなったとか。

まさかグルガの森に行っていたとは。とギルドマスターはしみじみと呟いた。

その後の王国はかなり大変だったらしい。国の偉いやつらのせいで英雄は去ってしまったんじゃないのか。とか民衆に突き上げくったりして。

「そんなわけでの。 ヨーゼフ・アルベルトの名は、この国で最も新しき英雄として、今でも人々の間で語り継がれておる。 ……じゃから、ヨーゼフ・アルベルトの全てを継いだ者。 というのは、この国に住む者にとっては特別な意味を持つのじゃよ」

「……なるほど」

あのじーさん、そんなとんでもない人だったのか。

てーことは、老いていたとはいえあのじーさんに勝てるようになってオレも、この世界の人の中じゃかなりの強さを持っているのだろう。

比較対象が今までじーさんとグルとジンしかいなかったから、いまいち強さの基準ってのが分からなかったが、早い内に知っておくことが出来てよかったぜ…！

知らずに動いて目立ち過ぎて、面倒に巻き込まれるとか嫌過ぎる。過ぎたるは及ばざるが如しだ。

「……じーさんのことは分かりました。 ……となると、あんまりオレ、じーさんの息子だって吹聴しない方がいいですよね？」

「そうじゃの。王国の騎士になりたいとかであれば別じゃが、普通に冒険者として暮らしていききたいのならば、あまりヨーゼフ・アルベルトの名は出さぬ方がいいかもしれんの。 それでなくともそちらの賢獣殿と一緒にというだけで目立ってしまうじゃろうし。 ただの虎の賢獣じゃないじゃろ、それ」

「分かるんですか？ 王天虎です」

ちよっと目を瞠る。猫族の人達といい、なんで分かったんだらう。ギルドのトップに隠すのも旨くないし、正直にバラす。

「お……っ!？」

じーさんもその答えは予想外だったのか、目を開いて驚いているが、背後で控えていた職員のお姉さんも驚愕の声を漏らす。

漏れた声にしまった、とばかりに口元を押さえてるお姉さんを見つづ。

そんなお姉さんの様子にやれやれ、といった様子でギルドマスターが肩を竦め、オレの疑問に答える為に口を開く。

「獣人族の者達は同種の賢獣の区別がつからしいが、わしはそんな眼は持つておらんの。…まあ、ただの虎にしては風格があり過ぎるし、ヨーゼフの子が従えるのがただの虎なわけがない、と思ったから言ってみたんだがの」

まさか王天虎とはの。やや呆れを含んだ口調でギルドマスターがオレを見た。

「賢獣殿の正体についても、あまり口外しない方がよいじゃろう。

“地を統べる地皇狼、天を駆る王天虎”

地皇狼を従えた英雄、ヨーゼフの後継者が王天虎を従えるなど、本当にどんな運命の巡り合せじゃ…」

「ですよねー」

オレも正直できすぎだと思う。

なんか職員のお姉さんとか、ちょっと興奮してんのか目を輝かせながらうんうん頷いてるし。

「猫族や虎族の者達には流石に隠せないじゃろうが……彼らにとっ

て王天虎は神のような存在。 まあバレたところで悪いようにはせんじやるつて」

それはマーカス一家を見ていて分かる。 もう至れり尽くせりだもんな、ジン。

「ともあれ、ヨーゼフ・アルベルトについてはこんなところじや。 前置きだけで中々時間をくってしまったが、これからが本題での。 お主、アベル・アルベルトについての話じゃ」

……つと。 ジンを横目に見ながら緩みかけていた気持ちを、居住まいを正しながら張り直す。
お茶を口に含んで、喉を湿らせ。

「はい」

「先に説明した通り、お主の親、ヨーゼフ・アルベルトの名前は、有名過ぎて、徒に広まればどうなってしまうのか予測がつかん。 ので、お主が望むのであれば意味は無いので別じゃが、ギルドとしてはヨーゼフ・アルベルトの後継者ということは伏せて、ただのアベル・アルベルトとして扱おうと思う」

「はい。 それで構いません」

「まあ、流石に完全に秘匿することは出来ぬので、王国の王や重臣、ギルドの上層部には伝えることになるがの。

だが、むしろ冒険者ギルドとしては非常に有望な冒険者でもあるし、決して悪いようにはせんことをわしの名にかけて誓おう」

「はあ、ありがとうございます」

なんかやたら待遇良いなあ。
まあ、単騎で魔物の軍勢と対抗できる可能性がある戦力なんて、早々居ないのだろうしな。

「うむ。次に冒険者としての登録についてじゃが、登録に関しては何も問題無いの。普通にアベル・アルベルトとして登録して貰おうと思っとる。が、ランクについてはどうしようか悩んでおる」

「ランク ですか？」

「そうじゃ。王天虎を従えてることからして、お主が普通の冒険者より高い実力を持っていることはわかりきっておるしの。本来なら冒険者として登録したものは、Gランクから始まって、手順を踏んで一段階ずつランクを上げていくのじゃが、お主は英雄ヨーゼフのお墨付きじゃしの」

「はあ」

「ヨーゼフのように飛び級でランクを上げる方法もあるにはあるのじゃが、王天虎も付いていることじゃし、最初からある程度のランクを与えてしまおうと思っっているのじゃが、どうかの？」

「どうと言われても…今まで比較対象が周りに無かったので何とも言えないのですが。グルガの森に出てくる魔物程度でしたら、問題ありません」

「……あそこはB級の冒険者のパーティが、入念に準備してようやぐ多少の探索が出来るような森なんじゃがのう。まあよい。ならばとりあえずCランクの冒険者として登録することにしておくでの。」

冒険者としての生活は森での生活とはまた勝手が違うじやろっし、
下位の依頼も受けることが出来るからとりあえずここから慣れてい
って欲しい」

「わかりました」

「また、わしに何か伝えたいことがあったら、後ろに控えているマ
ールに伝えてくれ。ヨーゼフの件については秘匿する以上、他の者
に伝えてもスムーズに話が繋がらない可能性があるでの。

わしから何かあった場合も、基本的にマールから伝達する。日中
にギルドに来れば、ほぼマールは常駐している筈じゃ」

「よろしくお願いします。アルベルト様」

「こちらこそよろしくお願いします」

やっとお姉さんが同席している理由がわかった。オレとギルドマス
ターの連絡員にするためか。

優雅な仕草で一礼する様子に、こちらもぺこりと頭を下げる。

「わしからはこんなところかのう。何か質問はあるかの？」

「いえ、今のところは」

「では、あとは冒険者としての登録だけじゃの。ふう。長々
となったが、これでわしの話は終わりじゃ。あとの登録や説明など
はマールが行うでの」

「はい。ありがとうございました。これからお世話になります」

「いや。有能な冒険者は冒険者ギルドでは常に歓迎じゃ。こちらこそじゃて」

最後にギルドマスターに頭を下げて、控えていた女性、マールさんに案内されて執務室を出る。

そこから別の個室に案内されて、登録に必要な物を取りに行くと言われて一旦部屋を出て行くマールさんを部屋に設置されていた椅子に腰掛け待つ。

人としやつちよこばった話をするのはえらい久しぶりなので、多少疲れてきてはいた。傍に控えるジンに抱きついてだらけたい衝動に駆られるが、伸びをしながら我慢我慢。

なんかこういう風に精神的に緊張というか、ストレスみたいなのを感じる、煙草吸いたいなー、お酒飲みたいなー。という前世のオレの嗜好が心に芽生える。

森の中じゃそんな嗜好品まるで無かったしな！ 国の中心である王都なら、そういう嗜好品の類いもきつとあるだろう。

煙草はそこまで吸いたいわけじゃないけれど、お酒は飲んでみたい。これが終わったら買い物ついでに探してみよう。

「お待たせしました。アルベルト様。それではこれより、冒険者ギルドへの登録と、ギルドについて、私マール・アスペリアが説明させていただきます。改めてよろしくお願いいたします」

「と。はい。よろしく申し上げます」

ぐい、と伸びを胡乱にそんな思考を連ねているとマールさんが書類やらが色々入った箱を抱えて部屋に戻ってくる。

居住まいを直し、机を挟んで対面に座る彼女と互いに礼。

ジンも床に伏せたまま、聞く気があるのか眼を彼女に向けている。眼鏡のリムをつい、と持ち上げ、マールさんが口を開く。

「ではまず最初に、登録に際して銀貨一枚の登録料が必要になりますが、よろしいですか？」

「あ、はい」

バッグから銀貨を取り出し、マールさんに渡す。

「ありがとうございます。ではこちらの書類にお名前と、拠点となさっている家、ないしは宿泊施設。それと特殊な技能、特技をお持ちであれば、そちらもお書き下さい。例としてはアルベルト様のように、従えている賢獣殿の能力など。ですね。他には魔法や、薬学等の知識。魔道具の作成などが挙げられます。

技能については任意ですので、何も書かなくとも構いませんが、こちらからの緊急の依頼の際などに参考にさせていただきますので、なるべく協力をお願いいたします。

拠点については、変更なされる場合はその都度ギルドにて更新してください」

「はい」

名前はアベル・アルベルト。拠点は、遙々亭 と。技能に関しては、言われた通り賢獣の能力は あー。

「賢獣のとこなんですけど、王天虎のことについて書いた方がいいですか？」

「あ、そうですね…。この書類に書かれたことは、ギルドの職員

であれば誰でも見る事ができるものなので、伏せておいた方がいいかもしれないね。他者への情報の漏洩は無いよう努めておりますが、絶対とは言い切れません。ギルドマスターも私も知っておりますし、賢獣使い、とだけ書くだけでもよいかと」

「分かりました」

言われた通りにする。あとの技能は魔法くらいか。薬草の知識は、怪我に効く薬草が少しわかるくらいだし、知識と言えるほどではないので書ける程じゃあないな。

「できました。」

「では確認させていただきます」

はい。問題ありません。

では次は、こちらの水晶とカードに、一滴ずつで構いませんので血を垂らしてください。」

一緒に渡されたナイフで親指を浅く切り、ぽたぽた血を垂らす。すると水晶と銀行のカードみたいなサイズの鉄板が、鈍く光って輝く。

「これでアベル様の個人情報登録が完了しました。まだお渡しできませんが、こちらのカードに処理をしたものがギルドカードになります。詳しい説明は後日お渡しする際に致しますが、これがアベル様の冒険者としての身分証明になりますので、大切に保管するようにしてください。大体三日ほどで出来上がりますので、三日以降にまたギルドまで受け取りに来て下さい」

「了解です」

血が滲む指を渡された布で止血しながら頷く。
一気に何もかも詰め込むのは頭の処理が追いつかなそうなので、ありがたい。

「では次に、冒険者として活動する上での、規約等について説明させていただきます」

そう言うって喋りだしたマールさんは、それからざっと30分ほどかけて冒険者として得られるもの、課せられるもの、注意事項などについて喋り始めた。

書類などを使って丁寧に説明してはくれたけれど、正直覚えきれなかったので大雑把に纏めると。

「ギルドが身分を保証するので家や土地が買えるようになる。滞在する国での準国民として扱われる。割安で国の行き来ができる。ギルドの系列施設の利用料金が安くなる。

ランク、状況、依頼内容によって変わるが毎月一定数の依頼を受けなければいけない。滞在する国が魔物の大規模侵攻に襲われた場合は防衛に参加しなければいけない。ギルドの仲介無しで起きた問題に対してはギルドは関知しない。

最低限、これらを覚えておけば問題無いかと

「な、なるほど」

流石に一度に全部は覚えきれなかったもので、そう纏めてくれたマールさんにこくこく頷く。

「ふふふ。後ほど今お話した内容を纏めた書類をお渡ししますので、お帰りになられた後にもご覧になってください。疑問に思ったことがありましたら、またその都度説明させていただきますので」

いっばいいっばいになってるオレがおかしかったのか、手で口元をおさえて雅やかにマールさんが笑う。
まあぼちぼち覚えていくしかないだろう。

「あとはギルドでのお仕事についてですね。登録されました冒険者の方は、最初はGランク…アルベルト様の場合はCランクからとなりますが、そこから初めていただき、基本的に自分のランクより上の依頼は受けられません」

「基本的？」

「はい。冒険者の方には個人のランクの他にチームランクというものがあり、冒険者同士でパーティを組み、それをギルドに申請するとチームとしてのランクが与えられます。そのランクが例えばCであったなら、個人ではC以下の冒険者の方でもそのパーティで依頼を受けることによりCランクの依頼が受けられます」

「チームランク……」

なんかまた新しい単語が出てきたな…。
とりあえず単語だけは覚えておこう。

「そしてこのランクを上げる方法ですが、個人のランクもチームのランクも、どちらも今のランクの依頼を一定数受けた後、ギルドにランクアップの申請をしていただくことで、こちらでその冒険者様の依頼の達成具合を審査し、問題無いと判断した際にこちらから斡旋する上位の依頼を受けていただきます。

見事その依頼を果たした場合のみ、一段上のランクへとランクアップすることができます」

なるほどなるほど。　ちょい面倒そうなシステムだけれど、ギルドとしても依頼の達成率を少しでも高める為にも必要な措置なんだろう。

ちよろちよろ抜け穴が見受けられるけど、きつと上手いこと出来るんだろうなあ。

「本日伝えるべきことは、こんなところですね。　何か質問はありますでしょうか？」

「いえ、特にありません」

というか、疑問を浮かべる余裕がありません。

「かしこまりました。　それでは、本日の登録は以上で終了となります。お疲れ様でした」

「お疲れ様でした。　ふひー」

最後にまた互いに礼をして、疲れ果てたオレはジンの身体にもたれかかる。

ふさふさの毛の感触を堪能しつつ、疲れを癒しているとマールさんがおかしそうに笑った。

「登録される冒険者の方は皆さん似たような反応をなされますが、アルベルト様もそこは変わらないのですね」

「疲れました。　すぐく……。　アスペリアさんもよく覚えてますね、あんな細かい規約とか」

「ふふ、これがお仕事ですからね。それとマールでいいですよ、アルベルト様。これから長いお付き合いになるでしょうし」

「あ、だったらオレもアベルでいいですよ。これから色々お世話になると思いますが、よろしく願います。マールさん」

「はい、こちらこそ。アベル様の冒険者としての門出に立ち会えて光栄に思います。これからよろしく願います」

規約について纏められた書類を受け取って、マールさんに見送られながら部屋を出る。

次にここに来るのは三日後か。マールさん美人だし丁寧でいい感じだし、早くも三日後が楽しみだなあ。

やたらうれしながら、カザネとの待ち合わせ場所。ギルドの入り口付近にまで戻っていくオレだった。

さーで、次は買い物だ。

第9話 一応買物（前書き）

毎度読んでいただきありがとうございます。

カザネの容姿、誤字等についての報告ありがとうございます。

どちらも僕の表記ミスですので、その他細かい所を微調整しました。

以降、感想からの質問や作者からの意見募集に関しては、活動報告の方にて記載していこうと思いますので、興味がありましたらご覧下さい。

訂正です。感想を載いている以上、それらを勝手に纏めて返事をするのは大変失礼なことと感じましたので、感想の返信につきましては、時間を見てその都度それぞれ返信させていただきます。

作者からの意見募集などに関しては、活動報告で記載することになります。

色々に至らない作者ではありますが、今後もどうぞよろしくお願い致します。

それでは、以下本編です。

第9話 一応買い物

ギルド1階の入り口の方に戻ると、隅の方でやっぱりフードを被ったままのカザネの後姿を発見する。

遠目から見ると、フードを押し上げる一本角の所為でなんか三角錐の置物みたいに見える。

「おーい、カザネー」

声をかけながら近付くと、あちらもこっちに気付いて歩いて来る。待たせてごめん、と詫びを入れると、ふるふると首を振り。

「いや、構わないさ。 けど登録の時間を差し引いても、大分時間がかったな」

「うん。なんか色々ごたごた聞いたり聞かされたり。 ま、道すがら話すよ。とりあえず行こうぜ？」

出口を指差しながら歩き出す。ちゃきちゃき歩き出したオレとジンに、少し駆け足でカザネがオレの隣に並びながら疑問を口にする。

「宿に戻るのかい？」

「いや。昼飯と買い物」

先導するように歩き出したはいいものの、王都に来たばかりのオレは道が全く分からないので、カザネにオレとカザネの服とかを買いたいと説明し、知ってる店に案内してもらおう。

ぶらぶら歩いて自分で店を開拓するのも楽しいだろうけど、今日は登録作業で疲れたので次に持ち越すことにする。

相変わらずジンを中心にオレらの注目度はとても高いけれど、来る時のギルド前の集中視線である程度耐性ができたのか、多少は気にならなくなってきた。

…そっぴやギルド前に屯ってた連中、帰りはいなかったな。今日は顔の確認だけに来た、とかなんだらうか。

今日はこれ以上イベント増やしたくないから、願ったりではあるけども。

「てな感じでさ。登録はスムーズにいったんだけど、じーさんの話とか聞いたりしてこんな時間になったんよ」

「成る程な。確かに彼の子だと知らればどういう方向にせよ騒がしくなることは確実ろうしね。冒険どころじゃなくなるかもしれないし、その判断は正しいと思う」

「うん。だからオレも頷いておいた。カザネも秘密にしてな？」

「勿論だ。恩を仇で返すような真似はしない」

露店で買った昼食代わりのケバブを二人で食べつつ、カザネの知っている服屋に向かう。

ソースの味付けは大雑把ではあるけれど、豪快に生地から溢れるほどに盛られた具と香ばしくローストされた肉はかなり美味い。懐かしいのジャンクフード！って感じで結構好きだな、オレは。あの露

店は覚えておこう。

当然ジンにも買ったけれど、一口でぺろりと食べてしまった。まあ大きき的にもあれだけじゃ足りないだろうし、今は新しく買ったスぺアリブみたいな骨付き肉を十個ほど買い与えている。

骨ごとボリボリ食ってるのがなんとも逞しい。ふりふり尻尾を振りながら食べているので、中々美味しいだろう。実際に一つオレも食べたがこちらも中々美味かった。

「しかし、じーさんがそんな有名人だとは知らなかったな。カザネも知ってたみたいだけど、他所の国でも広まってんの？」

ケバブをぱく付きながら、ふと疑問に思って尋ねる。この国では有名らしいけども、他所ではどうなんだろう。

「うん？ ああ、勿論それもある。歴史的に見てもSS級の冒険者などそうはいないしな。最も新しいSS級の冒険者として、それなりに有名ではある」

「うはあ……そんなじーさんの子供だとか、ギルドマスターとか変に期待してそうだなあ」

期待されるのはまあ、構わないけど、無駄にハードル上げられてこれくらい出来て当然。とか思われるのは嫌だな。

「銅像とか立てられるくらいだしな。そんな人物の全てを受け継いだとかってという人物が現れたなら、期待してしまうのも無理無いんじゃないか？」

……………え？

「銅像？ え、マジで？」

「あるぞ？ 中央広場にある、この国を建国したアセナル王と、北門のそばにある英雄ヨーゼフと賢獣グルの銅像。 王都の観光名所の一つらしい。行ってみるか？」

「……いや。いい…止めとく……」

なんかこう、妙に気恥ずかしい。ただのハイパー元氣爺さんだと思つてた身内が銅像にまでなってるとか。

見たら胸がむず痒くなってしまいそうだ。 それでなくともさんざんじーさんの昔話聞かされて胸いっぱいだったのに。

予定通り服屋に向かい、辿り着いた先で衣服の注文をする。

どうやらこの世界では服は一つ一つオーダーメイドで作っているらしく、寸法を測り、生地や完成後のサンプルなどを見て注文する形であるらしい。

服のセンスとかはよくわからないので、適当に丈夫そうな生地を選んで服屋の主人のお勧めに従って上下3点ほど揃えてもらうことにした。

カザネの方はというと、やはり女性はどこの世界でも似たようなものなのか、色んな種類の服の生地を手に取り見ては、どんなものかいいか楽しそうに選んでいる。

「なあ、なあ。 アベルはこっちの生地とこっちの生地。どっちがいいと思う？」

「オレは右手のやつのが、手触り良さそうが好きかなあ」

「そうかそうか。 ならばこちらにするとしよう。 色はどんなの

がいいと思うっ。私はこの辺りの色合いがいいと思うんだが」

「そん中だと、ベージュっぽい色のやつが、オレの好みではあるけれど、カザネに似合う気がする」

「うんうん。ならば」

そんな感じで、オレの方はすぐ終わったものの、彼女の服の素材選別に結構な時間を使うことになった。

正直途中でよく分かんない。とか、どっちでもいいんじゃない？とかいった言葉が口をついて出そうになったが、なんとか堪えることに成功する。

女性との買い物でそういう発言はマナー違反だと分かってはいるけれど、しんどいぜ…！店の表でのんびり前足で顔を洗いながら欠伸しているジーンが羨ましい。

結局カザネもアレコレ悩んだ末に三点ほど衣服を注文し、それとは別に急場凌ぎの着替えとして、注文をキャンセルされた、既製の簡素なズボンとシャツの上下を一点買う。

他にもオレもカザネも下着などを購入し、服の代金を支払う。

服は三日ほどで出来上がり、出来たら宿の方に届けてくれるらしい。

『遙々亭』の店の名前と場所を説明してから、ようやく店を出る。

カザネの服などの荷物をバッグに収納し、フードで表情は見えないけれどご満悦な様子のカザネと、表で待っているジーンの元へ戻ると、なんかジーンが猫族のお婆さんに拝まれていた。

ありがたニヤありがたニヤ、と両手を合わせて拝んでいるお婆さんを目を丸くして見ていると、こちらが出てきたのに気付いたジーンが、お座りの姿勢からのっそり起き上がり、お婆さんをスルーしてこっ

ちに寄つて来る。

……いや、一々相手にしてちゃキリが無いんだろうけどさ、ジン。

何となく猫族のお婆さんに軽く頭を下げてその場を立ち去り、次はカザネの武具を買うために武器屋などをみたい旨を伝える。

するとカザネは武具を揃えるのは三日後以降にしないか。と提案してきた。

「今じゃ都合が悪いん？」

「都合が悪いというわけではないのだけれど、ギルドカードの再発行に私も三日ほどかかるようですね。武器屋などはギルドの系列店が多いから、カードを手に入れてからの方が安くなる」

そついやそんなこと言ってたなマールさん。

「成る程。そついやカザネはギルドカードの再発行、スムーズにいったん？」

「ああ、手数料として銀貨10枚かかったけど。アベルと同じで三日後に取りに来てくれと言われたよ」

「10枚!? オレ、登録料は銀貨1枚だったんだけど」

「ギルドカードはギルドの専属の技師が貴重な鉱石や魔法を込めて作っているらしいからね。一種の魔道具だと思えば10枚でも破格だよ」

「パツと見ただの鉄板にしか見えなかったけどなあ」

結構でかいな、無くしたときのペナルティ。今は金があるけれど、銀貨10枚つてのは決して安くはないから無くさないよう気をつけねば。

服もオレとカザネの分併せて銀貨20枚くらいかかったし、金があるからって調子に乗って使つてるとすぐ底をつきそうだな。

何時どこでどんな出費があるか分からないし、改めてよく考えて使わねば。

ともあれ。カザネの提案を受けて、武具を揃えるのはカードが出来てからにすることにする。

そこそこの装備を整えようとするれば、金貨数枚はかかるらしいし、ギルドカードで割り引かれる値も結構なモノになるだろう。

流石にカザネの生死に直結する武具の話でもあるし、品質をケチるつもりは無い以上、そういうところでちまちま節約していかねば。

ということでは本日の予定はここまでとなり。宿に戻りながら、道すがら都市の大体の区分けを説明してもらいながら帰る。

基本的に王都は王城を中心に、王城の近くに貴族の邸宅やら上流階級の住宅が集まっていて、続いて金持ちや騎士の家、宿舎。それから市場や商店やらの繁華街、中流、下流の居住区へ、といった具合らしい。物凄く大雑把にいつてしまえば、だけれど。

中心近くが貴族や金持ち区域とはいっても、冒険者ギルドもあるし、ギルドに来る冒険者向けに軽い商店街みたいなのも近くにある。まああくまで目安としては、くらいらしい。

『遙々亭』は大体中の上くらいの場所に位置している。ギルドに近い宿はでかいし、結構いいところだな。

「 うん？ カザネ、あれはなに？」

説明ついでに寄り道して、繁華街となっている区域を通っていると、

通りの一つに、他とは一風変わった雰囲気を通りがあった。

首輪を付けた人を連れ歩く人が多く、中には手枷まで嵌められた人もいる。よく見てみると、通りにある店からちよろちよろと、人が首輪付きの人や獣人を連れて出てきたりしている。

「ああ。あそこは奴隷市場だな。色んな事情で奴隷となった人や亜人が売られている。中には調教された魔物や賢獣などを扱っている店もあるらしいぞ」

ジンの前で言うのもなんだがな。とカザネは言う。そのジンはというと、カザネの話も聞いても特に気にした様子は無く、ちら、と市場の方を見ただけで他所に視線を向けてしまった。賢獣同士とはいえ、他の賢獣の処遇に対してはあんまり興味が無さそうだった。

「赤い首輪をしているのが犯罪を犯すなどして強制的に奴隷になった者達で、素行が悪いと手枷を嵌められたりするらしい。黒い首輪をしているのが自らの意思で奴隷になった者達だな。借金で首が回らなくなつて自分を売ったり、家の食い扶持を減らす為に。とか事情は様々だが」

「へえ、なんか　こう言うのもなんだけど、意外とケンゼンなんだな。もっと、こう、無理矢理連れて来られた人とかいると思つてた」

「勿論そういう奴隷もいるぞ。法律上は違法だから、表だっては売られていないけどな。魔物はともかく賢獣の売買も違法だし。そういうのはこういう場所ではなく、もっと密やかに行われているらしい。詳しくは知らないけどな」

「なるなる。まあそんなもんだよな」

「私もアベルに出会わなかったら、最終的にそういうとこに売られてたのかもしれないな。改めてアベルには感謝している」

「いいよいいよ。オレも色々教えてもらって助かってるし、ジンが馬車見つけなかったら気付かなかったろうし」

こちらを向いて真摯な口調で述べる彼女に、ひらひらと片手を振って返す。狙って助けたわけでなし。偶然あそこでオレ達に見つけられた彼女の運が良かったってというだけだ。

「ならばジンにも感謝しなければいけないな。ありがとう。依頼を受けてお金が入るようになったら何か贈らせてくれ」

「がっ」

ジンも、いいよいいよ。といった風に尻尾をひらひら振る。まあ、美味しい肉でもあげてやれば喜ぶと思う。

それにしても奴隷市場か。これもまたファンタジーの定番ではあるな。可愛い女の子買って自分のお世話してもらったり下のお世話してもらったり。

うん。良い。

金が貯まったら一度見に行ってみよう。

「まあ何らかの形で必ず恩返しはさせてもらうよ。ともあれ。この辺りは奴隷市場を含めそういった類いが多い場所だな。あっちに行けば花街もあるし」

「花街」

花街　ああ、風俗のことか。

風俗かー。日本と違って本番メインなんだろうなあ。

……。

とても、とても興味がある……っ。

「……。

何考えてるのか大体わかる顔だな。

案内を続けるぞ」

「がっ」

軽く溜息をつくカザネに引っ張られるようにして、その場を離れるオレ。ジンにまで背中を頭で押されてせつつかれた。

その後はまあ、特に何事もなく普通に街を見て回り。

途中途中でちょこちょこ興味の沸いた店を覗いたりして宿に戻った。その最中に、探していた酒を扱う店があったので試しにワインのボトルを幾つか買う。

この世界では、主にワインやエールなど、洋風の酒が中心らしく。焼酎とか日本酒的なものは見当たらなかった。

つまみやジンのおやつ代わりに露店でチーズやビーフジャーキーも購入しつつ。早速今夜にでも飲んでみようか。

「アベルは酒が飲めるのかい？」

「いや、飲んだこと無い。

まあ試しに飲んでみようかと。

カ

ザネは？」

「そこそこいけるクチだな。鬼族は酒に強い者が多い」

「そか。したら夕飯の後にでも一緒に付き合つてよ。一人で飲むのも味気ない」

「ふふ。それではありがたくご一緒させてもらおうよ」

そんな約束を取り付けつつ、『遙々亭』に戻るオレたち。

宿に戻ると受付にいたマーカスに、今日もここで夕飯を食べることを告げると同時に、風呂の使用の予約を頼む。

昨日は何だかんだで夜中まで喋ってしまったて見送っただけけれど、風呂の予約をしておけば予約順に湯が沸いたら使えるらしい。

一回につき銅貨五枚ほどかかるらしいけど、元日本人として風呂は是非入りたいところ。カザネと二人分予約する。

森の中でも自作で風呂場作って入ったりしたけれど、旅行中は流石に入れなかったしな。実に一週間ぶりだし、とても楽しみだ。

それらをマーカスに告げたあと、荷物の整理の為に一旦部屋に戻る。バッグの中からカザネの服や酒を出し、服はカザネに渡して酒は適当にテーブルにでも置いておく。

同時に貸してた外套を返されたけど、とりあえず武具を揃える三日後までは貸しておくことにしてカザネに渡したままにする。

少し休憩してから食堂に向かうことを伝えると、ジンは床に寝そべり、カザネは買った服に着替え始めた。

ワンルームのこの部屋で。

遮蔽物ゼロのこの部屋で。

…誘われてんのかな？とか思ったけれど、オレの視線をまるで気にする様子が無い辺りからして、旅慣れというやつだろうか。自分の肢体を見せることに抵抗が一切無いみたいだった。

一応オレもタテマエとして、ギルドで渡された書類を見るかのよう
に手に持って。カザネの身体を観察する。

日本人系の髪と瞳、肌色に、ハリのある肌。 サラシを巻いて締め
付けている上からでも分かる大きな胸に、安産型と言っただろうか、
大きく締まったお尻。

身体に特に目立つ傷も無く。女性らしいしなやかさを残したまま鍛
えられている身体はとても美しいものに見える。

顔立ちも整っていて、切れ長の目がクールビューティって感じでと
てもオレ好みである。

人との違いとか外見的にちょこんと生えた角くらいしか無いし。う
ん。良い女だ。

カザネを見て鬼族に魔物の血が混ざってるなんて思うヤツ居るとは
思えないけれど。…でもまあ差別の問題は難しいよな。とかそんな
ことをつらつら考える。

「……………。見られるのは構わないんだが。カモフラージュの書類ま
で持ってるのに一瞥もしないとか、君も大概正直者だな……」

カザネが着替え終わったのを見計らって、食堂に赴き夕飯を食べる。
今日も昨日ほどではないが、オレもジンもカザネもしっかりと食べ
て腹を満たした。

夕飯の後はカザネ、オレの順に風呂に入り、ジンはその間またもマ
ーカスの娘さんにニヤンニヤンブラッシングされていた。

ジンも娘さんも嫌じゃなさそうだし、放っておくことにする。

あゝあゝ。と濁点が付くほどに気持ちの良かった風呂を堪能し、
ほかほか湯気を立てながら部屋に戻る。

帰り際に食堂を覗くと、まだジンと娘っこは一緒に戯れていたもので、そのままにしておくことにして、カザネと二人で晩酌することにする。

風呂上りでまだ少し髪の毛の湿っているカザネの姿もやはり美人で、こんな姉ちゃんと二人きりでお酒が飲めるとかマジ天国だな！と思いつながら、バッグからつまみにチーズを取り出し、マーカスに借りたグラスに赤いワインを注ぐ。

テーブルを挟んでソファに互い向かいに座り、グラスを掲げ。

「したら、まあ　　お互いの出会いにでも。乾杯」

「乾杯」

チン、とグラスを触れ合わせ、ワインを一息に呷る。

味は以前の記憶にあるワインのそれと差異は無く、久しぶりのアルコール懐かしいなーとか思いながら空のグラスをテーブルに置いたところで。

「　　あ、ダメだ」

「　　アベル!？」

全身にくまなくアルコールが染み込んでいく感覚と同時に、徹夜明けでやたらと疲れてる時に酒を飲んだような、非常に抗い難い眠気がオレを襲ってくる。

この身体酒にクソ弱エ　　!!

カザネの焦ったような声を聞きながら、オレは意識を途切れさせた。

目が覚める。

微かに頭痛がするのは、酒の所為なんだろうか。

ワイン一杯で頭まで痛くなるとか、弱いにも程があるな、オレ。

上半身を起こして周りを見渡すと、どうやらベッドにまで運んでもらったみたいで、今日もまた一緒のベッドでオレとカザネ。ベッドの傍に戻ってきたジーンが丸くなって眠っていた。

そっぴやまたベッドも一つマーカスに用意してもらったの忘れたな……。

とりあえず二人を起こさないように立ち上がって、備え付けの水差しから水を飲む。まだ少し頭が痛いけど、眠気がすっかり飛んでしまったようで、どうしよう。と思う。

辺りは真っ暗で、正確な時間は分からないけど、日が昇るにはまだ相当時間がかかりそうだ。二人起こすのも忍びないしなあ。

「　　そうだ」

花街に行こう。

この身体、正直若いエネルギーが迸って仕方が無い。

今までは周りに女性0人の強制禁欲状態だったけども、今は完全に自由であるし。

ここ数日はリビドーをやたらと刺激してくれるのが傍に付きっ切りだったこともあり、自分で処理する隙もないし、そろそろ発散しておかねば拙い。

バッグから財布だけ取り出して、足音を立てないように扉の方まで向かう。

忍んだつもりだけど、ジンはどうやら気付いたようで、闇に光る金の瞳を片目だけ開いて、こちらを見た。

しー、と口元に指をあてて、少し出かけてくる、とジェスチャーをすると、興味を失ったのか、ふり、と尻尾を一度振って、見送りの挨拶をしてくる。

オレもひらり、とジんに手を振って、そーっと部屋の扉を開け、そーっと部屋を出る。

そのまままるん小走りに宿を出て、今日通ってきた花街の方へと脚を向ける。

そして

その日、オレは大人の階段を一步昇ったのだった。

第10話 やっちまった

「くさい」

目が覚めると、開口一番。 そんなことを言われた。

昨夜、素敵にエロいダークエルフのお姉ちゃんと、ダークエルフがホワイトエルフになるんじゃないかというくらい頑張っちゃったあとのこと。

こっそり宿の部屋に戻り、カザネを起こさないように静かにベッドに入って、身も心も軽い爽快な気分のまま眠りについたのだけれども。

朝起きると、カザネがベッドの傍に立って、オレを見下ろしていた。しかもくさいって言われた。寝惚け眼を擦りつつ、軽く自分の匂いを嗅いでみる。普段と変わらなく感じる。のだけれど。

「なあ、カザ」

「すまないが。今すぐ風呂に入って身体を洗ってきてくれないか？」

「いや、その」

「すまないが。今すぐ風呂に入って身体を洗ってきてくれないか？」

「……あれ？　なんか怒ってる？」

「今すぐ、風呂に入って、くれないか？」

やたらと迫力のあるカザネに従って、色々な疑問を押し殺して起き上がる。

ジンなら何か知ってるかと、そちらに視線を向けてみると、オレシラネ、とばかりに丸まって顔を伏せてしまう。

仕方ないので、とりあえず言われるままに部屋を出て、受付にいたマーカスに頼んでお湯沸かさなくていいから風呂場を貸してくれと頼む。

そうして向かった風呂場で、自前で魔法を使って水溜めて、魔法使って温める。

ざぶん、とお湯の中に浸かりながら、思わぬ朝風呂に入ることになった理由について考える。

お湯で顔を洗ったりして、意識が次第にしっかりと覚めてくるけれど、意識がしっかりしてくるにつれてあまりにも状況の判断材料が少ないことに気付く。

よし、諦めよう。

とりあえず疑問は棚にあげて、今は朝風呂を楽しむことにした。

風呂から上がり、さっぱりとして部屋に戻ると、ベッドのシーツやら枕やら。それらが綺麗に折り畳まれて、部屋の隅に置かれていた。それを行った張本人であろうカザネはというと、ソファに座ってじっと目を閉じている。

オレが戻ってきたことに気付くと、さ、と対面のソファを手で指し示し

「少し話したいことがある。座ってほくれないか」

「いや、でも……ほら、もう朝食の時間だし、とりあえず朝ご飯食べからにした方が」

「少し話したいことがある。座ってはくれないか」

「はい」

大人しく座ることにして、助けを求めるようにジンの方を見つめると、頼みの綱のジンは器用に尻尾で扉を開けて部屋を出ようとするところだった。

あの野郎、裏切りやがった……ッ！！

オレの恨みの籠った視線に、ふりふりと尻尾を振りやがると、がう、と一声鳴いて礼儀正しく扉を閉めて部屋を出て行った。

二人を残し悠々と一人部屋を出て朝食を食べに行ったジンに、必ず仕返しすると誓うオレ。

「……………」 私、自分でもそこそこ容姿が整っている方だという自覚があったんだけども」

「？ はあ」

話し始めたカザネに、扉に向けていた視線をカザネへと戻す。カザネも目を開いてオレの方を見ていた。

「旅の途中、何度が襲われそうになったこともあるし、鬼族だとい
うのに私を誘ってきた者もいた。だから、自分はそれなりに容姿
が整っているんだな。とは思っていた」

「はあ……成る程」

急にどうしたんだ。一体。

「だから、最初にこういう関係になった時に、自惚れているのかも
しれないが、そういうコトになる可能性が高いだろうな。と思っ
ていた。

本当なら無理矢理奪われていたであろうものだし。鬼族だろうと
関係無く手を差し伸べられる人というのは、非常に少ない。だか
らもしそうなたならば、そういう人なら、まあいいかな。と思っ
ていたんだ。　　いたんだけれども！」

「は、はい」

「けれども、私を見る視線は異性を見るそれなのに、君は一向に手
を出してこない。若いのに紳士的なんだな、とか思っていたら。

今朝方目を覚ましてみると、酔い潰れて倒れたはずの君が、香水
と女の匂いをぶんぶんさせて寝ているじゃないか。目の前に無防
備な女が居るのに、金を払ってまで商売女と性欲を発散させてきた
のかと思うと…私はそんなに魅力が無いのだろうか、落ち込んだ」

「い、いやいや、そういうわけじゃ…」

「そして同時に、非常にむかむかした。知らないオンナの匂いを纏
ってる君に。　　それでさっきは君にきつく当たってしまったて…

八つ当たりみたいで、すまないと思っっている」

「あー、いや。うん。あんまし気にしてないから」

「けど！」

「は、はい！」

「私に魅力が無いわけじゃないと言っのなら、何故私を襲ってくれないんだ！ 私は夜の世話も構わないと言ったじゃないか。私に少しでも恩を返させてくれ このままじゃ何も返せないじゃないか！ 君は非常に強いし、容姿も頭も決して悪くない。このままでは、私は君に恩を受けるばかりで何も返すことが出来なくなってしまう。そんな自分は嫌なんだ！ お願いだ。私に恩を返させてくれ。」

私に女性としての魅力を感じてくれているというのなら、性欲が溜まったならば私に出せばいいじゃないか。別に他の女とするなというわけじゃないんだ。ただ、お金を払ってまで君のことを好きでも何でもない女と性欲が溜まったからとするくらいならば、その丈を私にぶつけて欲しいんだ。私ならば喜んで君の情欲を受け止めよう。君が満足するまで付き合っし、適う限り君の要望に応えたいと思っっている。君は私に何の遠慮をすることも無いんだ。私が寝ている時であろうとむらむらしてきたならば襲えばいいし、もし私が不甲斐なく意識を無くしたとしても気にせず私を貪っればいい。」

重ねて言う。お願いだ、遠慮なんてしないでくれ。私は少なくとも君に抱かれても構わないくらいにの好意を抱いているし、君になら何をされても構わないという覚悟で君に雇われたつもりだ。あの日あの時あの場所で君に雇って貰えたという恩義はたかが借りたお金を倍返すというだけでは安すぎる。あの日だけで二度も救われた命を、そんな安い金で払わせないでくれ。どうか どうか私を、もっと高く買っつて、求めてはくれないか……？」

「……………」
息を呑む。

……………。
あ、ありのままに今起こったことを話すぜ。

何となく雰囲気が掴めなくて手を出しあぐねてたお姉さんに、なんかよくわからないけれど怒られると思ったたら、なんかよく分からないけど抱いてくれと懇願された。

な…何を言っているのか分からないと思うだろうけれど、オレも何を言われたのかよく分からない。

頭がどうにかなりそ　　いや、落ち着け、オレ。

何を言われたのかは　まあ、分かる。

まるで嵐のように吐き出された彼女の言葉は、その全てに純粹に切実な思いが込められていて、そこにはきつと嘘なんて混じっちゃいないんだろう。

…正直そこまでのことだろうか。とは思っけれど、それはオレが持つ者だったからだろう。

持っている者は、持たざる者の気持ちは　中々理解出来ないものだ。

彼女にとっては、それだけのことだった、ということだ。

ならば後は、これにオレがどう応えるかー　ということだけであり。

……………。

腕を組んで、真剣な目をしてこちらを見詰めてくるカザネを見詰めて考える。

まあ　深く考えずとも、答えはすぐに出た。

「オレは どう見られてるのか分かんないけど、中々我が俣で口くでもない人間だから、カザネを抱いても他の女の子口説いたりするよ？ でも、オレのを他のヤツに取られたくはないから、カザネにはそんなこと許さない」

「構わないさ。強いオスは群れを従えるものだ」

「一回でも抱いたら、きつと二度と手放す気が起きなくなると思う。カザネがお金の返済を終えて契約を終えようとしたら、支払う前にすげえ高いのカザネに買う。金貨百枚くらいの買う」

「大変だな。一生かけて支払わねば」

「一人旅とか出来なくなるかもしれない。オレが離れることを許さないから」

「でも、君と一緒に見て回ってくれるんだろう？」

「……………はぁー」

「……………ふふふ」

「……………オーケー。なら改めて オレに雇われてくれ。カザネ。オレは君が欲しい」

「承った。アベル。 誠心誠意尽くして、働かせて貰おう」

ふはー。と大きく息を吐く。

なんだかなー。 いやもう、なんだかなー。

がしがし頭をかいて、満面の笑みでにっこにここちらを見つめているカザネから目を逸らす。

こう　もうちょいドライな関係でいくつもりだったんだけどなー。これで完全に彼女を背負わねばならなくなった。そのメリットもデメリットもオレは甘んじて享受せねばならないわけで。

いやもう　あー、いいや。なんか考えるのも面倒くさい。とりあえずこいつはオレのもんになったんだ。後のことは後で考えよう。

何よりも先ず、オレのもんになったことに先立って、オレはやらねばならないことがある。

「したらまあ　早速お仕事してもらおうとすっかな」

「ふふ。　勿論いいとも。何でも言ってくれたまえ」

息を吐き、大きく吸う。

「抱きたくなった。　　今すぐ、ここで、カザネを抱きたい」

。

最終的な結論としては。

…オレはエロ猿だった。

あれ、まだ昼くらいなんだ。

とか思ったら翌日だった。

正直自分でもドン引きなくらいサカってしまった。

えっち。というか交尾だった。

…一応、始まる前にも一戦やってきていたというのに。若さって
すげえなー。でも若さだけじゃ済まないよなコレ。としみじみして
しまう。

これがこの世界平均だとは思わないし、恐らく絶倫というヤツなん
だろうけれど、いやもう、なんかふと冷静になると引くね。自分の
やった行為に引くね！

カザネは初めてだったようだけれど、全く加減が出来なかった。

なまじ前世の普通の成人男性の精力とか知ってるから、余計ありえ
なさが際立つ。自分で自分が信じられない。

所謂賢者タイムな状況で目が覚めて、一頻り自己嫌悪した後室内に立ち込める汗の匂いやらに顔を顰める。とても風呂に入りたい。

この惨状をどう処理したものか。あれこれ考えていると、もぞ、と隣で動く気配を感じる。

カザネも目を覚ましたようだった。見ると、最後の行為の直後のままの姿。うつ伏せの姿勢で、苦しげな表情を浮かべて薄目を開いている。

「おはよ、カザネ。 なんとというか ごめん。 水飲む？」

ちよこんと頭から生えている角を撫でて声をかけると、こくこくと頭を縦に揺する。声を出すのもしんどいらしい。

部屋に置いてある水差しを取って、コップに水を注いで眼の前に差し出す。動かない。

動けないみたいだった。

一旦コップをベッドの脇に置き。

「よいしょ」

カザネの身体を抱えて仰向けにする。身体の前面も色々とパリパリだった。

改めてコップを手に取り、水を口に含んで、カザネの唇に口付ける。口移しというやつだ。

カザネが喉を鳴らし飲み込んだのを確認し、口を離す。

「もつと飲む？」

首を横に振る。　大丈夫らしい。

「コップここに置いとくから」

水の入ったコップをベッドの脇に置き、立ち上がって換気の為に窓を開く。

開けた途端に入り込んでくる爽やかな風と光に、思わず顔を顰めて目を細める。　大体今は昼過ぎくらい、だろうか。

そついやジンはどうしたんだろう。なんか一回ちよろつと扉が開いてた記憶はおぼろげにあるんだが。

魔法を使って風を操り、換気を手伝いながら今まですっかり忘れていた相棒のことを考える。

まああいつならどうにでもするだろうけれど、気になるっちゃ気になる。

ある程度臭いが薄れてきた辺りで魔法を止めて、窓は開けっ放しにしたまま水で湿らせたタオルで全身を拭く。

カザネの身体も拭いて。髪とかにもかかっちゃってるからやっぱお風呂に入れた方がいいな。と判断。

身体中くまなく拭かれたにも関わらず未だ微々たる反応しか返せないカザネはとりあえずまだ寝かせておくことにして、オレは服に着替えてマーカスに風呂場を借りることにした。

「ゆづべはお楽しみでしたニヤ」

マーカスを探して部屋に出て、受付でマーカスを見つけた途端そんなことを言われた。

「何故知っている」

「ジン様が教えてくれましたニヤ。　ちニヤみにジン様は、昨晚は娘と一緒に休み戴きましたのでご安心くださいニヤ。　娘も非常に嬉しそうでしたし、こちらとしましては毎晩励まれても構わないくらいですニヤ」

「……とりあえずありがとう。とは言っておく。　それとまたこんな時間で悪いんだけど、お風呂借りたいんだけど。　お湯は大丈夫だから場所だけ」

「かしこまりましたニヤ。　準備も必要無いので今からどうぞニヤ」

「はいよ、銅貨五枚。　あと、ジンって今どこにいるか分かる？　風呂入る前に顔合わせておきたいんだけど」

場所だけとはいえ、毎度変な時間に使って悪いので迷惑料代わりにお金を払う。

「まいどですニヤ。　ジン様でしたら、先ほど昼食を召し上がって、娘と一緒に裏庭の方に向かわれましたニヤ」

「りょーかい。　ちょっと様子見てくる」

「はいですニヤ」

入り口から宿の外に出て、ぐるっと廻って館の裏庭の方に向かう。館の大きさに比例して裏庭もかなり広く、走り回っても窮屈じゃなさそうな広さだった。

そんな裏庭で、ほかほか降り注ぐ日光を浴びながら丸まっているジンを発見。

おい、と声をかけようとして、声を出す前に気付いたジンに視線で制される。

なんだなんだ。と口を閉じ近寄ってみると、丸まったジンの懐の中に、包まれるようにして眠っている黒猫の姿があった。

マーカスの娘のシエナだっけか。その子なんだろうけれど、こうして丸まって寝てるとこ見ると大きな猫にしか見えない。

ジンも何だかシエナを包んで丸まっている姿からは、父性が溢れ。

白と黒の二人の姿はとても仲睦まじく見える。

「昨日は気い利かせてもらってありがとな、ジン。多分これからもあんだけど、そこはスマン」

シエナを起こさないよう小声で言うと、ジンは一度頷いて地面に線を二本書いた。

肉二つか。なんか美味しいの買ってやんないとな。

それからはカザネのこともあるので静かに裏庭を去り、部屋に戻ってカザネに適当に服を羽織らせてから風呂場に抱えて連れて行き、カザネの身体を洗った。

洗ってる最中にまたむらむらしてきてしまっ、我慢できずにろくに動けないカザネと一回してしまった。

最低だった。

長くなってしまった風呂を終えると、再びカザネを抱えて部屋に戻る。マークスが気を利かせてくれたのか、ベッドのシーツが新しくなっていたそこにカザネを寝かせる。

それから食堂に向かって遅めの昼食を三人前ほど食べて、身動きがとれないカザネの分も作ってもらい部屋に持ち帰りカザネに食べさせた。

罪滅ぼしとばかりにその日一日は傍でカザネの世話をして終わった。

最終的に。カザネは翌日になると幾らかは回復したものの、腰がすっかりやられて動けず。

ギルドカードが出来上がるその日まで、ベッドの上で寝たきり生活を過ごすことになるのだった。

ジンもマークスもマークスの奥さんも呆れていた。お前どんだけやっただ。みたいな目で。

とても反省している。

第11話 登録完了

ギルドへ登録してから三日目の朝。
ギルドカードが出来上がると言われていた日。

ようやくと回復したカザネとオレとジンは、食堂で朝食を取りつつ今日の予定について話し合っていた。

「本当に大丈夫か？ 別に今日必ず取りに行かなきゃーってわけじゃないだろうし、明日でもいいんだぜ？」

朝食のパンを頬張りながら尋ねる。朝起きる時まだ少し調子悪そうだったし。

「いや、問題無い。私の所為で二日も無為に過ごしてしまったのだ。これ以上時間を浪費するわけにはいくまい」

「別に余裕が無いわけじゃないし、構わないんだけどな……」

「ふふ。普段はそんなに優しいのにな。ベッドの中とはまるで別人だ」

「その件に関してはもう謝らないぞ」

溜まったら気にせずやっていって言われたんだ。文句なんざ聞くつもりはない。

流石に初めてでアレだけってのは、と思って最初は謝ったけども。

「勿論だとも。そうしてくれと言ったのは私だしな。だが正直、

私一人では身が持ちそうにないな……毎回する度にコレでは、私は壊されてしまう。なるべく早めに奴隷なり愛人なり、新しい女を囲うといい」

金払ってやるのはイヤだけど、そいつ自体を買ってオレのもんにしてやるのは別に構わないらしい。よー分からん。

「今んとこ冒険者になってどれだけ稼げるかわからないし、少なくとも奴隷とか買うのはもうちょい先になるかなあ」

「何だかんだですぐに困ってそうだし、何だかんだでさっさと稼いでそうだけどな。君は。でもまあ、それならば、溜まってきたと少しでも感じたら求めてくれないか。纏めて吐き出されると私一人では対処しきれない」

「善処します」

だってカザネ、肉付きいいのに身体は締まってて柔らかいし、具合が良すぎるんだ。やり過ぎてしまうのも仕方が無いと思う。思いたい。

「ともあれ。今日はギルド行ってギルドカード受け取って。帰りにカザネの装備を整える。こんな感じかね」

「カードを受け取った後で適当な依頼を受けてみるのもいいかもしれないな。カードの受け取りには大して時間がかからないし、午前中に私の装備も整えられれば午後は丸々空くことになる」

「そかそか。……んー、でも。新調した武具の慣らしとかいらんの？カザネは」

「これでもCランクになってそこそ長い。アベルとジンの手伝い程度ならば、新しい武具でもCランクの依頼程度なら充分果たせるさ」

オレが初っ端からCランクスタートだということはカザネには既に伝えてあった。

オレの実力の片鱗を知っているカザネは、特例でのCランクスタートに驚いてはいたが、ハウンドドッグの群れを倒せるならば問題無いだろうと納得していた。

朝食を食べ終えて、食後のコーヒーを飲んだ後、部屋で出かける支度を整えて宿を出る。

カザネは相変わらずオレの外套を被っていて、紺色の三角錐みたいな格好をしている。

オレは今朝方服屋から届いた、丈夫さ重視の長袖シャツと厚手のズボンを着ている。そっぴい服は揃えたけれど、防具とかどうすっかな。今まで森の中でそんなのしたこと無いんだよな。鎧とかなんか邪魔つけそうだし、とりあえずはこのままでいいかなあ。

相変わらず歩行人の視線を存分に集めつつ。ギルドまでやってくるオレとジンとカザネ。

そろそろ視線は気にならなくなってきていたが、それとは別に気になる問題が発生していた。

隣のフードのお姉さんの存在である。

肉体的な関係を持ってからというものの、別段普段接している分に以前と大して変化は無いように見えるのだけれど、ふとした時の距離

が近いというか。
部屋でソファに座る時も隣同士座るようになったし、寝る時は言わずもがな。

こうして歩いている時だって、今までは壁1枚分程度距離を開けて歩いていたのに、今はぴったり肩がくつつくくらいの距離で並んでいる。

その所為か、カザネが歩いている人を避けるなどして少し身をよじるだけでも腕に胸が当たって、それがとても気になるんだけど、意識しているのかと思いきやそういうわけではなさそうだし。

まあ気分いいからいいけどさ。

何だか色々と目に見えぬ距離が狭まったオレ達だった。

ともあれ。ギルドに着くなり、マールさんがオレ達を出迎えてくれて、2階の銀行のロビーみたいなのとこまで案内してくれる。

カザネのカードも纏めてマールさんが担当してくれるというので、三人でカウンターに座ってマールさんから説明を受ける。

「それではこちらがアベル様の。こちらがケイロン様のギルドカードになります。念の為お持ちになってご確認ください」

そう言っただけ渡されたのは、三日前オレが血を垂らしたカードだった。

鉄製のプレートみたいなのそれは、特別な処理をしないと聞いた割には血を垂らした時と変わりが無いように見える。

とりあえず受け取ってみると、オレが触れた途端、カードがぼんやりと輝いて、プレートの上に文字が浮かび上がる。

プレートには。

名前：アベル・アルベルト

冒険者ランク：C チームランク：

登録拠点：アセナル王国王都アルハイム

と浮かんでいた。

カザネの方を見ると、そちらも似たような文字が浮かんでいる。

「そのカードは持ち主の個人情報に反応して文字が浮かび上がるようになっており、持ち主の冒険者様が手を離すと文字は消えます。

浮かんでいる文字は持ち主の方以外はギルドでしか確認できませんので、身分証明などを求められた場合はそちらのギルドカードを提示すれば、本人であると証明できます」

試しにカードをテーブルに置いてみると、文字はふっと消えた。すげえ。

「このギルドカードは本人証明やギルドの依頼を受ける際、他にも様々な使い道がありますので、決して無くさないようにお願いします。万が一紛失された場合、その是非を問わず再発行には銀貨10枚を戴きますので、ご了承ください」

成る程。落とそうが奪われようが誰の責任だろうと関係無いのか。

まあなんか色々手間隙かかってるっばいしな！。

「無くされた場合は、その国のギルド本部がある都市。アセナル王国なら此処、王都アルハイムのギルド本部までお越しいただき、再発行手数料を支払っていただいた後にお名前と登録した際の水晶の番号を教えてください。アベル様なら8番水晶。ケイロン様でしたら5番水晶ですので、忘れないよう記録しておくことをお勧めします」

あの水晶に血を垂らしたのはそういう意味だったんか。

こくこく頷く。あとでメモっところ。

「次に、アベル様のチームランクの部分が空欄になっていると思いますが。こちらはチームに登録された後に刻まれることになりません。」

チームの結成、参加は自由ですので、チームを結成されるのであれば、チームのメンバーとなる方とリーダーとなる方を全員連れて登録に。他のチームに参加するのでしたら、チームリーダーと一緒に登録に来てください。チームの登録は一日ほどで終わります。」

カザネのギルドカードを見てみると、こちらもチームランクは空欄だった。チームに参加したりはしていないらしい。

「チームは最低一人からでも登録できますが、チーム向けの依頼は主に大量発生した魔物の討伐や、長期に渡る探索依頼。単独での討伐が難しいと思われる強力な魔物の討伐など。」

個人でやるには難しいような依頼が多いです。その分報酬も高いのですが。」

難易度的には、個人のランクとチームランクでは同じランクでもチームランクの方は二段階ほど難しいと言われていますので、少数でやる際には注意してください。」

えーと、つまり　チームランクC向けの依頼は、個人で受けるならAランク相当ってわけか。
なるなる。

集団だからこそ出来ることって多いもんな。

「チーム結成の際は、ランクはチームメンバーの個人ランクを平均したランクの一段下から、というシステムになっております。これは一流の冒険者の方々がチームを組んだ時にまた一からランクを上げる手間を省く為です。　例えばアベル様とケイロン様がチ

ームを組んだ際は、お二人ともCランクですので、チームランクはDから。ということになりますね」

個人ランクがAランクになってからチームを結成しても、またGから始めなくて済むってことか。

とはいえチームランクDってことは個人ランクだとB相当。難易度はちょい上がるのな。

……まあ、下位のランクの依頼を受けちゃいけないわけでもないよ
うだし。無理して死んでも自己責任ってヤツか。

「説明は以上になります。何か質問は御座いますでしょうか？」

「大丈夫です」

「無い」

「がっ」

「かしこまりました。それでは本日より、正式にアベル様は冒険者となられました。この後すぐに依頼を受けても構いませんし、お帰りになっても構いません。ですが、最初の登録の際にも説明した通り、冒険者の方は怪我などの理由が無い限り毎月一定量以上のお仕事を受けていただかねばなりませんので、そちらについてはご注意ください」

そついやなんかそついうこと言われた気がするな。

「具体的にはどれくらいの？」

「Cランクであるアベル様ならば、毎月金貨1枚分ほどの依頼を受けていただければ。この義務はチームランクにて適用されても構いません。登録した月はその必要はありませんので、来月からの話となりますが」

ざっと百万円。 …… 高えなオイ。

「えーと。毎月金貨一枚ギルドに納めればいいんですか？」

「いえ。依頼をこなすだけで構いません。諸経費は既に引かれておりますので。ギルドには依頼が日々多数舞い込んでおり、慢性的に人手が足りない状況です。なるべく多くの冒険者様に依頼をこなしてもらおう為の措置です」

「わかりました」

金貨1枚つてのがどれくらい依頼受けなければいけないのか分からんけど。まあ依頼を受けてみれば分かるだろ。

「それでは、改めまして以上で説明は終了となります。この後依頼を受ける際はまたお知らせくださいませ。お疲れ様でした」

「お疲れ様でした」

皆揃ってぺこりと頭を下げ、マイルさんと別れる。とりあえず依頼を見てみようってことで、カザネとジンとで1階にある依頼を集めた掲示板の場所まで向かう。

1階に戻ると、左右の壁に掲示板が張っており、掲示板の上に、ランクを示すであろうAからGまでの文字がずらりと並んでいる。

SランクとSSランク用の掲示板は無いつぱい。
右の壁が個人向け。左の壁がチーム向けの依頼らしい。

「まあ、とりあえず見てみるか。　　そういやカザネはさっき説明された義務。みたいな大丈夫なん？」

「ああ。なるべく　であって絶対ではないからな、アレは。ギルドカードを紛失したことを説明した時に、今月は問題無いといわれたよ」

「へえん。とりあえず仕事受ける気があるならいいよって感じなんかね」

「そうだな。　それに冒険者登録だけして、ギルドカードの恩恵だけを受けようとする者を防ぐ意味もあるだろう。　　依頼が常にあるっていうのも嘘じゃないだろうが」

「そうか。国の行き来が楽チンだったり通行料安くなったり。　銀貨一枚でそんなカード作れるならみんな作ろうとするよな。そういう義務でも無ければ作った後は依頼受けずにほったらかしも出来るわけだし。」

「色々考えてんだな」

「美味しい話ばかりじゃない。ということだな。　　まあ、冒険者として生計を立てようとするのならば、Cランクであれば月に金貨1枚分受けるなど普通に出来る。　　そう心配することはないさ」

百万円ついたら相当な大金に感じるけど、そこまで無理の無い額だ

ったりするんだらうか。

……。
考える。

……ああ。そついや今借りてる宿だけでも一ヶ月銀貨50枚かかってんだもんな。金貨1枚くらい稼がないと話しにならないか。どっちにしる稼がねばならない最低ラインが金貨1枚辺りであろうことに気付いたオレは、一先ずCランクの依頼が載った掲示板を見ることにする。

どの掲示板にもそれなりの冒険者が屯していて、Cランクの方にオレ達が近付いていくと、ジンの威容に圧されてか、皆一様にこちらを見てくる。

視線は努めて無視し、勝手に道を開けてくれる彼らの間を縫って掲示板の前へと。

「……………」

掲示板見た。

そして見て思う。なんてーか……

「……………」

ジンも同じように掲示板を見ていて、文字も大体分かるコイツも、オレと同じような表情をしていた。

なんだらうか。この気持ち。どう言い表すべきか少し悩む。もう一度貼ってあるCランク依頼をざーっと見て、腕を組む。

まあ依頼の数は結構な数あるんだが、依頼のサンプルを幾つか上げてみよう。

Cランク依頼その1。

バージ村の付近に出没するレッドベアー1頭の討伐：銀貨30枚。

依頼その2。

ミズドの森にて拠点を作っているゴブリン達10〜20体の討伐と
拠点の破壊：銀貨35枚

依頼その3。

魔物領と隣接する国境付近からの、魔物領への、騎士団と共同での
調査任務：1〜3ヶ月程。 月金貨1枚と銀貨50枚。

依頼その4。

王都から都市ダブーへ移動する商人の護衛：期間は約一週間程。
食事負担。 銀貨50枚

依頼その5

ルギト山にて採れる薬草の採取：詳細は受付にて。 銀貨30枚

レッドベアーとか10歳の頃には倒したわ。

あいつ銀貨30枚か 30万もするのか、あいつ一匹倒すと…。

熊鍋にした、アイツが。

でかくて食べ応えがあるのか、グルヤジンがわりと好んで狩ってた、
アイツが。

カザネは大体Cランクでいっぱしのベテラン冒険者って言ってたっ
け。

つまりは、レッドベアー倒せるようになると大体冒険者として一人
前ってことか。

「なあ、カザネ。 依頼って纏めて受けられたりするの？」

正直、長期間拘束される以外の、討伐系依頼であるなら一列くらい纏めて受けたい気分なんだけども。

「いや、依頼は一度につき一つだな。一日の内に一つの依頼を終えてから次の依頼を受ける。などといったことは可能だが」

ダメらしい。

オレとジンはもう一度顔を見合わせて、そして掲示板を見る。

カザネはオレ達の様子に気になったのか、被ったフードの先端の尖がりが傾いている。 首を傾げているのだろう。

「 まあ、いいや。 とりあえずこのゴブリン100〜200体の討伐ってやつ、受けてみようかな」

「 ? そうか。 ミズドの森といえば、北門を抜けて、丁度王都と国境の間くらいにある森だな。 ジンに乗って行けば一日中には行って帰ってこれるだろうが。 これから行くのであれば、念の為野営の準備もしいた方がいいだろうがな」

「おっけ」

準備は常にバッグの中に仕込んである。 カザネの装備整えてたら早速行ってみよう。

貼ってある依頼書を剥がし、マールさんを探して依頼を受ける。

依頼を受けることにしたオレにマールさんは多少驚いたようだけれ

ど、そこはやはりプロなのか、眼鏡を一度くい、とさせるとクールに手続きを執り行ってくれた。

依頼期限はこれより一週間。一週間以内に成功報告が無い場合、依頼は失敗したと判断され、その後には報告しても報酬は貰えないらしい。失敗が何度も続くとランクが降格されたりするとか。

「それでは、お気をつけて行ってらっしゃいませ」

マールさんに笑顔で見送られてギルドを出る。

さて、次はカザネの装備が。

武器の買ひ物は、割とあっさりと決まった。

カザネが何度か使ったことのあるという、ギルド系列の防具屋にて、今まで使っていたのと同じタイプの軽鎧を購入。

赤色を基調にした、機動性重視といった感じの必要な部分だけを覆った鎧だ。

最初はなんか銀貨50枚くらいのやつすい皮鎧みたいなんを買おうとしてたので、どうせ今後ひたすら貸しを押し付ける予定なんだから遠慮するなと言って、ちゃんとしたモノを買ってもらった。

カードを見せて割り引いても金貨三枚ほどしたが。命には代えられないし、妥当なところだろう。

防具屋の店主は慇懃な感じの中年の男だったのだけれど、細かい調整をする為にカザネが外套を脱ぐと、頭から突き出ている角を見て

あからさまに顔を顰めた。

特に何か言ったりはしてこなかったけれども、嫌々やってるのが分かるような態度で鎧の調整をしていた。

……マーカスやらが然程反応を見せなかったから忘れかけてたけど。本当に嫌われてんだな。鬼族って。

カザネは慣れているのか、特に気にした様子も無く鎧の調整を終えると、鎧の他に黒いフード付きの外套を買い、鎧の上にそれを羽織って店を出る。

気持ちが悪く入っていないありがとうございました。という声を聞きながら、オレもカザネの後を追い。

「なんかもう見事なくらいに態度が違うんだな。鬼族相手だと」

「だから言っただろう。アベルは別としても、むしろ知っていても普通に接してくれているマーカス殿やギルドの職員の方がおかしいんだ。ほら、外套。今まで借りてすまなかったな」

「いいよいいよ。…確かにマールさんとか、全然そんな態度見せなかったもんな」

外套被つても角の尖がりとかで分かっただろうに。実際見てなけりやまた気にならないってやつかもしれないけれど、ギルドの教育も大したもんだな、と思う。

武器の方もさくつと武器屋に向かい。遠慮するのは止めたのか、ちやんとした頑丈さ重視といった感じの分厚い両手剣を何度か振り回し、使い心地を試してから買っていた。

盾にも鈍器にもできるような、カザネの身長くらいありそうな剣だ

った。

そんな剣と鞘。それに剣に合わせた金属製の籠手を購入して、
て金貨3枚と50銀貨。

半ば覚悟してたけど、武器と防具高エー！ 一気に残金金貨2枚く
らいになっちまった…！

武器も防具もどっちも、更に高い金貨10枚相当のものとかあつた
し、恐ろしいなあ畜生。

「えーっと、その…… 本当によかつたのか？」

「後悔はしない。ケチってカザネに怪我でもされたら、その間オレ
の性欲は何処にぶつけければ良いんだって話になるし。 まあ、そ
の分働きに期待ってことで」

オレもちよつと真剣に稼がねば。早く可愛い奴隷を買いつうにも。

「……………。 まあ。君が良いなら私はありがたく使わせてもらつ事
にするけども」

大剣を背に背負つて、なんとも言えないような間を空けてそう返し
てくるカザネ。

ギルドの依頼とか見る限りじゃ、こつちで金稼ぐのはそう難しいこ
とじゃない感じだしな、オレにとつちゃ。

ともあれ。カザネの装備も整つたので、早速依頼を果たしにゴブリ
ン退治に向かうことにして、北門へと向かうオレたち。

途中、昼飯代わりにホットドッグを露店で買って、3人で食つ。オ
レ一個カザネ一個ジン10個。

北門から王都を出る時、なんか見たことあるようなツラの
ーちゃんと見たことあるようなツラのオオカミの銅像が見えた気が
したけれど、オレもジンも何も語らず門を出た。

さーてよーしゴブリン退治だがんばるぞー。

第12話 ゴブリン退治（前書き）

よくみたらランキングで、日間、週間、月刊の三種で五位以内に入賞していたので。

大人気御礼として、一挙二話掲載とさせていただきました。

毎度ありがとうございます。

第12話 ゴブリン退治

ミズドの森というのは、王都の北にある小規模な森であり、更に北へと向かうと魔物領と隣接する国境がある。

ミズドの森自体は、既にアセナル王国の領地として平定した場所で、普段は近隣の村や街の樵が木を伐採にきたり、木の実を取りにこれるような安全な場所なのだけれど、時折国境から魔物が侵入してきて今回のように恵みの多いこの森を根拠地にすることがあるらしい。

国境を護るのは王国の騎士団を中心とした国境警備隊なのだけれども、大規模侵攻は無くとも日々うじゃうじゃ魔物は魔物領から湧いてきており、目の届き難い山間部などからぼつぼつ魔物が侵入してくるらしい。

これはもう仕方のないこととされており、そういった魔物によって起きる問題の対処も、冒険者ギルドの仕事の一つというわけだ。

今回の依頼も、そうして侵入してきたであろう魔物、ゴブリンの集団が森にて集落を作ろうとしているので、それを潰してこいということであった。

ゴブリンとか、オレのイメージだと初期装備のダガーとかでさくつと倒せる魔物ってイメージなんだけども。

そう思って聞いたカザネの説明によると、簡単な武器や防具も使うし、知恵もある。単体だと個体にもよるが、EからGランク相当の相手らしいけれど、集団となると組織的な動きをして襲ってくる為、冒険者が単独で相手するには、確実に倒すにはCランク相当の実力が必要。ということらしい。

確かに現実じゃ死んでもセーブポイントからやり直し。とか出来ないわけだし、依頼を受ける時はただ倒せる。ではなくて“楽勝で倒せる”くらいが丁度いいのかもしれないな。
特に一人じゃ何らかのアクシデントが起きた時、誰もフォローしてくれないわけだし。

ジンの上に乗って、空だと目立つので陸上を駆け抜けてミズドの森へと向かいながら、今回の依頼先の話聞く。

そこそこに王都で冒険者をやっていただけあって、これから行くミズドの森も向かったことがあるらしい。時折ジンに声をかけて行き先の修正をしている。

「そっぴやさー、気付いたんだけどさー」

オレの後ろで腰に両手を回して捕まっているカザネに声をかける。
以前一緒に乗った時よりも密着度が増しているのがなんとも心地良い。

「うん？なんだい？」

「オレ達この依頼終わったらチーム登録した方がよくな？一緒に仕事してんのに別々に仕事すんのもアレだし」

「それは……私も考えなくてもなかったのだけれど。…流石に私と、アベルやジンでは力に差があり過ぎると思ってるね」

「あー。いいよ。別に。カザネ連れて行けなさそうな依頼の時はジンと二人で行くし、そういう時だけ別行動にすりゃあいい」

「む。それはそうかもしれないが　それはそれで、私のいる意義というか。そういうモノが……」

「はっはっは。折角同じ冒険者同士なんだから、なるだけ一緒にイチャイチャしようぜ、イチャイチャ。戦闘でも力になりたいってんなら、頑張って強くなってくれ」

「く。　…そうだな。依頼先でアベルがむらむらしてしまったり困るだろうしな。雇われの身として、いつでも対応できるように足手纏いにならない程度には強くなってみせよう」

「そうそう。常にオレの傍に居られるくらいに強くなってもらわないと、依頼から戻って来た時困るのはカザネだぜ？」

「ふふ。正直、たまーにならばああいう無茶苦茶なのも悪くは無いと思っているけどな。分かった。頑張ろう」

あんだだけ無茶苦茶汁塗れにされて、たまになら、とか言えるカザネに素直に脱帽する。

いいのか。マジか。

ちよっとこれからは如何にか理性残しておくよう頑張ろうと思っ
てただけども。

少し色々な意味でテンションが上がりがけたが、ジンの上だしこれから戦いだし流石の流石に自重する。

今夜が楽しみになってきたー！！

そんなわけでミズドの森。

オレとジンが暮らしてた、グルガの森ほど広くもなく、おどろおどろしくもなく、殺伐としているわけでもなく。

ちよいと周りを見渡せば必ず魔物が見つかったあの森と違って、静かーな、大人しいって表現が合ってるのか分からんけど、そんな感じの森だった。

そんな森の中ほどで、ゴブリンの集団が集落を作ろうとしているらしいので、とりあえず森の中に入る。

森の中でジンの上に乗っていると、咄嗟の時にジンもオレも動きが制限されてしまうのでカザネと二人してジンから降りつつ。

「……どこら辺にいますか分かる？ジン」

「がっ」

「分かるのか……」

森に入ってすぐのことだというのに、ジンが前足で森の中を示す。

カザネが驚いたようにジンを見つめている。

どんな超感覚だかオレにも分からんけど、ジンもグルもやたらと気配に敏感なんだよな。オレがこっそり忍び寄ろうとしても必ず気付かれるし、森で夕飯を探す時も最初に気付くのは必ずジンの方だった。

もしかしたらゴブリンの位置もわかるかなー、と試しに尋ねてみたら本当に分かるとは…。

正直オレも驚いてる。

そんなジンの先導で、森の中へと進んでいく。

グルガの森を思い出しながら、意識を戦うためのそれに切り替えていき、どんな状況にも対応出来るように杖を握り心構えを作っておく。油断してあっさり死亡とか洒落にならんし。

見るとカザネも先ほど買ったばかりの両手剣を鞘から取り出し片手に持っていった。かなり重そうなんだけどな、あの剣。片手で難なく持つてるあたりは、流石に鬼族ってことか。

やがて歩いた先に、森の中に木を切り倒して出来たような小さな広場があり、その奥に丸太を突き刺して作ったような柵。柵に囲まれて建てられた小型の砦みたいなものがあった。

砦の中に、ギルドで説明を受けた魔物　　緑の肌色に、子供くらいの背丈をしたゴブリン達がうるちよろしており、それぞれ石を削り出したようなナイフや手斧、木製の弓などで武装している。いっちょまえに腰布とかも巻いている。

一先ず広場から距離を取るように森に戻り、3人で顔突き合わせる。

想像していたよりも拠点が大掛かりだな。というか

「あれ？ あいつら10や20じゃきかなくね？」

明らかに30匹以上は居た。見える範囲で。

「……ゴブリンは集団で行動する魔物だからな、仲間が多いところに集まってきたのだろう。こういった状況も含めて、クランクの仕事だということだ」

そうそうあることではないけどな。という。

こういう状況から無事に戻ってこれる能力も含めてCランクの依頼だとかで、別に逃げ帰ってもペナルティにはならないらしい。別に逃げ帰るほどじゃないけれど

「倒すとしたら、アレ全部の討伐証明部位を持って帰らなきゃならんの？オレら」

量もそうだし、魔法とか使ったら跡形も残らないヤツも出てきそう
だ。

ちなみに討伐証明部位というのは、その魔物を倒したことを証立てるものであり、ゴブリンの場合は尖がった緑色の耳らしい。

「いや。ある程度で構わないよ。成功報告を受けた後に、一応ギルドが討伐確認の依頼を出して確認するから問題無い。GとかFランク向けの仕事だな」

良かった。ならとりあえず倒せばいいのか。

あいつら倒すだけならば、こっから魔法ぶちこみまくって皆諸共一方的に破壊すればいいんだけれど。　　ここらでカザネの実力も見えておきたいしな。

よし。

「したら、カザネの実力も見たいし、とりあえず突っ込むか。オレが後衛でジンとカザネが前衛。オレが魔法あのバリケードみたいな柵をぶっ壊すから、ジンとカザネは皆から出てくるゴブリン達の掃討。オレ援護。って感じでどうよ」

「いいんじゃないか？ 私はそれで問題無い」

「がっ」

「ジンは張り切り過ぎるの禁止な。 お前が頑張りすぎるとオレ達の仕事が無くなってしまう」

「がっ」

「一応釘を刺しておく。 ジンも美味そうな相手でも手強そうな相手でも無いし興味が湧かないのか。 大人しく頷いた。

「 そんじゃ。 オレが魔法をぶちこんだら開始で。 各自怪我などしないように気をつけること」

「了解」

「がっ」

改めてゴブリン達の拠点となっている広場の手前まで来て、皆に目を向ける。
なんかゴブリン達もちよろちよろ忙しく動いていて、森で取った木の実や猪などを皆に運んだり、皆の増築をしたりと一生懸命働いているのが見える。

なんか海岸で一生涯命砂の城を作っている子供を邪魔してしまった時のような心地が一瞬胸を締める。まあ、可哀想だけど仕方ないよな。そういうモノは、ゲルガの森に置いてきた。

「行くぞ　　すごいビーム!!」

後ろに控えている二人に声をかけ、杖を握った片手を皆に向ける。声と共に、手の前に魔方陣が浮かび上がり、そこから太く、白く輝く魔力砲が放たれる。

オレお得意のその光が放たれた瞬間、結果も見ずにジンが皆へと駆け出して、一拍遅れてカザネも皆に突貫する。

オレの魔力砲は至極あっさりとも木製程度の柵なんて消し去り、皆の一部も食いちぎる。その白光と、線上に巻き込まれたゴブリン達の断末魔で、他のゴブリン達が異変に気付き、オレたちの存在を発見する。

が、時既に遅い。

既に柵の手前にまで駆け寄っていたジンが、白光に目を奪われていたゴブリン数匹を柵ごと爪で引き裂き、その勢いを緩めず駆け抜けて通り道に立っただけで済んだ者達を切り裂き、喰い散らかす。

続いて駆け寄ったカザネが両手に握った大剣を扇状に振り回し一閃。これもまた数体のゴブリンを真っ二つに切り裂き、そのまま遠心力を利用しぐるっと一回転したカザネは、周囲一帯のゴブリン達を斬り伏せてしまう。

…おお。　　ジンは当然として、カザネもオレが思っていた以上に強

い。大剣の重さと遠心力を利用して、くるくる独楽のように廻ってはゴブリン達を切り伏せる。

かといって勢い付いた大剣に振り回されることもなく、剣を振り抜いた後の隙も少ない。

鬼族の身体能力の高さを存分に活かした戦いかただなあ。　　なんか鬼が金棒持って暴れまわっているみたいな暴虐っぷりだ。　　な

遠くから時折魔力砲を撃っては砦を破壊したりなどしながら、二人の戦いっぷりを眺める。

ゴブリン達は二人に接近戦では敵わないと知ったのか。弓を中心にして射掛けるけれど、ジンの体毛には石なんかで作った鏃はまるで歯が立たず。カザネも的確に回転しながら剣で弾いてものともしない。

敵の数は予想以上に多かったけれど、どうやらオレが手を出さずとも殲滅は時間の問題のようだった。

「　　や。　　なんか思ったよか強いのかな。カザネ。　　アレでもCランクなん？」

砦に籠っていたゴブリンも無事殲滅し、築かれていた小さな砦もオレが魔法で破壊した。

オレの魔法で焼き消えたゴブリンや、ジンに顔を食い千切られたヤツなどは別として、とりあえず採れるだけの討伐部位を集めて袋に纏めてバッグに詰め終え。

周りに生き残りや他の魔物がいないことを確認してから休息を取る。

丁度広場になってて周りの見晴らしもいいし。
ゴブリン達が切り倒したと思われる切り株の上に座って、剣についた血糊を布で拭き取っているカザネに尋ねる。

「鬼族の一人旅である以上、それなりには実力が無いと話にならないからな。
…私の場合は、他人をアテに出来ない日々だったから、確実に問題無いと判断できる依頼しか受けてこなかったんだ。
そのラインがCランク、というわけだな」

つまりCランクなら大概の依頼は余裕で達成できるというわけだ。
頑張ればBランク以上の実力なのかもしれないな。あの感じだと例え一人でもいけそうだったし。戦いが終わった今も、じんわり汗が滲んでいるけれど、さして疲れてる様子は無い。
このまま連戦となっても、戦えるだろう。

「成る程な。この感じだと意外と全然ついて来れそうじゃんか、カザネ」

「流石にそこまで自惚れられる気はしないな…。ジンなんかまだ動き足りなかった感じだし。アベルもあれだけ凄まじい魔法を放っておいてまるで消耗した様子が無い」

オレの言葉に肩を竦めながら否定を返すカザネ。

その噂のジンはというと、ゴブリン達を倒して小腹が空いたのか。穢滅を果たしてからすぐに森の中へと走っていき、猪を捕まえて小腹を満たしていた。

ゴブリンは食べる気がしなかったらしい。

…まあ、人型の生き物って骨が多くて肉少なくて、美味くないらしいからな。

オレの方もカザネの言う通り、アレくらいの魔法では微塵も疲れたりはしないため、カザネの言葉を否定することも無く、これからに期待している旨を告げた。

さてさて、ともあれ。

そんなこんなで無事ゴブリンどもも討ち果たし、見事依頼を果たすことに成功したオレたち。空を見てみると、まだようやく日が陰ってきたかな。という頃合で。日没まではまだまだ余裕がありそうだ。

みんな大して疲れてるわけでなし、ジンもそろそろ猪を食べ終えそうだしさっさと帰ろうか。そう、二人に伝えようと

ずんっ

した、

ずしんっ

その時。

ずしんっ！

不意に地響きが起きる。

二人に声をかけようと、腰を浮かしかけていたオレは、思わず蹈躡

を踏んで辺りを見回す。
見るとカザネも、大剣を支えにして立ち驚いたような表情を浮かべており。そしてジンが

「……………」

肉を食べるのを止めて、顔を上げ、じ、と遠くの空を見つめていた。方角的には、オレたちがやってきた王都の方が南だから、北の方になるか。

「なんだ。地震か？」

地響きは断続的に今も続いており、それは段々と大きく、強くなっているように感じる。

カザネもジンも、オレの疑問に答えることなく、顔に緊張を張り付かせており。オレも答えを聞くまでもなく分かる。これは地震なんかじゃないということが。

「……………」がっ

ジンが起き上がり、首を振って己の背を指し、乗れという仕草をする。

オレとカザネがジンの背に乗ると、今まで念の為にと人に見られることを嫌って止めていた、ジンの足が大気を掴む。

螺旋階段を昇るようにその場をぐるりと回りながら空へと駆け上がっていき、森の木々を見下ろせるほどにまで駆け上がると、視界に広がる光景に息を呑む。

ミズドの森から動物が逃げ出していた。

それらは全て、先ほどジンが見据えていた方角。北の方を避けるようにして散っており。

その、北の方角からも、疎らに馬などの動物が逃げてきていて、鳥が必死の形相でオレの真横を飛び去っていく。

そして。

これらの問題の原因と思われる北の方。そこから、夕焼けに照らされた、この距離からだと思える影のようになって見え難いソレが、姿を現す。

…次第に目が、そいつの正体を解析していく。

影は、人のようだった。

ただ、地平線の端から見ても分かるようなサイズの人型の存在を、オレは知らない。

あれほど遠くからはつきりと分かるとか、どれほどの身長があるのだろうか。

片手に大きな棒のような獲物を持っており、そのシルエットは武装した戦士のようだった。

「……………ギガス」

オレの背後で、オレと同じように北方を見詰めていたカザネが、緊張に声を震わせながら呟く。

ギガス。というのだろうか、あのシルエットは。

成る程。

「……………。確かに、ギガ。って感じではあるよな、アレ」

納得した。

第13話 続きまして

ギガスとは、魔物の一種であり、身長五メートル超の巨人である。総じて筋骨隆々の体つきをしており、容姿は個体によって様々ではあるが、男性の体つきをしており、皆一様に顔には憤怒の形相を浮かべている。

知能は低い、武器を使ったり目標に向かって投げたりする程度のそれはある。

その巨体を活かした臂力は凄まじく、更には決して鈍重というわけでもない為。

討伐するには最低でもチームランクB、出来るならばチームランクAの冒険者達で立ち向かうのが望ましいとされる。

以上。

カザネさんの魔物講座でした。

どうやら巨人はこちらの方に向かってきているらしく。段々とはつきりと姿が見えてくるにつれ、その正体を悟ったカザネが魔物についての説明をしてくれた。

魔物の中でも姿を見ることは稀であり、決して個体数は多くないらしい。カザネも見るのは初めてだと言っていた。

確かにこんなでつけえのがうじゃうじゃ居たら、人間なんてとっくに全滅してるよな、常識的に考えて。

片手に持っていた獲物は、どうやらどっかしらで引っこ抜いてきた大木らしく。樹齢何年だよ、というくらいにでかい幹と、幹から生えた枝や葉。持ち手のあたりに根っ子らしきものが見える。

……武器を使う程度には知恵があるつつつても、木い引っこ抜いて武器にするとかある意味バカだろ。

「…恐らく、魔物領からやってきたんだろうな。国境を守る騎士団がどうなったのかは分からないが、あんな巨大なモノを見逃すはずがない。突破されたのだろう」

うん。これは見逃せないよなあ。
見ない振りしたくても視界に入ってしまう。

ギガースを追ってくる人の姿も見えないし、警備隊の方はやられたか。もしくはこいつにまで手を回せない状況だったりするのだろう。最低チームランクBが必要ってことは、結構な戦力を割かねばならんってことだろうし。

ふむ。さてはて。どうしたもんかな。

「どうする？ 私は一旦王都に戻って、このことを知らせた方がいいと思うが。このままアレが進むと王都に突き当たるし、既に早馬が向かっているかもしれないが、念には念を入れた方がいいだろう」

「そうだな。アレって依頼とか受けてはいないわけだけど、倒した場合お金とか貰えんの？」

「は？ ……あー、そうだな。基本的に依頼外での魔物の討伐は、報酬は無いが、倒した魔物の部位を剥ぎ取って売る等して、金に換えたりする。例えばレッドベアの肝や、毛皮などはそこその値段で売れるしな。だが、アレは換金できるような部位があるような魔物には見えないし……」

巨人とはいえ人の皮とか、趣味が悪すぎるもんな。使い道も無さそ

うだし。

「じゃあ無理？」

「……いや。恐らくではあるが、こつこつ突発的な国や都市の危機を防いだとなれば、国なりギルドからなり、それなりの報奨金が出るだろう。どれぐらいの額になるかは分からないが」

「そっか……」

なら、いいかな。 うん。

「よし。そしたらちよつと倒してみるわ。 念の為ジンの手も借りたいし、カザネはここで待っててよ」

「………は？」

「まだ結構距離あるし、森に一旦下ろすから。 まあ、終わったら迎えに来るよ」

言ってることが分からない。といった風に、惚けた顔をするカザネ。いつもきりつとしているだけに、ちよつと珍しい。

「いやいやいや。ちよつと待て！ 最低、チームランクで、Bのランクが必要なんだぞ？ 分かっているのか？ 個人でやるならばSランクだ。 流石にそれは無謀というモノだろう」

「大丈夫だろ。たぶん。 まあ、無理そうだったらジンに乗ってトンスラしてくるさ」

そう言つて、猶も考えを改めるよう告げてくるカザネを一旦森に下ろす。

ジンも反対してくる様子は無いし、多分いけると判断しているのだらう。

正直今の自分がどれほどのモンなのか試す為にも、丁度いい試金石になるだらう。うまくすれば報酬もゲットで、一気に懐に余裕が戻るし。

「したら、行つて来るわ。何が起こるか分からんし、待つてる間気をつけるよ、カザネ」

「それは私の台詞なんだが……。アベルも、ジンも、本当に無茶はするなよ？ 別段私達がやらなくともいいことなんだからな」

「あいよ、了解。 んじゃまた後で。 行こうぜ、ジン」

「がっ」

まるで考え直す様子の無いオレを見て、説得することを諦めたのか。カザネは額に手をやって溜息を吐く。

森で見送るカザネにひら、と手を振つて。跨ったままのジンに声をかけてとこと巨人の元へと向かうオレとジン。

確かに、別にオレが倒さなければいけない理由は一つも無いし、倒したとこで得られるメリットも大したものではない。

けれど、逆にそんな状況が良い。この先じーさんの息子というこゝとが周囲に広まった場合、どんな無茶振りされるか分かつたもんじゃないし。後に引けない状況でぶっつけ本番をやらされるより、こゝという状況で自分がどれくらい出来るのか確かめておいた方がいい

だろう。

それに、だ。

「　　なんか、ジーさんやグルに比べると、それほど大した相手には見えないよな、ジン」

「がっ」

近付いて改めて見てみるまでもなく、そいつはやはりでかく、迫力というものが確かにあった。

この巨人に比べれば、普段でかいでかい言ってたジンも、普通の猫くらいのサイズに見える。

5 m超、って言ってたけど、余裕で10 m以上はあんじゃねえかなあ？

前世の世界では、恐らくどこ行っても見られないような生物の姿に、なんか感動すら覚える。

巨人の姿を近付いてよく見てみると、身体の所々に焦げ後みたいなものや、主に脚部を中心に切り傷みたいなものが見え、どっかしらで一戦やりあってきた様子が窺える。

やりあった連中がどうなったのかは　　まあ、オレの知る由もなく。

「さてさて。 いっちょ、腕試しと試ってみますか」

ぐるんぐるん杖を振り回し、ある程度の距離を置いて巨人と対峙する。

あちらもこちらの姿に気付いたようで、何をそんなに怒り狂っているのか、阿修羅のような顔がオレとジンの姿を捉える。

杖を握った右手に、左手を添える。

巨人が歩みを止める。

「 いっ、」

脚と腿でしっかりとジンの身体に己の身体を固定し、ジンも四肢に力を漲らせる

巨人がこちらを見下ろす。

「くっ、」

オレの眼前に特大の魔方陣が浮かび上がる。
大木を握った巨人の腕が振りあがる。

“ ”

“ ”

“ ”

「　ぞおおおおおおッ！！」

「グルウオオオオンッ！！」

「ゴアアアアアアッ！！」

オレの前に浮かび上がる魔方陣から、特大の白光が溢れ出し、

四肢に漲らせた力を解放させたジンが、咆哮と共に前方へと飛び出して、

雄叫びを上げながら振り下ろされた巨人の豪腕が、凄まじい音を立てて大地を揺るがせる。

右足に直撃したオレの魔力砲にてバランスを崩された巨人の一撃を、ジンが前方の空隙に飛び込むようにしてかわす。
一撃を避けてなお、衝撃波と地響きを発生させてこちらを捉えんとするそれを、地に足を取られるのを嫌ったジンが空へと駆け上がり対処する。

勢いをそのままにジンは巨人の眼前へと迫っていき、更なる一撃を叩き込む為オレは意識を研ぎ澄ませる。

途端　　横合いから迫る、唸るような風切り音。

「　　ッ！　　ジンッ！」

「ガアアアアッ！！」

羽虫を払うように横薙ぎに振るわれる平手を、ジンの背を蹴りオレは上に、ジンは下へと跳び避ける。直後、寸前までオレ達が居た空間が風を巻き込みながら薙ぎ払われていく。

ジンがそのまま巨人をすり抜けるようにして爪で脇腹を切り裂いて、一時的に巨人の頭上にまで跳び上がったオレが、真下へと向けて杖を向ける。

「頭が、高え　　！！」

ジンの爪に意識を逸らされた巨人の頭を、再び放った魔力砲が包み込む。

その衝撃に巨人が膝をついた隙に、ジンに拾ってもらったオレは巨人と一度距離を取る。

「　　つふはー！　流石に流石。そこらの魔物と同じようには、
いかないか」

顔を抑え、苦悶の声を上げる巨人の姿を、杖を肩にかけ眺めながら素直に感嘆の息を吐く。

今までの敵を殆ど一撃で倒してきたオレの魔力砲も、流石にこのレベルの相手となるとそうはいかないようだ。

右足も顔面も熱によって焼け爛れてはいるものの、まだまだ致命傷とまではいきそうもない。

ジンの爪による攻撃も、皮膚をざっくりと切り裂いてはいるものの、その面積に対して傷をつけた規模が小さすぎる。でかいつてのは本当に、それだけで脅威だなあ。

「ゴ、ア、ア……ッ!!」

巨人が顔をおさえたままに立ち上がる。

怒り狂ったような面の、ところどころの皮膚が爛れ始めていてビジュアルが更に凄まじい。

「ウガアアアアア!!」

大木を握った腕が振るわれる。怒りで力が増しているのか、先ほどよりも早い。

が。それをジンが体格差と俊敏さを活かし、次々に避けていく。嵐のように振るわれる腕を、どんな翼を持つものであると出来ないような、急激な方向転換を駆使して翻弄していく。

前後左右上下。どのような体勢でどのような状況だろうと、大気を足場に出る王天虎ならではの三次元の駆動を、巨人は捉えること叶わず、闇雲にただ腕を振るう。

とはいえ。

このままじゃこっちも攻撃をする暇が無く。ジン単体ならばともかく、この動きを更に続けられると、凄まじいGに乗ってるオレの身体が持たない。

…よし。

覆い被さるようにジンに抱きついた姿勢で、ジンの耳元に囁く。

「オレ防御。ジン攻撃。なんとかあの腕一瞬なりとも止めるから、その隙に喉笛でも噛み切つてやれ」

人間と一緒になら流石に有効打になるだろう。雑に作戦を提示すると、

杖の宝玉をがっしと掴み、ジンに捕まりながらタイミングに備える。巨人が当たらないことに苛立ち、大木を大振りに振り下ろした瞬間

「今ッ！！」

ジンの上から飛び降りる。完全に振り抜いた腕を、臂力にモノを言わせ無理矢理返しの一撃として振るうその腕に向けて、杖を握った拳を振り下ろす。

「障、壁、全、開ッ！！」

ありつただけの魔力を込めて、宝玉を通じて拳の先に巨大な障壁が展開される。

透明な赤い壁のようなものが眼前に発生し、振り上げられる大木と衝突。

！！

「お、おお、おおおっ！？」

瞬間。大木と障壁が拮抗し、相当な勢いを減衰させることに成功するものの、結局障壁ごと振り抜かれてしまう。

上空へと打ち上げられてしまうオレだが　ジンにとってはその一瞬で事足りたようで。

「ゲルアアアア　　！！」

豪快に巨人の喉仏を噛み千切っていた。打ち上げられながらみた巨人の喉元は、大量の血と共に白い骨まで覗いており、ジンが相当深

くまで噛み千切ったであろうことが分かる。

あそこまで楔を打ち込んでしまえば、あとは叩くだけだ。

「 ジンッ！ 」

ジンを呼びオレの身体を回収してもらうと、両膝を付き、喉元を抑え悶えている巨人の元まで迫り、身体を魔力で強化。

こちらに気付いた巨人の前で、再びジンの背を蹴り上げ跳躍。

一瞬どちらの獲物を追うか迷った瞬間に、ジンがその両目を爪で引き裂いた。

そしてオレは、巨人が押さえてる両手の隙間からも、だくだくと血が巨人の首筋へと向かい、飛び蹴りを叩きつけると同時、その足先から魔力砲を発射。

「これで、とどめだ ツ！」

足先から零距离で放たれた魔力砲が、ジンの牙により切れ目を入れられていた首を焼き切っていく。

巨人は凄まじい咆哮をあげ苦しむも やがて、白光が止む頃には、首と胴が完全に別たれ、巨人は物言わぬ骸と化した。

「……ふいー。 流石に、首が取れたら死ぬか……」

ジンに外套のフードを食まれぶらさがりながら、上空から巨人の様子を観察する。

完全に胴と頭の繋がりを断たれ、生物であるなら絶命する以外余地

がない状況であっても、少し本当に倒したのか不安になる。　こんな巨人が動くっただけで常識なんてきかねえし。

暫く真上から様子を観察して、完全に死んでいることを確認してから、ジンに頼んで地上に降りてもらおう。

なんだかんだで、ジンと一緒にとはいえ、チームランクB以上の魔物、ギガースを倒してしまったぜ…。

結果的に見ると、こっち無傷だし圧勝といった感じだけでも。流星に多少は疲れたので、暫しその場でジンに寄り掛かって休憩する。

ジンもバッグから取り出したジャーキーを頬張りながら寝そべっている。　魔物とはいえゴブリン同様、人型のギガースは食指が動かないらしい。

肉は多そうだけどな、大きさ的な問題で。

「　まさか本当に、しかも無傷で倒してしまうとはな……」

そろそろカザネ迎えに行かなきゃなー、と。ジンの身体を背凭れに、ぼんやり空を見上げていると。

カザネの声が聞こえてきた。

どうやら戦闘の終わりを察して、歩いてこっちまで来たらしい。

なんか呆れたように半笑いで、腰に手を宛てている。

「いやいや。あんなの当たったらあつちの勝ち。避けきれなかったらこつちの負けの弾幕ゲーだろ。無傷だったのは別に関係ないさ」

それに被弾ゼロだったのはジンの功績によるところが大きいし。

ぼんぼん、とジンの背中を叩いて、ご褒美代わりにまた一つジャーキーをジンにやる。
手ごと食べられた。

「弾幕ゲー？なんだいそれは」

「いや、なんでもない。こつちの話」

ジンの涎でべとべとになった手を、ジンの毛で拭いながら返事をする。

「ふうん。　だがまあ、それでも勝ったことには変わり無い。

森からでも二人の戦闘の様子が見えたぞ。なんなんだあのバカでかい魔法。　つくづくとんでもないな、君は……」

「カッコよく見えたりした？」

「……まあ、鬼族としても私としても、強い者に好感を得るところはある」

「よしや」

なら、とりあえず頑張った甲斐があったかな。

自慢の毛並をべちよべちよにされて、ウザそうな目で見てくるジン

を尻目に立ち上がる。

「したら、とりあえず　どうすりゃいいんだろな、コレ。　褒賞貰うには、持って帰ったりした方がいいんかね」

「それが一番確実、ではあるだろうが……、手段はともかくとして、持って帰ったら間違い無く大騒ぎになるだろうな」

「　あ。　そうか……」

「正直本当に倒してしまうとは思っていなかったからな。　勢いで答えはしたが、アベルは親御さんのこともある。いきなり目立つのは旨く無いんだろう？　対処が難しいところだな……」

「　そういやそうか。　いずれじーさんのことが周知になるのは仕方ないにしても、ギルドカード貰って即日を目立つのはあまりにも悪手な気がする。　ギルドマスターだって恐らくオレのことを広め過ぎない為に色々手を尽くしてくれてる最中だろうし。」

「　こんなん王都に持っていったら、色々なヤツから根掘り葉掘り探られるのは決まりきってるもんなあ　。」

「　……。　オレはあくまでお手伝いで、…カザネが倒した。　ということにするのは」

「　幾ら鬼族の私でも、流石にギガースの首を断ち切れはしないぞ」

「　そっすか……」

うわー。しくったなー。勢いだけでやっちゃまった所為で、後のこと全く考えてなかったや。

あー。

うあー。

あー。

……よし。

「いや面倒くさい。褒賞の件は諦めよう。とりあえずゴブリンの報酬だけ貰って、ギガースのことは一応マールさんに報告するだけにしよう」

「マールさん？」

「オレ達にギルドカード渡してくれた職員さん。オレとじーさんのこと知ってて、ギルドマスターとの連絡役もやってくれてるらしい」

「あの女性か。アベルがいいのならば、私に異論は無いな。

依頼の成功報告をすればアベルがこの辺りに来たことは知られるだろうし、信じてもらえるかは別として、伝えておけば余計な手間が省けるだろう」

「よし。じゃあそんな感じで。したらさっさと帰ろうぜ。

今から帰ればギリ夕飯にもありつけるだろうし」

ばん。と手を叩いて方針を纏めると、ジンの上に跨るオレ。 ちん

たらしてて野宿することになるのもアホらしい。
後ろにカザネも乗つけて、ジンを促し王都へと戻って行く。

王都に辿り着いた頃には既に辺りは真っ暗で、行きの時にも使った北門はなんだか騒がしい。

オレ達が門を通る際、門番の騎士に何処に行っていたのか。何かおかしいことはなかったかと聞かれ。

多分あのギガースのことかなあ。とは思ったものの、面倒臭いので特に何も無かったと伝えた。

この時間にギルドに行ってもギルドは営業しており、とりあえず換金してから帰ろうかな。と考えたが、今日は行きも帰りも戦闘の際も動き回ったジンが腹が減った様子だったので、ジンを尊重して換金は明日にすることにして宿に帰る。

夕食は、ジンの夕食代だけで銀貨5枚かかった。

まだ成長期だったりするんだらうかコイツ。

食欲旺盛な相棒の様子に戦慄しつつ。夕食を食べ終わったら風呂入って歯ア磨いて寝る。

翌日、マーカスにまた「ゆうべはお楽しみでしたニヤ」と言われた。

だから何故知ってたんだよ。

第14話 暴露

戦いの後は血が昂ぶる。という感覚を、森での生活では感じたことがなかったけれど。

昨夜辺りから分かるようになってきた。

ともあれ。

ゴブリン討伐したり、でっかい巨人とケンカした翌朝。

昨夜もマーカスの娘さん シエナの部屋で寝たらしいジンと食堂で合流し、三人で朝食を食べる。

相変わらずメシを食べているジンの毛並みをせっせとブラッシングし、奉仕しているシエナの姿になんだかほんわかしつつ今日の予定を話し合う。

主にギルドに討伐の報告をした後どうするか。といったことだが。

カザネの話によると、冒険者というのは基本一つの依頼を受けたら数日は休息を入れるものらしい。

酷使した身体を休めたり、刃毀れた武器を武器屋に見てもらったり、防具の点検をしたり酒飲んだり。

人それぞれではあるが、まあ、そんな感じだとか。

で、オレ達はどうするか。というわけで。

別段オレもカザネもジンも何か消耗してるわけではなく、連日依頼を受けても全く構わなくはあるのだけれど。

そこまでせっせと仕事をするのも、ワーカーホリックみたいでなんだかなあ。といった感じである。

かといって、仕事をしなかったらしなかったで、特に依頼以外に何かすることがあるわけでなく。

前世に比べて娯楽の少ないこの異世界で、急に暇になったら今の才しげやらかす事なんて決まりきっているの、それもなんだかなあといった感じなのである。

いや。やりたくないわけじゃない。　　が、どうせ夜やるんだから昼間くらい基本ちゃんとしとこうぜ。というワケだ。
でないとなんの為に前世の記憶あるのか分からんしな。　　最近身体の年齢に精神年齢が引つ張られすぎだ。

金貯めて奴隷買いたい。って目標もあるし。

とりあえずギルド行って掲示板見て、手頃そうなのがあったら依頼を受けてみようと考える。

無かったら街の散策でもしよう。　　まだ大して見れてないしな、街の中。

というわけで、そういった旨をカザネとジンに告げる。

別段今日は二人について来てもらう必要は無いので、二人はどうするか聞いてみると、

カザネはついてくるらしく。　　ついでにチームの登録もしてしまおう。という話に。

ジンは今日は宿屋でだらだらしているらしい。

シエナに付きっ切りでお世話されながら、ゴロゴロ仰向けになって行ってらっしゃい。とばかりに前足を振られた。

おい、虎。

そんなわけで冒険者ギルド。

マールさんを探し、ゴブリン討伐の依頼報告の為に討伐部位をバッグから取り出しつつ。

手袋を嵌めて取り出した耳を確かめているマールさんに、昨日のギガースの件についてさくつと報告する。

「……………はい？」

「森の近くで、ギガースつてやつを見つけたので。ついでに倒しておきました。死体を持ち帰るのは色々とアレだと思ったので、放置してきましたけど」

ぱちぱちと、両目を見開いて目を瞬かせるマールさん。

数秒後。　は。としたように周りの様子を確認すると、眼鏡をくい、とさせて。

「……………少し別室で、お話を窺っても構いませんか？」

「構いませんけど？」

そう言うと、マールさんは取り出しかけていたゴブリンの耳を袋へと纏め、同僚の職員に何事かを告げてオレたちを個室へと案内してくれる。

オレとカザネは、勧められた椅子に座って、一旦退出したマールさんが部屋に戻ってくると、改めてマールさんに昨日の詳細を話すこ

とにした。

「……つまり。昨日ゴブリンの討伐を終えたら、北の方からギガスがやってくるのが見えたので、ついでに討伐したと。」

ギガースを倒したのはいいものの、目立つのは嫌だったので放置。念の為今日私に報告しておいた。と……」

「はい」

「そうですか……」

「信じられません？」

「いえ。国境を突破して、ギガースが侵入したという情報は、昨日の時点でギルドの方でも掴んでおりました。警備隊の話によると、ギガース数体が同時に現れ、その内の一体の侵入を許してしまったそうです。」

早馬でその報告を受けた我々は、緊急依頼として、騎士団と共同で対応出来るチームを編成していたのですが。一先ず放った斥候の報告によるとギガースは既に殺されており。一体誰かと、ギルドと騎士団の両方で話題になっていたのですが。…アベル様の仕業でしたか」

仕業で。

「何かマズかったりしますか？」

「いえ、即応できるAランクのチームが出払っていた為、多少の被害を覚悟でBランクのチームを中心に編成していたところでしたので、討伐していただいたことに関しましてはこちらも助かりました。」

先ほどギルドマスターに報告したところ、さしあたって問題は無いようです。……ただ。出来るならば昨日の内に報告に来て欲しかった。というのがギルドマスターとしても私としても正直なところですが……」

そう言つて溜息を吐くマールさん。

何か色々バタバタして大変だったらしい。すいません。

「ギガースの討伐に対する褒賞についてですが。申し訳無いのですが、今のところ褒賞はお支払いできません。この件に対して褒賞を支払うとなりますと、必然様々なところにアベル様の名前を出さねばならないからです。アベル様がそれでも構わないようでしたら、問題無いのですが。」

「いや、いいですよ。オレも倒してから気付きましたし。折角伏せてんのこんなことで周知にするのもアレだし」

「ギガース一体討伐の報酬は、大体金貨3枚から5枚ほどとなるのですが……」

「……………」

揺れた。

超揺れた。

別にいいんじゃないかな。どうせいずれはバレるんだし。今バレても後でバレても結果は同じだって誰かが。

「…………ツ。……い、いや…………大、丈、夫…………つ、です。…………伏せて、おいてください…………」

「アベル」

せめて無闇に人に集られたりしないように、根回しするか権威みたいなものを持つてから公表したい。

どうしようもない状況でバレてしまうならともかく、自分からばらすのは現状、上手い判断じゃあ無いだろう。

じーさんの後継者のアベル。じゃなくて 凄腕の冒険者だと思ったら、じーさんの後継者だった。 みたいな具合がベストだな。そう考えて渾身の自制心を持って金に目の眩む自分を押さえつけていると、なんともいえない感じでカザネがオレの名前を呟いた。

「そうですか…分かりました。 それでは、この件に関してはそのような方向で。 …まあでも。 後日、断言は出来ませんがギルドマスターから何らかの褒賞はあると思いますので、そう気を落とされることはないかと思えます」

「マジっすか！」

やた！完全にタダ働きだと思っていただけに、報われるものがあるってのは嬉しいな！

むぐむぐ消沈していた表情が、唐突に輝いたからか、マールさんが口元に手を宛てて微笑む。

「 ふふふ。 普段は見た目よりもずっと落ち着いて見えますが、 そういった表情もなさるんですね。 なんだか安心します」

「安心 ですか？」

「はい。ギガスすら倒してしまうような、英雄の息子殿とは言え、ちゃんと人の子なんだなあ…」と」

「…確かに。年齢に対して、外面を取り繕うのが上手いところはあるだろうな。プライベートなんか、色々な意味で歳相応だしね」

びっ、と澄ました表情を緩ませるマールさんに見惚れてしているとにまにました雰囲気で口元に笑みを浮かべながら、カザネが爆弾を投じた。

「おい」

「あら お二人は、そういうご関係で？」

「寝食を共にする間柄ではある。まあ ちゃんと歳相応の間だよ、アベルは」

「あらあらそれは やはりお年頃の殿方なので？」

「ああ、正直」

何だかオレを置いて色々突っ込んだ話題を始め出す二人。おいやめるカザネ。折角オレが今まで取り繕ってきたモノをそんなあっさりぶち壊すな。

マールさんもマールさんで、眼鏡の奥の瞳を輝かせて話聞いているし。

「つか鬼族って嫌われてんじゃないのかよ！ 何そんな仲良くガールズトークしてんだよ！」

やめる、オレの予定ではもちよつと英雄の後継者って強くて落ち着いててカッコいいとかそんなイメージ持ってもらってマールさんと仲良くなるつもりだったんだぞ！

初めてだったのに。とかケダモノ。とか昨日も　　とか。オレのイメージ全てぶち壊しじゃねえか！

何度か口を挟んで話題の修正を試みたものの、結局オレがカザネにしたことの殆どをぶちまけられた。

オレ自身聞いても猿だな。と思ってしまうような内容をマールさんに聞かれてしまった。

…せめてもの救いは、その話を聞いてもマールさんはお若いんですね。と大人な感じに微笑んでいて嫌悪感はありませんさそうだったことだろうか。

とはいえ今後どんな面下げてマールさんと会えばいいんだ…！！

「　まあ、そんな落ち込むことはないさ、アベル。ギルドの職員は基本荒くれ者の多い冒険者の対応をしているだけあって、そのテの話題に耐性のある者が多い。　実際、マールだって嫌な様子は無かっただろう」

すっかり意気消沈してしまったオレは、こんな状態で依頼を受ける気にもなれず。　話が終わってゴブリンの討伐報酬を受け取ると、オレとカザネのチーム申請だけして、しょんぼりしながら宿へと戻っていた。

カザネがなんかへこんでいるオレをフォローするかにように話しかけてくるが、そういう問題でも無いだろう。
つーかいつの間にか呼び捨てる仲になってんだよ。

「つつてもお前、流石にアレは無いだろ……」

「ふふ。マールが私が思っていた以上に話せる人物だったんでね。
つい、私の主の逞しさを自慢したくなってしまったんだ。ついつい喋り過ぎたとは反省しているし、許して欲しい」

「く、ぐ……っ」

そう言つて身を寄せ、こちらの顔を覗きこんでくるカザネ。

オレが怒っているわけではないと確信しているのか、表情には笑みが浮かんでいる。

くそ。見透かされてる感じがなんか悔しいな。

けどまあ、カザネもずっと一人旅で、気軽にプライベートのことを話せる相手なんてそうはいなかったんじゃないかな。とか考えてしまつと、実際怒る気にもなれないところはあるわけで。

「……それにまあ、アベルがマールを狙っているのかどうかは知らないが、脈が無いわけではないと思うぞ？ あちら的に」

「は？ なんで？」

「エルフは高潔……というよりは潔癖かな？ そんな者が多いのだけどもね。故に嫌った相手に対しては割とあからさまに態度に出たりするんだ。彼女は私の話を聞いても特に嫌な素振りを見せる様子は無かったしね。殆ど勘だが」

「安心して良いんだか悪いんだか…」

「まあ彼女が、内心実はとても嫌っているけど、それを表に出さないくらい高潔な人物だった。という可能性もあるからな」

「全く安心できねえー！」

むしろそっちの可能性のが高い気がする。
出来る大人の女性！って感じだし。

「はは。 そう気に病むな。 別に女はマールだけじゃないんだ。
私だっているしな」

「そうは言ってもなあ……」

カザネもそうだが、マールさんくらいの美人の女性ってのはそうは居ない気がする。

頑張れるなら頑張りたいところはあるんだ。

そんな風にぶちぶち言いながら歩くオレとカザネ。

途中、屋台でラーメンっぽいものを食べて昼飯にしたりしつつ。

色々気分転換代わりに二人で買い物したりして帰った。

その際、久しぶりに煙草が吸いたくなかったので煙管と喫煙セットを買おうとしたら、カザネにやんわりと止められたりした。

匂いがあんまり好きくないらしい。

残念。

日が沈みかけてきた夕暮れ時。

宿に帰ると、庭の方がなんだか騒がしい。

気になって向かってみると、そこにはジンとシエナ。そして二人を囲むように大勢の猫族の姿があった。

猫族の人らは皆ジンの前で正座しており、

ニヤーニヤーニヤーニヤー騒がしい。

「
なにあれ」

「
一度言わなければならぬと思っていたんだが。私は何でも知ってるわけじゃないぞ」

「ニヤ？ お帰りなさいませですニヤ、アベル様」

カザネと二人で目を丸くして見てみると、そんなオレ達を見つけたマーカスがオレ達に声をかけてくる。

丁度いいので眼の前の光景について聞いてみる。

「街中でジン様を見かけた同族の者達が、集まってきたようですニヤ」

ああ、そついや猫族の連中はなんか知らんけどジンが王天虎だって分かるんだっけ。

別に人目を忍んでいたわけじゃないし、この宿にジンがいるのはちよつと頑張りや分かるか。

「そついや、何でマーカス達つてジンが王天虎だつて分かるんだ？」

「ニヤ。むしろ此方としましては何でジン様とそこの虎の区別がつかないのか不思議ですニヤ。そこの虎ニヤんて及びもつきませんニヤ」

そついうことらしい。

オレには分からないが顔立ちの違いとかあるんだろうか。正直周りを囲っている猫族の顔の区別もいまいち判然としないし。

「成る程な。まあそれはいいんだけどもさ。それよりも、大丈夫なのか？アレ。あんま騒ぎになるのは好ましくないんだけども」

「大丈夫だと思えますがニヤ？ 以前も説明しニヤしたが、我々猫族にとつては王天虎の方々は神様のような存在ですニヤ。皆、ジン様がここにいると聞いて集まったんでしようがジン様の迷惑にニヤることはしニヤいと思えますニヤ」

ならまあ いいかなあ。ほつといても。

猫族の人らはジンと直接会話できるみたいだし、変なことになりそつうだつたらジンが自分で何とかするだろ。

ニヤーニヤーニヤーニヤー鳴いてる猫族の人らの中で、時折がう、と鳴いて会話してるつばい彼らを見て、オレは深く考えることをやめた。

なんかボス猫とその子分達。つて感じで微笑ましいし。

そんなわけで彼らを放っておくことにしたオレは、宿の部屋に戻つ

て買った物の整理などをすることにする。
夕食の時間になるとジンも戻ってきて、なんか高そうな宝石のついた首飾りやら貰って帰ってきた。
邪魔つけそうに部屋で首飾りは外してた。
なんかオレの方が色々申し訳無い気分になる。

そんな感じでこの日は終わり。

それから暫くは取り立てて挙げるようなこともなく日々が過ぎて行った。

チームを組んだオレとカザネとジンでぼちぼち依頼をこなし、時折カザネとデートしてみたり、ジンと狩りに行ったり。

チームランクDの依頼だと楽勝過ぎるし稼ぎも大したこと無いので、マールさんに進級してみたいと言ったら、あっさりOKされてクラシクに上がったり。

そんなこんなで二週間が経った頃。

マールさんがオレの宿屋にやってきた。

第15話 謁見

日々順調に依頼をこなし、大体この街での勝手、というのがわかってきた頃。

今日も今日とていつもと同じように3人で朝食を食べていた時、食堂にマールさんがやってきた。

珍しい　　というか、初めてのことなのでどうしたんだろう。と話を聞くと、ギルドマスターが呼んでいるのでギルドまで来て欲しいという。

出来れば一人で。と言われたのでジンとカザネには留守番してもらうことにして、一度部屋に戻り支度を整えてから、マールさんと一緒に歩いてギルドへと向かう。

途中ちよろつと用件について聞いてみたのだけれど、ギルドマスターの方から説明するので。と言われて濁されてしまった。

果たして良い話なのか悪い話なのか。

多少身構えながら、冒険者ギルドへと向かったのだった。

「朝から急にすまんのう」

マールさんに案内されて通されたのは、以前も案内されたことのあるギルドマスターの部屋だった。

部屋の中ではギルドマスターのクルツ・ロベイロ爺さんが、以前と

同じ職員の制服を着て、執務机に座りながらオレを出迎えた。

「いえ。特に予定もあるわけじゃなかったんで構わないんですが何かあったんですか？」

「そうじゃの。とりあえず 先日のギガースの件なんじゃが、色々事情があつての。褒賞についてはもう少し待ってくれんかの？」

「あ、はい」

正式に依頼を受けたわけじゃないし、オレとしては貰っても貰えなくてもどちらでも構わないので、頷く。

それから少しの間、ギルドマスターは書類になにやら書き込んで、一段落ついたのか控えていたマールさんに纏まった書類を渡すと、椅子から立ち上がり。

「今日の用件なんじゃがの。申し訳無いんじゃが、アベル君にわしと一緒に王城まで来て貰いたいんじゃよ」

「……………はい？」

「先日のギガースの件について、お主がやったということとはわしのところで留めたんじゃがの。ならば誰がやったのか。ということになるんじゃが…………… 王がお主がやったんじゃないか？と疑つておるようでの」

「……………はあ」

「お主のことは、前にも言った通り王や重臣の一部には既に伝えてあったからの。あちらもお主の意向を理解して、とりあえず接触する気はなかったようじゃが…… 一目お主に会ってみたいと、先日打診があつての」

「他の人がやつたとは思っていないんですか？」

「他の者が討伐したならば、倒した事実を隠す意味が無いからの。ギガースを倒した者には決して安くは無い報酬と、それなりの名声が手に入る。それをわざわざ放棄する可能性がある者で、倒せる可能性がある者 となると、お主ぐらいしか居らんのじゃよ」

「成る程……」

つまりはオレの迂闊さが齎したことってわけか。やっぱ勢いだけで行動するもんじゃないな！

「じゃがそんな難しく考える必要はあるまいて。あちらもヨーゼフの教訓がある。力ある者を失うのは所属が王国じゃろうと冒険者じゃろうと手痛い損失じゃからの。顔合わせくらいはしておきたい。ということじゃと思うぞ」

わしも一緒に行くしの。とギルドマスターは言う。

自分で撒いた種だし、仕方ないかな。

クルツ爺さんもああ言っていることだし、諦めて承諾することにする。

「分かりました。

オレ礼服とか持ってないんですが、このまま

でいいんですか？」

「うむ。正式な面会じゃないからの。そのままでも構わんじやろう。では、早速で悪いんじやが、裏に馬車を待たせてあるでの」

そう言つて執務室を出るギルドマスターに続き、オレも部屋を出る。本当にそれっぽい服着ていなくていいんだろうか。少し気になりはしたものの、まあギルドマスターがいろいろいうなら構わないだろう。

裏口で待つていた、普段街中で見かけるより立派そうな馬車に二人して乗つて、かっぱらかっぱら王城へと向かうオレ。

馬車の中ではギルドマスターと、グルガの森での生活の話などをして時間を過ごす。

何だかこれからこの国のトップと会うというのに、まるで気負つた様子の無いギルドマスターにつられて少し気持ちが楽になる。

「そう言えばギガースの褒賞についてなんじやがの。金銭でも構わないんじやが　うちの職員、…例えばマイル辺りなんぞでどうじや？」

「　　はあ！？」

思わず素で問い返してしまふ。

「まあ、彼女達はギルドの所有物。というわけでもないから誰でもというわけにはいかんのじやが　ギルドには有望な冒険者との出会いを求めて働いている。という者も少なくない。お主が気に入った者があるならわしが間を取り持つても構わんぞ」

「いやいやいやいや　　えっと。そんなことして大丈夫なんですか？」

「お主ほどの有望株なら嫌がる者も少なからうて。紹介した後はお主次第、ということになるが。これならばこっちとしては金もかからんし、上手くすればお主をこの国に留める重しにもなるからの」

こちらとしては問題無い。とさらっと言っただけのけるギルドマスター。

いや、なんか、もう。あえて言葉にして重しにー、とか言う辺り中々あざといなこの爺さん。

特に冗談で言っている雰囲気でも無いし、多分オレが領いたらガチで話を進められるんだろ。

うわー。女の子囲いたいとは思ってるけれど、こっちは裏の意図が見え見えのエサに引掛かるってのは、なんだかなー。

多分これに領いたらギルドマスターへの借りみたいな扱いになっちゃうし。褒賞の筈なのに！

「　　少し。考えさせて欲しいです」

.....。
こんだだけ見え見えの誘いでも、すっぱり断ることは出来ずに考えてしまうオレだった。

そんなくだりもあつたりしつつ。王城へと到着するオレ達。
王都の中枢に威風堂々と建てられたその中へ、城の騎士に案内され
てギルドマスターと一緒に入っていく。

中はオレがイメージしていた通りの、城！といった感じで、高そう
な絵画や壺がちょこちょこ置いてあり、大体イメージに沿った感じ
の中身だった。

この国を治める者が住むところだし。こういうのは手を抜くわけに
はいかないんだろうな。

王城が特に飾りも何も無い殺風景なところだったら、威厳みたいな
のもガタ落ちだろうし。

こういう普段お目にかかれないのを色々見せることで、来た者にす
げー、と思わせる為に、大体王城ってのはイメージと変わらない感
じのモノになるんだろうな、と思う。

城の構造とかはともかく。

そんなことを思いながらおのぼりさん宜しくまわりをきよるきよる
見ていると、やがて一つの大きな扉の前に辿り着く。

この先に王様が待っているようで。失礼のないようにと軽く注意
される。

それにこっくり頷くと、開かれる扉の中に、ギルドマスターの後に
続いて入って行く。

部屋の中は、所謂謁見の間。というべき場所であり。

最奥の、オレ達が居る場所より何段か高いところに玉座 と、
そこに座る、この国の王であろう壮年の男性の姿。

精悍な。という言葉が相応しい金髪の男性で。英気と威厳に溢れている。

その手前に、まあこの場に居るんだからそれなりに偉いだろう何人かの姿があり。部屋に入った瞬間全員の視線がオレ達に集まる。想像していたよりも少ないな。もっとこう 騎士ずらーって居るもんだと思ってた。護衛の為にとかで。

入る前に失礼の無いように。とは言われたが、礼儀作法とかオレはとんと分らないので、前を歩くギルドマスターに倣うようにして、余計なことを言わないよう黙って小難しい口上を述べるギルドマスターの後ろに控える。

「ロベイロ殿よ、そのように堅苦しく繕わなくてもよい。今日は正式な場というわけではないのだ。楽にしてもらっても構わん」

「は」

「後ろの者もだ。そなたが英雄ヨージェフ殿の息子が」

「はい。アベル・アルベルトと申します」

「ヨージェフ殿のことは、まだ幼い頃のことであつたがわたしも覚えてる。身命を賭してこの王都を守つた彼に対して、申し訳無いことをしてしまったと、父はよく嘆いていたよ」

「は」

「ヨージェフ殿は既に亡くなつてしまつたと聞いたが、そなたは彼からこの国のことについて、何か聞いておるのか？」

「いえ。　　じーさん　　父は冒険者であった頃のことをあまり語らなかつたので。　　オレも父がそのような人物であったことはこの街に来てから知りました」

「そうか。　　ならば今更何を言っても詮無きことであるな」

「……………」

「そなたの話は、ロベイ口殿から聞いておる。　　ヨーゼフ殿の力を継いだというそなたが、わが国の騎士となってくればこれほど心強いことはないが、ヨーゼフ殿の悲劇を繰り返すつもりはない。　　そなたが冒険者として生きていきたいというのであれば、その意思を尊重しよう」

「は。　　ありがとうございます」

「うむ。　　冒険者達とて、この国に尽くしてくれる守り手には変わらないからな。　　ヨーゼフ殿などその最たる例だ。　　わたしは幼い頃、彼と何度か会ったことがあるのだが　　」

謁見は、オレの予想していた以上にあっさりと終わった。

王様はオレが冒険者のままやっていきたい。という意向を尊重してくれるようだし、聞かれると思っていたギガースの件についても触れてくることはなかった。

後の会話の殆どが王様がじーさんと会った時のことや、王様が見たじーさんの武勇伝。そしてオレとじーさんの森での生活についてなど、じーさんの話尽くしだった。

途中オレの持っている、じーさんが使っていた杖を触らせて欲しいと言われたけれど。それだってその杖をどうこう。ということもな
く。何か感慨深げに一頻り杖に触れた後に返してくれた。

他に謁見の間に控えていた人達も、オレと王様の会話に口を挟んだりすることはなく。

まあ色々と胡散臭げだったり興味深げだったりといった多様な視線で見られはしたけれど。逆に言えばその程度であり。

一頻りじーさんの話をし終えた後、オレとギルドマスターは謁見の間を退出することになった。

無駄に気疲れしたぜ……！！

王族とか、前世の記憶を含めても初めて会うから緊張したなー！

「ふはー」

謁見の間から出てすぐ、緊張が解けて思わず息を吐いてしまうオレを、ギルドマスターが可笑しそうに見て笑う。

「ほっほ。緊張したかの？」

「はい。でも、特に大した話はしなかったと思うんですけど、あんなんでもいいんですかね？」

城の出口へと歩きながら会話するオレとギルドマスター。

正直殆ど中身の無い話だったと思うんだけども。

「だから言ったじゃろう。顔合わせじゃと。 今回の謁見は顔を合わせることに意味があったんじゃ。言ってしまうえば他のことはオマケじゃの」

「そんなもんなんですか…」

よくはわからないが、とりあえずギルドマスターの言葉に頷いておく。

まあでも、王族やら重臣っぽい人らがわざわざ時間を割いてまでするくらいのことなんだから、あちらには何か意味のあることだったのだろう。今日の謁見は。

「お主が仕官しないと決めておる以上。今のお主に求められることは殆ど無いからの。実力についても今一未知数じゃし、と」と

「はあ。？」

先の会話についてギルドマスターと話していると、不意に前方を見たギルドマスターが足を止める。

なんだ？ ギルドマスターへと向けていた顔を前方に向けると、そこには人が3人ほど。オレ達の道を阻むように立っていた。

「ほう。こやつが例の英雄ヨーゼフの息子か。 なんじゃ、そこらの冒険者と変わらぬではないか」

「英雄の子が英雄になる。というわけではないでしょう。 それにヨーゼフの息子だったことも、グルガの森に住んでたなんての

も、全て自称らしいですし」

「私は本当だと思いますが……」

3人の真ん中に立つ、金髪の豪華なドレスに身を纏った女が、オレをじろじろ見ながら何か言ってくる。

左右に居る騎士甲冑を身に纏った男と、ローブを身に纏った女が続いて口を開くが
なんだこいつら？

なんか色々初対面なのに無遠慮なことを言われている気がする。
歳は総じて若く、三人ともオレと同じか少し上くらいだろうか。

「これはこれはマルグリット様。 お久しゅうございます」

「おう。 久しいな、ロベイロ爺。 して、隣のやつが父上の言っていたヨーゼフの息子かの？」

「左様でございます。 アベル・アルベルトという者です」

「はじめまして。 アベル・アルベルトと申します」

ギルドマスターが丁寧に対応しているのを見て、一先ずオレも自己紹介しながら頭を下げる。

それをギルドマスターにマルグリット、と呼ばれた真ん中の女性がまたまじまじ、と見て。

「ふむ。 やはりこうして見るだけでは、とても英雄ヨーゼフの息子のようには見えぬのう……」

「えーつと……あの？」

「おおつ。申し遅れたの。私はマルグリット。マルグリット・テイル・アセナル。この国で王女をやっておる」

うっわお姫様かよ。

そう名乗った王女様は、輝くような金髪を腰まで垂らし、さつき謁見の間で出会った王に似た金の瞳は、利発そうな目の輝きをしている。背は160くらいだろうか。

上品な感じはするが、淑やかな感じはしない。色々アクティブそうな女性だ。

「隣に居るのが私の護衛をしているランスロット。ローブを着ているのが友人のフィオリじゃ」

「ランスロット・オリガだ」

「宮廷魔術師を務めております、フィオリ・グリムと申します」

王女様の紹介を受けて、左右の二人が名を名乗る。

ランスロットと名乗った男は、白銀の甲冑を身に纏った金髪碧眼の美丈夫で。180cmくらいはありそうな細身の身体と意思の強そうな顔つきで。胡散臭そうな視線をこちらに向けている。

フィオリと名乗った女性は、王女様と同じくらいの背丈で。3人中では最も大人びて見える。

神秘的な銀の髪に銀の瞳。長い髪を後ろで三つ編みに束ねた温和そうな女性だった。黒のローブに身を纏い、手には先端に黒い魔石と思われる石の付いた杖を持っている。

「はじめまして アベル・アルベルトです。 冒険者をやっ

ます」

二人にも改めて自己紹介をしつつ。

一体何なんだろう。もう今日は帰るだけだと思ってただけに、正直面倒な気持ちになってくる。

「ふむ。アベルよ。お主がヨゼフの息子だというのは本当なのかえ？」

「義理の ですけどね。血は繋がっていませんが、じーさんに育てられました」

「ほう。ならばヨゼフは既に亡くなってしまったと聞か。ヨゼフの従えた地皇狼、グルはどうしておるのじゃ？」

「あいつはグルガの森で、じーさんの墓守をしてると思いますよ」

「なんじゃ。共に来てはおらぬのか？」

「ええ。グルはじーさんの相棒ですし、じーさんの遺言にもグルにはグルの好きにさせてやれ。と書いてあったので」

「成る程のう」

「ほら、姫様。やはりヨゼフの後継者だという証拠なんてどこにも無いんですから。信じるなとは言いませんが、姫様が相手をするほどの者ではありませんって」

「む、むう……」

「あら。ですがアベル殿の持っている杖は、伝え聞く英雄ヨーゼフの持っていた杖。棍のような杖の中心に宝玉が嵌められた、棍杖ではないですか？」

「本当かつ!？」

左右の男女の発言に、落ち込んだり喜んだりやたら忙しそうなる王女様。

王女様に杖を見せて欲しいとせがまれたので、王様にも見せたことだし快く差し出すことにする。

「ほう。これが……」

「面白い杖ですね。普通の杖とは違い、杖の中心に魔石が嵌められている。使われている材質も見たことがありませんし」

「ならばやはり。アベルがヨーゼフの息子という話は本当かどうか」

「姫様！フィオリも！ そんなの、偶然ヨーゼフの杖を手に入れたのかもしれないし。ヨーゼフの杖に似せて作った贋作の可能性もあります。信じるに値する証拠になるとはとても思えません」

オレの杖を興味深そうに見る女性陣二人に、その様子を嗜めるランスロット。

別に疑われんのは構わないんだけど、何かやたらと突っかかってくるな、このにーちゃん。

「確かにランスロットの言うことも一理あるのう……」

「他に何かヨーゼフとの関係を証立てる物は無いんですか？アベル殿」

「その杖以上のもの、となると　特に無いですね。　森じゃじーさんと二人きりでしたし。証人になるような人もいません」

「ほら。やはり姫様が気にかけるような者じゃありませんって。次の用件も控えております。早く行きましょう。姫様」

オレの返答に、あからさまにがつかりたように肩を落とす王女様。ランスロットと呼ばれた男は、オレの返答で完全にオレへの興味を無くしたのか、オレを視界から外して王女様を急かす。

オレとしてはどうしようもないことではあるので、王女様から杖を返して貰うと、口を挟むこともなく黙って成り行きを眺める。

「う、うむ。　そうじゃの。もう少し話を聞いてみたくはあるが…
…次が控えておるのも確かじゃ。　ロベイロ爺、アベル。時間を取らせてすまぬの。　私達はこれで失礼する」

ランスロットの勢いに圧されるように、こくこく頷いてから綺麗にオレ達に挨拶する王女様。

オレとギルドマスターは揃って頭を下げて、三人を見送ることにする。

「それではの。　機会があったらまた会おう」

「失礼する」

「慌しくてすみません。　では、私もこれで」

言葉通りやや慌しく去っていく三人を見送って。姿が見えなくなってからふは。と息を吐く。

「ふむ。 てつきり謁見の時には姿が見えなかったから、会う事は無いかと思っていたが　こんな所で待っておったとはの」

「なんか。 やたらと活発な感じの王女様ですね…」

ギルドマスターが顎に手を添えながら呟き歩き出すのに続いて、オレもギルドマスターの後に続きながら率直な感想を述べる。

「今の王に似て、優秀な方じゃぞ。　愛嬌もある故に、国民からも好かれておるしの」

「へえ……」

改めて王城の外へと歩き出しながら、ギルドマスターからさっきの3人の話を聞く。

先ほど出会った王女様は、この国の第2王女様で、見目麗しい容姿の上に、剣や魔法の才覚にも秀でて、お国柄武を尊ぶ国民達に人気のある王女様らしい。

傍に控えていた二人は、若くして国の近衛騎士と宮廷魔術師に抜擢されたエリート。というやつらしく。3人が小さい頃から親交があったそうでもよく3人でつるんでいるそう。

王国のアイドル的な王女様と、この国の次代を担うであろうルーキーってわけか。

「なんでそんな人らが　　なんか。 わざわざオレのこと待ってた

つばいんですけど」

「マルグリット様は、国を救った英雄ヨーゼフの逸話が大好きじゃからの。わしも何度かヨーゼフのことについて話を聞かれたこともある。ヨーゼフの息子だというお主に興味が沸いたのじゃろうて。他の二人は　まあ、王女様について来たんじゃろうな」

「成る程」

それでやたらとジーさんとの繋がりを聞いてきたんだらうか。

まあ、証拠なんて求められても無いものは無いのでどうしようもない。

王女様と思わぬ遭遇。というアクセシデントはあったものの、その後は何事もなく。再度馬車に乗ってギルドへと戻ってから、ギルドマスターと少し茶アしばいて『遙々亭』へと帰った。

すっかり夜も更けた頃に宿に帰ると、部屋で留守番をしていたカザネとジンに何処へ行ってたのか聞かれ。正直に王城へ行ってたことを話すと、どちらも行かなくてよかった。という表情を浮かべていた。

その気持ちはすごく分かる。　オレも出来るなら行きたくなかった。

特に何かあったわけではないので、今までと変わらないことを二人に告げて。　仲良く3人で夕飯食ってその日は終わった。

カザネには一体何をしに王城へと言ったんだ。と聞かれた。

オレが聞きたい。

その後も特に王国からのアクションは無く。本当にあの面会はただの顔合わせだったのか。と結構驚いていたオレだった。

第16話 スポット参戦？

王都に来てそろそろ一ヶ月が経つ。

街の人々も多少はジンの姿に慣れてきたようで、人当たりの良い商店街のおっちゃんなんかは、ジンを連れ歩いていると肉やら野菜やらをジンにくれたりする。

カザネへの人当たりはやはり厳しいままではあるが、まあこればかりはどうにもならない。

冒険者稼業も順調で、討伐系の依頼を中心にぼちぼちこなしている。流石に個人ランクならA相当のチームランクC。ごりごりお金が貯まっていく。

王国の方からは、謁見の後から特に如何こうというのは今のところ無く。

少し騒がしくなるかな。と気構えをしていたオレとしては、拍子抜けした感がある。

……まあ、王国の方からは。なんて強調しただけあって、他方からはアクションがあったわけだが。

「……………。 ……本当に毎日来るのな。 本職はどうした」

朝。そろそろ『遙々亭』の部屋の更新が切れるので、住み心地も悪くないし、ジンも気に入ってるしということ、部屋の契約をとりあえず三ヶ月ほど更新した後、三人揃って食堂に行くと、ここ1週間ほどですっかり顔馴染になった人物が食堂で待っていた。

「むしろ私が聞きたいです。 一体何時になったら私はこの任務から解放されるんでしょう。 正直、このままずっとほったらかしにされそうで気が気でないんですが」

「オレに言われてもなあ……」

魔術師然とした黒のローブに、先端に魔石の付いたワンド。黄みの強い茶色の髪をショートカットに短く纏めたその女性は、髪と同じ茶色の瞳を物憂げに伏せさせて、食堂の一角でコーヒを啜っていた。

そう説明すると、よくある魔法使い風の姿を思い浮かべがちではあるが、彼女の特徴はむしろそこではなく、頭部に生えた、狐の耳に酷似した狐耳と、ローブに隠されて見えないが、尻から伸びている尻尾の方だろう。

彼女の名前はマリス・アルバと言い、先日会ったフィオリ・グリムと同じ王国の宮廷魔術師 の見習いみたいなものらしい。

人族ではあるが、先祖に狐族の血が入っているらしく、狐族の血が色濃く出た彼女は、人の姿に狐耳、狐の尻尾といった姿をしている。学園都市ディングルの魔法学院を優秀な成績で卒業し、その実績を持ってエリート揃いと言われる宮廷魔術師団へ入り、見習いとしてフィオリに師事している らしいのだけれど。

一週間ほど前、そんな彼女が『遙々亭』へと尋ねてきて、暫くオレ達と行動を共にさせて欲しいと言ってきた。

話を聞くと、フィオリと第二王女様に、オレが本当にヨーゼフ・アルベルトの息子であるか確かめてこい。と言われたらしい。

確かめるってどうやってさ。

そう聞いたら、目尻に涙を浮かべて私だって知りません！と怒られた。

最初は2、3日くらいで適当に判定し終わるかな。と思っていたが。

どうやらガチらしく。ちゃんと証拠を持ってくるまでは、城に戻っても今までマリスがやってきた仕事は全て奪われ、フィオリもこの任務をこなすまでマリスに教えを授けるつもりはないらしい。

悪魔の証明というか。確かめようが無い気がすんだけどなあ、こんなもん。

ギルドマスターに王女様って優秀って聞いてたけど、実は阿呆だったりするんだろうか。

「ぶつちやけ、王女様かグリムさんをお願いして、さっさと任務を解いてもらった方がいい気がするけどな。オレに同行したってじーさんの息子である証拠なんて掴めないぞ?」

血筋的にも義理の息子だから血が繋がってるわけでもなし
まあ、証明する方法が無いわけではないが、そこまでする気にもならない。

「既に言いました。王女様は戻ってきてても構わないようなのですが、フィオリ様には何かしらの考えがあるらしく。城に戻ることは許されませんでした」

「考えなあ……」

何考えてんだかなー。

マーカスが運んでくれた朝食を胃に納めながら、王城で会った魔法使いの姿を思い出す。

人の良さそうな、温和そうな人に見えたが。一癖ある人だったんだらうか。

「というわけで、本日も貴方方に同行させていただきます。」

「まあ、報酬もいらないうてことだし、構わないけどさ」

不満たらたら。といった風な慥然とした表情でそう告げてくるマリ
スに、肩を竦めながら答える。

これが男だったら、何コイツうざってえ。と感じるところだけれど、
幸い彼女は女性であり、容姿も悪くない。寧ろ良い。

目の保養にもなるので、今のところ同行を承諾している。

大体ここまでがここ一週間のオレとマリスの挨拶代わりみたいな会
話。

一週間前から依頼のあるなし関係無しにオレ達についてくる。冒
険者として依頼を受ける際は、依頼を手伝ってもくれており、純粋
に人手が増えるので楽になつてる部分もあるのだけれど。

「ふむ。アベルが構わないというのなら、構わないけどね」

「貴女には聞いていません」

「やれやれ」

最近、髪が伸びてきたのか黒髪をポニーテールにして纏めているこ
とが多くなったカザネが、チームメンバーとしての意見を述べて。
それをマリスがざっくり両断する。

このマリス。カザネとはやたらと仲が悪い。

仲が悪いというよりは、一方的にマリスが鬼族であるカザネを毛嫌
いしている。という感じで、カザネの方は特にこれといった感情は
無いようだけでも。

ちよつとの会話でもご覧の有り様なので、正直このことについては
多少辟易していた。

「最初にも言ったけど、カザネはオレのチームのメンバーなんだから、同行するなら仲良くしてもらわないと困るぞ」

「それは分かっています。分かっていますが、納得していません」

「それじゃ意味無いだろ」

「大体、どうして鬼族などと行動を共にしているのですか！あまつさえ同居までしている。だ、男女の仲であるなどと！英雄の息子として如何かと思えます！」

「そんなこと言われてもなあ…… カザネはオレのモンだしな」

「ふふ。そうだな。一生アベルから離れられなくされてしまったな」

「なんて、不潔　！」

主に金銭的な意味でのオレ達の関係を表す会話を聞いて、顔を真っ赤にしながらこちらを睨んでくるマリス。
あえて誤解されるように言ったオレ達もオレ達だが、マリスも大概ピュアだよなあ。

まあ、一概に誤解ってわけでも無いんだけど。

「ともあれ。そんなわけだから、一緒に居てギスギスされんのも面倒だからお互い上手くやってくれよな。上手くやれなくても同行する以上は上手くやってるフリをしてくれ。一応そっちは仕事で来てんだし、ここは譲歩してもらおうぞ」

「……ッ。 ……分かりました」

「分かった」

「よし」

とりあえず肯定の返事を返してくる二人に満足して、朝食を再開する。

ジンがそんなオレ達の様子を、くっだらなそうに顔を洗いながら眺めているのが視界の端に見える。

「今日の予定だけでも。とりあえず今日もギルドに向かって、適当な依頼を見繕って仕事をこなそうと思っただけど、どうよ」

「問題無い」

「了解です」

「がっ」

そんな感じで、今日も一日が始まる。

魔法というのは。凄まじく乱暴に、かつおざなりに言っしまえば、人が持つ魔力という酒を世界に吞ませ、口八丁手八丁で世界を騙す

作業である。

つまりは、体内の魔力を世界と繋げることにより　　ああ、やっぱり面倒臭いな。

じーさんとマリスに教わったことをオレなりに解釈すると。

人が持つている魔力を、上手に世界に吞ませて酔っ払わせ、へべれけになつてる世界をうまく騙し、世界に思った通りに動いてもらう技術である。

だからして。酒の量が少なかったり、度数が低いと世界はあまり酔っ払わないから上手く騙し辛いし。魔法の具体的なイメージ　口先が上手くないと、世界は酔っ払っても思った通りに動いてはくれないわけだ。

更には、世界に動いてもらう技法だからして、相手に直接　例えば、相手の体内の血液や水分を操作して如何こう。ということは出来ない。

だから魔物や人を魔法で倒す時は、酔っ払った世界に火の玉などを生み出してもらい、現象として動いてもらって世界に相手をぶん殴ってもらう、などといった方法がメインとなる。

ちなみに上記の例でいうならば、魔石は酒の詰まった瓶であり、魔法道具は美味しそうな酒に、「このようなことをしていただいたらこの酒を呑むことができますよ」と書いてある、値札付きの酒みたいなもんだ。

魔力という酒の量や、質などは生まれ持った才能に依るところが大きいだけけど。その酒を吞ませる方法や、酔わせた後に騙す方法は人様々である。

が、過去から連綿と続く経験則的に、上手な酒の吞ませ方。上手な騙し方。というのがある事が発見されており、勤勉な人はそれらの体系を纏めて、より上手に世界を騙そうとする。

魔法を人に教えるということは、つまりそういう騙し方の方法を教えることであり。魔力の量については今のところ才能に頼る以外はどうにもならないらしい。

そんな魔法ではあるけれど。世知辛いことに、魔法を使う際に大事なのは、学ぶことの可能な世界の騙し方。ではなく。

先天的なものに左右される魔力　　酒の方であり。

ぶつちやけ騙し方がへたくそだとしても、がぶがぶ世界に無理矢理酒を吞ませて酔っ払わせてしまえば、魔力が少ない人が上手に騙すよかよつぽど強力な魔法を発動させることが出来るのだ。単純な力としては、だけれども。

で。　　何でオレが急にこんなことを言い出したか。　　という

「やっぱじーさんやオレは規格外なんだろうなあ……」

「今も魔法学院で勤勉に学んでいる者達に謝っていただきたい程度には。　　そうですね、やっつてられません」

本日の依頼はグラスホッパーと呼ばれる、巨大なバツタの群れの討伐であり。

犬猫のサイズ程度の黒いバツタの群れが、大量発生してミズドの森の木々を食い荒らしているのです、その殲滅がお仕事だったのだけれども。

蝗の群れみたいに数の多かったそれらに対して、ジンやカザネ達接近戦タイプでは相性が悪いので、二人にはオレとマリスの護衛に専

念して貰い、二人で魔法を使って殲滅することになったわけなのだけれども

「この差を見るとな。魔法に疎い私でもよく分かる。アベルの桁外れっぷりというものがね」

そう言つてカザネが肩を竦める。カザネは魔法は使わないようだし、今までは実感が薄かったのか。オレとマリスの遺した結果の差を見て、フードの下の口元が苦笑を浮かべてた。

「それでも私は、宮廷魔術師団でも魔力量だけならば、有数のモノを持つていると言われていたのですが…」

そう言つてマリスが、自分が殲滅したバツタの群れを見遣る。

そこには、炎を束ねて火炎放射器のように浴びせ、焼け焦げて所々炭化したグラスホッパーどもが散乱している。

自分で言うだけあつて、ワンドによるブーストがあつたとはいえ、その炎の勢いは凄まじく。木々を齧り食い荒らしていたバツタ達を飲み込んだ炎は、容易く奴らを焼き尽くしていた。

「まあ、結果は変わらないんだし。そう気にするほどでも無いんじゃないかねえかなあ」

一方、オレの方は、というと。

いつもの凄いビーム 魔力砲を広めに拡散させて放ったわけだけれども。

その魔力砲を放った後には、バツタどもの影も形も無かった。全部消し飛ばしてしまつたわけだ。

何の気無しに放つた魔力砲に込められた魔力にマリスが顔を引くつ

かせ。

カザネがオレと他の魔法使いの差というものを実感して、呆れたように腰に手を宛て。

ジンが何時も通りの光景に身体を丸めて欠伸をしている。といった現状なわけだ。

「この力を告げれば、その王女様方もアベルのことをヨーゼフの息子だと納得するんじゃないか？」

「お？ ならいいんじゃないか？ これだ」

「いえ。これでは、ただの強力な魔法使いというだけであって、英雄ヨーゼフの息子。ということの証左とはなりません。既に強力な魔法使いであることは報告してありますし」

カザネがぼん、と手を叩いて呟いて。それならそれでいいんじゃないね？とマリスに尋ねてみるとふる、と首を振って否定される。

「どうやら既に報告済みらしい。本当に、どうやって証明しろって言うんだらうな」。

「実はマリスってグリムさんに嫌われてて、左遷代わりにこんな仕事押し付けられたんじゃないかね？」

「がっ」

「ああ、成る程な」

「そ、そんなことはありませんっ！ フィオリ様は私にとっても良くしてくれていますっ！」

思わず言ってしまったオレの発言に、ジンとカザネが納得したように頷く。だよなー。そう思うよなー。

マリスは狐耳をぴんと立て、憤ったように否定するが　　オレはお前が一瞬でもったのを確かに聞いたぞ。少し涙目だし。

「まあ、マリスが例えこのまま放ったらかしにされて、宮廷魔術師クビになったとしても、そんな時はうちのチームに入れてやるから安心しろって」

「…そしてゆくゆくは私もその鬼族のように貴方の女に　　とでも?」

「よくわかったな」

「ここ数日のあなたの言動を見ていれば大体分かります」

いやまあ、まだそこまで具体的には考えて無かったけれども。そんな分かりやすい生活してたかなあ……。

「まあ、してたな」

してたらしい。

表情に出ていたらしいオレの疑問に、カザネが答えてくれる。

「ま、まあ、可愛い子とはとりあえず仲良くなっておこつ。と考えるのは普通だろ、ふつー。依頼も終わったし、とりあえず帰ろうぜ」

マリスの半目が心に痛かったので、一先ず話題をずらしてジンの元

へと向かう。

「全く。他の女性に目が移るのは良いが、私のことも構うのを忘れないでくれよ?」

「既に充分構ってると思うんだけど」

「だから忘れないで　　と言ったんだ」

ジンの上に跨ったオレの後ろにカザネが乗り、オレの腰に手を廻して抱きついてくる。いつもより少し力が強い。

夜ん時はもう無理だ!とか言ってくるから多少自重してんのに。よくわからん。

「さも私があなたの女になるのが確定したように言わないで下さい。第一クビになどなりません」

マリスもジンの上に跨り、オレの前に乗る。カザネと密着するのは嫌だそう、女性二人に挟まれるこんな形になっていた。

ジンは別に重いとか感じてるわけじゃなさそうだけれど、そろそろ多少窮屈になってきたな。ジン以外の移動の手段とか考えた方がいいかもしれん。

「マリスは嫌かい?」

「嫌だとかそういう問題では無いでしょう。会って一週間も経たない男性に対して、そのようなことを考えるわけがありません」

「なら、これから仲良くなっていけばいいわけだな」

よしよし。ならば問題無い。

「今のところ、ただの軽い男としか見えませんが…」

「決して悪くない相手だとは思っぞ？　今はまだ無名だが、これからどんどん有名になっていくだろうしな」

「だからと言って　！」

オレを挟んで喋り続ける二人の会話を耳に入れつつ。ジンに声をかけて出発することにする。

特に思いを寄せてる相手とかはいないようだし。少しずつこれから仲良くなっていけば、色々と機会もあることだろう。

そんなこんなでうだうだやりながら王都へと戻り。ギルドへ依頼の報告をして報酬を貰う。

今回の報酬は金貨1枚となった。

ある程度以上の魔法で一掃でもしない限り厄介な相手であった為か、かなり割が良い。

一先ず本日の予定も終わった為、マリスとはギルドの前でまた明日とお別れすることになる。

オレ達も後は帰るだけであったのだが、カザネは念の為武器を鍛冶屋に見て貰いに行くそう。

オレも付いていこうか。と聞くとこれくらい一人で大丈夫だ。と笑われた為にジンと二人で『遙々亭』に先に帰ることにする。

最近一人で街を歩くことなどほとんど無かったので何だか感慨深い気持ちになってしまう。ジンは別として。

「まだ夕飯には時間あるしなあ 何か買っていく？」

時刻は夕暮れ時。空が赤くなってきて、もう少ししたら日が沈むのだろうけれど、夕食にはまだちょっと早い。真っ直ぐ帰ってもすることがあるわけでも無いし、ジンと一緒に少し寄り道して帰ることにする。

「……………」

尻尾をゆらゆら揺らして歩くジンの姿を横目に見ながら、露店などを冷やかしく歩く。

魔力を流すと冷たくなる石や、魔力で文字が書けるペン型魔道具（ただし魔力が尽きると文字が消える）などといった、この世界独自のアイテムを見て楽しみ。ジンが興味を示した焼き鳥っぽい串刺し肉を買ってやつたりする。

ちなみに魔力で文字が書けるペンは買った。なんか面白くて思わず。銀貨10枚だった。

「さつてと。そろそろ帰る んん？」

買い物もし終わって、さて帰るか と考えたところで、視界の中になにやら見覚えのある人の姿が目映る。

どうやらあちらもこちら というよりも、オレの隣のジンを見ていたようで、オレが見たことに気付いて互いの視線が交差する。

「ん、んん？」

「……？ あら、もしかして何時ぞやの少年じゃないかしら？」

どっかで見たよなあー と記憶を頭の中から掘り起こしていたら、
どうやらあちらの方が先に気付いたようで、目を丸くして声をかけてくる。

「 ……？ あ。 ああ」

思い出した思い出した。

こっちに来てから少なくとも出来事があったために、すっかり忘れていた。

まさか再び会うとは思っていなかったが、一応同じ都市に住んでいる者同士、会うこともそりゃああるだろう。

あれからもう一ヶ月ほどになるだろうか。

オレは、何時ぞや花街でお世話になった、ダークエルフのお姉さん
とばったり、街中で再会した。

第16話 スポット参戦？（後書き）

毎度本作品を読んでいただきありがとうございます。

ストックが自転車操業になってまいりました。

投稿を開始して一週間ともなりましたので、そろそろスタートダッシュも終えてゆったりとした更新速度に移行しようと思います。

今後は大体週一を目安に、ストックが溜まって来ましたら時折一気に解放したり。といった感じでいこうと思います。

今後とも拙作をよろしく願います。

第17話 交渉

艶かしい褐色の肌に赤い瞳。ウエーブがかかった黒味が強い銀の髪に、長く先端が尖った耳に、女性らしい豊かな身体付き。

何が、とは言わないが、オレが今まで見た中で一番大きいんじゃないだろうか。

「奇遇ねえ。まさかこんなところで少年と再会することになるとはね」

「そうですね。オレも正直また会うとは思いませんでしたよ」

「お互い王都に住んでれば、有り得ないことじゃないんでしょうけどね。隣の虎ちゃんは、少年の連れかしら？」

「はい。ジンと言って、オレの相棒みたいなもんですね」

「がっ」

「よろしくね、虎ちゃん。成る程ねえ。少年が最近噂の、巨大な賢獣連れの冒険者だったのね」

「噂？」

「そうよ。今んとこ王都に虎ちゃんくらい大きな賢獣は居ないからね。そんな賢獣を連れ歩いている冒険者も含め、街じゃちよつとした話題になってるわよ」

「そういうことですか。確かにこっちに来てからジンくらい大き

な賢獣は見てないですし、話題に上がるのも不思議じゃないですね」

「そういうこと。にしても君、あれ以来私のトコに来てくれなかったけど。私はお気に召さなかったのかしら？」

「いや。そういうわけでは……。 ちょっと、あれから色々どタバタしてまして」

「そうよねえ。 あれだけ好き放題しておいて満足出来なかったとか。流石にそれは無いわよね」

「いやあ、まあ。 あはは……」

後ろ首に手を宛てて、色々誤魔化すように笑うオレ。

眼の前の買い物袋をぶら提げているお姉さんは、王都に来た当初、持て余したりビドーを発散させようと花街に行った時にお世話になった女性であり。 彼女の話によるとダークエルフ、という種族であるという。

ダークエルフの特徴としては。エルフ同様、長く、先端が尖った風な耳と、総じて褐色の肌をしていることが挙げられる。

エルフもそうだけれど、全体的に魔法の素養が高く、身体能力も鬼族や獣人ほどではないが、平均的に人間よりも高い。 が、エルフよりは下位の種族と見られているらしい。 何でか知らんけど。

んで。オレは花街に行った時、外れを引くのは嫌だったので、適当に質の高そうな、高級っぽい娼館に行った時に彼女と出会ったのだけれど。

その女性らしい体付きと、艶っぽい褐色の肌にすっかり参ってしまい、それこそ翌日カザネにくさい、と言われてしまうほど彼女の匂いをオレの身体に混ぜ込んでしまったのだ。

あの時は理性というものが殆ど働かなかったもので、今こうして改めて会ってしまうと気恥ずかしさを覚えてしまう。とりあえず往來のど真ん中で話していると、間違い無くジンが邪魔なので、揃って通りの端の方に寄ることにする。

「来れなかったのはまあいいわ。でも、別に気に入らなかつたっていうわけじゃないのなら、またお店に来てよね、少年。あれだけ元気だと、放っておくと色々大変でしょ？」

「あー、いや。それがですね」

「ん？なに？ あ、もしかして他のトコでお気にの子でも出来た？ それとも彼女？」

「どつちかつつーと後者なのかなあ。そんな感じの仲の相手に、花街行くくらいなら自分で発散しろ！みたいなことを言われてるんで」

「うわあ やるわねえ、その子。私でも少年の相手を付きっ切りするのは、ちょっと辛いかなー。って思っわよ」

「やっぱりそうなんですか」

プロのご意見に、やっぱり無理させてんじゃないかという気がしてきて、少し罪悪感を覚える。

「まあ少年が毎回あれだけ元気なら、だけどね。 で、大丈夫なの？その子」

「一応、最近はなるだけ自制するようにはしてるんですけどね。 見

た感じ普段の生活に支障は無さそうなんですけど　　早めに奴隷
なり愛人なりを見繕え、とは言われました」

今更だけどこれ、日が暮れてるとはいえ天下の往来です話じゃね
えな。

「あら？　花街行くのはダメなのに、奴隷や愛人はOKなの？」

「らしいです。　オレも他人のより自分の、の方が良いんでそこは
構わないんですが」

色々気楽だし、独占欲的なものも満たされるしな。

「ふーん、成る程ねえ…」

そう言つて、じろじろとオレの全身を見てくるお姉さん。

上から下まで余すところなく。杖やバッグ、ジンの姿もまじまじと、
オレ達をチェックでもするかのように見てくる。

「　　あの？」

「ちよつと失礼」

オレの疑問の声を無視する形で、服の上からお姉さんがオレの身体
に触れてくる。

とはいえ、別にやらしい意味ではなく。純粹にオレの体付きを確か
めているように、腕やら腿やら腰やらの筋肉を掴んだり叩いたり。
といった感じで。

一頻り触れると、お姉さんは何かに満足したように、うん。と頷い
た。

「今のは？」

「え？　ああ、うん。　ほら、私って商売柄冒険者の人と接する機会が多いじゃない？　だから優秀な冒険者かどうか、大体の体付きで分かるんだけど　　うん。少年は良い冒険者ね。お姉さんが太鼓判を押してあげます」

「はあ」

「それにその棒。　最初は武器にでも使うのかしら？　と思っただけ
れど、真ん中のそれを見る限り。杖よね、それ」

び。とオレが持っている杖を指差して指摘する。

おお。当たってる当たってる。　こくこく頷いて肯定する。

「ふふーん。やっぱりね。　体付きは戦士のそれなのに、そんな杖を持つているってことは、少年は魔法も使えるってことですよ？
どっちが専門なのかは分からないけれど、それを少年がスタイルとして確立しているっていうことは、少年が魔法も格闘も使いこなす、
高い実力を持った冒険者だっていうことよ！」

バーン！とでも音が鳴りそうな様子で、自信ありげな笑顔でオレを指差してくる女性。

すげえ。確かに合ってる。

「ちょっと見ただけで良く分かりますね。　確かにオレはどっちも使います」

「でしょー。伊達に少年より長く生きてるわけじゃないわよ。　…

…で、ね？少年。ものは相談なんだけど」

「はい？」

「今のところ奴隷や愛人のアテが無いなら、私を買ってみない？」

その言葉には複雑な意味など無く。それはそのままの意味であり。

言葉通りそのまま、オレにそういったものを買う予定があるのなら、自分はどうかだろう。ということらしかった。

「冒険者としての見込みは充分そうだしね。今は無名みただけで、名前が売れてきてからじゃ寧ろ遅いでしょうし」

現在、立ち話もアレだったので近くの公園のベンチに座ってお姉さんと話している。

適当に喫茶店にでも入ろうかと思ったけど、ジンも連れて入れるとは思えなかったので、公園にした。

つまりは先物買いの感覚で、売り付けに来るものがない今の内に自分を買ってもらおう。っていうことか。

お姉さん　　ナーディアと名乗った彼女の話によると、彼女は元奴隷であり。娼館に買われて娼婦として生きてきたが。見目麗しく、また娼婦としては珍しいダークエルフであった為にそれなりに人気生まれ、自分が買われた代金はとうに自分で払い終えているらしい。

既に自由の身である彼女だが、幼少の頃から娼婦となる為生きてきた彼女は他の生き方を知らず。今も娼婦として食い扶持を稼いでいるのだけれど、娼婦という職業は決して寿命の長い職業ではないので、目ぼしい相手がいたならば己を買ってもらおう、と考えていたらしい。

「で、その目ぼしい相手がオレ、と」

「そういうこと。話してる感じ、少年は娼婦だからとかそういうの気にしない人でしょ？ここでこうして会った縁を考えても、これが私の最大のチャンスな気がするのよね」

確かにオレは結構な雑食だと思う。

相手の職業とか出自とか、処女であるかとか過去の諸々は割りとうでもいい。今後オレだけのもんになるのであれば。

ので、眼の前のお姉さんがオレのもんになってくれるというのは、オレにとっても悪くない話だ。

内面的なものは分からないけれど、外見的なものは概ね超オレの好みだし。

口に手を宛てて、ちよつと真剣にナーディアさんの提案を考えるオレ。

……とはいえ。

「正直悪くないかな。とは思いますが。流石にここで即決できる話じゃないですね。現状オレも宿暮らしの根無し草ですから、色々準備も足りませんし」

女性を養うにしても宿暮らしではなんとも。だしな。

「そりゃそうよね。ん。それなら　とりあえず女性としての私を買う。っていうのは、どうかしら？」

「女性として？」

「そう。　愛人のお試し期間みたいなものかしらね。とりあえず今のままの生活を続けるけれど、私はママ　うちのお店の店主のことなんだけど。ママに事情を話して貴方専属って扱いにしてみらうわ。　：まあ、その分、貴方には毎月それなりのお金を私に使ってもらわないといけないけど」

私生活できないし。とナーディアさんは言う。

「ふむ」

手付みたいな感じが。

「で、貴方が私のことを気に入ってくれて、あなたの準備も整ったなら、その時は私のことを正式にもらってもらう。　気に入らなかつたのならこの契約は解消してくれていい」

「なんか、大分オレに都合がいいですね」

「必ず気に入らせてみせるって自信あるしね。　これならお相手さんも納得するんじゃないかと思うのだけれど、どうかしら」

気に入らせるて。

なんか女性のこわい部分を垣間見ている気がする。さらりと、というか思いつきり肉食系女子だなあ。

ここで頷いたら、試しても色々と確定する気はする。　するけど

も。
分かってるけども。

「そこまで言うてくれるなら、まあ、試すだけなら」

ここまでの美人さんにここまで評価されて、この提案を断るなんざ男として間違っている。とオレは思うんだ。

「……………ということがあったんだ」

ナーディアさんと別れて『遙々亭』の自分の部屋に戻り、既に戻っていたカザネに先ほどの出来事を話す。

ナーディアさんはオレの返答ににんまりと笑みを零すと、具体的な金額とか諸々、細かいところを話すために後日また会う約束をして、その場は別れた。

でまあ、カザネにこのことを話さないのは、なんていうか不義理だよな。と思ったオレは正直にカザネに事の顛末を説明したのだった。

「……………確かに奴隷なり愛人なり困うといい。とは言ったが。何と
いうか…少し目を離れた隙に……………」

オレの話聞いたカザネが何とも言い難い。といった風に口元をむすむすさせる。

カザネは部屋のソファで、先端が尖った串のような鉄の棒を持って

弄っていた。何それ？と聞いたら、投擲用に使うらしい。今日の朝までは持っていなかったように思うので、ついでに買ってきたんだらうか。

「……やっぱり嫌だつたりする？」

カザネってこういうのも使うのか。興味深そうにテーブルに並べてある鉄の串を見つつ、聞いてみる。

何だかんだ言っても情を交わす相手が公然と他の異性を囲うというか浮気というか、前世的な感覚からしてもいい気はしないんじゃないかなあ、とは思うんだ。

「いや。そうだったことは……まあ、多少はある。とは思いますが。いずれそうなるだらうとは感じていたし、覚悟はしていたからな。そこまではない」

「何というかすみません。じゃあ、他に何かあったり？」

「あー。その女性は……つまり、アベルにあの日沢山匂いを纏わせていた、あの時の女性なのだらう？ もうあの匂いを感じることは無いだらうと思うっていたからね。少し複雑な心境だ」

「ふうん？」

ナーディアさんとかういった契約をしたことについては、とりあえず反対ではないらしい。

でもカザネって、オレが決定したことに対して殆ど反対しないから、内に色々溜め込みそうで多少心配ではあるけれど。

まあ、色々気にかけるようにするしかないか。今の所。

絶対オレ他の女にも手え出しちゃうだらうし。

「まあ、アベルも最近私のことを気遣って色々抑えてるようだったし、女を囲うのはいいさ。が、だ。」

あれ、バレてんの？ 普段と変わらない風につけてたのに。

見透かした風にカザネは薄く笑うと、握り具合を確かめていた鉄串をテーブルに置いて、隣に座っていたオレにしなだれかかってくる。

「昼にも言ったが。ちゃんと私のことを構うのも、忘れないでくれよ？」

耳朵を唇で挟まれながら、鼓膜に直接浸透させるように囁くカザネに、思わずドキドキして背筋が震えてしまう。

「忘れるわけ、ないだろ！」

夕食を食べる時間が。いつもよか遅れることになった。

そんなこんなで、後日。 専属娼婦？みたいな感じになるナーディアさんと、毎月払う金額やらなんやら、細かい話を決めた後に、ナーディアさんが勤める娼館のママさんという人と多少雑談。

ママさんは豪快な感じの、こう、ふくよかな、下の子とかに慕われそうなおばさんだったけども。 オレを見るとナーディアさんと

同じように身体をじろじろ見られたり触られたりした後、ナーディアさんと似たにんまりとした笑顔で、うちの子を頼むよ。と言われた。

親譲り。とでも言っただろうか。

ナーディアさんとの逢瀬の場所は、娼館の部屋を使って良いそうで、オレの借りてる部屋では色々と気まずいものがあるので正直助かる。

んで、そっから数日後。

やたらと充実した夜の生活が始まるのだった。

基本的には今までと同じ生活だけでも、3、4日に一度ほどの割合でナーディアさんに逢いに行く。

流石プロというか、様々な手練手管に加えて、オレが依頼で少し疲れている時などは純粹にマッサージをしてくれたり、ご飯を作ってくれたり。もうこれでもか。というくらいに甲斐甲斐しく奉仕してくれる。

このマッサージやご飯というのが、またやたらと上手く、そして美味で。オレの何気ない仕草から、求めているものを読み取って、その日その日のサービスを变えてくれるのだ。

この人を家に迎えたら、さぞや快適な生活を過ごせるんだろうなあ、と。自然と思ひ知らされてしまう。

「なんかやたらと美味しいですね、これ。味付けも丁寧だし。

料理人とかでも行けるんじゃないですか？」

「ふっふー。そうでしょそうでしょ。うちのママがね、男をモノ

にするには上と下の袋を膚にしなくちゃいけない。って、小さい頃から教えられてきたのよね」

「へえー」

「他にも編物や洗濯から、簡単な護身術まで。家庭に必要なことは人並み以上にできるわよ。旦那様の留守はお任せあれ　ってね」

「ここはあれですか。花嫁養成所とかそんなのなんですか」

「そんなわけじゃないけどね。お店の子達も、ただ毎日働かされてるだけじゃ嫌になってきちゃうからね。チャンスがあれば良い男にもらってもらえる。そういう風に考えて一生懸命働くように、ママの方針で色々教えられるのよ」

「成る程」

「いやいや働いてるんじゃない、店の質も落ちてきちゃうもんな。希望を与えることが、店の為にもなる。ちゃんと考えてんだなあ。」

「だから　ね？」

「ナーディアさんが、オレの口元の食べ残しを啄ばみながら、片腕を豊かな胸で挟み込み、しなだれかかってくる。」

「私、貴方の留守を守れる、いい女になれると思うなあ」

「……………」

……………。

なんという、したたかさー！

そんな生活を続けていると、カザネも何だか対抗心を燃やしたのか。最近マーカスに厨房を借りて料理とか作ってくれようになっってきた。

なんだか鬼ヶ島の料理というのは、前世の日本の風習に似ているのか。魚の煮付けとか、ほうれん草のおひたしみたいなのとか。やたらと懐かしい味付けのものが多い。

「米や味噌があれば、もう少し色々な料理を作れるのだがな」

「米あんの！？ 鬼ヶ島って！」

思わず前世のオレが表面に出てしまっ一幕もあった。

それ以外にもやたらと積極的になってきて、出来るだけ自分で搾り取ろう。という思惑が所々見え隠れする。

前世では夢のまた夢だった、理想の生活がオレの前に築かれようとしていた。

が。

世の中全てが上手く転ぶ筈もなく。

今のチームランクC程度の稼ぎでは、生活するには問題無いが、お金も貯まっではいけないという状況になってきた。

このままでは、今後ナーディアさんを貰い受けるにしても、そのお金が稼げ無さそうなので。

やや性急ではあると思ったが、オレはギルドにランクBへのランクアップの申請をしに行くことになるのだった。

第18話 昇格したい

「ランクアップ ですか？」

「はい。 ……流石に早い、ですかね？」

「そうですね。 殆どの冒険者の方が、チームランクをCからBに上げる際は、少なくとも一年以上かけるのが普通です。 更には、冒険者となってからたったの一ヶ月ほどでBランクへというのは…」

「…」

異例を通り越して異常であるらしい。

チームランクBともなれば、単独でやるならばSランク相当。 幾ら人数無制限のチームで受けるとはいえ、報酬に見合う人数、リスク、実力などを考え、顧みると。 ランクCに比べてチームランクBというのは、ぐっと狭い門になるらしい。

ギルドとしても、やっとこ力を付けて色々な仕事を任せられるようになった冒険者を、ほいほい昇級試験を受けさせて失うのは手痛い損失である為、Bランク以上のランクに関しては慎重な姿勢を取っているとのこと。

ゆーても、オレもオレの目的の為に、正直温ゲー感のある現状のランクでちまちま稼いでなんかいられないので、何とかありませんかねー？と交渉してみたところ。

マールさんはしばらく黙考した後、ギルドマスターに伺ってみます。との返答を返してくれたのだった。

「まあ、マールが迷うのもわかる気がするよ。私は」

「かねえ。　けども現実問題、行ってちよろつと暴れて帰って、みたいなピクニック感覚になってるじゃん。最近。　カザネだってたまにお弁当とか作ってくれるし」

「アベルの言う通りでもあるのが、またなんともね。　私とて油断するつもりはないが、その気になればアベルが杖振って終わりともなると、流石に多少は危機感が薄れてしまっさ」

「だよなあ。　加えて、最近じゃマリスもいるしな」

まあ、マリスはいつまで居るか分からんメンバーだったのが、多少面倒なところではあるのだけれど。　それにしたってオレとジン、そしてカザネの三人でも、現状のチームは楽勝過ぎる。

一段階で難易度が有り得ないほど上がるなんてことはないだろうし、なるべく仕事への緊張感が薄れない内に、それなりに歯応えのある段階へと進みたいところだけれども。

「　まあ、私達の意志ばかりでどうにかなる話でもない。　ギルドの判断を待つしかないだろう」

「だな」

急いで稼がねばならないわけでもない。　一生涯がれない、とかそんなわけでもないの。　別にどっちでもいいや。　くらいの気持ちで返答を待つことにするのだった。

数日後。

いつも通りオレとジンとカザネ。更にマリスを連れてギルドに向かうと、マールさんにより別室に案内された。先日のランクアップの件で話があるらしい。

「例の件ですが。条件付きで許可。とのことですよ」

「条件付き？」

「はい。アベル様方には、実力の確認の為、こちらで指定した依頼を受けていただきます。まあ、これは通常のランクアップの方式と変わらないのですが」

「ですね」

「その上で、依頼の際にこちらで指定した冒険者の方との共同の依頼。とさせていただきます。一緒に行動していただくのはBランク以上のチームの冒険者で、有り体に言ってしまうえばアベル様達の試験官。ということになります」

「試験官？一緒に依頼をこなすわけじゃなく？」

「いえ。任務は一緒にこなしていただきます。が、通常の依頼を達成すればランクアップ。というだけでなく。一緒に行動した冒険者の方々がアベル様達がBランクの冒険者として問題無い。

と判断した時に限り、Bランクへランクアップ。とさせていただきます」

「成る程な。アベルは実力はあるが、経験的なものはまだ一ヶ月やそこらだしな」

「この場合、私はどうなるんでしょうか。別に彼らのチームの一員というわけではないのですが、出来るだけ彼らと行動を共にしなくてはならないのですが」

「休みでいんじゃない？ その日くらいは」

「だな。チームの実力を計る以上、チームではない者が手助けするのは良くないだろう」

「む。まあ、そうですね。四六時中見張れと言われてるわけでもないですし。一日くらいならば」

「ちなみに受けてもらう依頼についてですが。期間は最長で2週間ほどのものとなる予定です」

「フィオリさまに聞いてみます」

「頑張れ」

宮仕えって大変そうだなあ。

「他人事だと思って……そもそも、さっさと貴方がヨーゼフの息子であるならないなりの証明をすれば終わる任務なのですから、いい加減はつきりしてください」

「だからオレはじーさんの息子だって言ってるんじゃないか」

「……証拠は」

「今まで見せたのが全てだな」

「それでは姫様方が納得してくれません。それに最近では、ケイロンさんと日タイチャつくだけでは飽きたらず。夜な夜ないかがわしいお店に足を伸ばしているとも聞きます。それが英雄の息子のすることですか」

「だったら、じーさんの息子じゃなさそうだって伝えればいいんじゃないかね？」

「そう伝えても、納得してくれないから、未だに同行してるんじゃないですか　！」

「宮仕えって大変だなあ」

「そうだな」

「がっ」

オレだったらやってらんなくて辞めてるかもしれん。

「原因達が無関係無いような顔しないで下さい。せめて英雄の息子っぽいのか、っぽくないのかだけでもハッキリしてくださいよ。なんですか、昼はばったばったと魔物を倒して、夜は遊び呆けてるって。どっちなのかハッキリしてくださいよ」

「冒険者ってそういうもんだろ」

多分。

もう、なんか最近、マールさんの前で取り繕うのは諦めたよ。

「ケイロンさんもケイロンさんで、そんなアベルさんのことを嗜め
もしないで！甘やかし過ぎです！ ジン殿なんか普段はそこらの猫
と変わらないだらけっぶりじゃないですか！ 賢獣ってもっとなん
か、違うでしょう!？」

「締めるところは締めてるんだから、いいんじゃないか？ そ
れに甘やかしてるんじゃない。甘えてるんだ」

カザネはオレが英雄の息子だとかどうとかは気にならないようで。
腕を組みながらにやにや笑ってる。

ジンなんかは完全にスルーして、後ろ足で耳の裏あたりをかいてた。
猫扱いされてるけどいいのをお前。

「貴方は ……」

びびびっ、と狐耳と尻尾を逆立てて、歯噛みしながら憤りを露わに
するマリス。

そんなオレたちの様子を黙って少し生暖かい視線で見っていたマール
さんが、頃合と見たのか。眼鏡をくい、とさせて口を開く。

「……………。 ……説明を続けさせていただきます。 ……今回、アベル
様達に受けていただくのは、主に、ではありませんが。魔物領への潜
入となります」

「はい？」

……なんか、一気に依頼の難易度がってね？

アセナル王国に限らず、この大陸にある国というのは、日々、大陸中央にある、魔物領からの魔物の侵攻の危機に瀕している。大陸の中央に近付くにつれ、その魔物の数も、質も上がっていく為、人々の居住地は自然と中心にある魔物領を囲むようにして形成されている。というのは以前話したことがあると思う。

が。人というのは欲深い。というか逞しいというか。そんな生き物で。

日々魔物領からの侵攻に怯える生活をよしとせず。またそれに備える為の費用というのも馬鹿にならないので。

国家百年の大計として、多くの国々が魔物領への領土拡大。最終的には、魔物領からの魔物の大量発生の原因究明を課題としているらしい。

国土を増やすには、魔物領から切り取るのが一番簡単だしな。

国民の理解も得易いし、共通の敵として他国と協調もとりやすい。

んで、アセナル王国もその例に漏れず、日々国境付近で魔物との攻防戦を繰り返すつも、チャンスがあれば中央へと一歩近付こうと、着々と進軍の為の準備を進めているらしい。

幸いにして、じーさんが英雄となった40年前の大規模侵攻から今

まで、魔物領から大きな被害は受けておらず。少しづつ国力も高まっている為に、肥沃そうな、かつ防衛に適していそうな土地のあたりをつけて、そちらへいずれ来る、進軍の為に補給物資などをちまちま置いていくらしい。

今回オレ達が受けた依頼は、そんな国からの依頼で、あたりをつけた土地に、進軍した時にすぐに砦の設営ができるよう、軽い整地をしたり、補給物資を魔物たちに見つからないよう、こっそり置いてくることだそう。

まあ、ちょっと魔物領に行つて、ちよちよいつと木を切り倒したり、穴掘つてタイムカプセル宜しく補給物資置いてきたりするだけの、簡単なお仕事です。

とは、マールさんは言っていないが、そんな感じの依頼らしい。

で、まあ、仕事の内容はそんなだけでも。魔物領に潜入するというだけでも、普通の依頼とは難易度が段違いな上、補給物資というお荷物すら護衛していかないといけないわけ。ギガースクラスの魔物などそうは出ないし、大概の魔物はチームランクC程度もあれば十分だとは思われるが、安全面を考慮して、Bランクチーム以上の冒険者を2チーム組んで、やってもらふことにしたらしい。

…で、オレの実力計るに丁度いい依頼なので、今回オレにこの依頼が来た、と。

オレとしては、これ受けないとさくつとBランクに上がれやしないので、特に何かあるわけでもなく、依頼を受けることに。

それなりの時間拘束される上に、リスクも中々の依頼だけあって、報酬はかなり美味しい。

前金で金貨5枚。成功したら更に金貨10枚がそれぞれのチームに支払われるらしい。

依頼が依頼だけに、何らかのアクシデントで失敗したとしても、前金の金貨5枚は保証されるらしく。

別に失敗する気は無いが、結構気楽にやれそうでありがたい。

やっぱり稼げるなあ、チームのBランク。いつぞやのゴブリン退治の約十倍じゃねえか。前金だけで。

運ぶ物資やらの準備もあるので、出発は一週間後。

食料もギルド というより、依頼主の国側が負担してくれるらしいが、念の為携帯食料の備えもしておいて下さい等等。

マールさんからちよこちよこ細かい説明を受けて、その日は終了。同行する冒険者については、まだ決まっていないうので、顔合わせは当日になるそうだ。

最長二週間ほどかかるということで、行き先が魔物領でもあることから、一応この日から依頼当日までは、依頼の準備期間に充てることにする。

カザネは剣を研ぎに出したり、以前見た投擲用の鉄串を買い込んだり鎧の総点検したり。

マリスは上司のグリムさんに報告、連絡、相談してくるこのことでオレ達と別行動。

オレとジンは、依頼中の快適な食生活の為に、バッグに調味料やら日持ちのする食料やらを買い込んだり。

ナーディアさんのところにも、しばらく顔を出せないことを報告に行ったりした。

心配させんのもアレだし、行けない間の分も、彼女のキープ料払っておかなければだし。

「 というわけで。 最長2週間以上、何かアクシデントがあったらそれ以上かかるかもしれないんで。 連絡やら行けない間の手付金やら払いにきました」

「 はあー……、有望だとは思っちゃいたけど、もうBランク？ それも個人じゃなくて、虎ちゃん入れても三人のチームで」

「 まあ、はい」

「 Bランクチームって言ったらアレでしょ？ 王国で言ったら、“灰燼獵犬”ガウルン率いるアームドドッグスに、“爆心地”や“慧眼”擁するバリエッタ は最近Aランクになったんだっけ。 とにかく、そんな街の人々でも名前を知ってる冒険者ってことよ？」

「 なんですかそれ」

二つ名とか、厨二病全開じゃねえか。

「 活躍し過ぎて自然と名前を覚えちゃったり、あだ名付けちゃうくらい有名人ってこと。 Bランクって言ったら、そういうレベルよ？ いわば一流ってやつよね」

「 よかったんじゃないですか。 ナーディアさんの見る目が当たってて」

「 そうなんだけどねえ。 流石にここまでトントン拍子で進んでくとは思ってなくて。 驚いちゃったわよ」

「確かに。普通はなんかもうちょい時間かけるらしいですね。Bランクに上がるのって」

「あら。やっぱりそうなの？　　ってことは何？　少年は普通じゃない方法で上がるうとしてるってこと？」

「そういうわけでも無いんですが…、ただまあ、今のままじゃ色々埒があかないんで、ランク上げられないか尋ねてみただけです」

「　冒険者ギルドも、条件付とはいえ、それを受け入れるくらいには、少年の実力を評価してるってわけね。　　うわー、本当に超有望株ね、少年！」

そう言ってオレに抱きついてくるナーディアさん。
胸の感触がとてもよいです。はい。
きらっきら顔を輝かせて喜びを露わにしていた彼女だが、不意に眉根を顰めると、真面目な顔をしてこちらを見上げてきた。

「　でも少年、無理だけはしちゃだめよ？　たった一度の失敗が生死に関わるような稼業なんだから。冒険者っていうのは。　　軽ーく、楽々達成できるくらいに難易度が丁度いいのよ。　　ちょっとでも危ないな。　　って思ったら、無理せずランクアップなんて諦めちゃいなさい。　　いい？」

「心配してくれるんですか？」

「？　　当たり前じゃない」

なんか、意外だ。

もつとこう、私の為にちゃきちゃき稼いでね！くらいのスタンスかと思っただけども。

「まあ、大丈夫だと思います。魔物領といってもそんな深い場所でもないですし、魔物と戦う依頼っつてわけでもないですしね」

「それでも、よ。寝てても安全な建物や、怪我しても治してくれるお医者さんもないんだから。慎重になりすぎるくらい慎重にして、無事に帰ってくることに。おねーさんとの約束よ。いいわね？」

正直、どっちもグルガの森で住んでた時から無かったものだから気にならないけどなあ、あんまり。

じーさんと暮らしてた家も、昼夜構わず時々魔物が力チ込んできたし。

医者なんていないから、怪我したら薬草自分で探して調べて自然治癒に任せるしかなかったしな。

まあ、昼はともかく、夜はグルヤジンが、オレやじーさんが気付く前に力チこんできた魔物倒してくれてたから、あんま気にせず寝れたってのもあるけれど。

それは魔物領行ってもジンが一緒だから条件は同じだしな。

でも、心配してくれるのはありがたいことなので、素直にナーディアさんの言葉には頷いておく。

「わかりました。なるべく気をつけるようにします。怪我して稼げなくなったりしちゃ元も子もないですし」

「そうそう。安定して稼ぐのが一番いいんだから。ちゃんと

約束守って無事に帰ってきたら、その時はたっぷりサービスして労
ってあげるんだから」

「よっしゃ！ 頑張ります」

モチベーションが更に上がってきたぜ！

気分よく心配されたりイチャヤネチャしたりして、しばらく会えない
ナーディアさんとの夜を満喫したオレ。

そんな感じで、一週間があつという間に過ぎていき

魔物領へと出発する、当日の朝。

オレとジンとカザネは、集合場所である、北門の外に集まっていた。

オレはいつも通りのフード付きの外套に、じーさんの杖とバッグ。

ジンは『遙々亭』店主、マーカスの娘さんのいつもより丁寧なブラ
ツシングによる、ふわっふわの毛皮。

カザネもいつもの赤色の軽鎧に、目深に被ったフード付きの外套。

そして背中に背負った大剣と、丈夫そうなウエストポーチに鉄串
を入れて。といった装い。

結局、この一週間の内にマリスから連絡は来ず。 どうなったのか
はわからないが、この場に居ないということは今回は同行しないの
だろう。

チームのメンバーってわけじゃないんだし、同行できなくて当然、
くらいに捉えてはいたので、それについては特に気にしていない。

集合場所で待っていると、北門の方から幌馬車が二両と、馬車に続
くようにして武装した人らが出てきた。その中に混じってマール
さんの姿も見えるので、あれがオレたちと同行するという、冒険者
の人達だろう。

更に彼らに遅れて二名ほど、門の中から出てくる姿が見えるけども、
あれ？

…ん、んんん？

「
なあ」

「
ああ。アベルも気付いたということは、見間違いでは
なさそうだな」

「マリスって来ないと思ってたんだけど、連絡あった？」

「私は聞いてないな。ジンはどうなんだ？」

「
がっ」

ジンも知らんらしい。

「それに、マリスの隣を歩いている者。彼の着ている鎧は、この
国の騎士団のモノだと思っただが 何故騎士団の者がここに？」

「
やっぱり？ あっちも見間違いじゃないのか… 来てる理
由は知らんけど、ランスロット・オリガっていうらしいぜ。あの人」

なんで王女様付きの近衛騎士がこんなところに来てんだよ。

「知ってるのかい？」

「ああほら、前王城に一人で行った時あったじゃん？ あの时会った。マルグリット王女の近衛らしいよ。ここに来た理由は知らね」

なんか。ろくでもないことになりそうな気しかしねえなあ。

ひしひしと嫌な予感を感じながら、彼らが近付いてくるのを待つ才
レ達だった。

第19話 顔合わせ

そうこう話してる内に彼らが近付いてきて、マールさんがオレ達と彼らの間に立って頭を下げる。

オレ達、マールさん、様々な武装をした6人程の集団、そしてマリスとランスロットの二人組が円を組んで顔をつき合わせる。

「おはようございます。皆様方。私を除いたこの場にいる方々が今回の依頼に参加される方々となります」

ぺこ、と軽く頭を下げておくオレら。

「初対面の方がほとんどだと思われまますので、私の方から簡単に説明させていただきます。まず、こちらが今回の依頼がBランクへの昇級試験となる、アベル・アルベルト様、カザネ・ケイロン様と賢獣のジン殿のチームです」

「よろしく願います」

マールさんの紹介を受けて、再び頭を下げるオレら。

「続きまして、こちらがAランクチーム、バリエッタの方々です」

そういつて6人の集団を手で示し、それぞれの紹介をしてくれるマールさん。

およ？Aランク？ Bランクの人らじゃなくて？

しかもバリエッタってアレだよな。 ナーディアさんが言った、

二つ名持ちの人らがいるチーム。

不思議そうな顔をしているオレの様子に気付いたのか、全員の紹介

をし終えたところでマールさんが説明してくれる。

「本来ならば、Bランクのチームにお願いする予定だったのですが、此処数日、魔物領の魔物の動きが活発になっていると国境の方から報告があり、念の為、Aランクチームのバリエッタの方々に依頼することにしました」

「　　っつーことだ。　　テメエらは気にせず依頼をこなすことだけ考えてる」

マールさんに続いて、ガタイの良い、逆立った金髪に無精ひげの、どこかヤンキーっぽいおっさんが言う。

先程のマールさんの説明によると、彼の名前はゲオルグ・ハックマン。

背中に自分の身長ほどの大槌を背負った彼が、“爆心地”の二つ名持ちの、冒険者であるらしい。

荒くれ者。って感じの見た目に反さず、口調も荒くれ者。といった感じだった。中身はまだ分からん。

他の面子は、“慧眼”の二つ名持ちであるらしい、魔法使い然とした装いのエルフの青年、ケイムスって人と、腰に剣を刷いた戦士風の狼族の男性、猫族の軽装の女性、弓を背に背負った人族の女性、人族の背に短弓、腰に双剣を装備した男性、といった感じの多民族パーティだ。

二つ名持ちで、バリエッタの中核を担うゲオルグとケイムスの二人以外の人については、後に控えている人々が気になり過ぎてよく覚えていない。

あとでカザネにこっそり教えてもらおうと思う。名前とか。

んで、最後に、オレがマールさん達が此処に到着してからずっと気

になっていた、マリスとランスロットの二人組を手で示し。

「最後に。 こちらのお二人は、今回の依頼主の、アセナル王国の騎士団員のランスロット・オリガ様と、王国の宮廷魔術師のマリス・アルバ様。 お二人は今回、ここ最近活動が活発になってきた魔物領の魔物の動静と、国境を防衛している騎士団の対応状況を直に探る為、丁度魔物領に向かわれる皆さんのパーティに同行することになりました。

とはいえ、依頼に追加して皆さんに何かして欲しいというわけではありませんので、「ご安心ください」

行き先が一緒だから、都合が良いので同道するだけだとか。別に追加クエストが発生するわけではない。

……。

魔物領の動静の調査 なあ。

……。

うっさんくせええええええ!!

そんな調査の為に第二王女の近衛騎士で、王国の次代を担うであろうエース候補を使うとか有り得ないだろ!

しかも王国側で調査用の兵団編成するわけでもなく、オレ達冒険者の依頼に人員を捻じ込む形での調査とか!

お供も、図ったようにマリスだけだしなあ…。

隠す気も無さそうな不自然さに、あからさまに胡散臭そうな目線でマリスを見ていたら。

つい、とマリスがこちらから視線を逸らす。 狐耳も追求を避ける

為か、ぺたんと伏せられ周囲からの音をシャットアウトしていた。

ちくしょう。話になんねえな、あいつじゃ。

しょうがないので、片手を拳げながら、マールさんに直接聞くことにする。

「えーと……本気で？」

こういう風にしか尋ねられない気持ちを察して欲しい。

バリエッタの面々は既に話を通っているのか、特にこれといった反応は見られない。

「ギルドマスターも了承済みですので」

簡潔に眼鏡をくいつ、とさせてそう答えるマールさん。

ギルドと王国の間でどんな交渉が行われたのか知らんけど、ギルドマスターが了承したってことは、オレが今更何を言ったところで無駄だろうなあ。

一応、飛び込み参加の理由を無理があるとは言え、建前で取り繕ってるあたり、表立って無茶苦茶なことを強いられたりすることはないだろうし。うん。

急なこととはいえ、クライアントからの追加注文としては大したことない部類だわな、

表面的に見れば戦力増すメリットがあるし、デメリットといえば、依頼の放棄がし難くなるくらいか。

依頼放棄する気なんてないし。 なら、後はオレがランスロットと上手くやればいいだけかなあ。

そんなところまで考えて、マールさんに頷くオレ。

「了解しました」

「ご理解いただけただようで何よりです。では、説明を続けさせていただきます。」

カザネもジンも、オレの決定に従ってくれるのか、口を挟んだりするということもなく。

他に質問する人がいないのを見て、次の説明に進むマールさん。

そうして、馬車の積荷の説明を受けたりするオレら。

宅配便のトラックほどの大きさの幌馬車の中には、二台とも、その中身の半分以上を木箱や皮袋やらが埋め尽くしていて、中身は保存食や、魔法薬、簡単な医療機器等だそう。

魔法薬などは、衝撃にはそれなりの備えをして梱包してあるが、それでも充分とは言えないので気をつけること。とのこと。

馬車を牽く馬も、元はソロウブという馬型の魔物を、品種改良したもので。

普通の馬よりも大柄で馬力もあり、タフな馬ではあるけれど。それでも積荷の量もかなりの物なので、全力で走らせてもそこまでの速度は出ないらしい。

要するに、積荷を拠点に運ぶまでの間は、魔物に襲われても逃げ切ることは難しいと思われるので、馬車に攻撃くらわれないように迎撃しろよ。ということだ。

また、オレ達の為の食料やら寝具やらもあるけれど、最低限のものらしいので、バッグの中に色々突っ込んでおいてよかったと思う。

他にも、幾つか細かい説明を受けてから、マールさんを除いた全員で話し合った結果。

二台の馬車を一方をバリエッタが。もう一方をオレ達とランスロッ

ト、マリスの二組に別れて使用することにして、出発することになる。

つつーか、面子的にこれ以外の選択肢なんて無かったので、話し合いと言えるほどの時間をかけるまでもなく、即決まった。

道中の役割分担などもこの場で簡潔に決めてしまい、全員がとりあえずの納得をした辺りで、マールさんに見送られて出発。

オレの冒険者として、初めての討伐系以外のクエストとなる、Bランクへの昇級を賭けた運搬クエストが始まるのだった。

意外といつかなんというか。

ランスロット・オリガは、オレが勝手に抱いていた偏見は外れて、仕事には真面目にあたる人物のようだった。

依頼主側の人間だからといって、道中の役割分担にて楽をしようなどとはせず。馬車の御者役や不寝番についても、オレ達と同等、というよりもマリスやカザネら女性陣の分まで幾らか肩代わりすると自ら言い出し。

オレもそんなことを言われては、見栄を張らざるをえず。オレ達の馬車の御者役は、主にオレとランスロットが担当することに。

とは言っても、オレは今まで馬車の御者なんてやったことが無かったので。最初はカザネに教えてもらいながらになったのだけれど。ジンやグルの上に乗っていた経験はあるけれど。こいつらは勝手にオレの意思汲み取ってくれたり、口頭で伝えれば勝手に動いてくれたから、ちよっと新鮮だった。御者。

移動中も、馬車の中でバリエッタ達を除いたオレ達身内組。とい
うかなんというか。

今回ランスロットとマリスが同道する原因となったであろうメンバ
ーのみとなっても、別段何か言ってくることもなく。必要最低限の
会話をするに留まった。

オレとしては、彼らが同道する本当の理由を聞いておきたくもあつ
ただけれど、なんとなく聞き辛い雰囲気となって聞けず。

特に何も言わないわりには、ふと気がつくとおレの方を監視するよ
うに見ているランスロット・オリガに、ちびちびと神経を削られて
いる気分になりながら、初日の日を過ぎすことになるのだった。

そして二日目の昼。

初日の夜の不寝番をこなすことになったオレは、ジンの上に覆い被
さるようにながらまどろんでいた。

明け方から先ほどまで馬車の中で眠っていたとはいえ、馬車はやた
らガタガタ揺れてやたらと寝辛かった。

カザネに膝枕してもらつことによつて、寝苦しさは幾らか緩和され
たけれど。それでも野宿と比べても馬車の中での睡眠は、安眠には
程遠いものがある。

今もこうしてジンの上に乗りながらだらけさせてもらつていた。

ちなみに今の馬車の御者はランスロットで、オレのだらけきつてい
る姿をガン見しているが。別に何か問題があるわけではないと思う
ので、無視することにしていた。

現在オレ達は、丁度王都と、魔物領との国境の中間辺りに位置する、
ミズドの森を越えた辺り。

今のところ魔物とは遭遇しておらず。順調に行けば今日中には国

境まで辿り着き、国境の要塞で夜を過ごして、明日には魔物領へと突入する予定だ。

ジンの柔らかい毛並みに顔を突っ込んで、うとうとと目を細めている。そんなオレとジンに接近してくる人物がいた。

バリエッタのメンバーで、動き易さ特化といった感じに獣皮を基調とした軽装の、猫族の女性。

確か名前はミアさん　と呼ばれてた。

マーカスらと同程度の小柄な体躯で、てってつ、と擬音がしそうな具合にこちらに駆け寄ってくる姿がなんとも愛らしい。

流石に寝そべったまま相對するのは失礼だと思ったので、上半身を起こすと、近付いて来たミアさんがジンに歩調を合わせながら口を開く。

今までの経験から大体何故近付いてきたのかはわかるけども。

「眠そうニヤところ失礼するニヤが　そちらのジン殿って、もしかして…」

「はい。　恐らくそちらの予想通りだと」

猫族の人には隠しても意味無いっぽいしな。

ちなみに、現在オレとジンは二組の馬車からある程度距離を取って、先行するように歩いている。

獣の本能かどうか知らんけど、ジンが近くに居ると、生物としての格の違いがわかるのか。馬が怯えるように萎縮するのだ。

近くにジンがいると真っ直ぐ歩かせようとしても勝手にジンから距離を取ろうとするので、ジンは馬車から距離を取って歩いてもらうことにしていた。

「ニヤ！ やっぱりニヤ!？」

そして『遙々亭』のマーカスやマーカスの娘さんと同じく、にゃーにゃー会話しだすジンとミーアさん。

なんか猫族の人とはやたら縁があるな。 いや、ジンがいるから縁が合いやすくなってるのか？

「あんまりこいつのことは吹聴する気はないので。 出来ればミーアさんもそのようにお願いします」

「ニヤ? ……ジン殿も同意見のようだし、わかったニヤ」

こくこく頷くミーアさん。

とはいえ、バリエッタのメンバーにはバレるんだろうなあ。

まあ、言い触らす気もないけど必死に隠す気があるわけでもなし。ジンの正体をこそこそ隠して生活するなんざ嫌だし、言うだけ言うておくに留めるオレ。

しばらく興奮したようにジンと会話していたミーアさんだが、落ちて着いてくるにつれてオレとも幾らか会話を交わした。

ミーアさんはバリエッタの、スカウト的な役割を務めている人で、索敵や偵察のスペシャリストであるらしい。

環境を利用した畏の知識なども深く。基本力技で障害は薙ぎ倒してきたオレとしては色々とためになる話も多い。

「ミーアさんは、バリエッタに所属して長いんですか？」

「そうだニヤ。 というか、ウチは結成して以来ずっと同じメンバ

「だニヤ」

バリエツタは全員が元々同じ街の出身らしく。年齢差はあれど、幼い頃から仲のよかった六人が一旗あげてやるうぜ。と組んだチームであるらしい。

リーダーであり、前衛の要である人族の、“爆心地”ゲオルグ。副リーダーで、チームの参謀役であるエルフの魔法使い、“慧眼”のケイムス。

狼族と人族のハーフで、重戦士タイプのゲオルグと対を成す、機動型前衛のドルトムント。

猫族であり、スカウト技能のスペシャリストであるミア。

魔力を矢に変えることの出来る、弓の魔道具を持つ名手、人族の口ーザ。

そしてメンバーの全てに長所では劣るが、全員の代役を務めることの出来る万能型戦士のクラウス。

この六名で、今まで欠けることもなく、増員することもなくやってきたらしい。

同じ街出身の割に、やたらとバランスがいいな。と思って素直に言ってみたところ。

「それぞれがそうあるように努力してきたからニヤ」

と、どこか誇らしげに笑いながら答えてくれた。

ローザさんやクラウスさんなんかは、元々ローザさんは機動力重視の軽戦士で、クラウスさんは魔法使い志望だったらしい。

それをチームのバランスを考えて宗旨変えし、今のスタイルに変更したらしく。

流石はAランクまで登りつめるチーム。それぞれの实力は元より、協調性も素晴らしいもんがあるなあ。

嬉しそうに仲間のことを語るミアさんに、多少羨ましさを感じたオレだった。

途中、魔物と幾つかエンカウントしたものの、オレ達の障害となるほどのこともなく、それぞれ見敵必殺して、暗くなってきた頃には国境を防御する要塞が見えてきた。

魔物領との国境は、なんとというか、万里の長城を想像してもらおうが一番近い形だろうか。

ずらーっと、要塞から横に伸びるように10mほどの高さの壁が続いており、壁を追っていくと遠めにまた砦みたいなのが見える。

途中から一緒にジンに乗って会話していたミアさんの話によるとオレたちが辿り着いた要塞、ティグルス要塞を中心に、一定間隔で魔物領と隣接する国境に砦や要塞が建設されており、その間をあの万里の長城みたいな壁で繋いでいるらしい。

とはいえ、それなりに大きな国であるアセナル王国は、その分魔物領と面している部分も多く。

以前対峙したギガスなどは、この程度の壁など簡単にぶち壊して入ってくる為、あくまで壁には気休め程度の、低級の魔物の侵入を阻む効果くらいしか無いらしい。

力のある魔物が来る度に、そいつとニアミスした壁がぶつ壊される為、補修が間に合わず。箇所によっては破壊されたまま放置してあるし、壁が築かれてない場所もあるとか。

それでも壁の効果は充分らしいけれど。

壁が無い頃と今では、国内の魔物の被害が段違いらしいですよ。

とは、夕飯の時に話したケイムさんの談。

ティグルス要塞の内部に入れてもらったオレ達は、要塞に詰めている騎士に依頼書を見せて、その日の夕飯とオレ達みたいな者の為の寝所を提供してもらった。

本職の騎士であるランスロットがいたこともあり、話は滞りなく進み。質素ではあるがちゃんとした料理と、安心して眠れる寝床を確保。

ちなみに男女別々で、一部屋ずつだった。いや、当たり前っちゃ当たり前だけ。

が。部屋を案内されたところで、ちょっとした問題が発生。部屋を用意してもらえたのは良いけれど、ジン並の大きさの獣が入るにはその部屋は手狭で、一緒に寝るには厳しいものがある。

一応、早馬や、馬車を牽いてきた馬などの為の馬小屋的な施設は幾つか空きがあるので、そちらはどうか、と紹介され。

ジンもオレもそれを了解し、ジンはそちらへ。オレもそちらへ。

いやだって。男同士雑魚寝するよかは、馬小屋だろうとジンと一緒が良いし。

ジンの世話しなけりゃならないので。と適当に理由つけて、ジンと一緒に小屋に向かい、藁葺きの部屋で寝ようとして。

そんなところに。　ランスロット・オリガがやってきた。

「　本当にここで寝るつもりだったのか」

尋ねてきた彼は、流石に寝る時間ともなれば彼の象徴でもある、騎士鎧も脱いでいて。　鎧姿の印象しか無かったオレは最初、彼がランスロット・オリガだと気付かなかった。
布の服とズボンを着た彼を確認し、ジンの横っ腹を枕にして寝転がっていたオレは、しょぼしょぼする眼を擦りながら起き上がる。

「どうしたんですかこんな時間に。　何か問題でも…？」

「いや。　お前が本当にここで寝ているかの確認をしに来ただけだ」

「……。　オリガさんは、王女様の指示で？」

「だったら確認したら黙って部屋に戻れよ。　と思ったが。　丁度いいのでこの度の彼の同行について尋ねてみる。」

「そうだ。　元はフィオリの提案ではあるがな」

「王女様の近衛なのに、こんなところまで来て良かったんですか？」

「……。　近衛はオレだけではないからな。　それに　」

「……？」

「本来ならば、正体を隠してマルグリット様とフィオリも来ようとしていた」

「うわあ……」

それをランスロットとマリスの二人にまで、何とか押し留めたらしい。

興味の為に魔物領まで行こうとするとか、王女様って暇なんだろうか。それともマルグリット王女が飛び抜けてアクティブなのか。思わず閉口するオレを、じい、と見詰めてランスロットは口を開く。

「二人が諦める代わりに。今回の依頼の期間で、必ずお前の正体をハッキリさせてくると約束したのだ。お前には絶対に化けの皮を剥いでもらうぞ」

「王女様は、何故そんなにじいさん…ヨージェフのことに拘るんですか？」

「…あの方は、英雄ヨージェフの逸話を聞いて育ってきたからな。

昔から、ヨージェフのようになって国を護るのだ。と言い続けていた」

「はあ」

「その為に剣や魔法の鍛錬を続けていたある日。英雄ヨージェフの全てを受け継いだ。等というお前が現れたのだ。興味を持たぬ訳が無い」

真偽はともかくとしてな。とランスロットは言う。

「とは言われても　マリスにも言ってますけど、オレにはそれを証明する手立てなんて無いですよ？」

「知っている。　戦闘も魔法でしか戦えないようだしな」

あ。やっぱり魔法専門だと思われてんだ。
チームバランス的に、魔法使いとしてしか戦ってなかったしなあ。

「じゃあどうするんですか？」

「どうもしないさ」

「はい？」

「今のままで、お前が英雄ヨーゼフの息子でないと言うには充分だ。
ヨーゼフの持っていた杖に酷似した杖を持ち、魔法もそこそこ使えるようだが。　逸話になっている、幾千の魔物の群れを薙ぎ払ったと言われる魔杖剣も、Sクラスの魔物すら殴り倒したと言われる術格闘も行う気配が無い」

「はあ」

「魔物領に入ってから、それらを行うのであればそれもまた構わない。
い。　お前がヨーゼフの後継者である可能性が高い。とお伝えするだけだ」

オレ次第。というわけか。

っーか。

「そんなんでいいんですか？ ……もつとこつ、直接オレの実力を見る。とか言われると思ってました」

「騎士の剣は、そのような理由で軽々しく振るわれるものではない。オレ自身は偽物だと思っっているが、お前の真偽についてはどうでもいいからな。マルグリット様が納得するのであれば」

「でも、その王女様が納得するかどうかの方が問題じゃないんですか？ 既にマリスが同じような報告をしてるでしょうし」

「 ……実際、」

オレの疑問に、夜空を見上げて考え込むようにしてから、ぽつりと呟くランスロット。

「 ……？」

「お前がヨーゼフの息子であるということの証明なぞ、お前にはしようが無いし、我々には判別出来ない。というのはわかっているのだ。オレもフィオリも。 ……そしてマルグリット様も」

「は？」

「ヨーゼフが既に亡くなっており、グルガの森に住んでいたというのであれば、グルガの森にお前を連れて行けば、その生家を案内して貰うことによってはつきりするかもしれない。」

が、王国としては、王がお前をヨーゼフの息子として、非公式ではあるが一応認めており、冒険者として生きるお前にちよっかいを出さないことを宣言している」

そういえばそれっぽいこと言われたな。 オレの意見尊重するとか
なんか。

「マルグリット様と云えど、王の決定に反することは許されない。
ましてや、自身の興味の為だけに、帰らずの森とまで言われるゲ
ルガの森に人を遣るなどもつての外だ。 マリスをお前の所に遣っ
ていることすらギリギリだろう」

「……言われてみれば」

むしろギリギリアウトじゃね？

「要は、マルグリット様の気持ちの問題なのだ。 マリスの報告だ
けでは、気持ちの整理がつかない。 出来れば自分で真贋を見極めた
いが、オレは彼女の近衛として、そんなことをさせるわけにはいか
ない」

「……………」

「幸い、オレは彼女に判断を委ねられる程度には、信頼されている。
故に、今回オレが同行することにしたのだ」

「……成る程」

「よって、オレは今回の期間、できる限りお前を監視して、それを
全て報告した上でオレの判断をマルグリット様に告げるつもりだ。
それで一応は納得してくれるだろう」

「……ことは、今回が最終判断になるのか。 王女様のな。
そして昼のだらけきった姿も王女様に報告されるのか。 いや、い

いけどぞ。

……うん？となると？

「…ということは、マリスもこれが終わったら本来の宮廷魔術師の仕事に戻るんですか？」

「そういうことになるな。　まだマリスには話してはいないが」

そっか。　少し名残惜しいな。

結局大して仲も進展してないし。

首を捻りながらマリスのことを思い出していると、ランスロットが視線を空からオレに戻す。

「というわけだ。　これを聞いてどうするかは、お前の好きにすればいい。　オレは見たままを報告し、判断するだけだ」

好きにしろ、って言われてもなあ。　。
正直オレとしても迷うところではある。　美人だし王女様だし、いとこ見せたい気持ちはあるが。
そのいいとこつてのが、ジーさんの後継者である証明をすること。　つてのは違うだろ。　なんか。

考え込むオレを他所に。　ではな。　と告げてランスロットは去っていく。

オレはジンへと後ろ向きに倒れ込みながら、一緒に話を聞いていたであろう、賢い獣へと話し掛ける。

「いや。どうすっかな本当に。　なあ、ジン」

ジンは、寝そべり眼を瞑ったまま。何も語ることはなかった。

第20話 魔物領へ

翌朝。

ランスロットの話に多少考え込まされたオレではあるけれど、結局、結論が出ることもなく気付いたら寝入っていた。

朝起きてからも考えてはいたのだけれど、朝食を食べ終える頃には考えるのを止めた。

考えてる内に面倒臭くなってきたのが第一だけど、じーさんの息子だと、意識して取り繕うのも、取り繕わないのも、何か違うかね？と感じたという理由も、それなりに大きい。

いつも通り動いて、判断はあちらに任せようと決めたオレ。

じーさんの息子がどうかなんてのは、頑張って人に認めてもらうものではない。と思うし。

…一応、これから向かうのは危険が一杯の魔物領だということもあって、余計な考えをしている場合じゃないと思ったというのは、後から思いついた後付の理由。

ともあれ。朝食も済ませ、それぞれしっかり武装した面々が、魔物領へと繋がる門の前へと集まる。

魔物領という場所は、例えAランクのチームであってもそれなりに緊張を強いられるのか。ランスロットやマリスは元より、バリエッタの面々も昨日より断然引き締まった表情をしている。

オレとジンは、程度が全く想像付かないので普段通り。カザネは実は魔物領に行くのは初めてらしく。期待と緊張の入り混じった表情をしていた。

そういや準備期間中から、表立って表情には出さなかったけど、どこかワクワクしてたもんなあ、カザネ。

一人で旅していたんじゃ、絶対行けない場所だから。とか。

割と恐怖の象徴として例えられることの多い魔物領に、そんな心持ちで行けるカザネに冒険者の鑑のような姿を見た気がしたオレ。

そのカザネについてだけねど。道中、始終カザネもフード被ったままではいられずに、鬼族の証である角をバリエッタの面々に見られることもあったのだが。

特に他のメンバーと争いが起こった様子も無かった。あくまでオレの見える範囲では、だけねど。

オレ以外の面々とも、会話とかもちゃんとしているようだし。和気藹々って雰囲気では、けしてないけれど。詰られたり無視されたりといった、刺々しい雰囲気があるわけでもなく。

流石にAランクにまで上り詰めるチームとなると、公私の分別はちゃんとするのかなんだろうか。

一時のパーティだし。表面上だろうとそうでなからうと上手くやってくれるならそれでいいや。と思うことにしたオレ。

そんなこんなで、要塞ではランスロットとの会話以外はこれといった出来事もなく。

見送りに来てくれた要塞の兵士達に礼を言ってから、開かれた門から魔物領へと踏み込むオレら。

さてさて。グルガの森と比べてどの程度のものか。確かめてみるとするかな。

と、意気込んで要塞を後にしたのだけれど。

要塞を出て即、魔物の群れがあらわれた！ などということはないな
った。

むしろ、要塞を出た時点で見える限りでは、あたりに魔物の姿は無
く。

魔物領に入った瞬間、魔物とのエンカウント率が激増することを覚
悟していたオレとしては、ちょっと拍子抜けした気分になる。

馬車の御者席で、そんな気持ちを素直に口に出すと。

「要塞の兵達が掃除してくれたらしいな」

馬車の中で控えていたランスロットの声が返ってくる。

「掃除？」

「ええ。我々が魔物領に向かうのは、事前に要塞には伝えてあり
ましたから。我々が到着するのに合わせて普段より入念に魔物の
掃討を行ってくれていたらしいです」

昨夜要塞の方々から聞きました。とマリス。

そっぴや一応建前としては、国境の防衛部隊の、対応状況の調査だ
かなんだかつてのもあったんだっけ。この二人。

「ちゃんと要塞の人から話聞いたりしてたのな」

「失礼な。仕事はきちんとやるに決まってるじゃないですか。と
と

もあれ。最近魔物領が活性化しているというのは、本当のようですよ」

「らしいな。要塞の司令部も確実に攻め寄せてくる魔物が増えていく。と言っていた」

どうやら魔物領の魔物の動きが活発になっているのは本当らしい。オレの隣で、大剣を抱き抱えるようにして座っていたカザネが、目を細めて遠く前方を見据えて。

「なら、平和なのは今だけだろうな。やはり気を引き締めていくとするか」

「だな」

ティグルス要塞の周囲一帯は、広大な平地となっており、見晴らしはいい。

ちゃんと気をつけていれば、奇襲を受けることはまず無いだろう。

オレ達が目指す目標地点は、ティグルス要塞から北西に、大陸の中心部へと地図上では僅かではあるが近付き、順調に馬車で進んで一日ほどの地点にある、丘のような小さな山らしい。

平地はこの感じからして大丈夫だろうけれど、問題は山の麓の森林部に入ったあたりからだろうな。と地図の図面を思い出しながら、馬車を進ませた。

実は平地も全然大丈夫じゃなかった。

後方にティグルス要塞の姿が見えなくなってきた辺りから、それは始まった。

ジンに乗り、進行方向の偵察に出ていたミアさんから報告によると。

進行予定のルートを含め、前方の地域一帯に魔物の群れを発見。

群れはじわじわと、魔物がいないゾーン。つまりオレたちの居るアセナル王国方面へと侵食しており、規模から考えても群れとの接触は避けられないそうで。

バリエッタの面々と話し合った結果。ジンとミアさんにこのまま偵察を続けてもらい、できるだけ魔物の数が少ないルートを選別しつつ。魔物の群れをぶっちぎって進むことに決定。

幸い、脅威となりそうな魔物の存在は確認されておらず。

どれも数こそいるものの、それこそランクチーム程度の力量があれば十分な魔物ばかりの上、まだ先は長いということもあり。今回の戦闘はバリエッタの面々のみでやるとのこと。

「まあ、テメエらは今回のところは馬車の中で大人しくしてろや」

「その代わり、今夜の不寝番をお願いするので気にせず。ゆっくり休んでおいて下さい」

とは“爆心地”と“慧眼”の二人の言葉。

バリエッタ側の馬車には、弓の使い手のローザさんと、万能戦士と噂のクラウスさんが残り。

ローザさんが御者席に、クラウスさんが幌馬車の幌の上に胡座をかいて座っていた。

魔物の戦闘とは別に、こちらの馬車側の見張りもやってくれるらしい。

つーことは、魔物との戦闘は4人で行うのか。いやミアさんは斥候役だから実際は三人か。

速度を落とした馬車から降りて、馬車の進行ルートへと先に向かっていくゲオルグさん、ケイムスさん、ドルトムントさんの三人組を見送る。

ちなみにオレ達側は、オレとジン以外は幌馬車の中で寝袋広げて仮眠とってる。

馬車の御者であるオレと、ミアさんと共に行動することによって、ミアさんの索敵範囲がグンと広がったジンは、安全性の向上の為に起きる側から外せない。

カザネやマリスは、バリエッタの戦闘や“慧眼”などと呼ばれるケイムスさんの魔法に対して興味があるのか。戦闘風景を見たそうにしていたが。

流石に魔物領という場所の危険性を理解しているのだろう。少ししたら自分から幌の中に戻って、寝袋広げてた。ランスロットは役割決まった時点で寝袋広げてた。

というわけで、一人御者席に残ったオレは、することもないので、

既にゴマ粒程度になっていたバリエツタ戦闘組をぼんやりと眺めることにした。

「おー……」

しばらくすると、遙か前方に黒い靄みたいなものが見えてくる。

アレがミアさんらが発見した魔物の一団だろうか。

それはかなりの大きさで、未だに僅かながらに判別のつく、ゲオルグら三人組をゴマ粒だとすれば、靄は夜空に見えるお月様程度にはハッキリと見える。

遠目からでもこれだけハッキリ見えるんだから、実際それなりの数が居るんだろう。

それでもミアさんの調査によれば、出来るだけ魔物の少ないルートを選んでいるというのだから、噂に違わない土地のようだなあ、魔物領。

んで。そのゴマ粒バリエツタ組と、お月様魔物集団がそろそろ区別がつかなくなるくらい、接近したところで

「……………ん……………」

黒い靄全てを埋め尽くすかのような、巨大な土煙が発生した。

ボン。とでも音が聞こえてきそうなほどの砂塵を巻き上げた、それが止む頃。

遠目からでもハッキリと見えるほどに大きな靄だった魔物の群れは、転々とゴマ粒が散らばる程度の規模に縮小していた。

「何アレ」

あんぐりと口を開いて、たった今起こった現象が理解出来ないでいると。

幌の上に座って、オレの驚いた様子を見たクラウスさんが、特徴的な糸目を更に細めて楽しそうに笑いながら解説してくれる。

「アレを初めて見た人は、みんな似たような反応をするなあ
アベル君は、ゲオ兄の異名を知ってるだろう？」

「“爆心地”ですか？」

「そう。ゲオ兄が全力で槌を振るうと、あたりが爆発でも起きたようにまっさらになる。そこから付いた異名が、“爆心地”」

「え。人族ですよ。あの人」

カザネの何倍脅力あるんだそれ。
直撃避けても、衝撃だけでダメージくらいそうだな。　つーから
ってんだろな。あの魔物の減り具合を見るに。
そここう話してる内にも、ゴマ粒ほどに残っていた黒い靄も、どん
どん数を減らしていく。

「魔物の掃討は、ドルトムントさんが？」

「そうだね。ゲオ兄が均したあとを、ドム兄が掃討。　そんな二人の戦闘指揮をしつつ。ケム兄が魔法で援護っていうのが、基本パターンかな。　状況を見て、俺とロザ姉が遊撃ーって感じ」

「へえ」

んで、ミアさんがその間も周囲の状況を掌握ってわけか。
何というか 余裕のあるチームだなあ。

危うさが全く無いというか。今戦闘を行っている三人でも充分冒険者としてやってけるだろうに。

この他にもスカウトと弓兵、更にはミアさんの話によると、彼らのどの役割の代役も務められるジョーカーのような存在のクラウドさん。

…恐らく。年齢的にはオレのちょい上で、二十歳になったかならないかくらい、チームの中では一番若手っぽいクラウドさんだけだ。

この人ら全員の代役が曲りなりにも務まるって、かなり凄いことなんじゃねえかなあ。

少なくとも、オレにはミアさんとローザさんの代わりはできない。

ああ、ケイムスさんの代わりもか。

魔法は使えても戦闘指揮なんてしたことないし。

彼らバリエッタの姿は、良いチームの見本のようで。この依頼の中で彼らから学ぶことはとても多そうだと感じた。

折角だし、依頼をこなす間に色々学ばせてもらおうと思う。

まじまじとクラウドさんの姿を見ていると、糸目を一直線にしなから、首を傾げるクラウドさん。

「どうかした？」

「いえ。…なんか、ゲオルグさんら戻ってくる気配ないですけど、大丈夫なんですかね？」

首を横に振り、前の方を見直すと、ゴマ粒の姿が更に小さくなっていた。

どこまで行く気なんだあの人ら。

「ケム兄がついてるし、大丈夫じゃないかな。多分、進行ルートに引っ掛かりそうなのを、粗方片付けようとしてるんだと思うよ」

そう言つて糸目を薄く開きながら前方を見るクラウスさん。

まあ、少なくとも命の心配はする必要は無さそうだな。あの戦闘力を見る限り。

ちなみに、馬車でゲオルグさんが暴れた後を通ると、ちょっと地面が凹んでいた。

雑草とかも消し飛んでいて、マジで爆撃の後みたいだった。

結局この日は、馬車に魔物が近付くことは一度も無く。

遠めに魔物っぽい集団が見えたな！。と思つたら、次の瞬間にはポンポン土煙が上がって消えていった。

馬車は順調に進み。予定以上に早く、実は日が昇っている内に、目標地点である山の麓付近まで辿り着いたのだけれど。

視界の利かない森林部で夜を明かすのは、馬車の護衛という観点か

ら見て危険だと判断し。

今日のところは麓の平野の地帯で夜を明かし。明日、早朝から一気に山を登ってしまおう。ということになった。

テントの設営やら、野営の準備を終えて。

ジンがミアさんが偵察ついでに、夕飯として猪型の魔物を捕らえてきたり。

メンバー全員で猪鍋突っついて、親睦を深めてみたりした後。

ケイムスさんやミアさん、マリスといった面々でミーティングを行った時に、オレは偵察という役割の重要性を痛感した。

「うわー……今日だけでこれだけ調べ上げたんですか？」

「ジン殿がいたからだニヤ。私一人じゃこの三分の一ぐらいで手一杯だったニヤ」

「それでも、すごいですね。……たった一日で、これだけの領域の情報が集められるとは」

オレとマリスが、地図に記された情報を見て、あんどり口を開けて驚いていた。

そこには、今日一日で調べ上げたのであろう、目標地点の山を中心とした周囲一帯の魔物の、大まかな群れの分布。そこにいる魔物の主な種族。山間部のより詳細な地形に、馬車で進行するのに適していると思われる、幾つかのルートの選別。等々が細かく記されており。

今夜の野営地点も、調べた時点での魔物の分布から見て、全体的に群れから最も離れた場所を野営地としている。

「まあ、そういう分布にニヤるよう、ケイムスが昼の内に、狙って魔物を掃討したのもあるけどニヤ」

「そうなんですか？」

「ええ、まあ。　　というか。そうでもしないと魔物領でまともに夜なんて明かせませんよ」

昼の戦闘組は、ミアさんの連絡を受けつつ。　　あらかじめ移動速度の速い魔物の群れや、こちらの方面に移動してきそうな魔物の群れを狩ったりもしてたらしい。

そうでもしておかないと、夜の間にも魔物の襲撃が続いて、不寝番以外の人員も五月蠅くて寝てられない状況になりやすいとか。

ううん。　　これは、覚えた方がいいかな。オレもスカウトの技術。

もしくは、そういう技術を備えた仲間を探すとかか。

今後魔物領に、オレのチームだけで突入する展開もあると踏まえて考えると、必須な技能な気がする。

「　　ミアさん。オレにこういう地図の作り方とか、教えてくれないませんか？」

ダメ元で一応聞いてみるオレ。

「アベルは　　そんなこと覚えるより、単純に人手増やした方がいい気がするんだニヤ？」

肉球のついた掌を頬にあて、困ったようにこつちを見上げてくるミアさん。

「そうですね。賢獣殿を入れてもアベルさんのチームは三名。実質ケイロンさんとの、たった二名のチームというのは、流石に少な過ぎではないと思いますよ。僕も。それでBランクに上げられる実力がある、とギルドに判断されたことは驚きですが」

相当優秀なのでしょうね。と穏やかに笑って言いながらも、ケイムスさんも人手不足という点については同意する。

「まあ、魔法使いとしての力量だけは相当なものですしね」
だけは、の辺りをやたら強調するマリス。

「なんか含みがある言い方だなおい」

「別に。普段の生活態度はあんなだらしないのになあ。なんて思ったわけじゃありません」

「思ったわけじゃない。って加える意味あんのかそれ」

「まあまあ。二人共。お二人は、この依頼が初対面じゃないようですが、お知り合いだったんですか？」

ケイムスさんが苦笑いを浮かべながらオレ達を宥めてくる。話題を逸らそうと向けられた言葉に、少し考えるオレ。

「ああ、それは」

「仕事の関係で、何度か顔を合わせることがあっただけです」

まあ、下手に話すよか、そっちの方が手間省けていいか。

「 そんな感じですよ 」

とりあえず話を合わせておく。

「 そうですね。 ということは、アベルさんはオリガ殿ともお知り合いだったりするんですか？ 」

「 いえ。 そっちについては、名前は知っていたーってくらいで 」

「 ああ、お二人共お知り合い、というわけではないんですね 」

成る程。 と得心するケイムさん。

その後は、明日の予定をさらっとおさらいした後、魔法使い三人で魔法談義をしたりした。

ほぼ感覚で魔法を使うオレと、対照的に理論的に使うマリス。 そしてオレ達二人の要素を、合わせて使っているケイムさん。 それぞれ違う視点からの魔法に対する意見の交換は大いに盛り上がり。

白熱して話し合うオレ達に呆れて、その場を離れていったミアさんにも気付かず、魔法談義はそのまま、みなが寝る時間となり、他の連中に止められるまで続くのだった。

魔物領に突入して最初の、この日の夜は特に何か起きるわけでもなく。

この日の不寝番担当となった、ランスロット、カザネ、マリスとオ

レの4人で、適当に会話しながら過ごしていった。

厳密には、ぱらぱらと魔物の襲撃はあったものの、単体から数体の、雑魚と言ってもいいような魔物しか襲ってこず。

こちらに近付く前に殲滅して事なきを得たって感じか。

途中、昼からずっと起きてたオレは後を任せて寝かせてもらったんだけれども、その後も問題は起きなかったようだ。

三日目の夜も恙無く終わったのだった。

第21話 登山

4日目の朝。

前日の打ち合わせ通り、日の出と共に起きたバリエッタの面々と、この日に一気に山の山頂部の目標地点へと向かうことにするオレ達。ろくな道も無く、乱雑に生い茂る木々の所為で見通しも悪いところが、荷物を運ぶ上でもっとも危険なポイントだと判断したオレ達は、昨夜の不寝番であったランスロット、カザネ、マリスの三人も動員して確実に登ることを選択した。

休息は山頂に辿り着いてから、順次摂っていくことに。

前日に、ジンとミアアさんが調査した馬車でも通行可能な道を通りじわじわ登って行くオレら。

標高が高いわけでも、大して険しいわけでもない山なので、登山自体は特に問題無く進んでいく。
けれど

「ほんつとーに鬱陶しいなあ!」

魔物領が魔物領と呼ばれる意味が良くわかる。

人にとって未開の地、という以上に魔物の支配する地なのだ。ここは。

昨日、バリエッタの連中が散々魔物を狩ったというのに、一晩経つともう、うじゃうじゃうじゃうじゃ。

出発する時点で、オレ達の周り以外は黒い霧のような魔物の群れが遠目に包囲するようになっていたし。

山に入ってからもう、常に戦闘の連続だった。
ガチで一步進むごとにエンカウトしてるんじゃないかな。

山林の視界の悪さもあり、ミアさんとジンの斥候効果も平野部よりは期待できず。山頂まで馬車使って登るルートを探してくれただけでも万々歳。

昨日のように幾人が先行して予め魔物を刈り取っておくという作戦も、既に前後左右を魔物に囲まれている上、先行した先でも魔物を取りこぼす可能性が高いので断念。

というわけでメンバー全員。御者を残して、馬車を囲むように陣形を組みながらえっちらおっちら。襲ってくる魔物を倒して歩いていくわけだが。

「気が休まる暇が無いなあ、これじゃ」

「木が邪魔で、どこにどれだけ魔物が潜んでいるのか、わからない。というのは なっ！ ……いつ奴らが途切れるのかわからなくて、心情的に辛いな……」

カザネが突っ込んできたゴブリンの脳天に鉄串を叩き込みながら、オレの愚痴に返してくる。

そこだよな。もうちょい視界がはつきりしてれば、今は安全。今は危険。とか判断できるんだけれど。

他の面々も、オレみたいに文句を言うことはないものの、やはり鬱陶しくは感じているのか、その表情はどこか険しい。
ああいや。ゲオルグさんはめっちゃぶちぶち文句言ってる。うぜえうぜえ言いながら魔物を殴り殺してた。

……ああ、馬車の方にまで被害出るから槌が使えないのか。

「とはいえ。文句を言ってどうにかなるものではないでしょう。

正面、来ましたよ」

「おっと」

ゲオルグさんに殴られて、ぐちゃぐちゃに弾ける魔物の姿を見ると、御者をやっていたマリスの声がかかり慌てて正面を向いて魔法を放つ。

若干の溜めが必要な為、即応性が求められる現状では不向きとされてマリスは御者担当。

バリエッタの方はローザさんがやってる。

いつも通りの魔力砲を、前方からやってきた人型の豚というか豚型の人といつかかな容姿のオークの群れへと放ち、集団を焼き尽くす。

オークと、オークの周りの薙ぎ倒された木々を見て。 少し考えるオレ。

「。。。。。。そういやさ、この山って山のままの形残しておかないきゃダメなん？」

「はい？ どういうことですか？」

「つまり。魔法で木とか薙ぎ払っちゃダメなん？」

森林保護法的な。

「……………いえ。特にそのようなことは無いと思いますが……………
オ리가様」

顎に手を添え考えていたマリスが、確認の為にランスロットの名前を呼ぶ。

数体の魔物を流れるような動作で斬り伏せながら、ランスロットがこちらに振り向き。

「魔物領への進攻の時の為、陣地構築できる程度の木材は残しておいて貰わなければ困るが、それ以外なら構わない」

ハゲ山にはするなというわけか。

「了解です」

「…いったい何を？」

まさか

「カザネー！ ジンー！ ちょっと下がれー！」

オレより前に出て、前衛を務めていたカザネとジンに声をかけて、一旦下がらせる。

馬車の側面と背面を護っていたバリエッタの面々も、オレの声に何をするのかと、魔物の対処をしつつもこちらへと意識を向けている。

「おっけおっけ。よし」

不思議そうな顔をしつつも下がってくるカザネとジンを尻目に、彼らよりも前に出て、前方へと向けて杖を構える。

杖にいつもよりも多めに魔力を込めると、前面にオレの身長と同じほどの大きさの魔方阵が展開される。

「どうかしまし

」

オレ達の様子に、何かあったのかと声をかけてくるケイムスさんを無視して。

魔方阵から陣のサイズ程の大きさの魔力砲を発射。

放った先の木々が裸になるまでそれを放つと、向きを変えてもう一度。

「ちょー！」

ゲオルグさんの目の前を魔力砲が通過し、抗議の声が向けられるがとりあえず無視。

オレを中心として何度か魔力砲を放ち。扇状に前方の木々を焼き払ってから、ふう、と息を吐く。

「これで見晴らしもよくなったし。少しは楽になるだろ」

「　　テメエコラクソガキツ！　急に何してくれてんだ！？」

「ちゃんと当たらないようにしたじゃないですか」

「そういう問題じゃねえ！？　何考えてんだ！　ブチ殺すぞ！」

「…アベル君、魔物に苛立つのもわかりますが、この先何が起こるかわかりません。　魔力はできる限り温存して　　」

「ああ、大丈夫です。　これくらいなら、幾らやっても問題ありませんから。　そっちもやっときます？」

「おいた方が …… え？」

「……あれでもまだ上限見せてなかったのですか」

言っている意味がわからない。といった風なケイムスさんと、溜息を零しながら呟くマリス。

ランスロットも、他のバリエッタの面々もこっちをガン見している。

「山の全てを薙ぎ払うのは拙いみたいなんで、程々にはしといた方がいいんでしょうけども」

ポンポン撃ってたらそれこそハゲ山になっちまう。

とりあえずオレ達担当の前方から、一通り魔物の姿が見えないのを確認して伸びをしつつ。

「……Cランクで収まらない筈ですね」

「二人だけのチームとはいえ、実際アベル一人で何人分なんだかニヤー」

「彼があれほどってことは、もしかしてケイロンさんも？」

「いや。私はあんなのとは違う。個人のランクもCランク程度だ」

あんなの言うな。

クラウスさんの質問に、首を振って否定するカザネ。

まあ、この世界の基準を見てる感じ、オレはそれなりに規格外なんだろうな。という自負はある。

怒り心頭のゲオルグさんに謝ったりあしらったりしつつ。
常に警戒していなければならぬ。という状況から解放されて、幾分気楽に進んでいくオレだった。

後はもう、山頂までひたすらコレの繰り返しだった。

一気に登山の難易度が下がったので、途中から徹夜状態の力ザネやマリスは馬車の中で仮眠を摂ったりしつつ。

いくら魔法を放つても消耗した様子を見せないオレを、呆れたように見詰める他の面々を背にしながら山頂へと辿り着いたのだった。

山頂に辿り着いたころには、もう夕暮れ時で。

早朝から約十時間以上登りつ放しだったこともあり、今日の作業はここまでにして休むことに。

周りの木を切り倒し、魔物が近付いて来ても充分対処が出来る程度の広さまで、見通しが利くようにしたところでテントを設営。

登った時のように魔法で雑草を払わなかったのは、明日からの作業で木を使うから。

まあ、根元のあたりを焼き切ったりはしたけれど。

本日の不寝番はバリエッタの面子が交代でやるとのこと。

流石に昨日のようにはいかず。寝ている最中に魔物との戦闘をしていると思しき物音がちらほら聞こえてきた。

が。こういう状況で寝るのはグルガの森で耐性が出来ていたので、気にしないことになって寝た。

明けて五日目の朝。

枕にしていたジンが起きるのに合わせ目を覚ましたオレは、テントから出ると、既に起き出していた面々と挨拶を交わす。

殆どの人が既に起きていて、この場にはいないのは朝方まで不寝番を担当していたドルトムントさん、ローザさん、クラウスさんの三人だけだ。

みんな起きるのはやいなー。とか思っていたら。

マリスやカザネ。それにランスロットも、一晩眠れたというのに、朝っぱらからどこか不健康そうな顔をしていた。

カザネやランスロットはともかく。特にマリスなんかは目元にうつすらと隈すらできている。

「 どうしたん？それ」

「 ……少々、物音が気になって……」

マリスが普段のハキハキとしたとは打って変わり、どこか重たく感じる声音でそう語る。

「…二人も？」

「熟睡していないというだけで、ちゃんと睡眠は摂っているから大丈夫さ」

「動きに支障が出るようなものじゃあない」

カザネとランスロットも、問題無いとは言いつつも、オレの言葉を否定はしない。

まあこの二人に関しては顔色もそう悪いわけではないだろうし。問題無いだろう。

「……………というか。何故貴方はあんな状況で熟睡できてるんですか」

「グルガの森もこんな感じだしなあ」

「あの森で生活していたというのは、本当だったのか」

「本当に危なければジンが起きるから大丈夫。ってのもありますけどね」

「今夜からアベルのテントで寝ようかな…」

そんなこんなで、本日も活動開始。

目標地点である、山頂に着いてからすることというのは以前にも話したが。

陣地構築予定地点となるこの場所の、ある程度の地均しと運んできた補給物資の保管である。

地均しというか木の伐採に関しては、昨日の時点で粗方終えたので、あとは木の根っ子を引き抜くなり焼くなりするだけで終わりだ。残るは補給物資について。となるのだけれど。

どうやって保管するか、となると。

隠す場所も碌に無いし、適当に置いたら破壊されるだけなので、タイムカプセルよろしく土の中に埋めることになる。

土の中に埋めるということは、埋められるだけの土を掘らなければいけないわけであり。

つまりどうということかというところ。

単純作業マジ苦痛。

「こういつ時の為の魔法、何か考えておくべきだったなあ…」

ざっくざっくと、穴を掘る。

馬車に積んであったシャベルで。

しかも、全員がこの作業に従事するわけにもいかず、夜に備えて仮眠とる人。魔物の相手する人。というのが最低限必要なわけで。

11名もいるパーティとはいえ、穴掘りに専念できるのは2、3名ほどとなる。

「今からでも考えろよ。そしてさっさと終わらせろ」

「そういうゲオルグさんこそ、あの槌でドカンとするヤツで、穴掘

れないんですか」

「ありやちよつと地面がへこむだけだ。埋める時の為の土も吹っ飛んじまうし」

「そこですよねー」

単にクレーターじみた穴を作るだけならば、方法が無いわけでも無いのだけれど。

穴掘った後に物資入れて埋める作業も待ってるわけで。

シヨベルカーの偉大さを痛感しつつ、ジャンケンにより選別されたオレとゲオルグさんの二人は、汗水垂らして穴掘りしていた。

体力に物を言わせてひたすら掘ってきたお陰で、既に深さだけなら身体が埋まるくらいにはなっている。広さはまだまだが。

シャベルが使えず、必然的に穴掘りを免除されることが確定しているジンが羨ましい。

いや、あいつもサボってるわけじゃないのだけどさ。オレ達のメシになる魔物の調達は殆どあいつがしてきてくれるし。

「そこ。無駄口叩かずさっさと掘るニヤ」

「つつても、黙々とこんなことやってたら発狂しますよ」

「なら無駄口以上に手を動かすニヤ。魔物の数が、昨日、一昨日に比べて増えてきてるニヤ。」

無理してでも早めに終わらせて、さっさと王国に戻った方がいい気がするニヤ」

オレ達の下へとやってきたミアさんが、そう言って急かす。

そういや、さつきから魔物の雄叫びやら爆音やらが止まないな。上の連中が休む間もないくらい襲ってきてんのか。もしかして。

「 急いだ方が良さそうだな」

「 つすね」

舌打ちするゲオルグさんと共に、掘り進めるペースを上げていくオレ。

ジンもいるし大丈夫だとは思うけど、ジンだって休み無しで戦い続けることができるわけじゃないしな。

結局この日では、二台の馬車の積荷を全て埋められるような穴を掘るには時間が足りず。

それでも、馬車の積荷の半分ほどの量を埋められるほどのスペースをたった二人で確保したのだから、頑張ったほうだと思う。

穴から出ると、拠点としている広場の周囲は大量の魔物の死体が広がっていて、拠点を護っていた皆も、重傷を負った人はいなかったが、返り血やら掠り傷やらでかなり酷い有り様だった。

かくいうオレとゲオルグさんも、汗まみれの土まみれで、負けず劣らずの酷さだったけど。

魔法で作ったお湯を使って身体を拭いたりはしてるけれど、さつきとこの依頼を終わらせて風呂に入りてえなあ。と思う。

「 うっわ汗臭 絞ったら水出るんじゃないかなあ。これ。 …」

…うお、出た」

着ていたシャツを替えながら、汗をたっぷり吸ったシャツを雑巾のように絞ると、案の定ポタポタと水が垂れてくる。久しぶりにこんな汗流した気がする。ジンもおいが気になるのか、鼻先こっちに向けないで毛繕いに集中してるし。

この日の不寝番は、前半がオレとジンとマリスだったのだけれども、マリスの消耗っぷりが傍目から見ても酷かったので、無理矢理テントに押し込んで寝かせておくことに。

「皆頑張っているのに、私だけ余分に休むことなどできるものですか。問題ありません」

「そんな今にも倒れそうなツラして言うことかよ。いいから寝ておけって」

「交代の時間までなら充分に持ちます。魔力だってまだ」

「ジン」

「がっ」

「なっ!? ちょ、止めてください! 何をする」

ジンに首根っこの辺りのローブをくわえられて、ずるずるテントまで引き摺られていくマリス。しばらくするとジンだけが戻ってきて、マリスは戻ってくる気配はない。

起き続けてる間は無理出来ても、少しでも休んじゃうと疲労に正直

だしな。身体って。

そんなこんなで不寝番をジンと二人ですることになりつつ。夜になつて改めてミアさんの言っていたことを実感する。

魔物だつて、グルガの森での生活を思い出す限り。休息が必要な筈なのだけれど。

こいつら休息必要無いのかもしかして。と思わされるほどにはそれなりの数の魔物が、夜にも関わらず襲撃をかけてくる。

今日もジンと共に周囲の偵察に出たミアさんの話によると、特別魔物がオレ達に向かってきている。というわけではなく。全体的に魔物の群れの数が増しているらしい。

何度か魔物領で行動したことのあるバリエッタの面々からしてもこの魔物の数は異常であり、このまま魔物の数が増えていくと、拙い事態になるかもしれないと言う。

最悪、これ以上魔物の数が増えるようであれば依頼の遂行は諦めて撤退することも辞さない方向でいくことが今夜のミーティングで決定されており。

その場合オレのBランク昇格はバリエッタの方から問題無いとは推薦してくれるらしいが、確実に昇格できるとは言えなくなる。と言われた。

状況的に仕方なさそうなので、オレもそれを承諾。まあ、明日の状況次第だ。

不寝番に関しては、ちよろちよろ襲撃がうざつたいとは言えオレとジンで問題が起きよう筈もなく。

時折、屠った魔物の肉を焼いて夜食代わりに食ったりしつつ、交代の時間が来るまで問題無く過ごして、その後寝た。

そして、六日目の朝が、やってきた。

この日もオレはジンを枕に、オレのテントに入り込んでいたカザネと、ジんに強制的にテントに放り込まれたマリスと一緒に寝ていたのだけだ。

寝てから然程時も経っていない、早朝。

唐突にジンが身を起こした所為で、頭を強かに地面に打ちつけた衝撃でオレは目を覚ますことになった。

「つつつ……！　おい、ジンお前急に」

ジンに文句を言おうと、起き上がったところで、ジンが、普段とはまるで異なった緊迫した面持ちで外を見詰めていることに気付く。

「……………どうした？」

オレの声に、一度オレへと視線を向けてから。のっそりと歩いてテントから出て行くジン。

その様子にただならぬ雰囲気を感じて、急いでオレも外套を羽織り、杖を掴んでジンの後を追う。

「おや。どうしました？」

「目を覚ますにはちょっと早いのニヤ」

「……………」

外に出ると、オレ達と代わって不寝番を行っていたケイムスさん、ミアさん、ランスロットの三人がオレ達に声をかけてくる。

今は魔物も襲ってきてはいないようで、薄っすらと明るくなってきた広場で三人、思い思いに休息をとっていた。

ジンの後を追いかけてながら、三人に向けて軽く頭を下げて。

「いや。ちょっとジンのやつが」

等と説明しようとしていると、外に出てからそわそわとあちこちにうろついていたジンが、不意にある方向に向けて視線を固定した。

「ジン？」

「……………」

睨みつけるようにそちらを見たまま、低く唸り声をあげるジン。

ジンの視線を追って、そちらへと視線を向けてみるも、薄く朝霧がかかっている木々の奥の方がよく見えない。

が。ジンがこのような様子を見せている以上、そこには間違い無く何かがある筈で。

その何かを判別しようと目を凝らすオレに向けて、疑問に思った三人を代表してケイムスさんが声をかけてくる。

「…何かありましたか？」

「いや、ちょっと」

視線を固定したまま、ケイムスさんに返事をしようとした、その時。

チカツ。と、

視線の先で、何かが光った。
その瞬間。

「
グルアアアアアッ！！！！」

鼓膜が痺れるほどの音量で、ジンが咆哮し

広場が光に包まれた。

第22話 襲撃

網膜を焼きそうなほどの、光の奔流が周囲を包み込む。避けようの無いタイミングで迫るそれに、咄嗟に腕で顔を覆い

直後、凄まじい突風が吹き荒れる。

踏ん張っていても吹き飛ばされてしまいそうな程の衝撃波じみた風を、遅れて発動させた障壁で堪えきり、光と風が止んだ頃に顔を上げ 何が起こったのかと。周囲を見渡すと。

オレ達が拠点とし、木々を切り開き開拓した山頂の広場。 その一帯が。

ハリケーンにでも見舞われたかのように、根こそぎになっていた。

「 な、なん……！？ 」

唐突に起きた事態に脳の理解が追いつかない。

大量の積荷を積み込んでいた馬車は、横倒しになって中の積荷をぶちまけており。

馬車を牽いていた馬も、馬車の付近で倒れ伏していた。 内の一頭は下敷きにもなったのか、ビクビクと震えながら、馬車の下でもがいている。

その付近で、休息をとっていた者達が寝ている筈のテントも、ぐちゃぐちゃと、テントを支えていたポールは周囲に四散し。シートは

潰れていて中で寝ていた人々の安否は全く分からない。

更に辺りを見回すと、オレとジンの後方で不寝番をやっていたケイムスさん、ミアさん、ランスロットの三人が、先ほどの突風に耐え切れなかったのか。呻き声をあげながら倒れ伏しているのが見える。

最後に、オレの傍で咆哮を上げていたジンは、光がオレたちを包む前と同様、低く唸り声をあげながら、じっと前を睨みつけていた。

「あ」

…いや、違った。

ジンが睨みつけていた方向をよく見てみると、その少し先の空間に、風が渦巻いており。

その空間を境目として、オレ達の側と、森の側の世界が、隔絶した異世界のように変貌していた。

風を境目にしてこちら側は、様々な物が散乱し、惨憺たる有り様ではあるけれど。

風を境目にしてあちら側は、地面を舐めるように焼いたかのような、一面の焦土が広がっていた。

嵐を纏うと言われる、王天虎の風を操る力。

その力を用いて、ジンはあの光の直撃からオレたちを護っていたのだと、そう理解する。

オレの魔法に勝るとも劣らない、この威力だ。余波だけでこちら側もこれだけなのだから、正直ジンは護ってくれなかったら、オレも

どうなっていたかわからない。

「　　ありがとう。助かった。ジン」

展開していた烈風陣を解きながらも、ジンは未だに前を見たまま警戒を解いていない。

当たり前か。　まだ攻撃を凌いただけで、この砲撃を行った相手の姿すら見えていない。

「何が起きてんだよ一体　　つか、他の皆は」

無事なのか。　前方から視線を外せないままに、後方の状況が気になる。

未だに後方からは何の音沙汰も無い為、皆無事なのか無事じゃないのか、予想すらつかない。
死んではないと思うけれど

　　そうして、後ろへと意識が向きがちになっていたオレに向け、前方から巨大な影が飛来する。

「ッ!？」

反射的に放った魔力砲を、身を擦りながら避ける影。そのままこちらへ飛び掛ってくるそれに向け、杖から障壁を展開し。

「　　こいつは……!」

障壁に牙を突き立てる　　影の正体を見る。

体長はジンと同じくらいだろうか。金色の体毛に、黒いたてがみ、鋭く長く発達した二本の牙が、オレが展開した障壁に突き刺さり、障壁を喰い破らんと力を込めている。

金色の、巨大な牙を持った獅子。そいつがオレを襲ってきた敵の正体だった。

障壁を展開しながら、相手の姿を観察していると。

それに噛み付いている獅子の口内から、バチバチと弾けるような音と共に、白い光がちらついた。

「？」

なんだ。と思いながらそれを見ると

「ツガアアアアア！」

「っうおおおお！」

獅子の口内から放たれる、凄まじい熱量を持った光のブレス。先ほど見た光と全く同じ閃光が、零距离で障壁にぶち当てられて、ミシミシと展開した障壁が悲鳴をあげる。

慌てて障壁に魔力を注いで強化するものの、熱量までは遮りきれず。急速に熱せられた周囲の温度にじわじわと汗が滲み出る。

くっそ。破られる気はしないけど、いつまで続くんだこれ！

下手にここから飛び退けば、背後にいる皆にこの砲撃が当たってしまうかもしれないだけに、迂闊に動くこともできない。

止む気配の無い光の放射に、歯噛みしながら対応策を練り

「グルアアアアアッ！！！」

「ガアッ!？」

横合いから突っ込んできたジンの突撃により、獅子が吹き飛び、オレはヤツの攻撃から解放されることができた。

「ガルルルルル……」

「グルルルルル……」

一定の間合いをとって、唸り、威嚇し、牽制し合うジンと獅子。こいつがさっきの奇襲の犯人か。

後ろの皆のことは気になるけども、今はジンと協力してさっさとこいつを倒すべきだろう。

「ッ!?!？」

不意に横合いから迫る殺気に、思考を中断してその場を飛び退く。直後。寸前までオレが立っていた場所が、ズガン、と激しい音を立てて爆砕する。

襲ってきたのは、一匹だけじゃないのか　!？

粉塵を巻き上げそこに現れたのは、恐ろしく太い腕を地面に突き立てる、巨大な猿。

いや、猿というかゴリラというべきか。

猿と言うには似つかわしくない分厚い筋肉と、黒い体毛に覆われたその姿は、寧ろゴリラに似通ったものではあるけれど。顔立ちはゴリラ、というよりは猿に近いものだった。猿というには凶悪過ぎる面構えでもあるけども。

新手の出現に、獅子の対応はジンに任せ、眼の前の巨大猿の相手に専念しようとしたところで

そろそろと、広場を取り囲むように、魔物の群れが現れた。

「な、ん……!？」

前後左右四方八方と、あらゆる方向から、広場の中へと魔物の群れが姿を現す。

まだ距離はあるものの、ゴブリンやオークといった、今までと同様の低ランクの魔物を中心にしつつも。

群れの中には幾つか、眼の前の巨大猿や、ジンと相対している獅子ほどでは無いにしろ。それなりに強力そうな魔物の姿も散見される。オレには、魔物のランクというのは未だにほとんど判別つかないが、それでも今までの依頼で討伐した魔物の中で、単体でCランクチームクラスであるとされて倒したことのある、巨大な犬の魔物のガラムや、ゴブリンを二回りほど大きくさせたような緑色の体色の巨人、トロールの姿があるのは確認できた。

オレとジンが生き延びるだけならばまだしも、この状況でこれは拙過ぎる。

「ケイムスさん！ ミーアさん！ オリガさん！ 聞こえますか！？ 緊急事態です！」

のそり、と振り下ろした拳を持ち上げて、こちらへと向き直る巨大猿と睨みあいながら、背後で倒れている筈の三人に声をかける。ちよつと無理してでも動いてもらわなきゃ、詰んじまうぞ。コレ。

「……………っ。 ……何が、起きた」

後方からランスロットの声が聞こえる。他の二人の声は返ってこなかったが、一人でも反応が返ってきただけありがたい。

「魔物の襲撃です。今までとは規模が違うようで。早急に皆を起こして対処しないと」

「ッ。 ガガールンだと…！？ それに、あの獅子は ……グサルガレオか…ッ

わかった。すぐに対処する」

「 ……っと！ ……お願い、……しますっ！」

ランスロットが、恐らく眼の前の巨大猿と、獅子の魔物の名前を呟いた後に了承の返事を返してくる。

それに振り向くことなく答え。殴りかかって来た巨大猿の拳を避け、魔法を込めた拳をカウンターとして顔面に叩きこむオレ。

直撃の瞬間に炸裂する、爆薬程度の威力が込められた拳を受けて、何度かバウンドしながら吹き飛ぶ巨大猿。

が。顔に痣を作りながらもすぐに立ち上がって、怒りの形相を

浮かべてこちらを睨みつけてきた。

「　　ったく。　　お前だけ相手にしてるわけにもいかないんだ。　　っ
っーの！！」

巨大猿と距離を取った隙に、適当な方向に向けて魔力砲を放つ。

どこに向けても当たるような状況なので、一々そちらを確認することもない。

動き出そうとしていた魔物達に向けて、牽制の意味をこめて放ったその魔法は。　　思惑通りに包囲を狭めていた魔物の足を一瞬とはいえ止めることに成功したものの。

この程度の牽制じゃあ、魔物達はすぐにでも突っ込んでくるだろう。

せめてジンがフリーで動けるなら、色々なんとかしようがあるのだけれども。

そのジンはと言うと、獅子型の魔物と未だ睨み合ったままであり、早々決着が着きそうな気配はない。

…ジンが即行で仕留められないってことは、それなりに強力な魔物なのかあの獅子。

流石に負けるとは思っちゃいないが、先の強力な砲撃のこともある。あいつとの決着が着くまで、ジンのフォーローは無いものと考えた方がいいだろう。

「　　！！」

「よ、っと　　させるかあッ！！」

再び飛び掛ってくる巨大猿の一撃を避けながら、後方のテントへ迫ろうとしていた魔物の群れへと、魔力砲を放つ。

続けて振るわれる、周囲の地面や岩を砕きつつ、つんざくような風切り音と共に振るわれる豪腕の連撃を避けつつ、視線は周囲を囲む魔物の群れへと向けて連中を威嚇する。

巨大猿にも反撃したいのだけれど、こいつに目を向けた瞬間に他の魔物がテントの方に突っ込む動きを見せているので、迂闊に攻撃できない。

さっきの一撃で決まらないあたり、タフさもそこそこなのだろうし。くっそ。面倒くせえなあ！

心中で、この追い込まれつつある状況に舌打ちした、その時。

巨大猿に背を向けたままその攻撃をあしらい続け、目線と魔法で魔物の群れを威圧し続けている、オレの背後で。

爆風が吹き荒れた。

「今度は何　！？」

またも発生した突風によるめきながら、すぐにでも障壁を張れるよう警戒しつつ背後に向き直ると。

そこには、愛用の大槌を振り下ろした体勢の、“爆心地”の姿。

「目覚ましにしちゃア　ちとドカンドカンうるさせえぞ、クソガキ」

鎧を纏い、完全に武装した姿で、槌を振り下ろした先を見下ろしながらゲオルグさんは呟く。

口振りとは反対に、急いで駆けつけてきてくれたのだろう。　普段ツンツン逆立っている金髪は、ぼさぼさと乱れており。　なんだか普段より年嵩が増して見える。

「ゲオルグのおっさん!!」

渋いタイミングでの参戦に、思わずおっさん呼ばわりしてしまう。

「ブチ殺すぞクソガキ。　　テメエはあっちの魔物の対処に向かえ。こいつはオレが相手をする」

そう言いながら、顎で崩壊したテントが散らばっている方角を指し示すゲオルグのおっさん。

視線は振り下ろした槌の下へと向けられたままで。　　気になったオレも、砂塵が舞うそこへと視線を向けてみる。

すると、吹き荒れていた砂埃が収まってくるにつれ、振り下ろした槌の下に、小さなクレーターの中に身を沈めながらも両腕を交差させ　槌の一撃を受け止めている巨大猿の姿がある。

あの一撃を防いだのか。こいつ。

「ガアアアアア　　ツッ!」

「グルアアアア　　ツッ!」

ジンの方も、どうやら本格的に交戦を開始したようだ。

虎と獅子が、残像が見えるような速度で周囲の魔物を巻き込みながら、爪と牙を交わらせていた。

「　ガガールン相手に一人つてのは、流石にオレもそう長くは相手したくねえ。　さっさと他の連中起こして援護に連れて来い」

「ギ、ギ、ギ……ッ!」

ゲオルグのおっさんに押し潰されるな体勢だった巨大猿が、徐々に槌を押し返している。

おっさんも人とは思えないような力を持っているとは言え。　単純な膂力では猿の方が上なのだろう。

その様子にも驚いた風もなく、淡々とこちらに声をかけると、数歩分飛び退いて、巨大猿から距離を取り槌を構えるゲオルグのおっさん。

「　　ッ。　了解です。　応援来るまでくらいは、もたせてくださいよ」

テントの防衛をしながら皆を起こして回るには、遠距離攻撃も出来るオレのほうが適任で。

ゲオルグさんもそれが分かっているから、急いでこちらに駆けつけて、巨大猿の相手を引き受けたのだろう。

一刻も早く皆を起こすべき、と判断したオレは、おっさんの返事を聞くこともなくテントの方へと駆け出した。

「ハッ。誰に物言つてやがんだテメエ。ガキが人の心配するなんざ、十年早エツ!!」

「グギヤアアアツツ!!」

超重量の物体と物体がぶつかり合う音を背に、オレはテントの方へと向かうのだった。

テントの方に向かっていくと、幌馬車の幌の近くでランスロットの姿を見かける。

パーティの皆を集めていたらしく。そこにはケイムスさんとミーアさん以外にも、クラウドさんやローザさんの姿があった。

「皆の具合は!？」

「…お前か。女二人の方は、意識を失っているようだな。無理矢理叩き起こすのも危険だからここに集めておいた。男の方は、一応すぐに目覚めたんだが」

ランスロットがオレの姿に気付き、現状を報告する。

あれ。オレの女っつーか。カザネとマリスはどうした。

ランスロットが続けてなにやら説明しているが。それが右から左に通り返ける。

意識はあるものの、右目が血で真っ赤に充血しているケイムスさん。あちこちからぼたぼた血は流しているものの、全体的に擦過傷が殆どっばいクラウスさん。

意識は失っているものの。ぱつと見た感じ目立った外傷のないミアさんとローザさん。

その場にいる全員の状態を確認し。

「あつちでゲオルグさんがでかい猿とやりあってるんで、応援行けるようなら行ってやって下さい。オレはカザネとマリス探していきます。ついでにドルトムントさんも探してみますが。場所わかるようならそつちで向かってもらえると助かります」

「あ！ おい！」

手持ちの情報を伝えるだけ伝えて、オレが使っていたテントの下へと走り出す。

話聞く時間も言葉を返す時間も勿体無い。その間にオレの女に万が一のことがあったらどうすんだちくしょう。

テントに辿り着く頃には、魔物の包囲もかなり狭まっいて。

下手したら既にテントのあたりまで蹂躪されていたかもしれない距離だった。

近寄ってくる魔物を殴り飛ばし、近寄ろうとする魔物を魔法で消し飛ばし。周囲の魔物を殲滅したところで、支えを失って潰れているテントの中を確認する。

中にはカザネとマリスが、毛布に包まりつつも抱き合うようにして眠っており。

「おい！カザネ！マリス！起きろ！おい！」

「……………なんだこの惨状は」

大声にうっすらと目を開いたカザネが、周囲を見回してそう呟く。まだ完全に目が覚めていないのか。普段より声音が低い。

「オレも正直よくわからん。ただ、碌でも無いことが起きてるのは間違い無いみたいだから。早く身支度整えてくれるとありがたい」

「その方がよさそうだな」

カザネと話しながらも、魔力砲をぶっ放すオレの姿を見て。起き上がり、傍に転がっていた鎧と剣を身に着けていくカザネ。そんなオレ達に遅れて、マリスも目を覚ましたようで。

「……………地獄ですかここは」

周囲に散乱する魔物の焼死体を見て、そんな感想を漏らすマリス。

寝癖を整えながら言ってるのが、なんともまあ。

「似たようなものかもしれない。馬車の方に皆集まっているから、対応策練る為にも、そっちに行つとけよ」

残り行方がわからないのは、ドルトムントさんだけか。

馬車の方を顎で示しながら、あたりのテントを見回していると。

「アオオオ ン！！」

遠方で、遠吠えをあげながら魔物相手に切った張ったを演じている、銀色の体毛に覆われた人狼の姿を発見。

…大丈夫そうだなあ。なんか。

「了解です」

「了解だ。 アベルはどうするんだ？」

ドルトムントさんの姿を発見して、さて と腕をぐるぐる振り回すオレに、カザネが声をかけてくる。

うん？とカザネに首を傾げてから、近くの木々の奥を見遣り。

「 誰かがアレ抑えておかなきゃ、作戦会議もしてらんないだろ」

両目に映るのは、森の奥から姿を現す、2体の異形。

対峙するだけでわかる、そこらの魔物では及びもつかないような格と、一方の魔物から放たれる尋常じゃない魔力に気がついたのだから。

背後で二人の息を呑む気配が伝わる。

オレよりも一回りほど大きな赤い体躯に、詰められるだけの筋肉を詰め込んだような、どこか見慣れた形をした二本の角を生やした魔物と。

襷褌切れを纏い、フードの陰から覗く青白い瞳を幽々と光らせる、白骨の死神じみた姿をした魔物。

「……あいつ、は……ッ!!」

二体の魔物の姿を確認した瞬間、強大な魔物の気配に怯んだ様子を見せていた背後の二人の片割れ。カザネの方から、凄まじい怒気が背中に伝わってくる。

その理由も、眼の前の魔物と、以前聞いた話を思い出せばある程度は予想がつく。

けれど。

「カザネ。マリス」

「は、はいッ」

「アベルッ。あのオーガは私が」

ちやきり、と杖を構えて。臨戦態勢を整える。

マリスとカザネの、まるで異なった様子にも頓着してやる気にはなれない。

「邪魔。他の皆にも近付かないように伝えといて」

「アベル!!」

二人にそこにいられては、気が散って全力を出しきれない。さっさと下がるように告げると、納得がいかないのか。カザネが強い口調で抗議の声を上げてくる。

気持ちはまだ、わからなくはないけれども、この色々切迫した状況でカザネの提案を受け入れるわけにはいかない。

「自分で言ってる、カザネ。個人でC相当のカザネに、あいつAランクチーム相当のオーガを相手どらせるわけにはいかないっつーの」

少なくとも魔物の一体は、Aランク相当だと確定しているんだ。その魔物と勝るとも劣らない魔物が、眼の前にもう一体いるつてのに、明らかにそれらと比べて劣っているとわかってるカザネを、戦列に並べる気にはならない。襲ってきている魔物はここだけじゃないしな。

「まあ、任せとけて。ちゃんとオレがぶちのめしておくから」

「だが！ いくらアベルと言えども、オーガを合わせて二体同時などと……せめて、私が前衛を」

「いやいや。逆なんだって。二体纏めて相手にするから、二人はちよつと邪魔」

下手にカザネやマリスを加えたところで、逆に攻撃する時に邪魔になりそうだし。二人が気になってしょうがなくなりそうなんだ。どっちか一体ならば、カザネ達加えた方が早いかもしれないけれど。

オレの率直な物言いに、ぐ。と齒噛みをするカザネ。
いや、眼の前の魔物から目が離せないから、そんな気配を感じただけだけれど。

「私では　アベルの隣に立てないのか」

「……。　まあ、今のところ」

「……………ッ」

「…マリス」

沈黙するカザネ。

溜息を一つ吐いてから、マリスにカザネを連れて行くよう頼む。
…何でオレがカザネをへこませなきゃいけないんだ。　ああ、イライラするな。

「　　本当に大丈夫なのですか？」

「大丈夫だろ。たぶん。　　じーさん相手にするよかマシだと思
う」

緊迫した口調で尋ねてくるカザネに、ひらひらと手を振り答える。
実際Aランクつてのがどの程度のものかわからないけども。そうだと
ろうと思いたい。

「……………わかりました。　どうにかこの包囲を抜ける算段を立ててき
ますので。　この場はお願いします」

オレの気安げな口調とは別に、徐々に距離を詰めている魔物の姿にこれ以上問答をしている様子は無いと感じたのか。渋々といった口調ではあるが、こちらの提案を受け入れてくれるマリス。

そしてカザネに声をかけ、この場を離れようとして。

二人の足音が聞こえ始めたー と思ったら、また足音が止まる。

「アベル」

「うん？」

「死なないでくれ。オーガは勿論、殺したいが アベルを失ってまでのことじゃない」

「はっ。そんな心配すんなって。 オレを誰だと思ってるんだ」

「？」

にやり、と。魔物に向けてではあるが、不敵な笑みを浮かべる。

「 オレは英雄お墨付きの男だぜ？」

遠ざかる二人の足音を聞きながら、さて　と杖に魔力を込める。
…決め台詞としてはいかなものだったのだろうか。　今更にな
って先程言い放った言葉を思い出しながらも。
言っちまったもんはしょうがない。　―先ず思考を切り替える。

距離があつたとはいえ。　なんだかんだで二人が離れるまで襲い掛
かってこなかつた二体の魔物は、その分戦闘の準備は万端なようで

オーガと呼ばれた鬼のような姿をした魔物は、低く腰を落とし、今
にもこちらに襲い掛からんと力を溜め込んでおり。
異形の片割れ。死神のような風貌の魔物の周囲には、無数の魔方陣
が浮かび上がっている。

それに併せてオレの周囲にも、幾つもの魔方陣が浮かび上がり。
「ちよつと気まずい雰囲気にしてくれやがって……この落とし前は、
きつちりつけさせてもらうからな。このやろつ」

開戦の狼煙が上がる。

白色の閃光と、紅色の球体がぶつかり合い。　周囲を光が焼き尽くし。
続く爆音と、雄叫び声。

互いの存在という存在を削りあう、死闘が、幕を上げた。

第23話 対決（前書き）

月曜日に更新できるか少しわからなくなってきたので
月曜日分を早めに更新。

ので、次の月曜日の更新はありません
ご了承くださいませ

第23話 対決

死神の周囲に浮かぶ無数の魔方陣から放たれる、禍々しくも強力な魔力の込められた火炎球を。

オレの周囲に浮かぶ、同数の白色の光線が迎え撃つ。

直後、オレと死神との間でぶつかりあうそれらが、爆音をあげながら破碎。

「おおおおおおおッッ!!」

もうもうと煙の上がるその中へ、咆哮をあげながら飛び込み

同じくこちらへと突っ込んでいた鬼が、迎え撃つように拳を振り上げる。

「つらあああああ!!」

「ウガアアアアア!!」

鬼の拳を、魔法を纏った拳で迎え撃つ。

一発の魔力砲相当の威力が込められたオレの拳が、鬼の拳とぶつかり合い。衝突点を中心とした、周囲の地面がひび割れ一帯に衝撃波が巻き起こる。

「つつ!!」

「ガアッ!!」

我が身に返って来た反動に、互いに数歩後退りながらも　　オレも、眼の前の鬼も、互いに無傷。

魔法を併用したオレと違い、単純に膂力だけでこれほどの威力を持ち、その威力に耐えうる身体を持っている目の前の存在に、つい苦笑いが浮かんでしまう。

……これがカザネ達鬼族が忌み嫌われる原因となっている、Aランクチーム相当の魔物。オーガってヤツか。

頭の角もカザネら鬼族の角に似てるし、こいつに仲間でも殺されてしまったら、鬼族に言い掛かりでもつけたくなってしまうのかもしれない。

こいつらがいる所為で、鬼族はいつまで経っても忌み嫌われてしまうぞ。

憤りを隠す事無く語っていた以前のカザネを思い出し。その実力の片鱗に素直に脅威を覚える。

しかも

「　　ッ。　　おおおおッ!？」

鬼との距離が開いた、その間隙を突くように、己に迫る無数の火炎球。

敵は眼の前の鬼だけじゃないときたもんだっ!

障壁を張り、火炎球を耐え凌いだ後すぐに疾駆する。

鬼に杖を振るい、魔力砲を放ちながらも、身体はその後方に控える

死神然とした風貌の魔物の元へ。

「まずは」

打たれ弱そうな後衛から　　というのは、戦闘のセオリーだろう。

死神の目前まで肉薄し、先ほどと同様の魔法を籠めた拳を打ち付ける。

インパクトの瞬間、解き放たれた魔法が眩い光を放ち。

「　　うっそ!？」

…それが闇色に塗りたくられた、魔力の壁に遮られていることを。拳を振り抜いた直後に知る。

どごん。とオレを追い迫っていた鬼が放った拳を横つ飛びに避けながら、ただのひ弱な後衛では収まらなかった死神に対して舌打ちする。

手応えから見ると、単発であの障壁をぶち抜くことは難しそう。単発でぶち抜けないってことは、死神に追撃を仕掛ける合間に、見た目以上に素早い鬼の攻撃は免れないってことだ。

いやいや。　流石に世の中広いなあ。　グルガの森じゃ、どっちか一体に相当しそうな魔物すらいなかった。

感慨に浸る間も与えず、襲い掛かってくる鬼の攻撃を、身のこなしと杖でいなし。

鬼に当たるとも厭わず放たれる死神の魔法を、小刻みに障壁を展開しながら防いでいく。

最も効率の良さそうな、後衛からの撃破が難しそうってことは。次善の策として地道に眼の前の鬼から倒していく、という方法が考えられるわけだけれども。

「っふ　　う！」

暴風のように荒れ狂う乱打の中を掻い潜り、鬼のどてっばらに魔力砲をぶちこもうとして

横合いから迫る火炎球に、魔法の構築を中断してその場から飛び退く。

これだもんなー！！

火炎球が鬼の足元で炸裂し、爆炎が鬼の身体を包み込むも。鬼に大したダメージが徹っている様子は無く。多少身体が煤けているくらいだ。

陽炎を纏いながらこちらに迫ってくる鬼に、再度魔力砲を放ちつつ考える。

厄介だなあ。　背後に控えてる死神だけじゃなく、オレが魔法を叩き込もうとした瞬間、鬼が拳を振りかぶっているのも視界の端に見えた。　相打ち覚悟でもこっちを殺そうとするとか、どんだけ闘争本能強いんだ。

それだけ自分の身体に自信があるってことかもしれないけれど、こいつに致命傷を与えるのは、ギガス以上にしんどそうに思える。　実際、放った魔力砲も交差させた両腕で耐え凌いでるし。

そして再び始まる、直撃をくらったらそこで終わりの鬼ごっこ。振るわれた拳の風圧だけで吹き飛ばされてしまいそうな連撃を、回避することに専念しながら事態の打開策を考える。

状況から考えるに、仲間が他の魔物片付けて、応援に来るにはそれなりに時間がかかるんだろうな。

ジンならもしかして　と思うけれど。　あいつは自分の方が片付いたなら、むしろオレのことは放置して他のフォローに回るだろうし。

ゲオルグのおっさんも、一人である巨大猿の相手をするのはキツそうなお口振りだったから、そっちに応援が回っているとしても、早々にあちらの決着が着くとは思えない。

他の連中も、他の魔物の対処で手一杯だろう。

カザネあたりは、自分達鬼族が忌み嫌われる原因となっているオーガに関しては、自分の手で倒したいと思っているだろうけれど、一旦離れてしまった以上は、今までの魔物とは桁が違うレベルの魔物の襲撃に追われているだろう。

それに、マリスを含めた皆にやこの魔物に包囲された状況から抜け出す算段も考えてもらわなきゃならん。

あー。そっぴいや今もまだ気を失ってるのかどうか知らんけど。ローザさんとミーアさんがまだ意識が無い状態なら、二人の護衛もしつつ魔物の対応をしなきゃならないんだもん。

ゲオルグのおっさんに何人が回しつつ。今後の対策を練って、襲ってくる魔物を、仲間の護衛をしつつ対応もしつつー、となると。やっぱこいつらはオレが対処するのが一番かなあ。

適当に皆が逃げる算段を思いつくまであしらって、それから逃げるのも無しだろうな。

この人数で逃げるんじゃないやあ、王国までの道程をこいつら含む魔物に追っかけられながらー、つてのは。どう考えても全員無事に戻れるとは思えない。

せめて、今襲ってきている魔物の中でも特別強そうだな、ジンが対応してる獅子型の魔物。ゲオルグさんが相手してる巨大猿。そしてオレの目の前にいる、鬼と死神型の魔物。

こいつらだけは倒しておきたい。

この連中の攻撃力を背にしたまま逃げるとか、流石に怖すぎる。

「と、なると……………」

そこまで考えて。

次の思考に移ろうとしたところで 気付く。

現状が、鬼の攻撃ばかりで、死神の魔法が先ほどから一切飛んできていないことに。

「しまっ
」

オレが気付くのと同時、周囲を包み込むように展開される魔方陣。

あまりにも多くのそれらは、オレと鬼を中心としてドーム状にオレ達を包み込み。 魔方阵の様をした壁のように映る。

咄嗟にオレが周囲に障壁を展開すると、魔方阵から魔法が放たれるのもまた、時を同じくして。

ドームの中を真っ赤にで染め上げる、大量の火炎球がオレと鬼を無差別に襲った。

「くー あああああー！」

「ガアアアア ！！！」

全方位から撃ちつけてくる炎の塊に、障壁がミシミシと悲鳴をあげる。

流石の鬼もこの集中砲火は堪えるようで、苦悶の音がオレの耳に届く。

いつ止むとも知れぬ砲撃の嵐に、次第に障壁に罅が入っていき。

拙い。このままじゃ、障壁が破られ

「 ツツツ！！？」

バキリ、と。

障壁が碎け散る音と共に、全身に爆炎が殺到し

いや、うん。認める。　　なんだかんだで魔物領舐めてた。

いい加減、ちゃんと魔法を使おう。

魔法と言うものを、以前酒と詐術に例えて適当に説明したことがあったけれども。

今回もあれと同様に例えさせてもらうならば、大量の酒　　つまり魔力があれば。

詐術のほうは適当でも世界は動いてくれるのだ。

だからこそ、オレは魔力にモノを言わせ、ほぼ溜め無しでそれなりの威力を持った魔力砲を放つことが出来ただけけれども。だが、それは決して詐術の方を軽んじているわけではない。

メインとなるのは魔力量なのは間違い無いが、更に念を入れてしっかり世界を騙すことによって、魔法はより効率的に、より強力に、より多彩に行使することが可能となる。

「……………」

死神の魔法の集中砲火によって、小さなクレーターが生まれた、魔方陣のドームの中。

ようやくに止んだ砲撃の、黒煙立ち込めるその中心地に立つ二つの影。

当然、オレと鬼の二人なのだが。

鬼の方は、流石に今の無差別攻撃には無傷ではいらなかったように。

全身から血を流し、地面に片膝を付いている。

一方、オレの方はというと。

障壁が破られた瞬間に叩き込まれた炎というよりも一つの塊としての衝撃により、幾らかのダメージは負っているものの。

周囲の酸素を焼かれた軽い酸欠と、身に纏った外套が幾らか黒ずんでいるくらいで、しっかりと両足の裏を地面につけて立っている。

新たに魔法を構築するまでの数瞬に負ったダメージで、軽く内臓が痛めつけられたのか、口内に滲んできた真っ赤な液体を地面に吐き棄てる。

一度自分の身体を見下ろし、全身が光に包まれているのを確認してから 鬼へと視線を戻す。

人並み外れた魔力量と、じーさん直伝の魔法構築技術。そしてオレの前世の記憶にある、魔力で鎧を纏うイメージによって編まれた、全身を覆う魔力障壁は、しっかりと機能しているようだ。

展開しているだけで魔力はゴリゴリ減っているものの、魔力量自体は、この戦闘を終わらせてもまだ数回戦闘するくらいの余裕はある。

「ガア、ア……ッ！」

こちらがまだ存命していることに気付いたのか。鬼がオレを睨み付けながら、ゆっくりと立ち上がる。

「カノン」

言葉に魔力を乗せて、呪文を通して、世界とオレとを接続する。杖を持たない右の拳に、白い光が灯る。

「ガ……」

力瘤が浮かび、一回りほど肥大化して見える豪腕を大きく振りかぶる鬼。

それに対して、腰溜めに右の拳を構える。

次の瞬間。

示し合わせたように、お互いの拳が繰り出され

「ガアアアアア　　ッッ！ー！」

「オオオオオオ

ツツ!!」

開幕の交差の焼き写しのように、鬼とオレの拳がぶつかり合う。

互いの渾身が込められたそれらが衝突した地点を中心に、生じた衝撃がオレ達が立っているクレーターを更に一段階深くさせ。

オレの拳を通して発動した魔法が　　鬼の腕を消し飛ばす。

「　　ツツ!?!」

至極あっさり鬼の腕を消し飛ばし、尚も衰えることなく、空へと向かって放たれる極大の白光。

あまりにも先の交差と異なる結果と、一瞬で失われた腕に、流石に鬼も驚愕したような咆哮をあげる。

「サンダーランス」

そんな鬼の隙を、見逃してやるわけもなく。

鬼へと向けて杖を翳し、呪文を唱える。

オレの詠唱に応えた世界が、現象として眼の前に顕現し。

1000ギガワットにも及ぶ、天から降り注ぐ雷そのものの威力を内包した槍が、杖の先に浮かぶ。

杖の一振りと共に、それは眼の前の標的へ向かって射出され。

「　　ガッ、ガアアアア!?!」

防御行動として割り込ませた、鬼の残った片腕ごと、胴を貫き、鬼の身体を焼き尽くす天の雷。
ぽっかりと割り貫かれた鬼の腹部を中心として、肉の焼き焦げた匂いがあたりに充満する。

身体の一部を炭化させながら、立った姿勢のまま。一瞬で絶命した鬼の様子を確認し、次の標的　　死神へと目を向けるオレ。

オレが鬼を倒している間に、あちらは次の魔法を構築していたよう
で。　　再び死神の周囲に、幾つもの魔方陣が浮かんでいるのが見え
る。

そこから射出される、バカの二つ覚えのような火炎球の集団に、こ
ちらから飛び込むようにして突っ込んでいき。

障壁により傷一つ無いオレの姿を見て、フードの奥の人魂のよ
うな青白い瞳が揺らぐのを見ながら、再度呪文を詠唱する。

「カノン」

先程鬼の腕を消し飛ばした、白光に包まれた拳を死神へと突き出し。

「……………」

闇色の障壁を展開し、死神がその拳を受け止める。
直後、射出される極大の閃光。

強靱なオーガの腕すら消し飛ばした、詠唱付きのオレの一撃を、障
壁をぼろぼろにしながらも何とか受け止める死神。

それに僅かに驚いて目を開きつつも 続いて杖を握った腕を振るう。

「これも受け止めるとはなあ」

バチバチ、と杖の先から、稲妻で構成された剣が形成される。

「ライトニングセイバー」

オレの身長ほどもある大剣を、柄となった杖を握り締め 横薙ぎに振るい。

再度展開された死神の障壁とぶち当たり、一瞬の拮抗の後 死神の胸を真つ二つに両断した。 死間髪入れず、返す刀で死神の頭蓋に雷光の剣を突き刺し、剣に込められた魔力を解放。

自然現象の中でも最たる脅威の一つに連なる威力を内包した大剣が、死神の頭蓋で爆裂し。

文字通り、塵一つ残さず 白骨の魔物を焼き尽くす。

「……………」

剣を振るった体勢のまま残心。 白骨死体の癖して動く魔物であるからして、どうやったらくたばるのかわからるので、念のため跡形も無く消し去ることを選択したけれどー

どうやら流石に全て消し飛ばせば、倒しきることに成功したようで。死神が消滅した、雷撃の影響で黒く焼け焦げた地面をしばらく見詰

めてから、ふう、と息を吐く。

念のため鬼がくたばっている筈のクレーターの方も確認。
あちらも間違い無く死んでいるようだ。 目を向けた瞬間、風に流
され音を立てて倒れる鬼の焼死体の姿が見えた。

「ふいー」

戦闘が終わり。多少気が抜けて息を吐きながら首を回すオレ。
今まで魔物相手なんて魔力砲だけで充分だったから、久しぶりの呪
文詠唱にやや気疲れしているのを感じる。

呪文使ったのとか、グルガの森でグルやジンとケンカした時以来だ
わ。

……それに口に出して呪文唱えるとか、なんか気恥ずかしくて嫌な
んだよなあ。

辺りを見回すと、オレ達が戦っていた周囲に魔物の姿は無く。
というか、戦いの余波に巻き込まれたのか。 火に焼かれてたり、
衝撃波に押し潰されたようにひしゃげている魔物がちらほらと転が
っており。

いないというより、いなくなったのか。と理解する。

身に纏っていた障壁を解いて、メリメリ減っていた魔力の消費を抑
えつつ。

他の皆はどうなってるのかと、馬車の方に視線を向けた。

多少距離があって見え難いが、遠目に炸裂する魔法やら、巻

き上がる砂塵やらを確認。

流石に今回は少々魔力を消耗したので、少し休みたい気分だけれども、状況的にそうは言っていられないだろう。

愚図る身体を叱咤して、杖を肩に担ぎながら皆の元へと向かうオレ。

パツと見厄介そうだった、四体の魔物の内、二体は撃破か。

あとの二体　ジンのとこの獅子と、ゲオルグさんとこの巨大猿はどうなったんかな。

あの二人が易々と負けるとは思えないけれど。まだ片付いていないようならば、もうひと踏ん張りしなくちゃならない。

先のことも考えると、ここであまり魔力も消費したくないし。　既に片付いてるといいなあー　なんて。

そんなことを考えながら、仲間の下へと歩いていくのだった。

第24話 下山

近寄ってくる魔物を魔力砲で薙ぎ払いながら、仲間の下へと戻っていくと。

彼らがいる場所で、横倒しになっていた馬車が立ち直り、馬車に馬が繋がれていた。

その馬車を中心にして、円陣を組んで戦っているランスロット達の下へと向かうオレ。

「おーい」

「！？ オーガとリッチを相手に交戦している、と聞いたが」

あ、リッチって言うんだ。あの白骨死体。

「はい。 あっちは片付いたんで、戻って来たんですけど」

「 倒したのか」

ランスロットを含め、馬車を守っていた面々が信じ難いものを見るような目でこちらを見てきた。

そんな顔されてもなあ。

単独でオーガとリッチを倒したという事実を、どうにも信じきれない様子の面々だったが、それでも遠目ながらどこかんどかんやってる様子とかは見えていたらしく。

なによりこうしてオレが戻ってきていることが一番の証明になったようで、とりあえず信じてもらえた。

円の中から飛び出してきた力ザネに手を両手でぎゅ、とかされつつ。この場にはいない仲間　恐らく、巨大猿とバトってるであろう、ゲオルグのおっさんやケイムスさん、ミアさん、の三人はどんな感じなのか、彼らを探してみると。オレが来た方向とは反対側、おっさんが巨大猿と開戦した場所に程近いところで、巨大猿と戦っている三人の姿が見えた。

あちらもどうやら終局間近だったらしく、ケイムスさんが放った風の魔法が巨大猿を牽制、その隙にミアさんがロープを足に引っかけ、転んだ巨大猿の脳天にゲオルグのおっさんが槌を打ち落としているのが見えた。

大槌に頭を潰され、脳漿をぶちまける巨大猿。

流石にこれは決まっただろう、流れるような連携攻撃に感心しつつ。

ランスロットへと再び目を向ける。

「あっちも何とかなっ たみたいですね。　この後の方針とかはどんな具合に？」

「のようだな。　援護に行く前のケイムスらと話し合った結果、この場は放棄して撤退することにした。　幸い、馬車も積荷はダメになった物が多いが、幌自体は無事で、馬も怪我の無かった二頭を既に繋ぎ直してある」

「あとは、ランクの高い厄介そうな魔物を順次片付けてから、皆で馬車に乗って撤退する予定だね。　とりあえずゲオ兄のとの魔物を片付けたら、おっつけでアベル君のとのこと、ジン君のとの応援に向かって　って感じだったんだけど」

「こっちが想定以上に早く片付いちゃったと。」

「そっいゃ、ジ

ンの方は？」

どうなってるんだろ。

ランスロットとクラウスさんの説明に頷きつつ。獅子っぽげな魔物と戦っていた筈の、ジンの姿を探す。

あいつのことだから大丈夫だろうけども、意外と手間取ったりしてるんだろか。

ジンの姿を探してきよろきよろと周囲を見回すオレに、オレの手を握って俯いていたカザネが顔を上げる。

「ジンなら……ほら、後ろ」

「うん？」

カザネの声に振り向くと、少し離れたところでジンより一回りほど小さい犬型の魔物、ガルムの喉笛を噛み千切っているジンと目が合った。

自慢の白い毛並みは、所々血で真っ赤に汚れているが、その全てが返り血のようで、特に怪我を負っている様子は無い。

「アベルが戻ってくる少し前に戻ってきてな。アベルの援護に行ってもらえるよう頼んだんだが、ああして他のランクの高い魔物を倒しに向かっていつてしまった」

カザネはオレの援護に向かってくれなかったジンに多少不満のある口振りだったが、流石オレの相棒。よくわかってる。

「ああ、ジンならオレがそうそう負ける筈無いつて知ってるしな。あっちのが良いつて判断したんだろ」

オレの姿を認めて、こちらへと歩み寄ってきたジンの喉下を撫でてやる。よしよしよし、えらいえらい。

ゴロゴロ嬉しそうに喉を鳴らすジンと、それを見て、対照的に珍しくちょっと不満げに眉根を寄せるカザネ。

「そうは言うがな。アベルの実力をまだ測りきれしていないこちらとしては、さっきまでとても心配していたんだぞ」

「つつても緊急事態だったし、しょうがないだろ。あの場で説明する時間も無かったしな」

口で説明して納得できるもんでもないだろし。オレの返答に、手を握る力が強くなるカザネ。

「本当に　心配だったんだ……」

「……………」

俯いたまま、そう呟くカザネの頭を、ジンを撫でていた手でぼんぼん叩く。

この世界に生まれてから心配なんて滅多にされたことなかったのだから、ここまで真剣そうに心配されると、何と言っていいのかわからなくなる。

むず痒い感情が胸中を埋め尽くして、どうしたもんか　とカザネの頭を撫でながら悩んでいると。

こちらへと戻ってきたおっさん達が、既に合流していたオレ達の姿を見つけて声をかけてくる。

「おう、テメエの方もうまくやったみてえだな」

「うまく　で済ませていい問題では無い気もするんですけどね。
…正直、こちらが片付くまで持ち堪えていただければ御の字だと思っていました」

戻って来たおっさんの姿は所々傷付き、鎧の胸当ての部分なんかはべっこり鎧がへこんでいた。

特に動きに支障があるようでも、辛そうな様子でもないが、鋼鉄製の鎧がへこむ程のダメージを受けて、やせ我慢にしろ素にしろ問題無さそうに見えるこのおっさんも、人間としてアレな部類だな、と思っただ。

ケイムスさんとミアさんは、所々服が破けていたりするものの、これといった怪我はないようだった。相変わらずケイムスさんの片目が充血したままだけれども、それは戦闘前からのことなので、ほぼ無傷と言ってもいいだろう。

他の面々も、流石にちらほら怪我をした人もいるようだが、行動不能に陥るほどの人はいないようで、とりあえず全員無事、と言ってもよさそうな状況だった。

「流石に一瞬ひやっとするところもありましたけどね。　まあ、なんとか」

「ひやっ、で済むものでもニヤイと思うけどニヤ、聞く限りの状況ニヤと」

「色々お聞きしたいことが出てきましたが　　ウインドカッター。
…とりあえずは、この場を脱出することが優先ですね」

「ですね。　まあ、絶対に隠さなくちゃならないことでもないですし、諸々のことは、落ち着いたら、で」

ちなみにこうして話してる間にも、オレやケイムスさんなんかは魔法で、ゲオルグのおっさんは拳で、ミアさんは鋼糸つばい糸で魔物を倒しながら話している。

カザネもおっさん達が戻って来た辺りで色々落ち着いたのか、既に戦列に戻って魔物と戦っている。

そうしてこちらの会話が一段落したところで、魔物の包囲網からの脱出作戦が開始される。

とはいっても、作戦と言うほどの内容でもなく。単純に積荷を全部棄てた馬車に、必要最低限の物だけ持った皆が乗って、オレ達が登って来たルートを使って強行突破で下山、という単純なモノ。

残っているのは雑魚ばかりとはいえ、魔物はまだちょこちょこ湧いてきているし。いつまたオーガとかそういったクラスの魔物が現れるかもわからない。

代案も思い浮かばなかったんで、すぱつと依頼のことは諦めて。二つ返事で既に用意の整っていた馬車に乗り込むのだった。

「魔物の侵攻が始まっている可能性があります」

来た道をそのまま逆走して、山の麓目指してひた走る馬車の中で、ケイムスさんがそう言って口を開く。

「魔物の侵攻？」

がたんがたん揺れる幌の中で、なんとか尻に負担がかからないポジションを探して何度か座り直しながら、鸚鵡返しにケイムスさんに尋ねるオレ。

ちなみに、山頂付近の魔物の包囲は一点突破で抜け出したものの、帰り道に魔物がないなんて、そんな甘い話があるわけもなく。今は馬がダメにならない程度の速度で走りつつ、何人かが下車して進行先の魔物の露払いと馬車の護衛。彼らが疲れてきたら馬車の面子と交代してー、という感じに、可及的速やかな帰還を目指した強行軍を行っている。

何故こんな負担のかかる移動をしているのかというと、粗方の物資を山頂に置いてきてしまった為に、魔物領でこれ以上連泊するのは心許ない、というのが一点。

次に、明らかに通常の魔物領と比べてもおかしなことが起きているので、多少の無理をしても早く、一応の安全圏である、王国に戻っておきたいというのが一点。

最後に、ケイムスさん達が魔物領の状況から予測した、最悪の事態が起きる可能性を、出来る限り早く国境の騎士団へと伝えておきたい、という理由が挙げられる。

「まあ、最後の理由に関しましては、既に国境にも魔物が迫っている、偶然我々の居たポイントに魔物が密集しただけ。などといた可能性も考えられますので、念のため、といった程度ですが」

肩を竦めながらそう言うケイムスさん。

魔物の侵攻つついたら、アレか。　　じーさんが英雄と呼ばれる切欠

になった大侵攻のことか。

じーさんの時以来、もう何十年と起きていなかったとか聞いてるけど、そんな大変なことが今起きてるんだらうか。そう疑問に思っけて口に出してみる。

「40年ほど前の、大侵攻と呼べる規模かは分かりませんが、ね。

魔物の侵攻が始まる原因は未だ説明されていませんから、今再び起きたとしても、然程不思議ではありません」

「遠いガズーン皇国じゃ、10年ほど前に大侵攻に見舞われてるらしいしな。

大規模侵攻ほどの規模じゃないにしろ、小規模な魔物の侵攻はこの国でもちらほら起きてるぞ」

オレの疑問に答えてくれるケイムスさんやドルトムントさんの話を聞きつつ。

幌の帳をちよろつと開いて馬車の前方を覗いてみる。

御者台からはローザさんが矢を撃ち放ち、馬車の前方では、ランスロットやクラウスさんが近寄ってくる魔物を牽制したり斬ったりしては、馬車の進行ルートを確保している。

「魔物領って、常時こんなもんだと思っけてたんですけど　　侵攻が予想されるくらいの状態なんですか？今って」

さっきの山頂の襲撃はともかくとしても、現状は雑魚ばつかみただし、これくらいはデフォじゃないかと思っけてよ、オレ。

「ゲオルグも時折似たような勘違いをするのですが……我々は一応、

ギルドの中でも上位にあたるAクラスのチームなんですよ？ アベ
ルくんたちも、ランスロット殿も常人では及びもつかない強さを持
っている。

実際今回の依頼、我々の2チームでなく、普通のBクラスと、B
クラス志望のCクラスの2チームでしたら、全滅していた可能性が
あります」

「今襲ってきている魔物も、Cクラスのチームじゃ多少てこずりそ
うな魔物がちらほら見えるしな。

自分の尺度でモノを考えるのは好ましくない」

「成る程」

呆れた風に溜息を吐くケイムさんと、腕を組むドルトムントさん。
それに頷きつつ、そっぴりや本当ならBランクのチームと一緒に行く
筈だったんだっけ、この依頼。

Aになってそれほど時間が経ってないとはいえ、より上位のチーム
であるバリエッタと、ふざけた性能持ちのオレとジン。

確かに本来Bクラスの随伴で、CからBへの昇級試験も兼ねての依
頼だと考えるとしたら、なんともこの状況は厳しいものがある。

ってーことはやっぱり異常事態なんだろうなあ。試験代わりにしち
やキツ過ぎだろ、コレ。

うんうん何度か頷いて納得していると、御者席の幕が開いて、ロー
ザさんが顔を覗かせる。

「悪いんだけど、そろそろ交代お願い。それとケイムス、ミー
アが帰って来たわよ」

「わかった」

「了解です」

「わかりました。ミリアに幌の中に戻るようにと」

各々返事をして動き出すオレら。

前衛の誰かしらと交代しに馬車を降りるドルトムントさんとは別に、オレは幌の上で固定砲台をしているマリスと交代しに幌をよじ登る。主に前方よりも後方や横合いから迫ろうとする魔物に対して魔法をぶっ放してるマリスに、交代の旨を告げる。

「マリスー、交代しに来たー」

「……っ。 ……了解しました」

背後から声をかけられて、ビクッと肩を震わせるマリス。

振り向いた先に居たオレの姿に、ほう、と息を吐きながら返事を返してくる。

心なしか狐耳をへこたれさせながら肩で息をしている様子に、コイツ疲れてんなー、と思った。

「お疲れさん。中で少しでも休んどけよ」

「そうさせてもらいます。 ……っ」

「 ……っ。 本当にキツそうだなおい」

額いて幌の上から降りようとして、ふらっと崩れ落ちかけるマリス。慌てて抱き寄せつつ、思っていた以上に疲労している様子に少し驚く。

「…すみません。これでも、そこらの冒険者よりは体力があると思
っていたのですが……」

疲労のピークってヤツなんだろう。そういやあんましくよく寝れて
なかったみたいだしなあ。

「あんまし無理すんなよな。それが原因でトチったらお前がやられ
るだけじゃ済まないんだし」

「分かっていきます。課せられた役割だけは何が何でもこなして
みせますから」

そうじゃなくて。

「じゃなくて。キツイと思ったらオレとかに頼れってこと。バリエ
ッタの連中には言い難いかもしれんけど、オレやカザネ、オリガさ
ん辺りならまだ言い易いだろ。オレならマリスの代役も務まるし」

「ですが……」

「そういうもんだろ、仲間って」

「……………」

変なモノを見るような感じで、目を広げてこっちを見てくるマリス。
あれ、なんか外した感じなんだろうか。

オレの発言には触れず、一言礼を言って幌の中へと去っていくのを見
送りつつ、腕を組む。

もう仲間みたいなものだと思つてたんだけどなあ、オレとしては。

なんかやつちまった感を覚えたりしつつ、気を取り直して魔物の掃討に励む。

やっぱり山頂で戦つたレベルの魔物なんてのは早々いないみたいで、大概の魔物が魔力砲一発で薙がれていく。馬車に追いつきそうな後方の魔物をそうして薙ぎ払いつつ、前線の方をちらつと見ると、あちらも問題は無さそうだった。

ミーアさんとの偵察から帰つて来たのか、ジンも戦列に加わつてることだし。前線はほぼ安泰だろう。

とはいえ、ちよつとこのまま強行軍するのはちよつと怖いなあ。

パツと見マリスほどじゃないにしろ、全員疲労の色が隠せてない様子だったし。このままぶつ続けて突っ走つても行けるかもしれないが、ふとした拍子にとんでもないミスが起きるかもしれない。オレだつて別に疲れていないわけじゃないしなあ。

行きの倍近い速度で下山しつつ、先行きに多少の不安を感じずにはられないオレだった。

山下りたらここまでじゃなくなるのかもしれないけど、それも分からないしなあ。

むしろケイムスさんの最悪の予想が当たっていたら、今と同じかそれ以上にキツイ状況になる可能性もある。

どうすっかな。

「いや」

どうにかするか。

とりあえずは山下りてからだな。ここじゃちっと見晴らし悪すぎる。幌の上で魔物をあしらいながら、もう一頑張りすることを決意するオレだった。

第25話 一難去って

どうにかこうにか山から下りて、平野部までやってきた俺ら。流石に突然の強襲からの連戦続きで、皆疲労の色が濃いように見える。

特に旅慣れしてないマリスや、移動しながらの戦闘を行っていた前衛組の消耗が激しく、山を下りた頃には深手とまではいかないものの、全員それなりに傷を増やしていた。

「 つつても、後衛組に余裕があるってわけでもないしなあ」

マリスは言わずもがな、ケイムスさんも魔法連発して魔力が磨り減ってきたのか、息切れしてるし、ローザさんも矢を放ちすぎて手が傷だらけになっている。

何より後衛の数自体少ないしなあ。

未だ余裕がありそうなのは、上手に魔法と格闘を併用して消耗を抑え続けてたっぽいクラウスさんと、なんかもう身体の作りがそこらの人とは格が違いそうなゲオルグのおっさん。

それと表情に出さないようにしてるだけなのかもしれないけれど、疲れた様子は見せていないランスロットに、オレとジンといった具合か。

「 というわけで、どうします。アレ」

「 どうする。と言われてもなあ……」

「どうするもこうするもないだろう。どうにしなければいけないだけだ」

「……クソ、タバコ切れやがった」

周囲の魔物の攻勢が少し落ち着いてきたので、疲労の色が濃い面子は馬車に押し込み、少しペースを緩めながら先に述べた、まだ余裕がある面々を中心に、馬車を護衛しながら歩いてきたオレら。

山中の勢いは流石に魔物が密集していた所為でもあったよう、山を下りてしばらくは多少ゆとりのある進行が出来ていた。のだが。

「なんか、壁みたいだなあ……」

襲ってくる魔物を千切っては投げ千切っては投げ、ようやく、頑張れば今日が終わるまでには国境に着くかな、といったところまで歩いてきたオレらの前に、それは何の気なく現れた。

魔物領に入った当初に、遠目からでもはっきり分かる魔物の群れを黒い塊のように例えたが。

今、オレ達の視線の先にあるのは塊どころじゃない。王国と魔物領とを隔てる城壁のような、一分の隙も見当たらない黒い壁が遠くに見えていた。

本来ならそろそろ国境の証である王国の城壁とかが見えてもいい頃合なのに、魔物の群れの所為で全く見えやしない。

「ケイムスの最悪の想定が当たってたみたいだな。こりゃ、既に始まってるとばいな」

「ティグルスを含む国境防衛隊も、最近の魔物の動向に警戒は強めていた。そう易々と落とされはしないだろうが……」

「……果たしてこれがどの程度の規模なのか　ですよねえ、問題は。大侵攻なのかどうなのか。一番の問題は俺達がどうやって王国に戻るかだけだ。…ゲオ兄、アレ全部消し飛ばせない？」

「ざけんな。あの数じゃオレの身体が先にイカれる。　最後の手段だな」

「山下りた時と同じように、全員で一点突破で切り裂きながら進むつてのは？」

拳手しながら提案してみるオレ。

クラウスさんが糸目を垂れさせながら首を傾げた。

「無理……かな。　今はあの時以上に皆消耗してるし、国境までまだ大分距離がある。　更には平地っていうのがキツいなあ。数の利が思いつきり生きてしまっ」

「ミアに偵察頼む意味が無さそうなくらいの規模だしなあ、アレ。手薄なとこなんてねーだろ」

映画とかでしか見たことのないような大軍勢だもんなあ。

幸いなのは、意思を持った集団じゃなさそうってことか。　とりあえずスペースのあるところに向かってる、って感じがする。　じわじわこっちの方にも迫ってきてるし。

別に王国に攻め入りにきてる、ってわけじゃねえのかな。　こっちはむしろ魔物領に戻るコースだし。

「つつつても、ここでいつまでも突っ立ってるわけにも、ですよね」

「そりゃそうだがな」

四人でそれぞれ腕組んだり、頬をかいたり、魔物の群れを見詰めた
り肩回したりしつつ、どうしたもんか頭を悩ませていると、馬車の
動きが止まったことを訝しく感じたのか、幌の中からケイムスさん
が顔を出す。

「どうかしましたか」

「まあ、どうかしてるな」

ひよこつと帳の中から顔を出した直後、遙か前方に見える黒い壁に
絶句するケイムスさんと、そんなケイムスさんに沈着に言葉を返す、
馬車の御者を勤めていたドルトムントさん。
それを見てゲオルグさんがガシガシ頭をかきながらケイムスさんに
声をかける。

「あんな感じになってんだよ。ケイムス、なんか手はあるか？」

「……何か、と言われなくても 最もよくないパターンとして、
コレは想定していましたが、むしろ、この状況にならない為に強行
してでも早く戻ろうとしていたんですけどね」

何度か確認するように瞬いてから、溜息と共にそう零すケイムスさ
ん。

彼に続いて、他の仲間もぞろぞろと幌の中から顔を出し、先の様子
を見ては、各々驚いた表情なり仕草を見せている。

つまり、この状況での有効な一手なんてのは、今のところ無いって
わけか。

どうにも行き詰まったっぽい状況に、場に重い空気が満ちていく。バリエツタ側に有効策は無しか。となると次はこっちから案を出したいところだけれど。

少し気になったことがあったので、ランスロットに聞いてみる。

「王国の国境線覆い尽くす勢いで魔物が群がってますけど、あいつら、どっから来たんですかね。オレ達が居た山付近は、流石にあそこまでの数通っちゃいないと思うんですけど」

「王国の調査によるとだな。大体魔物が魔物領からやってくるルートはほぼどんな魔物でも一緒らしく、一定の方角から一定のルートを辿って王国までやってくる魔物がほとんどらしい。」

そして、あの山はそのルートから外れていた。比較的魔物の数が控えめだからあの場所に次の拠点を作ろう、という話になっていたらしい。

やつらはそのルートからやってきたんだろう」

「へええ」

そんな事情があったのか。

なんで毎回その方角、そのルートからやってきているのか、ってのは、魔物がやってくる場所の元を確認した人が誰もいないので、わからないらしい。

長い歴史を持つ王国の経験則的に、とりあえず魔物はその方角から主に来る、とだけ分かっているのだとか。

「てことは、今見える感じだと規模は尋常じゃなくでかいですけど、あの群れ倒したら終わりー、といった風にオレには見えるんですが。そのルートから後続の魔物もバンバン来てる可能性があるってことですか？」

「そうだな。」

だが」

「？」

「恐らくではあるが、今回の襲撃は大規模侵攻、といった程の規模ではないだろう。聞いた話では、40年前の大規模侵攻の際は、魔物の群れが魔物領を隙間無く埋め尽くしていた程だったと聞く。

まだ一応、我々の辺りまで席卷する、といった程ではないからな」

今の比じゃないのか、大侵攻、

いや、流星にそれは話をした人の誇張も混ざってるとは思うけれど。

でも、確かにこの規模じゃ国境は突破されたとしても、あの堅牢な城壁を誇る王都が陥落するとは、どうにも思えないな。

「だからといって大丈夫とも言えないけどね」

「そうだな。山で現れたグサルガレオやオーガといった程度の魔物が頻発した場合、相当な被害が予想されるだろう。そうでなくとも、ギガスなどであれば、強力な個体の場合それ単体で城壁を破壊しうる力を持つしな」

ちら、とオレの方を見ながら注釈を加えるランスロット。

アレか、以前オレが倒したギガスのことを言ってるのか。

あれだけでかい魔物なら、こっからでもはつきり姿が見えそうなものだけど、とりあえず見回した範囲じゃそんな巨大な魔物の姿は見えない。

とはいえ、ランスロット達が言いたいのはそういった危険な魔物が

いるかどうかじゃなくて、大規模侵攻じゃないとしても安心なんかとてもできないよ、ってことだろう。

「やっぱ心配だったりします?」

主に王女様のこととか。

「当然だ。このような危急の時に傍にいてこそ、近衛だ」

やっぱ心配なのか。

口調自体は平坦だけど、どこかイライラした雰囲気、口調の節々から感じ取れる。

さっさと王女様の元に戻りたいけど、この状況じゃあさっさと、なんてわけにはいかないもんなあ。

そういう言ってる間にも、じわじわとこちらの付近にまで手を伸ばそうとしてくる魔物の群れを眺めて、担いだ杖で軽く肩を叩いてからジンを呼ぶ。

「おーい、ジン」

のそのそオレの傍まで歩み寄ってくるジン。

首元を一度撫で上げてから、ジンの背中に乗る。

座る位置を微調整して、丁度いい座り心地の場所を見つけてから、ジンの上で軽く腰を捻って準備運動。

「アベルくん? どうしたんだい?」

「何してんだクソガキ」

ケイムスさんと何やら話し合っていた、クラウドさんとゲオルグさんが声をかけてくる。

それに杖の握りを確かめながら答えるオレ。

「ちょっとあいつら、片付けてみようかと」

少し待ってみたけれど、バリエッタ側としては今のところ良い打開策ってのは思い浮かばないみたいだし。

このままだったら話しても良い案出そうに無い、オレがやるのが一番手っ取り早い気がするんだ。

「いくらオーガとリッチを倒した君でも、流石に無謀すぎる」

「だな。ガキがそんな無理すんじゃないやねえよ、ケイムスがすぐに良い手考えるからもうちょい待ってる」

「まあまあ、無理そうだったら逃げ帰ってきますから」

当然、急にそんなこと言ったって、すんなり賛同してもらえるわけもなく。

オレの投じた一石によって馬車の中に居た面々まで下りてきて、主にバリエッタのメンバーに引き止められることになった。

とはいえ、オレとしては現状これが一番の最善手だと思つので、とりあえずやってみたいと主張する。

他の面々は、カザネは最早オレのやることについては色々諦めて
いるのか、呆れたような顔で溜息を吐きつつも特に何も言わず。

マリスとランスロットは、オレとバリエッタの会話を黙って聞いて
いたのだけれど、オレとバリエッタの会話が平行線のまま、一度会
話が途切れたところを見計らつたように、ランスロットが口を開い
た。

「本当に大丈夫なのか？」

腕を組みながら話を聞いていたランスロットが、こちらを計るよう
にじつと見詰めてくる。

「大丈夫だと思いますよ。たぶん」

「……あなたはそればかりですね」

頷くオレと、オレの適当な返答に半目でこっちを見てくるマリス。

ですが、と。マリスが続けて口を開き。

「今のところ彼はやると言ったことは全て成し遂げています。私
としては、試すだけなら試してみても良いのではないかと」

反対一色だと思ってたけれど、予想外に賛同してくれるマリスに驚
く。

カザネも做うように首肯して、賛同の意を告げる。

「だな。 それにアベル一人ならともかく、ジンもいる。 もし

何とかならなくても、戻ってくるだけなら可能だろう」

この依頼中、ミアさんと一緒に東奔西走、偵察にひたすら走り回って、それでも尚全くバテる様子の無かったジンに騎乗して、というのは、バリエッタの面々に対してもそれなりの説得力を持っていたらしく。

可否はともかくとしてやってみるだけなら大丈夫なんじゃないか、という意見がミアさんを中心にバリエッタの面々に広がっていく。「とは言いまして、私としてはアベル君の実力が計りきれない以上、現状の貴重な主戦力であるアベル君には、なるべく消耗を避けたいところなのですが……」

「失敗して、アルベルトが消耗してしばらく使い物にならなくなつたとなればこの状況から脱出するのはいよいよ絶望的になつてくるぞ」

場に流れ始めた空気に流されることなく、慎重な意見を述べるケイムさんとドルトムントさん。

確かにその気持ちもわかる。いくらすさまじく仕事ができるからって、会社の命運をかけたプロジェクトをペーパーの新社員に任せたくはないよな。

「まあ、口でいくら言ったところで　ですよね。　なら、これならどうですかね」

ケイムスさんらの言い分も分かるが、このままだと堂々巡りのぐだぐだとした話し合いが続きそうに思えたので、ジンに乗ったまま、皆から少し離れて、両手で杖を握り締めるオレ。

場の視線がオレに集まるのを感じつつ、杖に魔力を込めていく。普段よりも強く、強く、強く。

集めた魔力の大きさに、大気が悲鳴を上げ、周囲に風が巻き起こる。

「何を」

「……ぐツ、これは……！」

「なんて、馬鹿げた魔力」

オレを中心に吹き始めた風に訝しげに声を上げるドルトムントさん。集う魔力を感じ取れる魔法使い組は、込められた魔力の大きさに顔を引き攣らせながらこちらを見ている。

それらの声を無視して、込めた魔力を編みこみ世界を騙り、オレの望んだカタチを世界に具現化させていく。

「ライトニングセイバー」

作り上げるのは、死神型の魔物と戦った時と同様の、雷光の剣。

が。込められた魔力に比例して剣の大きさも巨大化し、剣と呼ぶの間違っているような、7、8 m程の巨大な雷鳴が、杖の先から天に向かって伸び上がる。

流石に扱う魔力の量が大きすぎて、完全に剣の形は象れずバチバチと剣のあちこちから放電現象が発生しているが、まあ拘って剣の形にする必要があるわけでもなし、こんなもんでいいだろ。

ふう、と息を吐きながら、剣を具現化させ続ける為に魔力を垂れ流しつつ、啞然とした顔でこちらを見ている仲間の面々に顔を向ける。

「とりあえず、これで薙ぎ払ってこようかと」

不用意に振り回すと周りが大変なことになってしまったため、剣を両手で握ったまま顔だけ皆に向けるオレ。

「なんと……」

「すみません　もう少し離れてもらえますか。　ちょっと魔力がキツイです」

こうして形状を維持してるだけでもバリバリ魔力を放ってる所為か、少し苦しげにマリスが言い放ったのを聞いて、ジンに皆からもう少し遠ざかってもらいつつ。

オレが作り出した魔法剣を見て、ランスロットが両目を見開いてこちらへと目を向けた。

「魔法剣か……！」

「できない、とは言っていないですよね確か」

じーさんも使ってたらしい、この魔法。

実際じーさんと組み手する時はこんなバカでかい剣の魔法なんて使ったことないけれど、普通のサイズの剣の魔法ならば何度か組み手で切り結んだことがある。

きっと大量の魔物相手に戦うならこんな感じにするんだらうなあ、と予想して作り上げてみたけれど、ランスロットの反応を見るに予想は当たっていたらしい。

しかし杖でブーストしなけりゃオレでもキツイな、この魔法。

重さ自体は元々の杖の重さと殆ど変わらないそれをゆらゆら振ってから、片手で杖を握って、離れた方の手で皆に手を振るう。

「したら、行つてきます。斬り開いた道通れそうだったら馬車で追っかけてください」

「ちよつ、おい！」

「気をつけてな、アベル」

「はいよ、カザネもオレがいないからって、怪我するんじゃないぞ何か聞いたそうなゲオルグさんを無視して、カザネに一言告げてから、ジンに頼んで魔物の群れへと向かっていく。馬車から充分に離れたところで剣を水平に構え、次第に歩みを早くしていくジンの胸を両の腿でしっかりと締め付ける。

「そろそろ魔物領には飽きてきたしな。さつさとこいつら片付けてマークアの飯食いに帰ろうぜ、ジン」

「がっ」

一声鳴いて返事をするジンに笑みを浮かべて、徐々に迫ってくる黒い壁の集団に向け、思い切り腰を捻る。振りかぶると同時、剣に込める魔力を一時的にブースト。眩いばかりに雷光の剣が稲光を放ち

「つくぞおおおおおー!!」

「 グルアアアアアア！」

一閃。

視界に映る魔物を斬り伏せて、魔物の群れの中へとオレ達は突っ込んでいった。

第26話 群れと個

剣の一振りによって、眼前の魔物の壁がまるで紙のように引き裂かれていく。

一万度をゆうに越える、プラズマが発生するほどの熱を帯びた剣は直撃を免れたとしても、ただ刃が掠めただけで魔物たちを炭化させていく。

前方十メートルほどの魔物が犇く空間を、扇状に焼き払い、空いたスペースに向かって突っ込みながら返す刀でもう一度。

「もういつちよおおおツツ!!」

「グルアアアア　!!!」

炭と化した魔物の群れを踏み砕き、ジンが更に続く群れの中へと突入していく。

突如やってきた災厄に魔物たちは成す術なく蹂躪されていき、また気付いたとしても魔物同士が密集し過ぎたその空間では逃げようがないのだろう。

避けることも防ぐことも許されない災害のような突進は、平野一帯を埋め尽くしていた群れに大きな風穴を抉じ開け、剣の間合いである半径10m以内の絶対領域に存在してしまった魔物達の命が次々と刈り取られていく。

自然界最強の災厄を纏った剣の前では、魔物のランクなどというものは関係無く、駆け出しの冒険者でも容易に倒せるであろう魔物も、

高位の冒険者が細心の注意を払って当たらねばならぬであろう魔物も等しく仲良く、遍く全てを一緒くたに薙ぎ払う。

無人の野を行くが如く繰り広げられる進撃に、前方の魔物はそのほとんどもオレに気付くことすらなく屠られていき、後方の魔物は全力で駆け抜けるジンの速度に追いつけない。

途中、地上を中心に突き進むオレの攻撃を免れた、空を舞う怪鳥や、飛竜のようなものが攻撃をしかけてくることもあったが。

「　　グギヤ!?!」

「ギョグツ!?!」

オレたちに対して急降下突撃をしかけようとする、空を舞う魔物の悉くが、途中で見えない壁にでも阻まれたかのように急停止し、或いは地上に墜落していく。

ジンが王天虎としての、嵐を操る力を用いて魔物の接近を許さないからだ。

ジンの展開している大気の壁が強固な盾となり、魔物たちの僅かばかりの反撃も許さない。

常時この剣の魔法を維持する以上、魔力も集中力も剣の維持に裂かれてどうしてもオレ単独だと守りが疎かになつてしまふのだけれど。ジンという強力な相棒に騎乗することで、その欠点は補われる。

攻撃はオレが担当するから、ジンは安心して守りの為だけに己の能力を使えるし、オレもジンなら確実に守ってくれると信じているから、気兼ね無く安心して剣を振るえる。

そんじよそこらの手合いじゃ防ぐことの許されない雷光の剣と、ま

ず近寄ることから困難な嵐の盾。

最強の矛と盾を備えたオレたちを止められる者は、どうやらこの群れの中にはいないようだった。

途中で駆け抜け過ぎて、馬車を遙か後方に忘れてきてしまったことに気づき、一旦引き返したりなどしつづ。

オレとジンが斬り開いた道を、他の仲間を載せた馬車が走って追いかける。

一振り半径10mにも及ぶ空間を斬り取られた魔物の群れは、いくら多勢と言えど即座にその穴を埋めることは出来ず。

また、魔物にも恐怖というものはあるのか、無数の魔物であった炭が転がるその空間へと足を踏み入れる魔物の勢いは、どこか弱い。まあ、それでも突っ込んでくる魔物というのもいるにはいるけれど、多少の魔物程度ならば馬車に控えているゲオルグさん達で充分に対応できている。

このまま行けそうだったので、オレとジンで露払いを務めて国境へと進んでいく。

体感で大体20kmくらい進んだかなといったところで、ようやくくにオレたちが魔物領に入る時に利用した、ティグルス要塞の姿が見えてきた。

やっと見えてきたゴールに少し気が楽になるオレ。

ここまでできたら、あとは要塞までは馬車の皆でもなんとかかなりそうだな。

そんなことを考えていると、ふとジンがヒゲをひくひくと揺らし、顔を上向けた。

「どうしたよ、ジン」

「……」

尋ねてみると、顎をくいつとさせてティグルス要塞の方を示すジン。促されるままにジンが見ている方へと目を向けてみると。

「ごうん。という激しい音と共に、ジンが示したティグルス要塞の城壁がぶち壊された。

「うっわ」

まだまだ要塞までの距離は遠く、更には魔物たちが壁となって邪魔をしている所為で詳細なことは分からないが。

姿だけは見えていたティグルス要塞の巨大な城壁の一部が、粉塵をあげて崩落していた。

「なんかよくわかんないけど、ヤバそうだなあ。 ゲオルグのおっさん！！」

「ブチ殺すぞクソガキ！！ なんだ！？」

前方の様子に、後方や離れた位置からオレを追いかけてくる馬車を護衛している、ゲオルグのおっさんに声をかける。

お互い多少距離があるので、声を張り上げてるんだけど……声に大声ではなく、怒声といった感じの雰囲気かびりぴりと伝わってくる。意外と歳のことか気にしてるんだらうか。ちよつと今度から気をつけよう。

要塞の方を大剣で示しつつ。

「なんか要塞の方がヤバげなんで！ちよつと様子見に行ってください
！」

「チツ！ 戻る前に落とされんのは上手くねエな。 行つて
こい、こっちは任せとけ！」

「お願いします！」

剣で示した方を見て、舌打ちしながらもこちらの意を汲んでくれるゲオルグのおっさん。

返事を聞くと同時にジンがギアを上げ、一気に加速し進路を阻む魔物を蹴散らしながら要塞まで向かう。

「折角一休みできるとこまで辿り着いたつてのに 　　いい！？」

面倒な事態を引き起こしてくれたであろうまだ見ぬ魔物に、愚痴を零しながら剣を振り回していると、唐突にジンが横っ飛びに跳んだ。慣性で振り落されそうになり、慌てて腿を締め付けてジンにしがみつくオレ。

「ちよつ！！？」

寸前までオレたちが居た場所には何も無く、跳ねた先には魔物はわんさか居て。

危険を察知したわけでも、こちらに何かを見つけて跳んだわけでもなさそうなジンに抗議の声を上げつつ、慌てて周囲の魔物を薙ぎ払ってはジンに視線を向けると。

当のジンは悪びれた様子もなく、先ほどまでオレたちが走っていた先の、進行方向へとちら、と視線を向けた。

「あん？」

あっち向ってたら何かあったのか。

付近の魔物を片付けてからそちらに目を向けてみるも、相変わらず魔物が犇いていて、先の方など碌に見えやしない。

目を細めたり凝らしたりして、少しだけ頑張ってはみるものの、ジンが示したものがまるっきり分からず、早々に諦めるオレ。

「悪い、全く意味わからん。何かあったのか？」

「がっ」

仕方ねえなあ、とでも言うように軽く首を竦めるジン。

五感に関しては飛び抜けた超感覚を持つてるわけでない、と知ってる癖にそういう反応を返してくるジンに軽くイラツとしたが、ケンカしてる場合でもないの、湧き上がる怒りを黙って飲み下す。

後で覚えてるよ……！

オレが大人な対処をしていると、ジンが脚を撓めて、大きく飛び上がる前の準備行動をとり始める。

振り落されないよう、急いで再び腿に力を込めてジンに身体を固定すると、直後、上にオレが乗っていることをまるで感じさせない、軽やかな大跳躍をしてのけるジン。

魔物の頭上など余裕で越えて、魔物だらけだった視界が一気に開けていく。

少し気が滅入るほどに魔物か魔物の死骸だらけだった空間から解放されて、幾らか気分が楽になるけれど 別にジンはオレのことを慮って跳んだわけではないだろう。

空を駆けるつもりはないようで、そのまま前方の魔物の群れに向かって突っ込むように落ちていきながら、周囲を見渡してみると、成る程。

ジンが唐突に進路を変えた理由が理解できた。

落下先の魔物を切り払い、着地したジンの頭をぼんぼんと撫でてやる。

「ここらへんはもう、王国と魔物との戦闘区域なのか。 ありがとう。下手したら王国の人ら巻き込むとこだったぜ」

そう。オレ達が進んでいた数十メートル先、そこには魔物だけでなく、魔物と戦う人の姿があった。

オリガさんみたいな騎士っぽい姿の人や、マリスみたいなローブを着た人。王国の騎士団風な感じの人たちをメインに、冒険者っぽい自由な服装をした人らもちらほらと。

魔物の雄叫び声やらで分かり難かったけど、よく耳をこらしてみると爆発音や剣劇の音、鬨の声なんか聞こえてくる。

まだ彼らと合流するには距離があったが、あのまま剣を振るってい

たら、もしかしたら誰か巻き込んでしまったかもしれない。それを察知して進路を変えてくれたジンに、素直に感謝を抱く。

「するってーと　どうすっかな」

見た感じ先方の彼らは魔物の群れに対して、押されてるように見えた。

けど、城壁の方もそれ以上に魔物が寄り集まってきていて、押されているように見える。

どっちの救援を優先するか、少しだけ考えて。

「よし。　予定通り城壁の方へ直行だ、ジン」

拠点がしつちやかめつちやかにされちゃあ、前線の方も落ち着かないだろ、多分。

後方を一度振り返ると、バリエッタやカザネ達を乗せた馬車もこちらへと近付いてきている。

全体的に消耗してるとはいえ、彼らの戦力も相当なもんだし、こっちは彼らに任せることにしよう。

そう判断して、ジンを促し再度壊された城壁へと向けて走りなおすオレたち。

そろそろ周囲に気を配らなければいけない状況になってきたっばいので、剣の出力を落として、長さを5メートルほどにまで縮めつつあえて人の集団には合流せずに、魔物の群れの中を斬り分けながら進んでいく。

そうして魔物の勢力を多少なりとも減らしながら、目標である城壁

にまで辿り着くと。

城壁を前に騎士たち相手に暴れ回る、サイのような魔物の姿があった。

サイ　まあ、姿としては、サイが一番似ていると思う。大きさとか段違いだけど。

ジンが子供に見えるほどに大きな体躯に、ごつごつとした岩のような表皮。体躯に比例して大きく、太い一本角は、既に何人かの騎士の血を吸ったのか、赤々と染まっている。

そいつが城壁に向かって突進するのをなんとか止めようと、騎士達が横合いから斬りかかり、魔法使いが火の球を叩きつけたりするものの、魔物の身体は騎士の剣をもともせず、眼前に叩きつけられる火球にもまるで怯む様子が無い。

そうして、再びサイの魔物の角が城壁に突き刺さる。

直後、低く激しい音がして、べらぼうにでかい衝車の一撃をくらったかのように城壁に大きな穴が穿たれる。

……これがさっきの音の正体か。

立ち上がったらギガースくらいの大きさはありそうだけど、四足だから魔物の壁に紛れて見えなかったんだな。

城壁に突き刺さった角を引き抜き、再度アタックを仕掛けようとする魔物と、それを必死に食い止めようとする騎士団の人たち。

既に大穴が開けられた場所から応援が続々とやってきてはいるが、サイの魔物を仕留められるほどの実力を持った者はその場にはいな

いようで、傷らしい傷をつけることが出来ないでいる。

また、魔物はそのサイの魔物だけでなく他にも多数集まってきたので、穿たれた穴から魔物が侵入しないように塞ぎ止めることにも人手を割かれていようで、この場所に限って言うならば中々に苦しい戦況のようだった。

「ジン」

状況は把握した。とりあえずあのサイの魔物が厄介なんだな。ジンに声をかけてサイの魔物の元へと向かい、後方から一気にサイに迫っていく。

突如魔物の群れを切り裂いて現れたオレの姿に、騎士たちが驚愕に満ちた表情を浮かべるのを視界の端に捉えながら、一息にサイの元まで辿り着き

「ッらああああ!!」

そのまま駆け抜け、一刀の下に魔物を両断する。

魔物の硬皮をもともせず、スライサーにでもかけたように真っ二つに斬り別けられる魔物。

斬り裂いた部分から剣に込められた雷が、魔物の肉を焼き骨を焼き、身を焼き、魔物の身体を追い越し足を止めたジンに数瞬遅れて、焦げ臭い匂いと共に裂かれた魔物の上の部分が大地に落ちた。

「な、なあ…!？」

「バグナスが一瞬で…!？」

「あの巨大な虎は　魔獣使い！　冒険者の応援か！」

魔物を斬り伏せると、直後、周囲の騎士たちから驚きやらなんやらを含んだ声が沸き起こる。

魔物扱いされて低く唸り声をあげるジンの首を撫でてなだめてすかし、剣を肩に担いで、騎士の中で一番身なりの良さそうな人に向けて声をかける。

「　あの城壁ってなんとかなります？」

「っ。…あ、ああ、今要塞内の部隊が応急処置の資材を運んでいる。…貴殿は応援の冒険者か？」

きつと王都からの応援かー、とか、そんな意味で聞かれてるんだろー、とは思いつつ。

「はい。こちらが危ういようだったので急行してきました。この魔物は引き受けるので、皆さんは城壁の修復に専念してください」

説明とか面倒くさくなりそうなので、とりあえず肯定しとくオレ。ジンを進めて騎士達よりも前に進み出て、崩れた城壁と傷付いた騎士たちを背に、徐々に迫ってきていた魔物の群れに対して、威圧するように剣を横に振るう。

「　この先は一匹も通さないんで」

バチバチと剣身から雷鳴が迸り、ジンが周囲に風を巻き起こす。その威容に気圧されたのか、魔物の歩みが鈍っていく。

このまま城壁が修復されるまで大人しくしてくれてると楽なんだけどなあ。

「たった一人でこの群れを抑えるというのか？いくらなんでも無謀過ぎる！」

「大丈夫ですって。たぶん。ちやっちやと全力で城壁を修復してもらったほうが」

「危ないッ！」

騎士の人に振り向きながら説明していると、別の騎士の人がオレの後方を見据えながら叫んでくる。魔物たちから目を逸らしたオレに向かって、襲い掛かってきていたハウンドドッグの集団が一斉にオレとジンの下に飛び掛り。

「早く攻勢に出られるんで」

ジンが展開した風の壁に阻まれて、弾かれるように散っていくハウンドドッグたちに対して剣を一閃。近付いて来た魔物の群れを焼き尽くし、再び顔を後ろに向けるオレ。

「ね？ 大丈夫そうじゃないですか？」

「……………うむ…」

綽々なオレの余裕っぷりに、顔を強張らせながら頷く、この場で一番偉そうな騎士の人。

そうこう言ってるうちに要塞内から城壁を修復する為の部隊がやってきたようで、なにやらしばしと崩れた城壁の部分に土嚢を積み

上げている。

「オレには城壁の直し方とかよくわからないんで、そっちに専念してとりあえずでも要塞の安全を確保してもらえると助かります」

「……。わかった。可能な限り早急に修復しよう、この場は頼む」

「白虎に乗った魔剣士……そんな冒険者聞いたことないぞ」

「俺もだ。あれだけの實力を持っているなら高位の冒険者なのだろうが……」

オレと偉そうっぽげな騎士の人とで話を進めっていると、周りの騎士たちがオレの正体について訝しむ声が聞こえてきた。

オレと話していた騎士の人も周囲の声は聞こえていたようで、火急の状況にさっさと城壁を直しに向かうよう指示を飛ばしながらも、少し迷った様子を見せてから、こちらに向かって口を開く。

「こんなこと聞いている場合じゃないとはわかっているが　貴殿の名は？」

再びじりじりと距離を詰めてきた魔物に向かって睨みをきかせつつ、背後の騎士の人に片手を振るい。

「アベルって言います。こいつはジン。　最近冒険者になりました」

周囲に人の姿が無くなったのを見て、剣の大きさを再び10メートルほどまでに巨大化させながら、そう言った。

この時のオレの姿が要塞の人たちに口伝に伝わって、後に王国の逸話の一つとして人々に語り継がれることになるうとは、この時のオレは夢にも思わなかった。

ひたすらに土嚢を積み上げたそこに泥っぽい何かをひっかけてと、オレにはよくわからない城壁の修復作業は、二時間ほどの時間を要した。

その間もひっきりなしに魔物は攻めてきて、オレはその攻めてくる魔物たちをひたすら薙ぎ払い、城壁を守る作業を続けることとなり。途中、要塞からの応援の部隊がやってきたりもしたものの、魔物どころか人も迂闊に寄っては纏めて倒してしまいそうなオレの戦いっぷりをしばし呆然と見た後に、ここは大丈夫だと判断したのか、他所の魔物の対処に向かっていった。

なんともハリボテの感じはあるものの、とりあえずの城壁の修復が終わる頃には、流石に日も落ち始めていて。

流石に一日中戦いっぱなしってのは辛いもんがあるんだけど、魔物もある程度数が減ってきたように見えるとはいえ、俄然バリバリ残っている。

どういふ感じに対処すんのかな、この状況、とか他力本願に考えていると、後ろの方からカザネとマリスの二人がやってきた。

「虎に跨り単騎で魔物を圧倒する雷光の戦士　ですか」

「探するのが非常に楽だったぞ。　こういう時にはジンは目立つから

助かるな」

「よ、っと。…さっきぶり。無事そうだなにより」

「アベルもな」

カザネとこつん、と拳を打ちつけあったりしつつ。

いい加減魔物も学習してきたのか、この頃になるとオレの剣の届く範囲にはまるで近寄らなくなってきていたので、警戒はジンに任せ、互いの無事を祝い合うオレら。

「他のみんなは？」

「バリエッタの面々は他の戦線に応援に向かっている。オリガ殿は我々の状況の説明などの為に要塞の中に、だな。そして私とマリスはアベルのお迎え、といったところだ」

「迎え？　ここ離れても大丈夫なのか？」

「王都にて編成された騎士団と冒険者の部隊が先ほど到着したみたいです。彼らが戦線に出るまで堪えて、今回はそれで決着のようです」

へえ。したらあと一時間くらい待てば休めるってわけか。

いや、あれ？

「決着？」

「らしい」

「まだわんさか居るんだけど」

魔物。

オレの疑問に頷くマリス。

「決着です。今回の事態に王国は騎士団だけでなく、宮廷魔術師団を総力で出撃させたようですね。また、偵察に出た鳥族の部隊の報告によれば、魔物の規模はとりあえずこの見渡す限りの魔物たちで底を尽くらしいので。」

魔術師団が全力で出動したのならば、とりあえずこのテイグルス要塞の周囲の魔物は片が付くようですね」

「お前は？」

一応宮廷魔術師だろ、お前。

行かなくていいのかよ、という意味を含めて聞いてみると。

「……ここに辿り着くまでに、魔力が尽きてしまったので」

「……なんか、ごめん」

狐耳を垂れさせながら言うマリス。

なんか一気に落ち込んだ雰囲気を感じた様子に、少し気まずい思いをするオレ。

「……ま、というわけさ。今回のコレは、どうやら大規模侵攻ではなかったようだね」

「ふうん、なるほどな。こんだけの規模でもまだ大したことない程度なのか」

「……早期決着の最たる原因は、今攻めてきている魔物に比するほどの魔物が、原因不明の雷が発生した地点を中心に死んでいて、大きく魔物の勢力が減じているからだそうですが」

オレか原因は。

なんだかんだで半数近く倒してたのか。

マリスがなんとも言えない目つきでこちらを見てくるのに対して、オレもなんとも言えない表情を返しつつ。

まあ、早く終わるんならよかったよね、うん。

そんなことを思いつつ。一先ずもう少し頑張れば休めるってのなら、もう少し頑張ろう、と魔物の群れに向けて、魔力砲を放とうと掌を向けたところで。

カンカンカン！！

…と、鐘のなる音が戦場に響き渡った。

「お？」

なんの合図だ。掌に収束させていた魔力を散らし、鐘の鳴る方へと視線を向けて首を傾げていると、少し持ち直した様子マリスが解説してくれる。

「撤退の鐘ですね。魔術師団が出撃するようです」

「オレたちは撤退していいの？」

「ええ。 というよりは、撤退しないと巻き込まれます。貴方がいるならば安全ではあるのですが…態々戦場に残る理由もないでしょう」

「そだな」

大丈夫だってんなら、オレが残る必要も無いだろ。

頷き、二人と一緒に開かれている要塞の城門まで向かうオレ。魔物たちの追撃も特に無く、無事に城門の下まで辿り着くと、他の場所から撤退してきた騎士やら冒険者やらに混ざって要塞の中に入る。

その途中、オレたちと入れ違うように門から魔物領へと向かう、マリスと似たようなローブを纏った魔法使いの集団と擦れ違い。

「あら」

「お？」

「ふむ？」

「ふい、フィオリ様ッ！」

いつぞや出会った、マリスの師であり、マリスが冒険者かぶれになる元凶でもある、フィオリ・グリムさんと擦れ違った。

知己であるオレやマリスと違って、カザネは初対面だからオレたちの様子に不思議そうな顔をしているものの、オレがマリスのお師匠さん、と囁くとなるほど、と言って頷いた。

「ランスロットに聞いて無事だとは窺っていましたが　目立った怪我もないようで何よりです」

「お気遣いありがとうございます。……っ、申し訳ありません。本来ならば私も参戦したいのですが…！」

「大丈夫ですよ、マリス。　魔物領に入ってこのような事態に巻き込まれて　無事に帰って来ただけで充分です。　後は私たちに任せなさいな」

「は、はいッ」

がば、と頭を下げるマリス。

次いでグリムさんはジンに跨ったままのオレの方へと目を向けて。

「アベルくんも無事なようで何よりです。　うふふ。　ランスロットから多少ではありますが、色々聞きましたよ」

三つ編みを揺らして上品に笑うグリムさん。

何を色々言ったんだろう、ランスロット。

「色々　がどういった意味の色々なのはわかりませんが、まあ、後はお任せして大丈夫なようなので、お願いします」

よっこらせ、とジンの上から降りつつ、軽く頭を下げるオレ。

「ええ、アベルくんには沢山頑張ってもらったみたいですし、あとはゆっくり休んで待っていてくださいね」

これから魔物の大軍勢と戦うというのに、まるで気負った様子的な

いグリムさん。

立ち止まっているグリムさんを追い越し先に行く魔法使いたちの面持ちにも、緊張した面立ちを浮かべている者はいるものの、強張った姿を見せる者は無く。

流石に流石、王国の選りすぐりを集めた宮廷魔術師団つてとこか。

彼らがいけると判断したならば、それは確実な目算があつてのことなのだろう。

それでは、と言って城門から出て行くグリムさんに三人揃って頭を下げて見送つて、オレは安心して要塞内で休むことにした。

数十分後。

城壁の外で凄まじい爆音が鳴り響く。

陽も暮れていたというのに、まるで真昼のように赤々しい光が空を灼き、天を焦がす。

「ミズドの森、つてあるじゃないですか。 私たちが王都から要塞までやってくる時に通つた」

「え？ああ、うん」

ぼけー、と、そのド派手さにオレもカザネもマリスもジンも、揃つて空を見上げていると、ぽつり、とマリスが声を上げる。

赤く染まる空を見上げたまま、生返事でそれに返しつつも、マリスも特に気にかける様子は無く。

「あの森つて、昔はこの辺一帯までを覆う大森林だったらしいです

よ。度重なる魔物と王国との戦いであそこまで小さくなってしまったみたいですが」

もう大分昔の話のことらしいですが、と付け加えながら言うマリス。

……ああ、うん。そうだよな。

魔物が来るたびにこんなとんでもないドンパチやってれば、森のつや二つ、消し飛んじやいそうだよなあ。

城壁の上から徐々に要塞内に響き渡る歓声を耳にしながら、深く納得したオレだった。

第27話 帰還

なんだかんだで人間は群れてる時が一番強い生き物だよなあ、と。城砦内で見つけ出したランスロットと共に、次々と魔物を殲滅していく騎士団や魔法使いたちの姿を、城壁の上で眺めながら思った。

数は多けれど無計画に押し寄せる魔物の群れを焼き尽くす、絨毯爆撃のような火球の嵐。

魔法で抉じ開けた穴に騎士たちが突撃し、紙を裂くかのように容易く群れが二分に裂かれていく。

そうして隔てられ、圧を減らした群れが徐々に各個撃破されていく様子はなんとも見事で、こうして城壁の上から俯瞰できる場所で眺めていると、魔物の方も協調して倒されてるんじゃないか、と感じてしまうくらいの鮮やかな手並みだった。

魔物の方も雑魚ばかりじゃないので、容易く倒されてはくれないよな、手強そうな魔物もぼちぼちいるのだけれど、それらに対しても突撃の足を緩めることはなく、数人を切り離して押さえ込み、後続の応援と共に数を頼りにぼこぼこ倒していつてしまう。

国が興つてからひたすら魔物との戦いを繰り返してきた国の騎士や魔法使いなだけあって、見惚れるような錬度だった。

「はあ　　見事なもんですね」

「このような規模の戦闘は滅多に無いとは言え、魔物との戦闘には事欠かないからな。大侵攻にも耐えられるような騎士団を目指しているのだ。この程度はどつとでもせねば、話にならない」

上から見ている限りでは、統率が乱れているところが全然見当たらない。

魔物の対処なんかはほとんど冒険者任せっばかったし、そこまでレベルが高くはないかもなー、などと予想していたオレとしては、中々驚かされる光景だった。

それに組織力だけってわけでもなく。

「集団の先陣をきっている部隊、あそこだけ個々の力が異様に強いように見えるが　彼らは？」

一緒に眺めていたカザネもオレと同じ疑問をもったようで、騎士たちの塊の先端を指差してランスロットに尋ねる。

そうなんだよな。魔法で結構な被害を与えたとはいえ、そこそこに厄介そうな魔物もまだ残ってるのに、先陣の部隊がばったばったとそいつらを払いのけて突き進んでいく。

その集団だけ、赤い鎧に、やたらいかつつい馬に乗っているの、余計に目立って気になった。

「…ああ。そうか、二人はこの国に来て日が浅いのだったか」

カザネの質問に不思議そうな顔をしたランスロットだったけれど、オレも同じような疑問を抱いている様子に少し考えてから、納得したとばかりに頷く。

「うん？」

「王国で暮らしていれば知っていて当然のことですからね、赤甲騎士団のことは」

しゃっこうきだん？

首を傾げるオレに、戦場を見下ろしながらマリス。

「ああ。初代アセナル王が率いた騎兵隊になぞらえて、赤い鎧を纏った騎士団の中でも選りすぐりを集めた精鋭部隊だ」

「…成る程、あれが赤甲騎団か。セイグルの魔装兵や、ヤグニス
の獣騎兵に並び称される彼らなら あれだけの突破力を持つのも
納得できるな」

納得したように頷くカザネ。

名前を出されたところで、未だ彼らがどういうものなのかよくわからんオレに、マリスが補足してくれる。

「我が国に住んでいる者ならば、子供でも知ってるアセナル王国の
最精鋭部隊ということです。 皆赤い鎧を身に纏い、軍馬として鍛
え上げたソロウブに跨る姿から、赤甲騎団。 他国にも伝わるよ
うな、王国最強の騎士たちの集団です」

「へええ」

そんな有名な部隊なのか。

つてーことは、なんだ。今回の事態に対して、王国は宮廷魔術師団
に赤甲騎団、王国の誇る剣と魔の両方を出動させたってことなのか。

「なんつーかまあ 大盤振る舞いですね。 大規模侵攻の可能性
があったとはいえ、最初っから全力ですか」

「このような状況で使ってこそその剣だろう。それに ……」

「……それに？」

何かを言いかけて、口を噤むランスロット。
先の言葉を促してみるものの、左右に首を振ってなんでもない、と
追及を退ける。

「まあ、欠員が出て中々補充がきかない故に、出し渋りがちな部
隊ではあるがな」

「そりゃまあ」

精鋭つーからには誰でも良いってわけにはいかないだろうし。
見た感じ五千くらいか。赤甲騎団の人数は。ウン万とかの単位つば
い魔物相手にそれだけの人数で優位を保ってるのだから、中々に選
び抜かれた部隊なんだろうな、と思う。
軽く嘆息しながら呟くランスロットを眺めつつ、戦闘に関してはど
うやらこのまま大丈夫そうなので、今後について聞くことにするオ
シ。

「なんか色々面倒なことになっちゃいましたけど、オレたちってこ
の後どうするんですか？」

あとは残った魔物を掃討してくくらいだろうし、特別徴兵されたわ
けではないオレらは王都に戻ってもいいもんならうか。
どうにもオレには判別つかなかったので、素直にランスロットに尋
ねてみる。

「ああ、バリエッタとも協議せねばならないが、このまま戦況が落
ち着くようであれば、今日はここで一晩明かして、明日には王都に
戻って構わないだろう」

お、意外とあっさり戻れそう。

「了解です。 したら、ジンと前泊まったところへんで休んでるんで、何かあったら呼んでください」

「わかった」

「なら、私も休ませてもらおうかな」

「申し訳ありません、オリガ様。 私も……」

言ったもん勝ちというか、なんというか。

オレの発言に相次いでカザネとマリスが乗っかって、休養を宣言する。

それにランスロットがなんとも言えない顔を一瞬浮かべたが、すぐに取り澄まし。

「…わかった。 もう少し戦況を見届けた後で司令室に向かうから、何かあったらそちらに來い」

「了解です」

「了解」

「了解しました」

後のことは投げっ放して、ランスロットに軽く会釈をしてから以前ここで泊まる時に使った馬小屋へと向かう。

流石に連戦続きで疲れたしなあ。 そこそこに魔力も使ったし、さっ

さと休みたい。

「前泊まったところ？」

「あれ？話してなかったっけ。ジンが寝るには普通の宿舎じゃ手狭だから、馬小屋の方で寝てたんよ」

「そういうことか」

納得がいったように頷くカザネと、疲れのピークのように最早喋るのも億劫そうなマリスと別れて、ジンと小屋へと向かうオレ。

小屋に辿り着いてジンと一緒に横になると、まるで眠気に吸い込まれるかのように一気に瞼が重くなってきた。

久しぶりに何の警戒も必要無く眠れる場所なのだし、抗わず睡魔に身を委ねるオレ。

この晩は特に呼び出されることも、起こされることもなく。不足気味だった睡眠をめいっぱい摂って少し遅めの朝を迎えることができた。

オレが起きた頃には、魔物の方も無事対処し終わったみたいで、まだまだ各所に魔物は散らばっているものの、脅威となるほどの勢いは最早なく、ティグルス要塞や国境沿いの砦に詰めている騎士や冒険者らを中心に、ぼちぼち片付けていくらしい。

「結局今回の侵攻はどんなもんだっただんですか？ 大規模侵攻じゃなかったんですね」

「そうねえ。ティグルスの司令部の調査によると、今回の規模は子爵級……国境まで押し寄せてきた群れ自体は男爵級強の規模の群れだったらしいわよ」

特にこれ以上面倒臭いことも起きることなく、無事要塞を出発し、王都まで帰る道の途上、何故かオレたちの馬車と一緒に乗り合わせているグリムさんに今回の侵攻の詳しい話を聞く。

師団の方と一緒に行動しなくていいのか、とか色々突っ込みたかったのだけれど、出発する時にあまりにも自然にバリエッタやランスロットたちに混じっていたものだから、尋ねるに尋ねられなかった。バリエッタの方も、ランスロットまでも何か言いたげな様子だったが結局何も突っ込まなかったあたり、オレと同じ気持ちを抱いたんだろうか。

ともあれ。なんでか馬車の御者を務めるオレの横に座ったグリムさんとの話題とえば、ぱっと思いつくのはこの話題くらいしか無かった。ので、何を考えてるのかわからないけれど、とりあえず眼の前の会話を膨らませることにする。

「子爵級……国境線が突破される可能性が高い規模の魔物の群れ、でしたっけ」

「そうね。一般に広まっている言い方に倣って言うなら、小規模侵攻といったところかしら」

ちなみにこの子爵級やら男爵級というのは、アセナル王国の軍部を中心に広まっている、魔物の規模を等級付けした言い方のことらしく。

公爵、侯爵、伯爵、子爵、男爵の五段階に区分され、一番上が公爵級、一番下が男爵級であるらしい。

一番上の公爵は国家が存亡の危機に立たされる規模の魔物の侵攻を指し、一番下の男爵は国境線で防衛できる可能性が高いが、強い注意が必要な規模の魔物の群れを指すらしい。

男爵級の規模の魔物の群れから、このアセナル王国では魔物の侵攻である、と表現するらしく、今回の侵攻はその男爵級から子爵級の間くらいだったそう。

世に言う大規模侵攻は公爵から侯爵級の間で、じーさんの時の大侵攻は侯爵強の規模と判断されているとか。

「魔物の侵攻つつつたら必ずてんやわんやの大騒ぎになると思っていましたけど、そういうわけでもないんですね」

「今回の規模も決して軽視していい規模ではないんですよ。どなたかの活躍のお陰で男爵級にまで等級は下がっていましたが、本来の子爵級でしたらまだまだ防衛戦の真っ最中でしたでしょうし」

にっこり笑ってオレの方を見てくるグリムさん。
なんだろう。何か色々他意を感じる。

「被害が少なくなったのはいいことですね」
とりあえず当り障りの無い返事を返すオレ。
それを聞いて更に笑みを深めるグリムさん。

「ええ、そうですね。王国としましても、要塞に駐屯する兵たちにとってもとても喜ばしいことです。これも全て貴方のお陰ですね。
雷光の獣騎士様」

「……………」

馬の手綱を握ったまま固まるオレ。

「あ、オレも聞いたな、それ」

「私も聞いたな」

「私もニヤ」

「要塞の兵の中でとても話題になってましたよね」

オレたちの会話に乗っかってくる、馬車の警護の為に周囲に散っていたゲオルグさん、カザネ、ミアさんにケイムスさん。

侵攻があった直後のせいかな、国内にもそこそこ魔物は入り込んでいて、魔物領ほどでは決まてないものの、それなりに魔物の襲撃があるため、その対処に彼らは下車していたりするんだけど。

まあ、そんなことは今はどうでもいい。

「なんですか、その、えーと。聞き覚えの無い呼び名は」

「手に雷を携えて、閃光と共に魔物の群れを切り裂いて現れた獣に跨った謎の騎士。バグナスを一瞬で斬り伏せて、崩れた城壁を背に単騎で幾百の魔物から城壁を守り通したとか」

「やたら興奮した様子でその場を見たという騎士が語ってましたよね」

「司令部の者たちも非常に気にかけていたな」

幌の中からマリスとランスロット。

なんかやたらと話題になってるらしい。要塞出る間にオレとジンに多くの視線を感じた気がしたのは、気のせいじゃなかったということなんだろうか。

「うわあ……なんか、こう　いや、いいんですけどね！」

あの場ではあれが最良と感じたからああしたわけだし、いいんだけどね！その結果がどうなるうと！
でもなんか　なんか。

「うおおお……っ！」

悶えるオレ。

そんなオレに要塞で補給が出来たのか、タバコをくわえながらゲオルグさんが声をかけてくる。

「っーかよオ　結局何者なんだよ、テメエ。色々ごたごたして聞いている暇無かったけどよ」

煙ブハア、とさせながらゲオルグさん。

ミアさんやケイムスさんも同じ気持ちなのか、興味深げにこちらに視線を向けている。

がしがしと後ろ頭をかきつつ、ミアさんに乗せてのそのそ歩いているジンに目を向けるオレ。

「何者かって言われても　グルガの森で十年くらい暮らせば、誰

でもこれくらいにはなるんじゃないですかね」

魔物領ほどじゃないけど、弱肉強食を地で行くところだからなあ、あそこ。

あの森で生活してれば、自然とある程度以上の実力は付くんじゃないだろうか。

「グルガの森ってーと……王国の隅にだらーっと広がってる、アレか」

「だらーっと広い、アレです」

「あの森の近辺に村があるという話は、聞いたことがありませんが……」

「というか、人が住めるって話からして聞いたことが無いニヤ」

「ああ、村とかに住んでたってわけじゃなくて、オレとジンとあとオレの育ての親みたいな人と、そのペットを含めた四人でー、ですね。王都に出てくるまでじーさん以外の人に会ったことなかったですし」

実際よくあんなところで十年以上暮らせてたよな、オレ。

じーさんにとっては数十年単位か。野生に返っても不思議じゃないよなあ。

俄かにオレの言ってることが信じられないような、バリエッタの面々ではあったけど、あっさりとしたオレの物言いが逆に信じざるを得ない気になったようで。

なんか含みのある笑みを浮かべながらオレを見ているグリムさんは

意識して無視しつつ、色んな人に話してそれなりに話慣れた、森での生活っぷりをバリエッタに話して聞かせたりしながら、王都へと戻るのだった。

バリエッタの人々には結局、今まで世に出てなかった実力者、みたいな認定を受けることになった。

じーさんのことは話すかどうか少しばかり考えたけども、話したところで蛇足だし面倒なことになるだけだよな、と思ったので割愛。ランスロットもグリムさんも、じーさんの話を端折るオレに特に何か言ってきたりはしなかつたので助かった。

王都の城門近辺には魔物を警戒してか、いつにも増して多くの騎士たちが詰めていたものの、通るのにはこれといった問題もなく、ランスロットとグリムさんがなやら話して、さくつと終了。

街の中に入ってみると、てっきり魔物の侵攻に怯えて静まりかえってるものかと、オレは思っていたのだけれど。

早馬かなんかで報せが先に届いていたのか、静まるどころか戦勝祝いのお祭り騒ぎといった様相を呈していた。

道端に普段より多くの露店が開かれており、やんややんやとはしゃぎ回ってる大人や子供が多く見受けられる。

ポロポロになった馬車や、傷だらけの鎧を身につけたオレたちの姿は彼らに国境の戦場帰りの者達だと思われたのか、報告の為に冒険者ギルドに向かう途中、何度か街の人々に話をせがまれたりしたもの、各々やんわりといなしで、冒険者ギルドまで向かうオレら。

何故かランスロットやマリス、グリムさんまでも一緒に着いてきたりしつつ、ギルドの前で馬車を止めるとマールさんが息せき切ってギルドの中から駆け寄ってきた。

弾む呼吸を何度か深呼吸して落ち着かせて、馬車から降りたオレたちの姿を確認すると、ほう、と息を吐く。

「全員ご無事でしたか…。侵攻の報せを聞いて以来、皆様方の安否を私もギルドマスターも非常に心配しておりました。全員無事にお帰りになられて何よりです」

「なんかすごい心配かけたみたいですし、あと、申し訳無いんですが、依頼の方は失敗です。積荷全部放棄してきちゃいました」

アクシデントと今回の依頼は全くの無関係なので、謝るところはしつかりと。

失敗は失敗だしな。前金もらってるから別に構わないけど、ランクアップの件はお流れだと言われても構わないくらいの心地は作っておく。

オレの謝罪を聞くと、いえ、と首を振ってからギルドの方を手で示すマールさん。

「あのような状況では無事戻ってくることさえ至難の業。ギルドマスターも決して責めることはないでしょう。さ。皆様、どうぞ中へと」

促されて中に入っていくオレら。

ギルドの中には職員以外にも冒険者もちらほらと居て、彼ら全員がオレたちの物々しい風貌に視線を寄せてくる。

単純に知名度の差なのだろうけれど、主に視線が注がれているのはバリエッタの面々で、中には傷付いた鎧を身に纏った彼らに何があつたのかと、声をかけようと寄って来る人もいる。が。

「今しがた連絡を聞いて驚いたぞい。よくぞ無事戻ってきてくれた」

ギルドマスター直々の登場に、そんな彼らも流石に足を止める。

まさかあちらから出向いてくるとは思わず、意表を突かれたオレたちも目を真ん丸にして驚いてしまう。

「ハッ。じじい直々にお出迎えしてくれるたあな」

「その様子ではわしらの心配も無用じゃったかのう　まあよい。」

報告を聞かせてもらおうかの。こっちじゃ

軽口を叩くゲオルグさんとギルドマスター。

Aランクのチームともなると関わる機会も増えてくるのだろうか。

中々に気安そうな繋がりや両者の間に感じる。

ともあれ。全員の姿を認めて、くるり、と背を向けて歩き出すギルドマスターを追って、オレたちも続いていく。

なんだなんだ、と屯していた冒険者のみならず、ギルドの職員の見線も寄せ集めながらも、長かった今回の一連の出来事に区切りをつけるため、ギルドの奥へと進んでいくのだった。

第28話 報告

ギルドマスターの執務室には全員入りきらないので、小会議室みたいな部屋へと案内されつつ。

ざっくりとはあるが、事の顛末をケイムスさんが代表してギルドマスターに報告した。

「とまあ、こんな感じですね。正直グサルガレオらの魔物の群れに囲まれたときは、肝が冷えました」

いきなりビームドガー！！だったもんなあ。

ジンが守ってくれなきやどうなったことやら。椅子に座るオレの後ろで大人しくしているジンを横目に見ながら、山頂での戦いを思い出して、安堵の息を零す。

「魔物の侵攻に関しては未だに全く予想が出来んからのう。今回も常と同じく、多少魔物の数が増えただけとばかりに思っておったが…… 依頼を受けたのがおぬしらで本当によかったわい」

危うく数少ない上位の冒険者たちを失うところだったと、マールさんがいれてくれたお茶を啜りながらギルドマスターがしみじみと呟く。

「こちらとしても今回のメンバーで依頼に臨めたのは幸運だったと思いますね。同道する相手がアベルくんたちではなく、想定していた通りのBランク程度の冒険者だったならば、こうまで無事に帰ることは出来なかったかと」

「だな。　　ンなこと滅多にねえだろうが、昇級試験に魔物領を使うのは止めた方がいいんじゃないかねえのか？」

肩を竦めながらのケイムさんと、腕を組みながらのゲオルグさん。こつちも同行するメンバーがバリエツタじゃなかったら相当キツかったらうなあ。

戦闘面での負担はもとより、戦闘以外でのスキルに差があり過ぎる。他のチームのことはよくわからんけど、Aランクのチームであるくらいなんだし、彼らほど高い次元でバランスの取れたチームは早々いないんだろう。

「そうじゃのう。　　じゃが、魔物領を除いたBランクの試験に相應しい依頼となると、中々のう」

「……ああ。それもそうか」

「魔物領以外で、となると突発の依頼でも無い限り、普通の魔物領より危険なものばかりだもんね、常駐の依頼って」

試験出す側も大変なんだなあ。

死んでも自己責任とはいえ、別にギルド側も殺したいわけでもないだろうし、テストを作る先生の気持ちというものが少しわかった気がした。

「まあよい。この件に関しては職員とも協議してみることにするわい。　　続いて今回の依頼の報酬やアベルらの昇格についてなんじやが」

昇格の話と聞いて、居住まいを正すオレ。

そんなオレをギルドマスターが一瞥してから、ゆっくりと口を開く。

「過酷な状況の中、よくぞ戻ってきてくれた。じゃが、依頼自体は失敗は失敗じゃからの。成功報酬である金貨十枚に関しては依頼主に払い戻すことになる」

これに関しては、まあ構わない。

前金で充分もらってるってのもあるし、オレたちが破棄した馬車の積荷の値段も結構なもんだろうしな。

あの損失の補填とかもしなくちゃならないのだろうし、この裁定は妥当なもんだろう。

バリエッタの方を見ても不満そうな様子は無く、失敗したことを気にしてる様子も無さそうだった。

そんなオレたちの様子を確認してから、話を続けるギルドマスター。

「うむ。その様子では言う必要も無かるうが、今回の失敗は気にせずともよい。先方も状況は把握しておるじゃろうし、責められることはなかるうて」

そう言っただけで、と意味ありげにランスロットやグリムさんの方へ視線を向けるギルドマスター。

「……………」

「ふふ。ええ、そうですね。今回の失敗は致し方ないことだったと判断されるかと」

クライアント側の人間である、ランスロットは腕を組んだまま特に何か言うこともなく。

グリムさんの方は穏やかに笑いながらギルドマスターの言葉を肯定する。

失敗してもいい、なんて依頼はありえないだろうが、とりあえず今回の件に関してはあまり気にする必要が無さそうで、多少ほっとするオレ。

この様子だと後々突っつかれる、といったこともないだろうし。

「では、続いてアベルらのランクについてなんじゃが……」

どこか悩ましげにオレの方を見るギルドマスター。

「本来ならば依頼が失敗に終わった以上、昇級試験も失敗ということになるんじゃないが　状況が状況じゃったしの。報告を聞く限りでは実力に関しては充分以上なようじゃし、正直再試験するのも無駄じゃろ」

「……」

部屋に居る全員の視線が大なり小なりオレに注がれていることに、多少むず痒い思いを覚えつつ続きを待つ。

「……故に御主らの昇級試験に関しては、合格ということにしようと思うのじゃが。試験官であるバリエッタとしてはどうかの？」

「お」

流れからして再試験ってことになってもいいや。くらいの心構えでいたけれど。

思わぬ判定に目を丸くしてしまうオレ。

意見を求められたバリエッタの方を見てみると。

「実際戦闘能力だけならば、Aでもまるで問題無い気がしますね」

「あの实力を見てしまつとな」

「ま、冒険者つてのは戦闘能力だけでやってける稼業つてわけでもねえんだ。とりあえずは予定通りの進級で構わんだろ」

「！ 戦闘能力だけで申し上がってきたゲオルグがまともなこと言つたニヤ」

「ブン殴るぞミリア！」

「確かにゲオルグにしてはまともな意見ね。 私も異論は無いわ」

「僕も問題無いと思います」

それぞれの意見を述べるバリエッタの面々。
全員才したちが進級することに異論は無いようで、軽口を交えながらも賛同の意を示してくれる。

「決まりじゃの。ではアベルくんたちはギルドカードの更新を行うので、後ほどマールにギルドカードを提出しておくように」

「よしゃっ。了解です」

「まさか私がBランクのチームの一員になるとはな…」

小さく拳を握るオレと、宙を仰いでしんみりと呟くカザネ。

報酬はもらえなかったけれど、これだけでも苦労した甲斐はあるってもんだ。

これで更なる金稼ぎが出来る……！

うはうはの左団扇生活にまた一歩近付いたのを感じて、ややテンションを上げながら祝福の言葉を向けてくれる周りの人らに頭を下げる。

「こんなところじゃの。お主らも長旅で疲れておるじゃろっし、一先ずはこの辺で終いにしておくかの。」

まだ細々とした話が残っておるので、それについては後日改めてギルドに顔を出してくれい。とりあえず今日のところはこれで終わりじゃ。皆、ご苦労じゃった」

俄かに騒がしくなってきた場を纏めるようにギルドマスターが口を開き、依頼の終了を宣言する。

この言葉を皮切りに、それぞれ身体を弛緩させたり伸びをしたりと、思い思いに気を抜き始め、そんな様子を見てオレもやっと今回の依頼が終わったんだな、と実感した。

いや、長かったなあ、今回。

ぐるぐる肩を回して解しつつ、これからの予定を考える。

とりあえずメシだな、メシ。携帯食とか狩った魔物のサバイバル料理とかでなく、ちゃんと手の込んだメシが食いたい。

久しぶりの料理の味を想像して胸を膨らませていると、そんなオレの元にランスロットが寄って来た。

「気の抜けたところで悪いが、今からもう一つ」

「よっしゃあ！終いだ終い！ おうガキ！今から飲みに行くぞ。そ
ちの王国組もだ！」

オレに向けて何事か言おうとしていたランスロットの声を掻き消す
ほど声で、ゲオルグさんがオレらに向かって声をかけてくる。

「いや、すまないが我々は」

「まあまあまあ。あんな状況から無事帰ってこれたんですし、ここ
は固い事言わずみんなでパーツと飲み明かしましょうよ」

「うむ」

ランスロットの否定を何か別の意味と勘違いした感じのクラウスさ
んとドルトムントさんが、ランスロットに最後まで言わせずに誘い
をかける。

見ればグリムさんやマリス、カザネたちの方もバリエッタの女性陣
から飲みに行こうと誘われており、特に問題は無さそうなカザネは
別として、王国組の二人がやんわりといなそうとしているのをまる
で気にせずぐいぐいと強い押しで誘いをかけているのが見えた。

その押しの強さは、ゲオルグさんは別として、わりと落ち着いた人
が多いと思ってたバリエッタの印象が多少覆るほどだった。

「でかい仕事のあとは酒とメシ！仕事をこなした全員で騒ぐのが冒
険者の倣いってもんだ。一時とはいえ冒険者として行動を共にした
以上、騎士だなんだったのは関係無エ」

「まあ、そういうわけですので」

「ちよつ、待て　！」

行くぞあ。と足掻くランスロットの首根っこを、持ち前の膂力で無理矢理引き摺って外へ出ようとするゲオルグさんに、特にそれを止める様子も無いケイムスさん。

ケイムスさんまでもが止めないってことは、本当にそんな慣習があるのか、もしかして。

なんとかゲオルグさんの下から抜け出そうとするランスロットを見ながら、困った様子で頬に手を当てていたグリムさん。オレとランスロットを交互に見ては、悩ましげな表情を浮かべている

ここまで着いてきたあたりから多少予想はできたけど、なんかオレに用があつたのかな。二人共。

そんな様子を楽しげに見ていたギルドマスターが、ふおふお、と笑いながらグリムさんに声をかける。

「王国へはわしの方から連絡しておこう。　　すまんが、今日のところはこちらに付き合ってもらえんかの」

「クルツ殿がそこまで言われるのであれば……　　そうですね。同伴させていただきますでしょうか」

「決まりだニヤ！」

ギルドマスターの言を聞いても、しばらく思い悩んだ様子を見せたグリムさんではあつたけれど、やがて諦めたように嘆息しては、切り替えたように笑みを浮かべてそう言った。

「……よろしいので？」

「既に報告自体は届いているでしょうから、緊急の用件というわけでも無いですし。　ここまでの誘いを断ってきたとなれば、姫様も気に病まれるでしょうからね」

マリスの問いにそう答えるグリムさん。

ああ、成る程。姫様のところに連れて行きたかったんか、オレを。

正直これ以上疲れることはしたくなかったので、わざわざこっちまで着いて来たランスロットやグリムさんには悪いと思ったけれど、この流れに乗せてもらうことにする。

「おいガキ！　早く行くぞ！」

「　　ととと、了解！行くぞジン！　それじゃ、失礼します！」

急かすゲオルグさんの声に従って、ジンを伴って出口へと向かうオレ。扉が出る間際にギルドマスターとマールさんに頭を下げて。

慌しくも外へと向かうオレらだった。

外は戦勝祝いでどこも騒がしく、今から十人以上にもなるオレたちが扱える酒場などあるのかと多少不安になったが。

そこは流石王国中に名を轟かすAランクチームのバリエッタ。彼ら馴染みの店だという酒場に辿り着くと、来店したバリエッタの

面々を見つけるや否や、店員どころか客までが協力して、酒場の中央の席にオレたちが座れる席を作ってくれた。

「おうゲオルグ！今度はどこ行ってきたんだよ！」

「その格好だとやっぱ国境の防衛戦かい！」

「おう、待て待て。酒が来てから話してやらあ」

「ケイムスさま！お疲れさまです！ お怪我はありませんか！？」

「ケイムスさま、おしほりをどうぞ。今回はどんな冒険をなさってきたんですか？」

「ありがとうございます。いつも通りゲオルグから語られると思いますので、詳しいお話はその後にでも」

老若男女問わず、酒場にいる全員から気さくそうに声をかけられるバリエッタの面々。

そのあまりにも和気藹々とした光景に唾然としてみると、ゲオルグさんと軽口を叩き合っていたおっさんがこちらにも声をかけてくる。

「そつちのにーちゃんたちも座りな座りな！ こいつらと一緒に冒険してきたんだろ？話聞かせてくれや！」

「うお、でけえ虎だなオイ！ これにーちゃんのかい？」

「あ、はい。ジンって名前です。したら失礼して」

「でかしたぞゲオルグウ！ 今日は可愛い嬢ちゃんたちもいっぱい

「じゃねえか！」

「ローザやミアは流石に見飽きてきたもんなあ　うお！」

「ぶち殺すニヤ？」

矢継ぎ早に色んなところから声が上がって、凄まじい喧騒っぷりだった。

普通の声量で喋ったんじゃ声が掻き消されてしまっくらい。

ジンも一緒に入って大丈夫かな、とか少し思っていたのだけれど、そんなことは気にする必要が無かったようだ。

どっから出てきたのかジンに抱きついてはしゃいでる子供たちを引き連れて、席の方へと向かうオレたち。

「おおおう！全員酒は届いてるな！」

やいのやいの騒ぎながらも全員が席に着き、各々が酒の入ったジョッキやグラスを持っているのを確認してから、ゲオルグさんが一際大きな声を上げる。

「持ったぞー！」

「こっちも全員持ってるぞー！」

「えらそうに仕切ってるじゃねえー！」

「てめえ後でぶん殴るからなケニー！」

だうだう、と酒場の客の一人と言い合うゲオルグさんを捨て置いて、

ケイムスさんが杯を掲げる。

「それでは、今回も無事に依頼を終えられたことを祝って」

「「「「「かんぱーい!!」「」「」」」」」

一斉に杯を打ち合わせる音が響いて、オレも周りの人とジョッキを打ち合わせてから、一気にエールの注がれたジョッキを呷る。

そして。

ジョッキの中身を半分ほど空けたところで。

オレが酒を飲めない人間だったということ、今更ながらに思い出す。

「あ。ごめん、あとよろしく、カザネ」

「エールですらダメなのか…!？」

隣に座っていたカザネに後事を託しつつ。凄まじい勢いで襲ってくる睡魔に身を委ねる。

うん。オレもここまでダメだとは思ってなかったわ。

カザネの方へとぶっ倒れながら、心中でカザネに返答するオレだった。

目が覚めた時には、宴もたけなわのようで。

あつちこつちからしつちやかめつちやかに声が飛び込んでくるのを耳にしながら、やたら重たい瞼を開くオレ。

「……………目が覚めたか」

うつすらと目を開くと、視界いっぱいにかザネの顔が映りこむ。

「あー……………水ある？」

視線を左右に動かすと、どうやらカザネに膝枕してもらっていたようで、やたらダルさを訴える体に逆らわず、頭をカザネの腿に預けたままに、喉の渴きを訴える。

「ああ。用意してもらっておいた。飲めるかい？」

「うあゝー…… うん、大丈夫」

「お、やっと目を覚ましたか」

「アベルさんがお酒に弱いとは、思わぬ弱点もあったものですね」

のろろと起き上がって、カザネが差し出してくれた水の入ったグラスを受け取り、舐めるように一口含む。

身体中に染み渡るように水が全身に行き渡り。多少頭がはっきりとしてきた。

どうやら最初座っていた中央の席からは移動したみたいで、壁際の客席でカザネに介抱されていたらしい。

中央の方ではゲオルグさんを筆頭にドンチャン騒ぎが続いており、そのゲオルグさんに肩を組まれる形でランスロットの姿も見えた。

こちらの着いた当初は不承不承といった感じが見え見えだったランスロットだけれど、酒と場の雰囲気呑まれたのか。今ではわりと満更でも無さそうな雰囲気を見せている。

多分いいことだろう。うん。

次にジンの様子が気になって店内を見渡すと、中央の席の近くで子供たちにひつつかれながらメシを食うジンの姿を発見。

抱きつかれたり毛並みを引っ張られたりと、子供たちに大人気な様

子ではあったけど、ミアさんも一緒にいるから大丈夫だろ、うん。

そんな様子を確認してから、水をもう一口含んでカザネに謝るオレ。

「ごめんな。オレの介抱に付き合わせちゃって」

「構わないさ。アベルの世話をしながらではあるけど、それなりに楽しく吞ませてもらっていたしね」

そう言うカザネの頬は少し赤く、普段と比べても多少上機嫌そうな様子からして、楽しんでいたというのは本当っぽいなと感じた。

「お酒を吞むところは見たことがないな、とっていましたがか
こういう理由からでしたか」

「あまりにも自然に吞んでたから、全く予想がつかなかったわね」

「　　なんか勢いに吞まれて、つい」

遅れながらも周囲に視線を向けてみると、対面の席にグリムさんとマリス。

オレの両隣にカザネと、酒場のお客さんだろうか。茶色の髪をした眼鏡をかけた女性が座っていた。

「ワインの時はそれなりに強い酒だったし、その所為かと思っていたが　　完全に酒がダメなようだな、アベルは」

「みたいだなあ。　　別に気持ち悪くなるとかってわけじゃないんだけど、だめだ。意識が飛ぶ。　　なんか食い物ある？」

一心地ついて、自分のあまりにもな酒の弱さに嘆息しながら、飲めない分は食で補おうと食い物を探すと。
すい、とオレの眼の前に料理をもらった皿が差し出される。

「ほれ。そちらの娘が目を覚ましたらそう言うだろうっておったから、用意しておいたぞ」

「あ、どうもすみません。？」

カザネとは逆サイドの、茶髪の女性の側から差し出されたそれに礼を言いつつ。

なんか聞き覚えのある声が聞こえた気がして。首を傾げながら皿を差し出してくれた女性に目を向ける。

「どうした、食わんのか？」

「いや、食べる食べる」

にやにや、と笑みを浮かべながら問い掛けてくる茶髪の女性。
ううん。見覚えねえなあー 気のせいなんだろうか。
鳥っばい食感の唐揚げを頬張りながら、まだ少しぼやく頭でまじまじと女性を見詰めて、首を捻る。

声は聞き覚えあるんだけどなあ。どこで聞いたんだっけ。

疑問に思いながら周囲に視線を向けると、グリムさんが隣の女性と同じようににやにやと笑っていて、マリスが何故か額に汗を浮かべていた。

カザネもどこか楽しそうにオレの様子を眺めていて、何か面白がられるようなことが起きているのは間違い無さそうなのだけれど。

「……すいません。どっかで会ったことありましたっけ」

唐揚げを水で流し込みつつ、考えるのを諦めて直接聞くことにしたオレ。

その様子に猶も楽しそうに女性は笑みを深め。

「ふむ。そうじゃのう　これならばわかるかの？」

そう言っつて、女性は眼鏡を外す。

眼鏡の奥の、金色に光る瞳をまじまじと、眉を寄せながら穴が空くほどに見詰めて

「あまり意地悪せずに、教えて差し上げたらいかがですか？姫様」

「ぶふうッ！」

口に含んだ水を噴き出すオレ。

咄嗟に顔を逸らし、なんとか女性陣に水をぶっかけるのを避けたオレはとても頑張ったと思う。

「なんじゃ。もうネタばらしか　つまらんのう」

「ほらアベル、これで拭くといい」

多少不満げに唇を尖らせる茶髪の女性と、こうなることを予期していたのか、布を差し出してくれるカザネ。

その布で水に濡れた服とかを拭きつつ、未だに混乱している頭でなんとか言葉を絞り出す。

「な、なんであなたがここにいますか。　マルグリット様」

ふふーん、とカツラであろうつ茶髪を揺らしながら、彼女は得意げに
笑みを浮かべた。

第29話 酒場にて

「おぬしらが王都まで戻って来たと聞いて、王城へと顔を出すのを今か今かと待っておいたら、なんとおぬしだけでなく、ランスロットやフィオリまでもがこちらをほっぽって飲みに行ったというではないか。そんな話を聞いたら　　のう？」

のう？じゃねえ。

気管に入り込んだ水を何度か咳き込んで追い出して、もってもらしく腕を組んでこの場に居る理由を話す王女さまに突っ込みたい気持ちをなんとか堪え、対面でにっいたらにっいたら笑ってるグリムさんに目を向ける。

「いや、あの……大丈夫なんですか？」

なんとなく王女様に直接は聞けなかったオレ。

「今更戻ってもらおうにも、すんなりと戻ってくれる方じゃありませんしねえ。無理矢理戻ってもらおうとしても、下手に騒ぎになったら注目を浴びてバレてしまうかもしれないし」

困りましたねえ。と呟くグリムさん。

なんかなあ。言ってることはそれっぽいんだけど、楽しそうに笑いながら言われてもなあ！

とりあえず差し出された食べ物を再度口に運んで、地味に空腹を訴えていた胃袋を宥めてから、深呼吸。

よし、少し落ち着いた。

「まあそう案ずるな。一応護衛の者も何人かこの酒場に混じっておるしの」

「うっそ」

店内を見渡してみる。

ざっと見た感じ、見渡す限り男女関係無く飲んだくれしかいないように見える。

「飲んだくれしかいないように見えるんですけど」

「お忍びの護衛が目立つようではいかんじゃろ」

「そりゃまあ　そうなのかなあ？」

酒飲んでどんちゃん騒ぎながら護衛ってできるもんなんだろうか。

まあ、王女様の護衛なくらいだし、出来るんだろうな。もしくは酒飲まずにどんちゃん騒いでるのか。

どっちにしてもすげえなあ。オレは酒を入れずにあの喧騒の中に溶け込める気がまるでない。

楽しそうだけど、酒飲めたらめっちゃ混ざりたいけど。

「それにAランクの魔物を二体纏めて相手にして勝利するなどといった、とんでもない武勇を持つ者が傍におるのじゃ。この場以上に安全な場所はそうあるまい」

あれ、もう知ってるのか。

「カザネたちから聞いたんですか？」

「うむ、おぬしが寝ておる間に。それに王国に戻る際には、魔物の群れを相手にあの魔杖剣も使ったらしいではないか！やはりおぬしはヨージェフの息子で相違無いようじゃのう」

私は確信しておったぞ！と上機嫌にばしばしオレの肩を叩いてくる王女様。

何やらオレが酒飲んでぶっ倒れている間に、マリスやカザネ、そしてランスロットからの報告を受けたグリムさんから、オレの話聞いていたらしく。

それらの話を聞いて、オレがジーさんの息子だと確信するに至ったらしかった。

「マルグリット様が関わる事に関しては、恐ろしく疑り深いランスロットが認めるくらいですしね。彼が認めたのならば私たちも信じるに値します」

ということらしい。

あれほどの実力を持つ者が、わざわざジーさんの名を騙る必要がないとかなんとか、グリムさんによるとやたらとオレのことをかなり高く評価してくれてたらしく。

そんな様子がまるで見えなかったオレとしては、ランスロットがオレを認めてるなんて言葉は、かなり意外だった。

正直嫌われてるんだろ？な、くらいに思ってたしな、オレ。

間の抜けた顔でそんな話を聞いていたオレに対して、うんうん、と何度か頷き。

「ランスロットが認めたというのならば、最早何の問題もあるまいて」

「はあ」

「そこで なんじゃがの」

び、と指を一本立てて、身を乗り出し気味にこちらに顔を寄せてくる王女様。

寄られた分だけ仰け反るオレに、悪戯っぽく笑みを浮かべて。

「おぬし、国に仕えるつもりは無いらしいが、考え直してはみぬか？ もしおぬしが私の騎士になってくれるというのであれば、叶う限りの厚遇を約束するぞ？」

にこやかな笑みを浮かべて、冗談めかした口調でのお誘いではあったけど。

目だけはすごい真剣だった。オレでもたじろいでしまうくらいに。思わず頷かなかった自分を褒めてやりたい。もし仕官以外の用件だったならば大概の提案は呑んでしまいそうな、それくらいに美しい顔だった。

とんでもない威圧に固まってしまいそうな表情を、努めて解し。

「いやあ 宮仕えは、ちょっと」

やんわりと断りの意を述べると、猶も数秒間、オレの顔を見つめて。

「……ふむ。 まあ、ダメで元々じゃての。 おぬしの意味が変わらんのならば、無理強いするつもりはない」

そう言って顔を逸らし、お酒をちびりと飲む王女様。

ふひー。目が逸れたのと同時に圧迫感が消えて、こっそり安堵の息を漏らしていると、そんな王女様を嗜めるようにグリムさんが声を

かける。

「ダメですよマルグリット様。陛下も彼に対しては冒険者のままで良いって言ってたじゃないですか」

「一応聞いてみただけじゃ！もしかしたら気が変わるということもあるかもしれんじやろ」

「ならいいんですけどね。本気でお誘いしてるわけじゃないようですし」

オレ以外の人は王女様の眼力には気付いていないようで、場も一瞬前とまるで変わらない和やかな雰囲気にも包まれたままだ。

グリムさんとじゃれあってる姿を見ていると、先ほどのことはオレの気のせいだったんじゃないかとすら思ってしまうけれど、もしあの時何となくでも頷いてたら、間違い無く冗談でしたー、では済まなかった気がする。

王女様の意外な一面に驚いていると、すっかりいつもの雰囲気に戻った王女様が再びこちらに目を向ける。

「ともあれ。冒険者でありたいというのなら良いが、もし心変わりましたその時は私に言うのじゃぞ」

「はあ、わかりました」

「うむ」

満足そうに頷く王女様。

王様にでもなく自分に言えっことは、王女様直属のー、にしたい

ってことなんだろうか。

なんか色々思惑がありそうだけれど。まあ、今のところオレには関係無いか。

深く気にし過ぎると面倒なことになりそうな気がしたので、あまり気にせず気を取り直すことにする。

「そついや、護衛の人や、一応とはいえオレがいるとは言え、よくこんなところに来る許可下りましたね。王族つつたならもつと身動きの取れないもんだとばかり」

とりあえず仕官の話題から離れる為に、適当な話題をぶち上げるオシ。

実際疑問ではあったし。王族がこんな世俗に塗れまくったところに来るなんてとんでもない！とか言われそうないメージがある。

酒飲み過ぎたのか隅でゲロってる人や、半裸になってるヤツとか居るしな。

こんな高貴な王族が見てもいいもんなだろうか。

ちらちらとそついうのに視線を移しては、額に汗を流しながら黙々と両手で抱えたジョッキを飲んでるマリスの様子が、実はマズいことなんじゃないか、という予想をオレにさせてくれる。

そんな疑問を向けてみると、ちょっと目を瞬かせた後に、眼の前に置いてあったジョッキを掴み豪快に中身を呷り、これまた男らしくテーブルにジョッキを叩きつける王女様。

「民草のことを知らずして、どうして億万の民を食わせる政が成せようか！」

「 といったようなことを、若かりし頃お父上である陛下が仰つていたらしくて…自分も冒険者に混じって魔物退治とかしていたから、強く言えないみたいなんですよね」

一瞬カツコイイこと言うなあ、と思つたら、格好良いっちゃ格好良いけど、なんかダメな匂いのする格好世さだった。

王族つっても親と子の関係は切り離せないもんなんだなあ。自分も若い頃やんちゃしてたから、子供に強く言えないお父さんそのままじゃねえか。

以前王様と会つた時は滅茶苦茶落ち着いた感じの人に見えただけど、あの人も若い頃はこんな感じだったんだろうか。

「王族つてもつと世俗との交わりを絶つもんだと思つてた…」

「 まあ、旅をしていた最中にも、道端で雑談を交わす施政者というのは結構いたぞ。

私の国でも王自ら白昼堂々酒盛りを開いたり、率先して王族が魔物の討伐に行つたりするしな。民に近い施政者というのは好感が持てる」

王女様やらグリムさんの様子に思わずそんな感想を零すと、そんなオレに他所のことも教えてくれるカザネ。

勝手に王族のイメージみたいなのを作り上げてたけれど、この世界ではこういつた王族や貴族は珍しくないのかな。

ちよつとこの世界への認識を改めていると、カザネの発言に興味深そうに目を輝かせながら身を乗り出してくる王女様。

「ほお！蛮族などと呼ばれるだけあって、鬼族の王は豪快そうなお人じやのう！自ら討伐に赴くくらいなのじゃから、やはり王も強い

のか？」

「そうですね。基本的に我らの王は王族の中でも最も強い者が選ばれます。それは単純な戦闘の強さであつたり、民を治める政に関する強さであつたり様々ではありますが、他の王族にも認められるほどの強さを持つ者が、代々の王となつていきますね」

「なんとわかりやすい！人を従える力を持つ者が人を従える王となる。これほどわかりやすい王の在り方もないのう」

「そうかもしれません。…それなりに問題も孕んではおりますが」

「ふむ。そうじゃのう……確かにそのような形では、後継争いなどは激しいものとなりそうよな。今まで国が割れたりといったことは無かつたのか？」

「今のところは、まだ。ですが毎回世継ぎを決める時期が近くなつてくると、国が慌しくなつてくるのは確かですね。例えば」

オレを挟んで、鬼族の国である鬼ヶ島で昔起こつたという、世継ぎ争いの説話みたいなのを話し始める王女様とカザネ。

なんかおもしろいきりナチュラルに鬼族のこと蛮族呼ばわりしてるけど、この感じだと悪気とかまるで無いんだろうなあ、王女様。

カザネも特に気にした様子も無いし、会話の中にも別に隔意といったものは感じられない。

世間一般ではそういう認識が広まりきつてることなんか。むしろ蛮族と感ずてはいても、隔てなく接することが出来る王女様はかなり上等な部類なのかもしれない。

カザネの話す鬼ヶ島での後継争いの話は、実話なのかどうなのかは分からないが、お話しとして出来上がっていて中々に面白く、オレも王女様と一緒にになってカザネの話に聞き入っていたのだけ。その話が一段落してしばらく雑談を続けていると、不意に王女様がおお、と声を上げながら両手を叩いた。

「忘れておったわ。父上から言伝を頼まれておったのじゃ」

「ちゃんとした理由もあつたんですね」

オレもグリムさんと同意見だった。

ほっとあかしが寂しくて来た、ってだけの理由じゃないのな。グリムさんと違って面と向かつては言えないけども。

「うむ。どうしても行くと云うのなら、とついでに父上に頼まれたのじゃよ」

そう言つてちよつと周りに気を配るように目を向ける王女様。

相変わらず周囲は酒盛り続行中で騒がしく、こちらに注意を向ける人もいないし、喋り声も喧騒で近しい人にしか届かなさそうな具合だった。

そんな様子を確認してから、オレの方へと目を向ける王女様。

言伝つてのはオレ宛てか。…まあ、オレしかないか。

メシに伸ばしていた手を止めて、聞く姿勢を整えると、思い出すように上向き加減に王女様が口を開く。

「今回の侵攻でのことなんじゃがな。おぬし、ティグルス要塞でめちやくちゃ目立ったのである。要塞に詰めている者たちから、おぬしについての問い合わせがそこそこ来ておるそうなんじゃが、ど

「つする？だそうじゃ」

「……ああ、成る程。」

詳しい話を聞くと、要塞の城壁を守っていた時のオレを、今回の侵攻の多くの魔物を焼き払った雷の使い手だと推測する者が多くいて、風貌からして冒険者だと思われるが、あの時魔物の侵攻に即応した冒険者の援軍の中にはそんな人物はおらず、オレの情報は皆無。

「が、オレというか、ジンというわかりやすい目印である、白虎の姿を王都で見かけた者がそこそこいて、冒険者ギルドなどでもジンの姿を見かけたものがある、ということから冒険者であることは間違い無いだろう、と推定。」

それを知った主にオレが城壁で守った騎士の人らが、オレの戦功を讃えて欲しいと願い出たらしいのだけど、司令部としては問題無いので、冒険者ギルドにオレを探すよう打診してもいいか。と王女様がここへ向かう前に王様の下へと連絡があったらしい。

「ロベイロ殿の方にも既に連絡しておるそうじゃから、ギルドからも同じような話をされると思うがの。」

「こちらとしてはおぬしを表彰するのは何ら問題無いのじゃが、そうなるとおぬしの身の上についての扱いがのう……」

表彰されるということは、表立って色んな人の前で、この人はコレコレこういうことを成し遂げた凄い人だから、それを讃えて表彰します。といった感じのことをされるといっわけ。

そうなる、オレ　　というか、オレのやったことと、オレの姓名が色んな人に広く知れ渡ることになる。

王女様と王様が気にかけてくれるのは、恐らくオレの名前の方だろう。賢獣を使役するアルベルト　　じーさんの姓を持った強力な魔法使いとか、じーさんの繋がりを感ずるのはめっちゃくちゃ容易そうだもんなあ。

「やっぱ気付く人も多いですかね。名前出したら」

「そりゃの。そこそこにヨーゼフ殿との関係を疑う者は出てくると思うぞ？」
というか、どうなんじゃ、フィオリ。既に要塞の方ではそういつた噂が出てたりはせんのか」

「特別聞き調べたわけじゃありませんから何とも言えませんが…耳にした限りでは、まだそのような話は出てませんでしたね。ランスロットならもう少し詳しいことも知っているでしょうが……」

そう言っただけで、と酒場の中央の席へと視線を向けるグリムさん。釣られてオレも視線を向けると、なんか中央の席では皆で飲み比べが始まった。

ランスロットも顔を赤くしながら飲んでいて、潰れてぶっ倒れている者もいる中で、中々に善戦しているみたいだった。

今のところ、まるで顔色を変えずにさくさく飲んでるクラウドさんとローザさん。それと顔真っ赤にしながらもがばがば飲んでるゲオルグさんあたりが優勢っぽかった。

いいなあ、オレも酒飲めたらあんな中混ざりたいなあ…！

そこはかとなく羨ましさを感じながらその場を眺めていると、頼に手をあてながら視線を戻すグリムさん。

「あの様子では、今日は話を聞けそうにないですね」

「ぬう。あやつめ、楽しそうじゃのう」

「あのようなオリガ様は初めて見ました…」

「旅の最中では、もっと堅い人間のように見えたがな。中々付き合
いがいいじゃないか」

「いや、あれはどっちかつつーと周りのノリに毒されてるだけ
だろ」

あの場の雰囲気の流れに流されずに済む人はそうはいまい。

恐らく中々見る機会の少ないであろう、ランスロットの弾けっぷりを堪能した後、ともあれ、と王女様が仕切り直して、こちらはこちらで会話を続けることにする。

「こちらとしてはどちらの場合であろうと対応は変わるんの。父上からはどちらにしても特別扱いはせぬ、とも伝えられておる」

「ああ、それはありがとうございます」

特別扱いしないってことは、表彰することとなっても、じーさんの息子だからどうこう、といったことはせず、他の人と同列に扱ってくれるということだろう。

同時に、恐らく表彰された後にオレの素性について探ってくる人らがいたとしても、特別フォローしたりはしないぜ、ということでもあるんだろうけど、それはまあ当然のことなので、特に問題無し。

一応以前似た感じのことを言っただけで貰ったことがあるとはいえ、改めて保障されてるっばげな様子に、多少ほっとする。

とはいえ、それもこれもオレが表彰を受けることになったら話か首を捻って考え始めるオレの姿を見て取って、急かす気は無いのか、女性陣に別の話題を振って歓談し始める王女様。

その心配りをありがたく受け取って、思考に集中することにする才

し。

どうすっかなあ。表彰受けずとも、別に名前隠してるわけでもないし、調べる人が調べりゃオレのことなんてすぐバレると思うんだよな。

最初に冒険者ギルドに向かった時みたく、そういった気になる噂を調べる人つてのもそこそ居そうだし。要塞で暴れてたヤツがオレだつてという話は、王女様の話を受ける受けないに関わらず、情報を集める人には、広まることは間違いないだろう。

そこからオレのアルベルトつて名を知つて、じーさんとの繋がりを関連付ける人も……それなりにいるんだろうなあ。

そんな人らがオレに対してどういった行動をとつて来るのかは、いまいち想像がつかない。そのまま放置する可能性だつてあるし、じーさんの息子かもしれないオレに、一介の冒険者以上の何かを求めてくる可能性だつてある。

オレやじーさんクラスの力を持った人間つて、そうはいなさそうだしな。

表彰を受けるか否かつてのは、要するにその想定できない人たちの人数が大きい方を選ぶか、小さい方を選ぶか。といった問題になるのだろう。

表彰を受ければ、オレを知る人の総数が大きくなり、そういった何してくるかわからん人の数が増えて、その分面倒事が起きる可能性も高くなる。と。

メリットとしては名声か。オレの力がそれなりに知れ渡ることによって、融通がきくことも多くなつてくるだろう。バリエッタみたいになつても酒場に入れるようになったりとか。

一方、表彰を断れば、オレを知る人の総数が少なくなり、その分だけじーさん関連の何某かが起きる可能性も減る。

代わりに名声もほとんど手に入らない　まあ、とりあえずの現状維持ってところか。

いや本当にどうしたもんかな。

……。
……。
……。

よし。決めた。

とつぷりたつぷり時間をかけた決断を王女様に伝えた後は、堅苦しい話はすっぱりお終いにして、今回の依頼の苦労話やらなんやらといった雑談に華を咲かせることとなった。

途中、オレが目を覚ましたことに気付いたバリエッタの連中も交じったりしつつ、なんだかんだでこの賑やかな宴会は、実に参加者の半分以上が酔い潰れるまで続き、夜遅く、というよりも朝早くといった方が近い時間になってようやく終了した。

流石に王女様は酔い潰れたりはしなかったものの、その王女様と同席して緊張したせいも、やたら急ピッチで飲んでいたマリスなんかはへべれけになってグリムさんに介抱されたり、当たり前のように酔い潰れたランスロットが、お姫様の護衛の人に担がれたりしていた。

どう見てもちよっとハメを外して飲みすぎちゃった若者たち、とい

った風体で王女様ご一行は帰宅。

王女様おもつきし朝帰りって感じになっただけどいいのかなあ、とは思ったけど、まあ、オレが気にすることじゃあない。

バリエッタの面々はほぼ全滅していて、なんとか生き残ったケイムスさんやクラウスさん、ローザさんといった人たちが他の一般参加者の生き残りと協力して、潰れた連中をテキパキ二階の宿に押し込んでいた。

…こういうことがあるから、酒場には宿屋付きが多いのか、と感心したりした。

そんな彼らをちよろつと手伝って、オレとカザネとジンも帰宅。

長旅の疲れと騒ぎ疲れ、更には久々のふつかふかのベッドということもあって、部屋に辿り着くや否や、カザネと揃って仲良く、倒れ込むようにベッドに横になる。

なんとか夕暮れまでには起きて、ギルドに顔を出したいなあ　と
考えながらも、この眠気は無理だろうなと、頭の隅で考えながら、
久々の快適な睡眠を貪るのだった。

第30話 その後のあれこれ

「で、結局表彰を受けて、その褒賞やら何やらで私の身請けをしたと」

「そんな感じですか。おい、ジン、動くな。涎が引っ掛かって見えねえ」

「は……。私としては、こんなに早く身請けしてもらえると予想外とはいえ、ありがたい話だから否やはないんだけど。思い切ったわねえ、少年」

あれから一ヶ月ほど経った、ある日。

オレの部屋に遊びに来たナーディアさんが、急にオレが彼女を身請けしたことへの説明を求めてきたので、今回の騒動の顛末について話していた。

「別に悪い評判じゃないですすね、起きるか分からないものにびくびくするのもなあ……と。　　いてえ！」

「今回の報酬と王国からの褒賞。それに加えてここ一ヶ月の王国に入り込んだ魔物の掃討依頼を合わせれば……まあ、あそこまでの金額にもなるのかしらね。　　何やってるの？」

「いや、朝食つた肉の骨が喉に引っ掛かったみたいで。取ってやるうとしてるんですけど、ジンのやつ手え突っ込んだら噛みやがって」

ジンの口の中を開いて、引っ掛かっている骨を探すものの、影が多くてどこにあるのか見え難い。手当たり次第に探そうと喉に手を突っ込んだら噛んでくるしなあ。どうしたもんか、と口の中を覗んでいると、オレの背後からジンの口内を覗き込むナーディアさん。

「どれどれ………あ、それじゃない？」

「うん？ あ、ほんとだ」

ナーディアさんが指差した先をよく見てみると、白くて尖ったものが喉の奥にちらついて見えた。

取ってやるうとそれに向かって手を伸ばし、反射的に口を閉じようとするジンの上顎を片手で押さえながら、頭ごと口の中に突っ込んで喉に引っ掛かっていた骨を取ってやる。

「ふいー、取れた取れた。 てか、よくわかりましたね。 オレなんて全然気付かなかったのに」

「ふふー。 ダークエルフは夜目が利くのよ。 虎ちゃんの口の中くらの暗さだったらはっきり見えるわね」

「すげえ」

オレも森暮らしが長かったし、そこそこ暗闇には強い方だと思ってたけど、段違いの性能だな。

痛みが取り除かれて安心したように寝そべるジンに、ちょっとした武器になりそうな大きさの骨を渡してやると、今度はちゃんとバリバリ噛み砕いて飲み込む。

そんなジンの頭を撫でながら、確認するように首を傾げて尋ねてく

る、ナーディアさん。

「でも本当によかったの？王都じゃ少年、既にちよつとした英雄扱いになつてるわよ。 ティグルス要塞を守る為、たった一騎で駆け付け単騎で要塞を守り抜いた無双の戦士、アベル・アルベルト……って講談師の人が」

「大袈裟に言つてくれるなあ」

他に戦つてた人もいたし、守つたのは要塞じゃなくて城壁だろうに。ジンの涎のついた顔を服の袖で拭いつつ、思った以上に広まってそうなおれの名前に多少辟易としたものを感じはしたけれど、それもこれも一度決めたことなので、悔やむ気持ちは生まれぬ。

「そりゃあ大袈裟にも言うでしょ。彼らからしてみれば、久々に現れた飛びつきりのネタだもの。」

大英雄、ヨーゼフ・アルベルトに息子がいて。その息子が親と同じく国を守る為に戦っていた、なんて話はね」

……まあ、そういうわけで。

一連の騒動を通して感じたのだけれど、この世界においてオレやじーさんの力はどう見ても規格外のよう。

その上ジンやグルなんていう、規格外のパートナーと共に生きていくとなれば、いくら足掻こうとこの先目立たずに生きていくのは難しく思えた。

いやまあ、頑張ればこれからは無難に静かに生きていく、ということも出来るのかもしれないけれど、今回の侵攻が終わった後のこの状況では、既にして詰め将棋のような段階で、相手が間違えてくれねば無理という状況になっていることに、あの時酒場で考えていて気付いたんだ。

提示された選択肢は、どちらにしても遅かれ早かれオレのことが世に広まってしまいう選択肢。

ならばいっそ、こちらから全て明かしてしまおうと、そういう決断をオレは選んだ。

王女様や王様、それにギルドマスターからは本当に良いのかと確認されたけれど、今後オレの力や素性を怪しんで、こそこそ探られたりといったようなことをされるよりは、あいつはじーさんの息子だから、という理由でオレの実力について納得してもらった方が面倒が少なそうだから、と説明。

オレがそれでいいのならば、と王国側もギルド側も思った以上にあつさりとして承してくれて、魔物の侵攻時に武勲を挙げた者を表彰する表彰式の際、王国の防衛に最も貢献した者の一人として、ヨーゼフ・アルベルトの息子、アベル・アルベルトの名は王国中に知れ渡ることになった。

表彰やらが終わった後にランスロットやグリムさん、それにマールさんに聞いた話ではあるけれど。

わざわざ今まで隠してもらったのに、なんかやけにあっさりと王国側もギルド側もオレのカミングアウトを賛成してくれたなあ、と思っていたら、あの時点で既にオレについて探りを入れてきている人たちがそれなりにいたらしい。王国の方にも、ギルドの方にも。広めないと約束した手前、面倒な駆け引きをしてこちらからは開示しないようにしなければいけない、と頭を悩ませていたところにオレのそんな提案があったので、あちらとしては面倒事が減って渡りに船だったとか。

表彰された後、王国側からは改めて、王様直々にオレの好きに生きて良い、とのお言葉をいただいた。

じーさんの時の事件を国民がまだ根強く覚えているので、今回はそんな過ちは犯さないぜ、と国民にアピールする必要もあったかららしい。とは、最近顔を合わせる機会の増えたランスロットの談。

あの依頼が終わった後も、マリスはちよくちよく、ランスロットはたまーにオレの住んでる宿に顔を出すようになった。

マリスは相変わらず顔を出した時はオレたちと一緒に冒険者の依頼をこなし、ランスロットはオレやカザネと軽く模擬戦などをしていく。

そんな様子に、王女様もオレがじーさんの息子だと納得したみたいだし、二人共もう顔を出す必要無いんじゃないかね？と二回目の訪問あたりで両者に尋ねてみたところ。

以前の依頼を通じて友誼を深めた、互いの個人的な交流 とい

うタテマエの、王国とオレとの縁作りの一環で来ているのだと、告げられた。

…面と向かってランスロットにそんなことを言われたときは、ああ、そうですか。としか言えなかったオレ。

前と違って今回は、王女様だけでなく王様からも暗黙の了解というか、無言の指令というかを受けてるそう。仕官などを無理強いさせるわけにはいかないけれど、有事の時にオレに具合よく動いてもらう為に、個人的に仲がよくなった、といった言い訳を使えるランスロットやマリスとよく交流させて、王国との繋がりを深めよう、という目的があるらしい。

「　　というわけで、何か困ったことがあればオレを通じて王国が助力することも吝かではないぞ。…途方も無い貸しになると思っ
がな」

「ようやく元の生活に戻れると思ったのに……」

絶対にランスロットに頼み事をするのは止めよう、と誓った。マリスのしょぼくれた様子を見れば尚更。

転じてギルドの方は、カミングアウトしてからも特に変わり無く。良くも悪くも特別扱いされることなく、Bランクチームの冒険者としての活動を続けている。

変わったことと言えば、ギルドの方では無く、ギルドに所属する冒険者たちがオレをチームに勧誘したり、逆にチームに入れてくれ、と志願してくる人が一気に出てきた。ということか。

実力は既に証明済みな上に、英雄の息子というネームバリューまで

ある所為か。 チームに入るか否か、チームに加えるか否かを考慮するのも困難なくらいに多数の冒険者が言い寄ってくるので、面倒臭いのでとりあえず全て断ることにしている。

バリエッタと一緒に行動してて、ミアさんみたいなスカウト的な役割の出来る仲間が欲しいと感じていたけれど、そういった仲間を探すのはもう少し落ち着いてからになりそうだった。

「ま、皆が皆肯定的に捉えてるわけではないみたいだね。」

少年は悪評じゃないとは言っけれど、人によってはヨーゼフの年齢を考えると、あの年頃の息子というのはおかしい。嘘なのではないかー、とか。

講談師の中には、王国を守ったのに追い出される羽目になり、王国を恨んだヨーゼフが、王国に復讐する為に育てた存在が少年であり、彼はヨーゼフに代わって王国に復讐しようとしている…！とか言ってる人も居たわよ」

「まあそりゃ、そういう人もいますよねー」

どこのどんな人がどんなことを言っただって、それを信じる人もいれば、信じてない人も必ず居るもんだしなあ。

公表したことでそういったような風評が流れることもあるだろうな、とは予想していたので、想定範囲内ではある。

「意外とあっさりしてるのねえ。 普通は根も葉も無い悪評を流されたら腹が立つものじゃない？」

「なんだか普通に生きられそうにありませんしね、オレ。 今後はどんな風評も飾り程度に思っておかないとなあ、とは、既に考えてたんで」

「ふうん…」

ジンにもたれかかりながら、興味深げにしげしげとオレを見詰めてくるナーディアさん。

それに影ながらこそそ噂されるよか、こつやって大衆に公然とオレの噂が流れてる方が、周りがオレに対してどう思ってるのかわかって都合が良い。

「万が一噂だけでなく、実際に面倒なことが起きそうな感じになってきたら、その場合はどうか他所の国にでも行けば良い話ですしね」
面倒事を抱えてまでこの国に留まる理由があるわけでないし。

今のところは良い関係の知り合いもそこそ居るし、住み心地も悪くないのでこの国を拠点としようと思ってるけれど、住み難くなったらなつたで、他の国も見えて回ってみたいので、ならばよし。と
いった感じだ。

「…ああ、成る程。 だからさつさと私のことを身請けしたのね」

「ええ、まあ」

何時でも気兼ね無くどこにでも動けるようにはしときたいし。 ナーディアさんの女性としての素晴らしさは既に充分分かっていたので、もしすぐに国を出なきゃ面倒なことになる、といった事態が起きてても連れて行けるよう、纏まったお金のある内に正式にオレの元

へと来てもらうつことにしたオレ。

「ふふーん。もしかしたらこの街を離れなくちゃならないかもしれない。ってのは少し寂しいけれど、少年とならどこに行ってもなんとかなりそうだしね。おっけおっけ。どこへなりと着いていくわよ、ゴシユジンサマ」

「ナーディアさんがご主人様ってのもなあ……」

なんかしつくりこねえなあ。

別にそんなこと言わせずとも、しっかり弁えるところは弁えてくれる人だし。

悪戯っぽく口端を釣り上げて笑ってるナーディアさんに、何とも言えずに後ろ頭をかいて首を傾げる。

「別に型に嵌めずに今まで通りで良いですよ。そんな風に呼ばれてたら逆に変な噂立てられそうだし」

風評を気にしないようにするとはいえ、自分から進んで変な噂を立てるつもりもないしな。

「そう？ならお言葉に甘えて。でもせめて、少年の方がもうちよつと碎けた方がいいんじゃない？雇ってる相手に敬語使う雇い主なんていないわよ」

「ああ、確かにそう……だなあ。了解、そしたらこれからはこんな感じで。ナーディアさん」

「おっけおっけ」

そうですね。いつもの癖で言いかけた言葉を飲み込んで、普段力ザネやジンと交わしてるような口調に改める。

さん付けはなんとなく改められそうに無かったのでそのままだったけど、あちらもそこまで気にするつもりもないらしい。

そんなオレの様子に片手で丸印を作ると、そういえば、と室内をぐるっと見回して首を傾げるナーディアさん。

「ここに来る時に部屋を覗いてもいなかったから、てっきり少年の部屋にいるものだと思ってただけど　カザネちゃんは？ 買い物にでも出かけてるの？」

ちなみに現在は、Bランクに上がって収入が一気に増えたので、『遙々亭』に一人一部屋ずつ部屋を借りて生活している。

三人と一匹となると、ちょっととした所帯になつてきたと感じたので、いつそ家買うとか借りるとか、他のとこに引越すことも考えたんだけど。ジンがこの宿をかなり気に入っていて、更には『遙々亭』は絶対数が少ない賢獣や魔獣使い向けの割高な宿の為、年中どっかしら部屋に空きがある状態だということで、出費はそれなりにはなるが、思いきつてこの宿の部屋を三つ借りることに。

どうせ毎晩最低でも片方の部屋は使われないうし、二部屋でいいんじゃない？ などと言われたりもしたが、そこはそれ。建前とどうかなんというか。やっぱ皆プライベートな空間は必要だろうしね！

ともあれ。そんなこともあって、この部屋にカザネがいないというのはそれほど不思議なことではないのだけれど、ナーディアさんが言うには、カザネの部屋にもその姿は見えなかったという。

ナーディアさんの言う通り買い物にでも行ったのかな、とも思ったが。

「 買い物行く時は一声かけてから出かけるし、多分裏庭で鍛練でもしてるんじゃないかな。最近暇を見てはそんな感じだったし」

「 そうなの? 」

「 うん 」

王都に戻ってきて以来、以前からも早朝に自己鍛練とかはしてたけど、それにも増してハードな鍛練をカザネは己に課すようになっていた。

ランスロットが来た時には毎回模擬戦をして剣を交わしているし、オレやジンともちよくちよく手合わせを求めてくる。

普段の様子は以前と変わらないのだけれど、剣を握っている時の力ザネはなんとというか、鬼気迫るといった言葉が正に当て嵌まるような姿で、少し根を詰めすぎなような気もするものの、ああまで鍛練に励む理由もなんとなく分かってしまうので、普段の生活や仕事に支障が出ない限りはカザネの好きにさせてやろうと考えている。

とりあえずしばらくは何時でもカザネのフォローが出来るように、常に様子を気にかけてくくらいか。

「 成る程ねえ。少年の戦いについていけるようにーって感じかしら。そついうとこ頑張り過ぎちゃいそつだものね、あの子 」

「 恐らくは。別に気にしなくてもいいんだけどなあ 」

「 ふふー。そつは言われても頑張っちゃうものですよ。こついうのつて 」

「 確かにオレも、カザネの立場だったらそつしてるだろうしなあ 」

「念のため私もカザネちゃんのこと、よく見るようにしておくわね。ちよつと無理しすぎてる様子だったらそれとなく知らせるわ」

「うん。お願い」

こればかりはオレにはどうしようもない。

オレが鍛えようにも、カザネに魔法の素養は無いみたいだし、格闘のスタイルも全然違うから、出来るとしたら組み手の相手くらいだ。あとはカザネが無理しすぎないように注意して、地道に鍛練と実践を繰り返してくしかないだろう。鬼族つて格闘戦のポテンシャルは相当高いらしいし、伸び代はまだまだあるだろう、と思う。

任せといて、と豊かな胸に手を宛てるナーディアさんに軽く頭を下げて。

さて、と話も一段落したところで立ち上がるオレ。

「したらそろそろ時間だし、出かけてくる」

「はいはい了解。今日はどんな感じなのかしら」

「どうだろ。来てくれとしか言われてないからわっかんないけど…昨日ギルドでダグド山のあたりにガルムの群れを見かけたって話を聞いたから、それ関係じゃねえかなあ。先にギルドで話聞いておくから、ジンと一緒に来るようカザネに伝えといて。多分今日中には帰れると思いま　う」

「…ふふー、まあ、すぐに変えられるものじゃないわよね　それなら美味しいごはん作って待ってるわね。気をつけて行ってらっ

「しゃい」

ほんの少し気を抜いただけでと今までの喋り方になっちまうなあ……！
なんか噛んだみたいで恥ずかしかったので、面白そうに笑うナーデ
イアさんから背を向けて、出かける準備を整える。

紺の外套を羽織り、肩にバッグを提げて、杖を手に。

数分もかからない身支度を整えて、手を振り見送ってくれるナーデ
イアさんに手を振り返す。

「んじゃ、行つてきます」

グルガの森を出てから数ヶ月。

たったそれだけの期間で、今まで緩やかに流れていた時が、急に全
力疾走を始めたかのように色んなことが起きた。

森に住んでいた頃から何となくは理解していたが、オレの持つ力は
やはり異常とも呼べるような程度の力のように、それについてちゃあ
無いより有った方がありがたい物なので何の文句も無いけれど。

けれど。ここまでの力を持って生まれ変わったオレは、何か意味が
あつて、もしくは何かを為すために生まれ変わったんじゃないか

という考えが生まれしてきた。

よくわからない内に、何の脈絡も無く生まれ変わった自分の状況に
理由を見出したいだけじゃないのか。という気もするが。それにし
たつてこの、誂えたようなオレの境遇は、どう考えたって出来すぎ
ている。

国を救った英雄の息子。最強のパートナー。そのどちらと並べても遜色の無いオレ自身の身体の性能に、それらの要素が非常に有用なこの世界。

誰も何も言ってはくれないけれど、この状況が何より雄弁にオレに語りかけてるように感じる。何かを為せと。

その何かは何なのかってのはまるでわからないけど、これだけの要素を仕込まれたオレじゃないと出来ない何かではないのか。

と。

王女様に表彰を受けることを返事したあたりから、つらつらと考えていたのだけれど。

「やっぱりわからんことを察してもなあ」

絶対なんかあるよなあ、とは思うものの、表彰を受けることを決めた時と同様、何かありそうな気がする、という以外にまるで指標のないことを考えても、仕方ないわな。

深く考えようと浅く考えようと、答えを出そうと出すまいとオレに引っ付いて回りそんな問題だけに、適当に考えて今後も常に頭にちらつくのは嫌だから、一応自分なりに当たってようが外れてようが、解だけは作っておこうと思っていたが 止めにする。

「くあー……！」

真面目くさく考えていたテンションを振り切るように、大きく伸びびをして空を見上げる。

燦々と輝く太陽にてのひらを翳し、にんまりと笑ってみせる。

「どこのどなたかがオレにこんな天命を与えたか知らないが 覚悟しろよ。 … オレは好き勝手暴れ回るぞ、この世界で」

そんな決意を新たに、オレは気候な冒険者生活を今日もまた、続けていくのだった。

<オレが異世界で獣とランページ1、了>

閑話

「おい！英雄ヨーゼフの息子が王国にやってきたって話、お前ら知ってるか！？」

「はあ？今頃何言ってるんだお前。大分前から国中その話で持ちきりじゃねえか」

「いや、こいつ一昨日まで仕事でスタンドリアに行ってたからな。帰ってきて聞いたばっかなんだろ」

「そうそう！」

「あー。そういやそんなこと言ってたっけな。商隊の護衛だっけ」

「おう。あの手の仕事はワリは良いし、危険も少ねえが拘束期間が長えのがネックだな。半年ぶりに王都に戻ってきてみりゃあ、そこから中ヨーゼフの話題でもちきりじゃねえか。何があっただんだよ、いたい」

「ってことは魔物の侵攻があつたことも知らないのか？」

「いやそつちは知ってる。魔物の侵攻くらった割りに被害も少ない上、異例の速さで事態が収束したらしいって噂で流れてきたぜ。侵攻を受けた割りにはあまりにも終わるのが早えから、しばらく大侵攻を受けずに平和ボケした王国が、大したことの無い魔物の群れにビビッて間違えて布告しちゃったんじゃないかね？とか他所じゃ言われて

たな」

「あー、確かに」

「そう言われても、おかしくないくらい早かったな。今回は」

「で、実際はどうなんだよ」

「侵攻の規模は一応子爵か男爵くらいはあつたらしいぜ。スピード解決の要因は、侵攻を受けて即座の赤甲騎団と宮廷魔術師団の出勤が最大の要因だつて言われてるな」

「王国の二枚看板を二枚とも使ったのか。どっちもいろんな思惑が絡んでそう易々と動かせないつて前、王国に仕えてるやつが言つてたが、即応させるなんざ中々思い切つたことすんな、王様」

「四十年前の大侵攻の時は、あいつらを出し渋つたのも被害が拡大した原因の一つだつて言われてるくらいだしな」

「最初から出勤させてもヨーゼフいなきゃどうにもならなかっただろうとも言われてるけどな。まあ、それはさておいても、今回の対応の早さは大したもんだわ。今の王様はめっちゃくちゃ優秀だつて言われてるが……本当に優秀みたいだなあ」

「一説によると、あそこまで出勤が早かつたのは、侵攻の時に国境近くまで出ていた友人のことを心配した王女様が、王様に泣き付いて彼らの出勤をせがんだから、とかそんな与太話もあるけどな」

「あの王様がそんな公私混同しねえだろー!」

「ワハハ！そりゃそうだわな！大方、王様の手腕を妬んだやつらが流した根も葉も無い噂だろうよ」

「そんなところだろうな。話を戻すけどよ。んで、赤甲騎団と宮廷魔術師が出張ったのが解決の一番の理由なのは間違い無いらしいんだが、それ以外にも今回の侵攻で目覚ましい活躍をしたヤツが一人いてよ」

「もしかしてそいつが？」

「そうだが、とりあえず話を最後まで聞け。一々質問に答えるのが面倒くせえ」

「わかったわかった」

「コホン、魔物侵攻の報を受けて、王様が如何に早く彼ら騎団と魔術師団の出動を決めたとしても、大駒を動かすにはどうしたって準備に時間がかかる。彼らが編成を終えて国境に辿り着くまでは、魔物の相手をするのは国境の防衛部隊と即応できたオレたち冒険者の仕事なわけだ」

「お前らも参戦したの？」

「当たり前だろ。侵攻受けてる時もこんな風に酒飲んでたら、翌日にゃギルドから除名処分だ」

「ギルドから除名された冒険者の末路ってすげえ悲惨らしいしな。いざって時にビビって逃げだす暴れ者なんて誰も信用しねえから、奴隷か奴隷以下の仕事くらいしかありつけねえらしい」

「みたいだなあ。今どこに居てどんな依頼受けてるかギルド側に把握されてつから、誤魔化すこともできねえし」

「ああ。あんなバカみてえな数の魔物とやり合いたくなんかねえけど、逃げ出した後のことを考えてどっちがマシか、というとな……」

「だな」

「おれ丁度留守にしててよかったわ」

「侵攻の時にその国にいないのが一番なんだが……いつ侵攻があるかなんて全くわかんねえしな。運が良いやつめ」

「おれもこれからは長期の依頼受けるようにしようかなあ」

「それもどうだかな。おれの時は運良く侵攻から免れたけど……最悪先で侵攻に巻き込まれて、慣れない国で魔物の群れとやり合わなきゃいけないってこともあるだろうし」

「だよな」。 結局おれたちにはどうにもならねえ問題か」

「魔物領の奥地に行って帰ってきたやつが誰もいねえから、侵攻の理由とか魔物が何であんな沸いてくるのかとかまるでわかってねえらしいしな。今のところ」

「昔話の中には奥地まで行って帰ってきたってやつの話もあるけど、実話かどうか疑わしい話ばっかだしなあ」

「ドラゴンナイト竜騎士サーヴィンスとかか？あんな全部作り話だろ」

「いや、一概にそうとは言えないぜ？これはこの間情報屋から仕入れたとっておきのネタなんだが……最近発見された古文書の中に、今は無き魔法大国ゲベルの大魔法使い、グリモアの遺産の在り処を記した地図が発見されたらしい。サーヴィンスがいたと思われる時代とグリモアの生きてた時代は重なってる部分もあるし、もしかしたらサーヴィンスの話も実話なのかもしれないぜ」

「またお前はそんな胡散臭い情報に大金使ったのかよ……」

「夢を追うのも大概にしとけよな」

「なんだよお前ら！？今度こそは間違いないって絶対！　いいか、よく聞けよ？今回発見された古文書にはだな　」

「夢を追うトレジャーハンターサンカツコイーカツコイー」

「ひゅーひゅー」

「　　うがああああー！」

「ぶばっ！？ってえな！何しやがるため　　！！」

「うるせえばかー！しねー！」

「おいおいお前ら、こんなところでケンカすんじゃないやねえよ、他のお客さんの迷惑に　　ぶほっ」

「あ」

「あ」

「ぶっころす」

「……………で。なんの話をしてたんだっけか」

「えーっと……………確かヨゼフの息子の話を聞こうとしてた気がする。いてて…」

「話が逸れたな。息子の話に戻すが 赤甲騎団や宮廷魔術師の連中が国境に辿り着くまでは、国境に詰めてた騎士や冒険者を中心にどうにか凌ごうとしてたらしいんだが、ティグルスの方にバグナスが出たらしいのな」

「バグナスっつーと……………城崩しの？」

「そうそう。凶暴性はそれほどでもないし、動きもトロいからBランクチーム相当だけど、突撃の威力と頑丈さだけならAランクの魔物の中でも上位に入るっていう、城崩しのバグナス」

「おれ見たことねえわそいつ」

「おれもおれも」

「おれは国境の防衛部隊の増援依頼でハノーヴァ砦に詰めてた時一回見たけどよ、半端ないぜあれ。そこらを散歩するくらいノリで城壁とかの障害物ぶっ壊して進みやがんの。殺そうにも剣も魔法も効かないどころか、怒らせて更に始末に終えなくなっちまうような有り様だし」

「うわ……」

「話に聞いちゃいたが、厄介過ぎるな」

「あの時は砦のやつら総出で落とし穴作って、バグナスをそこに誘導してなんとか……って感じだったんだけどよ。それだけまともに戦わねえようにしても結構な被害が出てなあ……」

「ああ、わかる。おれも以前ギガスに出くわした時なんかさあ」

「待て待てお前ら。また話が脱線する」

「おつと。……まあ、そんなバグナスがティグルスの方に出たらしいんだけどよ」

「おつ」

「おつ」

「そいつを一太刀でぶった斬ったらしいんだわ。ヨーゼフの息子が」

「は？」

「……やっぱそういう反応になるよなー」

「ばっさり真っ二つだったらしいぜ」

「…またまた。そりゃ大袈裟に言われてるだけだろ」

「いや、それがなあ、実際に何人もその光景を見たやつがいるらしいんだよ」

「そいつが来るまでバグナスと戦ってた騎士団のやつらがな、そいつがバグナス真っ二つにするのを見てたらしいんだわ。他にも近くで魔物と戦ってた連中も何人かその光景を見たらしくてなあ」

「……マジか」

「ああ」

「おう」

「普通の剣じゃ歯が立たないバグナスを真っ二つとか、そいつ一休

ああ！だからヨーゼフの息子か！」

「そういうことだな。 そいつも使ってたらしいぜ、魔杖剣。更には賢獣まで従えてるっつーおまけ付き」

「ヨーゼフは炎の魔杖剣で、そいつは雷の魔杖剣だったらしいけどな。賢獣も狼じゃなくて虎だったらしいし」

「アホみたいに魔力食う上に、常に剣を持続させる為に意識を割きながら格闘できる魔法使いなんて早々いねえから、ヨーゼフぐらい

しか使い手がいなかったんだよなアレ。賢獣従えるところまで同じかよ……まさかその虎って王天虎だったりしねえよな？」

「あんなの使って乱戦するくらいなら、魔法撃ちまくって魔力切れ起こして倒れる方がまだ安全ってグラハム師団長が言ってたらしいぜ」

「オレも聞いたわそれ。 ヨーゼフが従えてたのが地皇狼だっただけにつてか？流石にそりゃ無えだろ。 その虎が空飛んでたって話も聞かなかったし……」

「……………」

「……………」

「……………」

「今度知り合いの猫族に聞いてみるわ」

「おう」

「任せた」

「……ともあれ。それでも最初はそいつがヨーゼフの息子だとはわからなかったんだけどな。バグナスをあっさり倒しちまう賢獣使いとか、まるでヨーゼフみたいだなー、くらいにしか言われてなかったんだが…… 侵攻が片付いた後の論功行賞だよ。王様がそいつのことをヨーゼフの息子だって発表したんだわ」

「王様が認めたのか」

「ヨーゼフの使ってた杖とか、ヨーゼフの手紙とか持ってたらしいぜ。ついでにここのギルドマスターも認めてるらしい」

「そつからはお前も知つての通り、もう国中そいつの話題でもちきりよ。王様公認つてこともあつて、ほとんどの連中はそいつがヨーゼフの息子だつて信じてるみたいだな」

「そりゃ、国とこの国のギルドのトップ二人が認めたとなりゃなあ……」

「それにそいつ、実力だけでなく中身も中々の英雄の息子つぶりらしくてなあ　　侵攻の後も国内に入り込んだ魔物を倒す為に、西へ東へ走り回つて魔物の討伐に明け暮れてたらしい」

「国境で魔物を塞き止めることが出来たのが、被害が少なく済んだ一番の要因なのは間違い無いが……そいつに救われた村や街の数も相当なもんらしいぜ」

「別にそんなの普通じゃねえの？ 確か侵攻後の国に入り込んだ魔物の討伐も、オレたちの義務とかじゃなかつたっけか？」

「そりゃそうなんだけどな、その依頼をこなしてる数が尋常じゃねえんだよ」

「聞いた話じゃ、多い時は一日4、5件はこなしてたとか」

「うっ…?」

「しかもそいつのランクB」

「チームのBな。メンバーはまだ二人と賢獣が一匹らしい」

「バカじゃねえのそいつ!? Bチームクラスついたら手馴れたやつでも一つの仕事に数日はかけるじゃねえか! ガキの使いみたいにぼんぼんこなす仕事じゃねえだろ!？」

「それが普通の反応だよなあ……」

「一月以上もそんな話ばつか聞いてると、感覚が麻痺してきちまっ
ていかな」

「しかも一月も続けてやがったのかよ……本当に何考えてんだそい
つ」

「さあな。…だがまあ、そんな様子に街の連中は大喜びよ。正しく
ヨーゼフの再来だ、つてな」

「人手の足りなさもあって、常なら対応が遅れがちな高位の魔物を
ばつたばつた倒していくわけだしな。魔物に苦渋を舐めさせられる
ことが多い地方の町や村ほど、そいつの人気は鰻上りらしい」

「成る程なあ……なんか、そこまでいくと出来すぎで気味が悪いな、
そいつ。大体、ヨーゼフつてのあ昔この国を救った英雄かもしれん
が、結局この国に嫌気が差して去った男だろ? そいつの息子が王国
の為に尽くそうとなんて思うのかね」

「そこだよな。おれもそこが気になって色々話を聞いて回ってみた
んだが…最近この国に来たばかりな所為か、実際ヨーゼフの息子と
面識のあるヤツつてのが驚くほど少なくてな。そいつが何処で何を

したかはわかって、何を考えて行動してるのかはまるでわかんねえんだよ」

「最近なんか忙しそうにしてんなーと思ったら、そんなことしてたのかよお前……。その知りたがり癖、冒険者よか情報屋とかの方が向いてんじゃないね？」

「それはおれも前から思ってた」

「うっせ。ちょっと他のやつらより用意周到なだけだったの。情報を集めるのは冒険者にとっても重要なことだろうが」

「重要だが、お前の場合は些か度が過ぎるんだよ……」

「ヨーゼフの息子のこととか、お前の冒険者稼業に間違い無く関係しねえだろうに」

「一見無関係に見えることでも、それを知っているといたないとが生死を分けることもあるのが冒険者……！」

「いやいや、そんな一見無関係なこと調べてる暇あんなら、次の依頼の下調べでもしろよ」

「そういう方面には発揮されねえんだもんなあ」

「うるせえ！おれの次の依頼先の話がどうこうってのを調べたって、女は全く興味持ってくれねえんだよ！」

「女目当てかよ……」

「ぶつちやけやがったこいつ！女との話題探しの為に、必死こいて駈けずり回って情報集めてたのかお前……」

「こついう時事ネタは興味津々なコが多いんだよ。より詳しい話を知っていると知ると、こぞつておれに寄つて来てうはうはだぜ」

「それはお前じゃなくてお前の持つてる情報に興味があるだけだろ……」

「おれもそう思う」

「わかつてねえな。まずは出会いを作るのが大事なんだよ。最初はおれの話にしか興味が無くとも、会話を続けていくうちに、やがては話しているおれの方にも興味が……」

「ああ、わかつたわかつた。その話はいいから、ヨーゼフの息子の話に戻せ」

「今のとこお前がそういうのやって成功してるとこ見たことねえけどなあ」

「言つなよ。おれも同じこと思ったけど、話が面倒臭くなると思つて言わなかつたんだから」

「お前らなあ……！ まあいい。……えーと、ヨーゼフの息子と面識のあるやつが全然いねえって話だったけか」

「おつ」

「そうそう」

「うむ。オレが調べた限りじゃ、そいつと交流のある冒険者はバリエッタくらいだな。合同で依頼でもこなしたのか、一緒に酒飲んでたらしい」

「またどでかい名前が出てきたなおい」

「よりによって二つ名持ちを二人も擁する、あのバリエッタかよ…」

「他に誰も見つからんから、彼らに話を聞いてみようと思ったんだが、 侵攻が終わってからも、バリエッタの方も相当忙しいみたいでな、あっちこっち飛び回ってるようでコンタクトが取れなかった」

「そりゃ、Aランクのチームなんて普段からあっちこっち引つ張りダコなんだから、侵攻が終わって通常の依頼が溜まってる今なんて余計にだろうなあ」

「というか、何の面識も繋がりも無いバリエッタの連中に話を聞きに行く、お前のそのアクティブさには時々驚嘆せざるを得ない。」

「そこまでしてるってことは、ヨーゼフの息子の方にも行ったんだろ?」

「当たり前だろ。そいつのこと調べるって決めて真っ先に行ったわ」

「 の割りには他のとこに話を聞きまわってるってことは、本人から話を聞くことは出来なかったんだろ?…バリエッタ同様出かけてたのか?」

「ああ、何度かヨーゼフの息子が住んでるっつゝ宿を訪ねたが…大

概が依頼で留守にしてたな」

「大概？」

「仕事より遥かに活動的だな本当に……」

「かわいこちゃんと遊ぶ為に仕事してんだから、主目的の為にこそ全力を注ぐのは当たり前だろ」

「この努力が実らないんだもんなあ……世の間違ってるよな、ほん」と

「おれちよつと応援してやりたくなってきたわ、こいつのこと」

「同情するなら女を紹介しろ。ともあれ、大概って言ったのは、一度だけ、そいつが在宅中に宿を訪ねることが出来たんだが」

「お？」

「直接話を聞くチャンスじゃねえか」

「が。庭にいた虎が怖くて帰ってきた」

「……………」

「……………」

「なんか言えよお前ら」

「……なら遠慮無く言わせてもらおうが　このチキンがっ！」

「がっかりだわ。お前の女にかける気持ちってのはその程度かよ！」

「うるせえー！ お前らは実際にあの虎見てねえからそんなこと言えんだよ！普通の虎じゃねえぞ！？めっちゃでけえしめっちゃ怖えし！目が合っただけで食い殺されるかと思っただわ！」

「虎つつたつてそれ、ヨーゼフの息子が従えてるつつー賢獣だろ？ いくら凶暴そうでも人を襲うわけねーじゃねーか」

「そつだそつだ。そんなことしてたら飼主共々とつくに王都から追い出されてるつつーの」

「ばっかちげーよばーか！そんなのわかってても逃げ出したくなるくらい怖えーんだよ！ だけえ骨付き肉骨ごとバリバリ食ってるような虎だぜ！？あんなのの前、襲わないってわかってたって通り過ぎたくねえつつーの！」

「お前がビビりってことは何も変わらないじゃねえか」

「そんなんでよく冒険者なんてやってられるよな」

「お前らも直に見ればおれの気持ちかわかる……。あれの前歩くらいだつたらハウンドドッグの群れに突っ込んだ方がまだマシだわ。……ってーわけで、直接本人や関係者から話を聞くのは諦めたわけだが」

「お前のチキンハートっぷりのおかげでな」

「おねえさーん、こいつに手羽先食わしてやって。とびっきりの鳥

「のやつ！」

「わけだが……！」

「へいへい」

「黙って聞いてやりやいいんだろ黙って」

「元はと言えばお前が聞きたいって言い出したことだろうに……！」

……あー、くそ。そういうわけで直接本人や関係者に会うのは諦めて、そいつを見たってやつを中心に噂を集めてみたんだが おれの聞いた限りじゃ特に怪しい素振りは見せてないな。怪しげなやつと接触してると話も聞かねえ」

「まあ、今は一番注目されてる時期だろうし 何かしらを企んでたとしても、おいそれと尻尾を見せたりはせんだろうな」

「だな」

「おう。だから腹に一物抱えてるかどうかってのは、やっぱ不明だな。 だがまあ、王国に仕官する様子も無いし、そいつが冒険者である限りはそこまで気にしなくてもいいんじゃないかなあ、とは思っ」

「疑り深いお前にしちゃあ、随分好意的な見解だな」

「やたら依頼受けてたのは、世の為人の為を思っで 納得できたのか？お前が？」

「いや、そういうわけじゃねえが 単純に金稼ぎたかっただけ」

なんじゃねえかなあ、と色々話を聞いてて

「あん？」

「どんな話だよ」

「いやな？そいつの目撃情報を追っかけてたら 冒険者ギルドの近くで目撃したって情報の次に多かったのが、花街付近での目撃情報なんだよ」

「……………」

「……………花街？」

「おう。それもヨーゼフの息子だと明かす前も、明かした後も、結構頻繁に目撃されてるみたいなんだよな。 更に」

「更に」

「更に」

「話によると、ヨーゼフの息子は王都に来るまで、ヨーゼフと二人つきりで人っこ一人いない森の中に暮らしていたらしい。 当然、今の歳になるまで女と出会う機会なんてなかったと推測される」

「……………」

「……………」

「そこから導き出される答えを考えると

なあ？」

「……金かかるもんなあ、ああいうのって」

「…英雄の息子と言えど、一人の男というわけか……」

「うむ。力無き人々の為—とかつて話よりよっぽど納得できるよな。同じ男として」

「うむ」

「うむ」

「あくまで色々な噂を掻き集めて繋げた予想に過ぎないが　この予想に至って、なんかヨ—ゼフの息子に親近感沸いたわ、おれ」

「英雄の息子殿は女好きか」

「なんかおれもちょっと好きになれそう、そいつのこと」

「おっと、あくまで予想だからな？　確認したわけでもねえし　こんな噂を広げたって噂の主知られたら、今度こそあの虎に食い殺されちまう」

「わかったわかった。だがまあ、そいつが世の為人の為を思って魔物と戦ってる聖人君子って考えるよりはよっぽど納得出来る話だな」

「だな。女の為に戦うとか　—これほどわかりやすい男が戦う理由も無いわ」

「だよな—」

「いやー。なんか安心したわ。噂通りの完璧超人みたいなやつだったらどうしようかと。おっと、これも噂だったか」

「もしかしたら、ひょっとしたらそういったこともあるかもしれない、といったくらいの憶測だよな！あくまで、あくまで」

「そうそう。あくまで一つの噂としての話な。…だが、おれの女好きとしての勘が、やつは間違い無く同好の志だと告げている…！」

「英雄色を好むっていうしな」

「こつこつという噂の一つや二つ、流れても不思議じゃないよな」

「お前らこれが真実だと疑っちゃいねえなあ…！？別にいいけど、他のやつに話しても情報元がおれだってばらすなよ!?」

「わかってるっつーの。それに言い触らす気なんてねーし」

「酒の席で口が滑っちゃうかもしれないだけだし」

「口を閉じる気もない癖によく言うぜ…。まあ、おれが調べたヨゼフの息子の話はこんな感じだな。今後も色々話題に上りそうだし、これからも情報集めてみるわ」

「おう。また新しい話を仕入れたら聞かせてくれ」

「期待してるぜ」

「任せとけ。お前らに話すのはカワイコちゃんに散々言い触らした

後だけどな！」

「その失敗談も含めて楽しみにしてる」

「期待してるぜ！」

「ぶつとばすぞお前ら

！！」

「……………」

「……………」

「…………」。ジンを連れてこなくて良かったな」

「話してる内容が完全に見当外れてわけじゃないのが、なんか余計腹立つな……！」

第31話 つづきのはじまり

オレが生きているこの大陸、クラルカ大陸の中でも有数の、四大国の一つとして数えられるアセナル王国を騒がした魔物の侵攻と、それと合わせてのオレ　　というか、大英雄ヨーゼフ・アルベルトの息子出現騒動から、早数ヶ月ほど経った。

侵攻の際に国内に侵入した魔物も、王国の騎士団と冒険者が協力して討伐に回り、今では侵攻前とほぼ変わり無い状態にまで落ち着いてきている。

本来ならば、小規模とはいえ「魔物の侵攻」と判断される規模の魔物たちに襲われた場合、国境線で塞き止めきれず侵入した魔物が各地で暴れ回り、国として少くない被害に見舞われるのが常だったらしいのだけれど、今回はその被害も少なかったらしい。

主に、オレがナーディアさんの為やらなんやらのお金を稼ぐ為に、依頼を受けて国中を駆けずり回ったせいだ。

侵攻の後の国内に入り込んだ魔物の掃討も、ギルドに登録した冒険者の義務なので、一応依頼という形を取っているものの通常の報酬より大分金額は低かったのだけれど、それでもBランクやCランクのチームが必要とされる魔物の討伐報酬はそこそこで、今後の万が一に備える為にお金を稼ぐ必要を感じていたオレは、王様とギルドマスターに自分のことをバラすと告げてから表彰を受けるその日まで、ひたすらランクの高い　　というか報酬の高い魔物の討伐依頼を受けまくった。

東にBランクの魔物があれば

ジンに跨ってそいつを殴り飛ばし
西にランクの魔物の群れがあると聞けば
行ってその群れを魔法で薙ぎ払い

帰り道に見つけた魔物もついでだからと倒していくうちに、今までは人手が足りず初動が遅れがちだった高位の魔物の被害が凄まじく少なくなっていたらしい。

国内の被害調査を終えてからそれを知った王国が、表彰を受けてからしばらくして改めて感謝状を送ってきた。

…完全に個人の事情から成したことなので、危険を顧みず王国の民の為に走り回ってくれた貴殿に云々かんぬんと大絶賛の書面を読んで、何とも気まずい思いをしたオレ。

まるで意図していなかったことではあるけれど、この行いがオレの風評を定める後押しとなったようで。

王国の人々からは概ね、オレがじーさんの息子だと好意的に受け入れられることになったのだった。

……とは言え、その受け入れ方も様々で、中には頭を抱えなくなるような受け入れ方をしてくれる人々もいたのだけれど。人の口に戸は立てられるもんじゃないので、そこは努めて気にしないことにした。

とまあ、そんなわけで、この国に来てから数ヶ月で、一躍王国の中じゃ知らない人の方が少ない有名人になったオレ。

その人気っぷりたるや魔物の侵攻が落ち着いた後も冷めやらず、むしろ魔物の脅威が去って遠くからもオレの元へと訪れることができる人が増えた所為か、日々オレの周囲の騒がしさは増していった

ギルドの依頼が無い日はほとんど来客の応対に潰されて、依頼受ける時の方が気が楽な有り様で。

ほんの少し前まではじーさんとオレと二匹の、喧騒のけの字もないような環境で過ごしていたオレとしては、自分で決めたこととはいえ、この尋常じゃない忙しさはちよつと煩わしく感じてしまう。

オレが利用している宿の店主である、二足歩行する猫といった風貌の猫族であるマーカスの話によると、オレが依頼に出ている日も来客は絶えず、オレへの取次ぎを願ってくる人が日々訪ねてきているらしい。

来る人来る人がオレが留守だと知ると、いつならオレが居るのか訪ねてくるらしいので、答えられるように定休日とか作って欲しいですニヤ、とお願いされた。

それは間違い無くオレにとっては定休日にならないと思ったので、考えておく、とだけ言っておいた。

今までとは比べ物にならないくらいの来客数に少し疲れてる様子だったマーカス。今度何か贈り物でもしようと思う。

猫族って言うからには、やっぱり猫同様、魚とか好きなのかな。

この人気っぷりは、オレ　というよりも、この国の大英雄であるじーさんの息子だということが主な要因みたいで、実際にオレが会った人も、マーカスからこんな人が来た、と教えられる人も基本的にじーさんの話を求めてやってくる、年配の人ばかりだった。

なんか、自治会の長老とか、元王国騎士団の団長とかが会いに来る。

主に四十年前の大侵攻を経験した人たちにじーさんは絶大な人気を

誇っているらしく、あの時のお礼をー、とじーさんの代わりにオレへと礼を述べに来る爺ちゃん婆ちゃんがかかりいた。

大侵攻当時のじーさんがいかに凄い活躍をしたか、とか。森に引き籠もってからのじーさんはどうだったかとかグルは今どうしてるのかー、などなど。会った人からはじーさんの話をされたりしたり。

オレの知らないじーさんの話を聞けたり、もうほとんど話すことが無いんだろうな、と思っていた森でのじーさんとの生活の話をすることが出来たので、最初の頃はこの忙しなさもあまり苦ではなかったんだけども　　そんな余裕があつたのは精々最初の一月くらいだ。

依頼の無い日は一日中オレに会いに来た見知らぬ人と、もう何度したかもわからないじーさんの話をして。

依頼のある日も迂闊に早く帰ってきてしまうとオレを訪ねてきた人に捕まってしまう日々。

ランスロットやマリスはそんなオレの状況を慮ってか、最近はある顔を見せなくなり、カザネやナーディアさんも四六時中來客の相手をしているオレに気を遣ってか、オレの部屋を訪ねてくる回数がめっきり減ってきた。

ジンの方はジンの方で休みの日が来るたびに猫族の人らに囲まれてて、なんか日に日に囲む輪が大きくなっている始末だし。

この終わりの見えない忙しさは、当初人の噂も75日と言うし、落ち着いてきたらしばらく依頼を休んで、カザネやナーディアさんたちと墮落しきった生活してやる　　！

…などと楽観的に考えていたオレの目論見を、粉々にぶち碎いてくれた。

徐々に徐々に忍耐よりも嫌気が上回り、特に稼ぐ必要も無いけれど、訪ねてくる人から逃れる為に依頼を無駄に受ける日々が続き、それが更にオレの名声を広げてしまい、オレを訪ねる人がより一層増えてくるといふ悪循環。

彼ら自体は全く悪気が無い　　というか、むしろ好意を持ってオレを訪ねてくる人ばかりなので、この何とも言えない煩わしさが積み重なった鬱憤をぶつけるわけにはいかないし、下手にぶつけてこの好意的な感情が逆転されたら、とか考えるのも恐ろしい。

じーさんがグルガの森に隠遁した気持ち少し分かった気がしたオレ。

これに加えて王国からのスカウトをこりこり寄せられた日には、オレもこんなところで暮らしてられるか！という気持ちになるかもしれない。

「くっそ。長くても二、三ヶ月で落ち着くと思ったんだけどなあ……！」

「アベルが今日まで毎日来客の相手をしていれば……もしかしたら今頃は落ち着いていたかもしれないな」

「そんな出来もしないことを仮定してどうすんだよ」

「訪ねてくるお客さんの数を考えると　　それでもどうかと思うけどね、私は。少年が出かけてる時もすごいわよ。マーちゃんお仕事どころじゃないくらい」

「宿代上乘せしといたほうがいいかなあ」

迷惑料的な感じで。

ともあれ。危惧していた面倒な事態とは真逆ではあるが、同じくらい面倒くさいこの状況に、いい加減忍耐の限界が迫ってきたオレは

侵攻が収まって数ヶ月ほど経ったある日。

いい加減魔物相手に鬱憤を晴らすのにも限界が訪れ、とうとう一つの決断をしたのだった。

「 というわけで、しばらく王都から離れることが出来そうな長期の依頼ってないですかね。依頼を終えて戻ってきたら、オレのことそんなヤツいたなあ、って言われそうなくらいの期間の」

「……はあ」

開口一番用件を捲くし立てるオレに、眼鏡のリムを指先で押し上げて生返事を返すマールさん。

このままじゃストレスが溜まってヤバい、と感じたオレは、オレに関する騒ぎが落ち着くまでしばらく、王都から離れることによって騒ぎが収まるのを待とう、と画策。

しばらく王都にいないと知れば、宿に訪れる人は当然減るだろうし、戻ってきてからオレの元へ尋ねようと考える人も、多くの人はある程度の時間を置けば、やっぱりわざわざ訪ねなくてもいいかなあ、と考えてくれるだろう。

めっちゃ欲しいと思って買おう買おうとしていた商品とか、なんだかんだで買わずに時間を置いてみると、やっぱりそこまで欲しくな
いかなあって思ったりするもんな。

きつとこの法則は今のオレの状況にも適用されるはず。

そんな考えを根拠に、今や目を瞑ってても辿り着けそうなくらい通
い慣れた冒険者ギルドを訪れて、出迎えてくれたマールさんにオレ
の目的に噛み合いそうな依頼が無いか訪ねてみた。

挨拶すらも省いて用件を告げたオレの言葉の意味を図るように一拍
置いてから、一先ず、とばかりに折り目正しく頭を下げるマールさ
ん。

「おはようございます、アベルさま。 お気持ちと意図はなんと
な
く察しましたが、とりあえず落ち着いて下さいませ」

「おっと。 おはようございます」

マールさんに応じて同じく頭を下げる。

色々と余裕が無くなってきていることをマールさんの言葉で自覚し
て、気を和らげる為に何度か深呼吸を繰り返す。

…ふいー。

少し落ち着いた。

そんなオレの様子を確認して、やんわりと目尻を下げて手でギルド
の奥を指し示すマールさん。

「では、ここで話すのもなんですし、カウンターの方までどうぞ」

「はい」

そうして先導するマールさんの後を追って歩き出すオレ。相変わらず落ち着き払った人だなあ。この人が声を荒げたところを初対面の時以来見たことがない。

常に冷静な対応をするよう教育でもされてるのか、ギルドの職員の人は大体こんな感じだけでも、その中でもマールさんは根っからという感じがする。

言うならば他の人は仕事用の性格、マールさんは元々こんな性格、といった感じだろうか。

いや、プライベートでマールさんと会ったことなんか数えるくらいしかないから、実際はどうなのかわからないけども。

これでプライベートではすごいきやつきやする人だったら、恐ろしいギャップだなあ。

「資料を持って参りますので、こちらにおかけになって少々お待ちください」

「あ、はい」

そんなくだらないことをあれこれと考えているうちに、いつも依頼の手続きを執り行っている受付まで辿り着いたオレ。

そこで勧められた椅子に座って、カウンターを隔てて職員側の空間の奥に資料を取りに向かうマールさんを目で追いながら大人しく待つ。

ほどなくして薄いファイルを携え戻って来たマールさんと、改めて互いに会釈して、本題に取り掛かるオレら。

「お待たせいたしました。お求めの依頼は日数のかかる、できれば

国外にまで足を伸ばすことになるような、長期の依頼ということではよろしいですね？」

「はい」

オレの返事を聞いて、ファイルを開き、ぱらぱらと頁を捲っていくマールさん。

やがて一つの頁に辿り着くと、その頁をオレに向けて差し出してくる。

「こちらと、次のページまでの依頼がアベルさまの求めている条件に合致すると思われる依頼です」

「……………？」

やけに準備がいいな。

そういう依頼としてまとめてたりするんだろうか。

開かれた頁を見てみると、マールさんが言う通り、そこには基本的に国外の最低でも終わるまでに行きと帰りを併せて三ヶ月以上はかかるような依頼ばかりが羅列していた。

なにに。古の魔法大国、ゲベルのものと思われる遺跡の調査依頼に隣国の国境防衛隊の応援要請。

グルガの森の探索に、商隊やお金持ちさんの護衛依頼と。

その他にも様々な依頼があり、大概のランクがCやBランクのチーム向けの依頼となっている。

…こういう依頼も結構あるもんなんだな。掲示板とか見た時は主に討伐系の依頼しか探してなかったから、オレの目に映らなかった

だけなんだろうかね。

「結構こういう長期の依頼ってのも多いんですね」

記載された依頼の内容に目を通しながら、どの依頼を受けるか考える。

一番に目を惹いたのが、遺跡調査依頼だった。なんかこういう遺跡の調査って、冒険者の依頼って感じがするし。

グルガの森の探索とかは、探索も何も既にほぼオレの庭みたいなもんだしなあ。久しぶりにグルと会うのは悪くないかもしれないけど。そうやってファイルと睨めっこしているオレに向けて、マイルさんが声をかける。

「……実はですね。これらの依頼は恐らくこういった依頼が必要になってくるだろう、というギルドマスターの意向を受けて、一月前くらいから集めていた依頼です」

「はい？」

顔を上げる。

ギルドマスターの爺さんの意向？

「アベルさまの近況はギルドの方でもある程度把握しておりましてので。近頃の依頼の受け方から見ても、そろそろこのような依頼を求めてくるだろうから用意しておくように、とギルドマスターが。

また、求めてこなければこちらから打診してみるように、とも」

「それは」

うわぁ……オレの考えてること筒抜けか。

そんなにわかりやすい行動して　してたか。

「ってことは、これ全部オレ用に集めてもらった依頼ってことなんですか？」

それはなんか、すげえ申し訳無い気がする。

だって結構依頼溜まってるし。

「いえ、他国の依頼も含めて、募集している長期の依頼をピックアップして纏めていた程度です。アベルさま以外の冒険者の方々にも募集はかけられておりますし、既に他の方が依頼を受けているものも幾つかありますね」

そういつて頁の中の、ペケ印がつけられている依頼を指差すマールさん。

成る程。これは既に他の人が受けているっていうマークか。

「それにしたって、なんか色々お手数かけてすみません」

「いえ。アベルさまには今後もこの国でご活躍していただきたいので。」

…最悪、ギルドマスターはアベルさまがこの環境に嫌気がさして出奔する可能性があるとも危惧していたようですので、このような形で問題を解決しようとしていただけてむしろほっとしております」

「……。　　ははは。いやだなあ。オレがマールさんもいるこの国から出てくわけないじゃないですか」

準備してただけですよ。準備してただけ。

じーさんの時のことを経験しているからか、色々用意いいなあ！

「ありがとうございます。私個人としましても、アベルさまの為ならばこの程度の協力は惜しみませんので、今後もなんなりとご要望を申しつけ下さい」

「それはマールさん個人としても、オレに好感を持っていると考えてもいいんですか」

「そうとっただいて構いませんよ」

にっこりと、落ち着いた笑みを浮かべて肯定するマールさん。営業スマイルというか、そういった類いの笑みだけだ。

……出たよ。この金城鉄壁のポーカーフェイス。

半ばオレ専属の担当官になっているマールさんとは、これまで何度も会話を重ね、その度にちよくちよく機を見てはちよっかいを仕掛けてはいるものの、その都度オレの放つジャブはマールさんのこの笑みによって悉く弾かれている。

嫌われてるわけじゃないとは思っただけだな　言葉のうちに秘めた感情が、マールさんのこの笑みから察することが出来ない。少なくともオレには。

距離を縮めようと踏み込んでいいのか悪いのか。なんとも判断がつかないな。

返してくる言葉以上に雄弁に、今仕事ですので。とその表情が告げているので、こっから先が中々踏み出せないでいるオレ。

ならばプライベートで仲の進展を、と思っても、侵攻終了から今まで、クソ忙しくてプライベートな時間なんてロクにとれてねえし。

くそー。この鉄の笑顔を崩せる日は来るのか、オレ。

……少なくとも、もう暫くは無理か。これからしばらく遠出するわけだし。

以前、ギルドマスターからこのマールさんとの縁談みたいなのを持ちかけられたけれど、結局その話も有耶無耶になってるしな。

いや、そういう関係になるのはなるべく相互の意思を伴って、とは思っていないだけどさ。ギルドマスターに頭上がらなくなっちまいそうだし。

「アベル様？ お話を進めても？」

「おおっと。はい。どうぞ」

再び胡乱な方向に向きかけていた思考を正し、こちらの顔を覗きこんでくるマールさんに首肯する。

オレの返事を聞いてから、それでは、と眼鏡のリムをくい、指先で押し上げて。

「こうしてアベルさまの要望に叶うような依頼を纏めていたのですが、もし、アベルさまがこれらの中で特にこれといった希望が無いようでしたら、こちらから一つ、受けていただきたい依頼がございます」

「オレに受けて欲しい依頼？」

わりと遺跡調査依頼に心惹かれてただけだな。

…まあ、どうしてもってわけじゃないし、とりあえず話を聞いてみることにする。

「こちらの依頼になるのですが」

「ほつほつ」

そう言つて次の頁をめくり、一つの依頼を指差すマールさん。

記載されている概要の他に、補足されるマールさんの説明を聞いて

成る程、オレ向きっちゃオレ向きだな、と納得する。

遺跡調査　　というか、宝探しも面白そうだけど、オレのチームにはそういった屋外の探索を得手とするスカウトの役割をできるやつがないしな。

最悪追い詰められたら遺跡ごとぶっ壊すとかそういったこととしてしまひそうだし　　あんまりギルドに世話になるのも問題だ。これ受けて貸し借り無しつてことにしとくか。

マールさんの説明を受けながらしばし黙考した後、その依頼を受けることを決める。

「わかりました。　この依頼、受けることにします」

「ありがとうございます。…では早速、詳しい説明になるのですが

」

こうして始まった、オレの新たなる冒険。

この依頼を受けた時は、とりあえず伸び伸びできそうな国の外に出たい、などという軽い気持ちで端を発したこの冒険が、まさかあそこまでの大事になるとは、オレはこれっぽちも予想してはいなかった。

<オレが異世界で獣とランページ2>

『ガンダス選定戦』

第32話 出発

オレが生きるこの大陸、クラルカ大陸には、四大国と呼ばれる国がある。

大陸の中央に陣取る魔物領との闘争が激しく、百年単位で地図を見比べてみると国の名前や位置がぼんぼん変わってるということがザラにある世界で、数百年以上の歴史を誇っている国のことだ。

数多の国と同じく何度も魔物の大侵攻に見舞われながらも、その都度何らかの天佑に恵まれたりしつつもしぶとく生き残ってきたそれらの国は、国の規模に関わらず、他国から高い評価を得ている。

それら四つの国は、魔物領を中心として、おおよそではあるが四隅に散らばるよう存在しており。

大陸の南東に位置する、勇者アセナルとその仲間達によって築かれた剣と魔法の国、アセナル王国。

大陸の北東に位置する、冒険者ギルドの創始者を輩出した国であり、ギルドの総本部が置かれている国でもある義と侠の国、シヴァルド。大陸の南西に位置する、遙か昔、魔物領を除き大陸のおよそ半分ほどまで版図を広げた超魔法大国、ゲベルの系譜に連なる国である魔と智の国、アクティア。

大陸の北西に位置する、閉鎖的な国柄に加え、ここアセナル王国とほぼ対極の位置にある為ほとんど情報は入らないが、現存する国の中で最も歴史が長い謎多き国、ガズーン皇国。

現在のクラルカ大陸の社会はこの四つの国を中心に回っており、これらの国の間に中小国家がちらほらと、という形だ。

この四大国は今もなお発展を続けていて、安寧を求めて周辺諸国からやってきた移民などを吸収しながら成長していくので、その他の

中小国家との差は開くばかりらしい。

まあ、移民とは言ってもその大半は魔物の被害に遭って住居や職を失った流民や、奴隷商人が連れてきた奴隷がほとんどらしいけれど。そんな人々も百人集まれば中には百人に一人の逸材、なんて呼ばれるような人も混ざっているもので。そういった人々や、安寧を求めてやってきた高い知識や技術を持った人々を中心に、大国は大国のまま力を増し続けているとか。

この世界では頭脳流出とか、そういった概念無いのかなあ、とかザネとかにその話を聞いて少し疑問に思ったものの、オレの元の世界とこの世界では色々の違いが有り過ぎるので、元の世界の考え方でものを考えるのは間違っているのかもしれない、とも思う。対魔物のことを考えると、うるちよると多くの国が散らばっているより、人を一つの意思の元に集めた方がいいのかな、とも感じるし。

実際のところ、集まってるだけで纏まってるわけではないみたいだけども。

四大国一つとっても、四大国間の繋がりをとっても様々な問題があるようで、ギルドを通じて魔物の侵攻に対してはどうか協調が取れているものの、国同士が一つに纏まって何かをするということはまだで考えられないのが今の大陸の状況だな、とかザネは言っていた。

カザネたち鬼族の故郷である鬼ヶ島や、夜族の集う国などに至っては、ほとんど敵対していないだけ、みたいな状況みたいだし。

それら個々の国が持つ問題やら、国家間の問題、その他にも色々この大陸の詳しい事情というのもカザネやランスロットに聞かせてもらったのだが、それらの話はまた今度。

オレ自身今回の依頼の話のついでに聞いた話の内容だから、話半分に聞いてた所為でよく覚えてないし。

そう。オレが周囲の喧騒から逃れる為に受けた今回の依頼は、そんなどろどろとした政のおいがする話とはなんら関わりのない、一介の冒険者の、依頼を終えれば酒の肴くらいにしかなりそうもない小さな冒険。

とある辺境の地で人知れず、依頼が終わればそんなことをやってたのか、と言われるような、酒の肴にしかならないような話　　の
筈だった。

「旅をするなら、やっぱり馬車だろ」

マールさんから今回の依頼を受け、旅支度を整えるにあたってまず最初に探し求めたのは馬車。

旅といえば馬車。馬車といえば旅。といった方程式が成り立っているオレにとって、馬車の調達は最優先事項だった。

未だオレとジンとカザネしかいなかった3名のチームな上、荷物などはじーさんから受け継いだバッグに全て収納できるとはいえ、その程度の必要性の有無なんて、オレの馬車に対する憧れの前ではなんら問題にならない。

依頼を受けたその場でマールさんに、以前バリエッタとの依頼で使った時のような幌馬車にアテはないかと尋ねたところ、快く王国のギルド御用達の業者を紹介してもらえることに。

今後のことも踏まえて、頑張れば7、8人くらいは乗れるような大きめの、頑丈な馬車を購入した為に多少値は張ったが、自分専用の馬車が手に入った時はどこかうきうきと、はしゃぎたくなるような胸躍る気持ちになったし、後悔はしていない。

基本的にカタチから入るタイプなオレ。

「……………。締めて金貨15枚というのは、多少値が張ったなどという言い方はしないと思う」

「仕方ないだろ。ジンに怯えない馬つてのが、めちゃくちゃ高いやつしか無かったんだ」

「そこは仕方ないから、馬車を買うのを諦めたり、何かしら妥協したりするところだろう。どうするつもりだ一体。旅発つ前に文無しじゃないか」

「……………」

依頼を受けてから出立するその日まで、いくつか他の依頼を受けることになったが、あくまで後悔はしていない。

ともあれ。旅立ちの準備や金の工面やら、しばらく王国から離れることへの挨拶回りとかで中々に慌しい準備期間をどうにか乗り越えて、オレたちは王国を出立。

目指すはアセナル王国の北、小国を幾つか挟んだ先にある、竜の棲む谷、ガンダス峡谷へと。

「で。そのガンダス峡谷ってどこに何しに行くのよ、少年」

かっぱかっぱと蹄を鳴らして歩く馬　正確には、ソロウブと呼ばれる馬型の魔物。ジンに怯えない馬というのが、この魔獣使いが必死こいて調教した、品種改良していない原種そのままの魔物しかいなかった。滅茶苦茶高かった　が牽く馬車の御者台で、のんびりと移り変わる景色を眺めながら手綱を握っていたオレの背中へと声がかけられる。

穏やかに差す陽気にうとうととしていたオレは、何度か目をしばたかせて背後へと振り返ると、幌の中からひよっこり顔を出したナーデアさんが、御者台の背もたれにもたれかかりながらオレの方を見詰めていた。

「あれ、言っただけじゃなかったっけ？」

服の袖で目元を擦り、眠気を振り払いながら尋ねる。

「言っただけじゃねえわね。関係無いと思って私も聞かなかっただけ」

「そっぴいゃそっぴか」

しばらく王国から離れることになったんだけどどうするー？
ついでー。

くらいの会話しかしてなかったな。そっぴいゃねえ。

「まあ、ご主人サマが行くというなら例え火の中水の中。どこだつてついでにけど。丁度今、カザネちゃんや虎ちゃんも寝ちゃってて暇なのよね」

「退屈しのぎにーって感じ？」

努めて前者の発言は無視しつつ、後者の言葉だけを聞き入れたオレの反応を気にする様子もなく、身軽な動作で背もたれを跨ぎオレの隣に腰掛けるナーディアさん。

「ついて行くだけとは言え、やっぱり多少は気になるしね。今更っちゃ今更だけど、丁度良い機会だから聞いておこうかなって。ああ、守秘義務？とかあるのなら構わないわよ？」

「いや。そういうのは特に。よし。そうだな。一応ナーディアさんも知ってたほうがいいだろうし」

次の街に着くまでまだ時間がかかりそうだし、時間つぶしには丁度いいだろう。

さて、何から話すべきか、と頭の中で情報を纏めていると。ただし、とナーディアさんが掌を眼前に突きつけてくる。

「念の為言っておくけど、話を聞いたからって私に出来ることなんて、家事か虎ちゃんの世話くらいしか無いんだからね？」

「んな念を押さなくとも。大丈夫、今回の依頼はナーディアさん……つか、カザネやジンもそんなにやること無いと思う」

「あら、そつなの？」

「うん。 受けた依頼がさ、Bランクのチームというか Cランクのチーム程度の実力を持った個人か、五名以下のBランクチームの募集だったんだよね、今回」

ジンも幌の中で寝てるということで、視線を前に、周囲の様子に多少気を配りながら話すオレ。

今オレたちが歩いている場所はアセナル王国から目的地に至る小国の一つ、国内の街道とはいえ、アセナル王国ほど治安というか、魔物の討伐は頻繁に行われていないようなので、結構頻繁に魔物が出るのだ。

ちよつとやさつとの魔物なんてものの数じゃないが、奇襲を許して馬車がぶっ壊されるのは嫌なので、近付いてくる存在にいち早く気付けるよう、意識はナーディアさんに向けつつ、五感は何となく周囲へと散らす。

「Cランクのチームって つまりAランクの冒険者ってことよね、個人の」

「うん」

基本的にチームで受ける依頼は、個人で受ける依頼のランクよりも2段階ほど難易度が高いものとされており、Cランクのチームの依頼を個人で受けるならば、個人向けのAランクの依頼をこなせる技量が必要と言われている。

「なんでそんなまわりくどい募集をしたのかしら。はっきりAランクの個人を……… ああ、そうね」

自分で疑問を提起して、そして納得に至った様子のナーディアさん。そんな様子に一つ頷いて。

「そう。マールさんも言ってたけど、Aランク以上の実力を持って個人で活動している冒険者ってほとんどいないらしいんだよね。大概がどっかのチームに所属してて、そのチームの中心人物だったりするから、個人で動いてもらうのも難しい」

例えば以前一緒に依頼をこなした、バリエッタというチームのリーダー、ゲオルグさんなんかは個人でもAランクの冒険者だが、あのおっさんを抜いたバリエッタは最早バリエッタじゃない。

他のAランクの冒険者も大体似たような感じなので、チームの中から一人だけを指定した依頼なんてできず、また相手も依頼を受諾してくれるとは思えないので、依頼する相手を探すのにギルドも苦労していたらしい。

「よねえ。私もほとんど聞いたことないわよ。そんな一匹狼の冒険者。……個人でAランクの冒険者って募集の仕方をするともまず見つからないだろうから、そんな募集の仕方をしたのかしらね。そうしたところで見つかるとは思えないけど」

「実際求めているものは同じだしね。ギルド側も依頼を受けて貰う本命は、後者のBランクのチームだったらしいんだけど　こっちもまた難しかったらしくて」

「そっちはいるにはいるけれど　って感じかしらね」

「まさにそんな感じ。いるにはいるけど、他の依頼でみんな埋まっていたらしくて」

こっちの指定は指定で、本当にいるにはいる、といった感じの少数のチームしかないらしく、条件に合う、手が空いてるチームとい

うのがあの時はいかなかったらしい。

チームというのは報酬の分配をする上での問題もあり、人数が多けりゃいい、というものでなく、更には上位になればなるほど有象無象がいくらいたところでももの役に立たない魔物ばかりになってくる為、Bランクのチームともなれば個人でCランク以上のベテラン中心に構成されてるもんらしい　が、それでも前衛後衛、不慮の事態による交代要員やらなんやら様々な安全面を考慮すると、7、8人以上のチームで構成されるのが常らしい。

ゲームみたいに休んでる間は敵が襲ってこないなんてことも無いわけで、誰かが休んでる間は他の誰かが休んでるやつらを守らねばならない。ちよろつと近場の魔物を討伐して帰ってくるという依頼だけでなく、日数がかかる長期の依頼を受けることも考えると、大体一つのチームで2パーティ以上編成できるような面子にしているらしい。どこのチームも。

そういったことを踏まえると、結成間もない新興のチームではなく、百戦錬磨のBランクチームのメンバーが五人以下、というのは実に珍しいことで。6名で構成されてるバリエツタが少数精鋭と呼ばれているくらいなのだから、それ以下の人員で構成されてるBランクのチームなんて、数えるほどしかいないらしい。もしくは欠員が出て仕方なく五名以下とか、そんな。

「それで丁度両方の条件に合致する少年に　　ってわけ？」

「そんな感じみたい。オレの希望にも合致してるし、まあいいかなって」

オレはチームを結成してから個人のランクは上げてないので、Aには達していないが、一応実力はA以上と見なされてるし、チームとしてのランクも、ジンを含めても三名構成のBランク。依頼を受け

るのにはまさに適任ってわけだ。

こっちとしても、片道一ヶ月はかかる辺境のガンダス峡谷だとか言うところまで行って、依頼をこなして帰ってきて、短く見積もっても三ヶ月以上はかかると予想される依頼なので、色々と王国のほとぼりが冷めるには丁度良い期間だなど思ったので、その依頼を受諾した形。

オレの話を聞いて、豊かな胸の下で腕を組んで頷くナーディアさん。

「少年以外の出番が無さそうな理由ってのは大体わかったわ。用があるのは高い実力を持つ個人　　というか少年だけだから、他のコはあまり出番はないだろう、と」

「うん。まあ実際どうなるかわからんけども。多分そんな感じになると思う」

「？　なんかすっごく曖昧な感じね」

「ああ　そこはなんか、依頼の内容が曖昧っつーかなんつうか……。　まず、ガンダス峡谷ってどんなところ知ってる？」

「知らない」

「うん。オレも知らないし、カザネも知らなかったんだけど。マールさん……えーと冒険者ギルドの職員さんに聞いた話によると、そこで行われる催し物？みたいなのに依頼人と一緒に参加するのが、依頼内容なんだよね」

「催し物？　お祭りでもあるのかしら」

「似たようなもん……なのかなあ。　えーと、要約して言ってしまう

うと、そのガンダス峡谷近くの村で行われる催し物に依頼人と一緒に参加して、優勝者に与えられる景品を手に入れるのが今回の依頼」とりあえずざつくばらんに説明してしまうオレ。大体この説明で合ってるはず。

「なんだか楽しそうなお仕事ね。どうしてもその景品が手に入れないから、腕の立つ冒険者と一緒に受けようとしたってところかしら」

「そんな感じみたい。参加者は二人一組で、依頼人とオレで参加する形になると思うんだけど、催し物の内容次第でカザネやジンに手伝ってもらうこともあるー かもしれない」

「どんなことをやるのかはまだ決まってないのね」

「うん。オレたちが到着する頃には決まってるだろう、とは言ってたけど」

まあでも、参加者以外が手出し出来るような内容にはならないだろうなあ、とも思うので、オレ以外の出番は無いだろうな、と予想。ふむふむ、とオレの説明を吟味するように腕を組みながら考え込んで、にんまりと笑みを浮かべるナーディアさん。

「聞いてる限りだとあんまり危なそうなお仕事じゃなさそうだし、もし少年以外の出番が無さそうなら、私もカザネちゃんと一緒に参加してみようかしら。なんか面白そうだし」

なんてことを言い出すナーディアさん。

確かにこの話だけ聞いていると比較的安全な、楽しそうな仕事に聞こえるかもしれない…が。

「それは止めた方がいいんじゃないかなあ」

「あら、やっぱり危ないお仕事なのかしら」

「危ないっつーかなんっつーか　その開催地のガンダス峡谷なんだけどさ」

「ええ」

なんだかんだで説明が最後になっていた、開催地の説明をするオレ。

「賢獣クラスのドラゴンの、生息指定区域なんだよね。そこ」

「え」

「ガンダス峡谷　通称竜の谷って呼ばれてるらしくて、峡谷一帯がそのドラゴンの縄張りで、人は手を出せないからそこら一帯ドラゴンと魔物ばっからしい。　催し物の主催者は谷の近くの、そのドラゴンを信奉する人々が暮らす村らしいけど、主催地はそのガンダス峡谷内」

つまりは、賢獣とはいえ竜　しかもとても強大な力を持つ竜に出くわす可能性が非常に高いイベント、というわけで。

賢獣だからして、ある程度の意思疎通はできるし、竜を奉じる人々なんてのもいるくらいだから、危険度はそこまで高いわけじゃないんだろっけれど　ドラゴンなんてのは、ピンキリとはいえ最低でもチームランクB以上でようやく太刀打ちできるかどうかって存在だ。

もしドラゴンと出くわしても、こちらから敵対しない限りはそう危

険なことは無い　とは思っけれど、実際どんなもんになるのかは、完全にあちらの気分次第というわけで。

オレの発言にしばらく固まっていたナーディアさんだったが、内容が頭の中に浸透してくるにつれ、額に一筋の汗が流れ始める。きよろきよろと周囲を見渡して、あっち向いてこっち向いて、上向いて下向いて、うんうん唸りながら一通り挙動不審な体を晒したあと、頬を引き攣らせた笑みを浮かべながら、ようやく口を開くナーディアさん。

「わたし、やっぱり王都でお留守番してよつと思っの」

「火の中水の中の精神はどこ行った」

今更遅え。

第33話 説明

「　　というか、え、行き先が竜の縄張りって何？　初めて聞いたわよそんな話」

「聞かなかったのそっちじゃん」

彼女の想定外の内容だったのか、少し慌てた様子のナーディアさんというかカザネには全部話しておいたし、むしろオレは今回の旅の内容全部織り込み済みでついてきてるものかと。

おうち帰りたい、と強く主張しているナーディアさんの顔を横目で一瞥してから、マールさんに伝えられたガンダス峡谷の説明を思い出す。

「ガンダス峡谷　通称白竜の谷。大昔からそこにいる、谷の主である賢獣指定の強力な白竜と、その眷属と思われる竜たちが支配する谷。眷属の竜からしてBランクチーム程の力を持つと推定されているが、谷の主の意思なのか、みだりに谷に踏み込まない限り、彼らが人を襲うようなことはなく、また谷の外に出てくることも少ない為に、峡谷一帯が手出し無用の領域と認定された、賢獣指定区域」

「　　ねえ、ちょっと」

何か言いたいことでもあるのか、口を挟んでくる彼女に構わず、説明を続ける。

「谷の主の白竜は、眷属の竜の力から見て少なくともチームランクA以上と推定される。」

真偽は定かならないが、地元の村民に伝わる伝承によると、元々は山であったガンダス峡谷は、白竜を襲ってきた魔物たちとの戦いの折、白竜が放ったブレスによって抉り取られて谷となった。などという逸話も残っており、少なくとも魔物領からちらほらやってくる、羽が生えただけのトカゲたちとは比べ物にならない存在と見なした方がいいことは確からしい」

「ねえ、ねえったら」

ちよつと待つて。あと少し。

「この谷の主である白竜は、驚くことに人語を理解するどころか、人との意思疎通が可能であるらしく、こちらは彼ら竜達と対魔物戦線に協力を仰ごうとした国やギルドの使者が確認済み。ちなみに交渉はどれも失敗しているとか。

……強力な、それも人との意思疎通が可能な竜と、その眷属の協力をどうにか得ようと考えてる人は非常に多く、彼らの協力を求めて、或いは古くから生きる彼の竜の知恵を求めて、何度断られようとしてつくく交渉に訪れる人々を煩わしく感じた白竜は現在、人と対話するにあたり、代々彼ら竜を信奉し峡谷の付近に村を作り暮らしている一族の者を選定者として、年に一度だけ、白竜と対話するに相応しい一組のみ、己との交渉権を認めると告げ、毎年この時期に白竜との交渉者を選別する戦いが、ガンダス峡谷で行われている。

地元の住人達はこれを」

「……………」

「ガンダス選定戦　と呼んでいるらしい」

手持ちの情報を一息に伝えると、ナーディアさんは何か言わんとし

て開いていた口を閉じ　しばし黙考。
数拍の置いて、うん？と首を傾げる。

「どんなことをやるのかわかってないんじゃないの？」

うん、と頷くオレ。

「目的はわかってるんだけど、目的の為に何をするのかはわかってないんだよね。戦いなんて言い方してるけど、その年によって選び方はまちまちで、文言通りに殴り合いでつぺんを決める年もあれば、一番早く謎を解いて目的地に辿り着いた組の勝ち、みたいな知恵比べの面が強い年もあったらしい。その年によって選定の方法は違っらしくて」

まあでも、どんな選定の内容にせよ、必ず戦闘面での強さというのは少なからず絡んでくるみたいなので、依頼の依頼人はあんな募集の仕方をしたのだろうか。

「成る程ね。……普段話に聞くばかりで、そういうところ全然見せないから忘れがちになっちゃうけど、少年はやっぱりBランクのチームの冒険者なのよね……」

額を掌で押さえながら、しみじみとした風に言うナーディアさん。

「うん？どういうこと？」

言葉の意味を図りかねて問い掛けるオレをちら、と一度覗き見ると、両手で頭を抱え、うあー！と空に向かって吼えるナーディアさん。

「　　Bランクチームの冒険者である少年が受ける依頼なんだから、

まかり間違っても軽いノリで一般人がついていっていいものじゃないのは、少し考えればわかることよね。ってことよ。 久々に私たち水入らずの日が続きそうだし、下着多めに持っていった方がいいかしら、とか悩んでる間に気付け私…！」

「うわーうわー、と折角綺麗に整えられていた銀髪を掻き乱しながら、慙愧の念に囚われているナーディアさん。」

「まあ別にその竜とやり合うってわけでもないんだし。遠くからでもいいから竜を一度見てみたい！って観光客とかも結構来るらしいよ」

その村。

「すごい勢いで落ち込んでいくナーディアさんにフォローを入れると、頷きつつも顔色が晴れる様子の無い彼女。」

「それはね。私を連れてくくらいだし、あまり危険なものじゃないのは確かなんですけど……、心の準備というか、そういうのがね」

「そういうもん？」

「ええ。少年のことだから、少年が依頼をこなしてる間は私たちに虎ちゃんを護衛につけてくれるつもりなんですよ？ 虎ちゃんと一緒にいて危ない状況なんて、王都で通り魔に遭う可能性と大して変わらないでしょうし」

「そりゃまあ」

カザネはともかく、なんの保険も無しに一般人のナーディアさんを

冒険に連れ歩くなんてことは流石にしない。

ナーディアさんもジンが王天虎だということは知っているので、賢獣最強種の一つ、などと呼ばれるジンと一緒に行動する以上、身の危険とかはあまり感じていないようだった。

が、ナーディアさんがへこんでいるのは、身の安全とかそういう問題のせいではないらしい。

「なんていうのかしら。 ご飯つくってって言われていつも通りご飯つくってたら、そのご飯は王様に出すご飯でした。みたいな感じ……？」

「言いたいことはなんとなくわかる」

要するに、ナーディアさんも自分で言う通り、心の準備というか、気構えの問題なんだろう。

一言で竜といっても、その種類は実に様々で、基本的に羽の生えたトカゲ、またはそれに類する姿をしているものを大雑把に纏めて竜と呼んでいるらしく、賢獣として認定されている竜や、魔物とされている竜もいるので、竜が人に対してどのような存在か、というのはその竜によって異なるのだけど、どんな竜だろうと、いっばしの冒険者程度では話にならないような存在ではあるらしい。

竜によってはジンやグルたち、賢獣最強種の王天虎や地皇狼と同等もしくはそれ以上の力を持つ竜も存在すると言われており、賢獣、魔獣という枠を超えた強大な存在、というのが一般的な竜の認識である。

そんな存在だからして、善悪どっちだろうと物語の華としてはうってつけなんだろう。

広くその力の強さが知れ渡っている竜を題材とした物語は昔から数多く伝えられており、それがまた竜の力の強大さや畏れなどといったものを広めることに繋がって循環しているようにオレには感じられた。

この連鎖のお陰で、竜という存在は他の賢獣や魔獣のどれよりも人々に憧れとか畏れとか、様々な感情を抱かせつつも人を惹きつける存在として見なされているようで、特に危害は無いとわかっていてもナーディアさんが落ち着けないのは、ここらへんが原因なんだろうな、と推測する。

とりわけ今回オレたちが向かっている、ガンダス峡谷に住まう白竜というのは、まず間違い無くジンたちと同等以上の力を持つ竜の類いであり。

山一つぶち抜いて谷にしたなんていう話は、流石に大袈裟に伝わっているだけだろうけれど、今も猶実在しているのにそんな話が伝えられてるっていうことは、もしかしたらそんなことが可能かもしれない、といった風感じられる程の存在ではあるっていうことだ。

ナーディアさんは割と穏やかな例え方をしていたけれど、彼女の立場からしたら王様にご飯を振舞うというよりは、大砲の砲口めがけて歩いてるといった方が言い方としちゃ正しいだろう。

人からいくら撃たないと言われようと、いきなり大砲の前に立ちに行きますなんて言われたらそりゃ躊躇いも出てくるよなあ、とは思う。

「ここまで来ちゃったんだし、着いて行くけどな。ええ、火の中水の中竜の巣窟の中。どこにだってお供するわよ、ご主人さま」

「なんか投げやりだなあ」

開き直ったというよりは、やけになった風に口を尖らせながらのナーディアさん。

いや本当に既に知ってると思ってたんだって、行き先のこと。

「目的地に着く頃には落ち着くわよ、たぶん。で、行き先や今回の依頼についてはわかったんだけど、少年がタッグを組むっていう依頼人とはどこで合流するの？現地？」

「いや、ガンダス峡谷手前の街で合流して、そこから一緒に目的地に行く予定」

「…その依頼人もまた変わった人よね。少年みたいな上位の冒険者を雇ってまで竜とお話したいなんて、いったい何を話すつもりなのかしら」

「そこらへんはなんとも。ギルドの話によると、同業の冒険者の人らしいんだけど」

「冒険者がどうしてもしたい竜とのお話ねえ……」

胸の下で腕を組み、空を見上げて考え込むナーディアさん。

どんなことを話したいのか、しばらく考え込んでいた彼女だが、やがてふるふる、と左右に首を振り。

「……だめね。全く予想がつかないわ。　　というか、そのお話をしに行く竜って力を貸してー、とか言っても突っ撥ねてるんでしょ？　その選定で選ばれた人の話も？」

「らしいよ。二二百年くらい」

「ひゃくつ!？」

裏返った声をあげるナーディアさんに頷く。

「うん。なんか、今さつき話した竜に協力を申し出たギルドや国の人の話っていうのは少なくとも百年以上前の話らしくてさ。

ガンダス峡谷に強力な力を持った、人語を理解する竜がいるっていうことがわかった当時は、結構色んな国でその白竜の話が広まったらしいんだけど、選定戦を勝ち抜いて交渉の場に臨んでも、その竜がどんなお願いも突っ撥ねるから、今じゃ本気で竜に交渉しに行く人はほとんどいないらしい」

「なによそれ。それじゃあお話する意味無いじゃない」

「文字通り話だけは聞いてやるって感じなんじゃね？竜の方からしてみればさ。まあ、そんなわけだからガンダス峡谷の竜の話が広まった後に、竜に何お願いしても無駄って話も広まって。百年も経った今じゃ竜に特別興味のある物好きくらいしかその選定戦の話も知らないんだとか」

「ああ、だから私も聞いたことなかったのね…」

こつちが何かお願いしても受け入れてくれないし、放置している限りあちらから何かしてくることもないので、近隣の国としてもギルドとしても、話を通じる相手とは言え、他の賢獣と同じく今じゃ相互干渉の立場を採っているらしい。

そんな交渉のこの字も見当たらないような相手に、本気で選定戦を勝ち抜いて何かを交渉しようと考えている依頼人の考えなんて、予想がつくわけがない。

「ゲオルグさん　バリエッタの人たちもこの選定戦の話は知らなかったし、今やかなりローカルな話なのは間違いないね」

「Aランクのチームに属する冒険者の耳にも入らないような話題じゃあ、私の耳に入ってくるわけなんかないか。…というか、それを聞いて更にわけがわからなくなってきたわね。そんな長年何の言うことも聞いてくれない相手に、今更何を話そうというのかしら……」

「案外他の物見遊山の人と同じく、一目噂の白竜を見てみただけだったりするんじゃない？」

「それは流石に……でもそれくらいしか思いつかないわよね」

適当に言った言葉ではあるが、オレたちの持っている情報ではこれくらいしか予想がつかない。

ナーディアさんも同様のようで、いや、とかまさか、などと言いながらも他の目的が思い浮かばないようだった。

「ま、こつちの仕事は依頼人をその白竜の元まで連れてくことだし、依頼人が何を話すつもりなのかなんてのは、あまり気にしてもしようがないんじゃないかな」

依頼人の目的なんかはわりとどうでもよく考えているオレに、不満そうに眉根を寄せるナーディアさん。

「あっさりしてるわねえ、少年。　こんな不思議満載の依頼をしてくる相手だっていうのに、気にならないの？」

気になるっちゃ気になる相手ではある　が。

「気にはなるけど、今考えても答えが出ない類いの話だしなあ……
それにもう依頼受けちゃったしさ」

一度依頼を受けた以上、相手が何を考えていようと依頼を達成するの
に全力を尽くすということは、変わり無いわけで。依頼人が何考
えてようとやることは変わらないのなら、考えても無駄だとは思
うオレ。

そんな考えを告げると、成る程ね、と頷くナーディアさん。

「そりゃそうよね、よっぽどのことじゃない限り依頼を破棄なんて
出来ないでしょうし。歳の割りにそういうところしっかりしてる
わよね、少年って」

そりゃ歳相応の年齢じゃないし。

などとは言わず、まあね、と得意げに笑ってみせる。

そんなオレを感心したようにこちらを見てくる視線を少しくすぐつ
たく感じながらも、馬車の行く先、前方に見えてきたものの姿に、
さて、と話を区切るオレ。

「でもまあ、気になるっちゃ気になることなのは確かだし、依頼人
と合流したら折を見て聞いてみるつもりではあるよ。話しても構わ
ないような内容ならナーディアさんにも教えるさ。

ともあれ。そろそろ次の街が見えてきたから、中の二人起こ
しておいて」

「あら本当。りょーかいよ。そしたらちよつと起こしてくるわね」

オレと同じく見えてきた街の姿に目をやったあと、返事をしてから
幌の中へと二人を起こしに向かうナーディアさん。

この後、ナーディアさんは自分でも言っていた通り、しばらくする
と行き先についての心の踏ん切りをつけたみたいで。依頼に出かけ
てる間、虎ちゃんの世話は任せて！とジンの世話を請け負い、選定
戦の間はジンから離れないという結論に達したようだった。

それから少しすると直に竜を見るの初めて。なんて少し楽しみにし
てるような発言をしているあたり、この人も中々タフな女性だよな
と思う。

王国から依頼人と合流するまでの道程では、特にこれといった出来
事はなく。ちよろつと観光気分で立ち寄った街を見回ったり、デー
ト紛いのことをしてみたり。

街から街への馬車の旅も、それなりに魔物の襲撃などはあったもの
の、オレたちの障害になるような魔物がさうろついている筈もなく、
むしろ襲ってきた魔物の毛皮とかを剥ぎ取って小遣い稼ぎになって
ラッキー。といった次第だった。

そんな調子で恙無く旅程は進行し、やがてオレたちは依頼人との合
流予定である街、ダフの街へと辿り着いたのだった。

第34話 散歩

ガンダス峡谷の為の街。

ざっくばらんに言ってしまうえば、ダフの街はそんな用途で作られた街のようだった。

ガンダス峡谷に至るいくつかのルートの内、アセナル王国から出発して一番最短なのがこのダフの街を通るルートで、ここから先は人の国ではなく、賢獣指定区域という竜が支配する地域となる為に、ガンダス峡谷に向かう人にとってはまともな補給ができる最後の街である。

この先にも一応、オレたちが目指している選定戦の開催地。峡谷の竜を信奉している人々が暮らす村があるのだけど、そこはまさに村といった程度の規模で商いは盛んじゃないので、何か補給をするならここが最後だよ！と露店のおっちゃんに言われた。

「したらその塩瓶二つ」

「まいど！ーまっ、この店の品揃え程度ならその村でも売ってんだけだな！がはは！」

「……………」

主に武器や防具、衣類などの点検、補給ができるのはこの街で最後だよ、ということらしい。

ともあれ。街を軽く見回った後、旅の疲れというか、馬車の乗り疲れもあり、早々にジン同伴でも泊まれる宿を探し出して一息つくこ

とにしたオレたち。

いつもは街に着く度に賢獣と一緒にでも大丈夫という宿を探すのにそれなりに手間取っていたのだけど、このダフの街はガンダス峡谷に至るまでの宿場町といった側面も強いのか、宿の数自体がそれなりに多く、賢獣、魔獣同伴可！というのを謳い文句にしている宿もあった為に、さほど時間をかけずに見つけることが出来た。

「さて、ここまでは概ね予定通り。多少早く着いてしまったが、早く着く分には問題無いしな。」

あとは依頼人と合流してガンダス峡谷に向かうだけが……確か依頼人との待ち合わせはこの街の冒険者ギルドで、だったか」

「うん。明後日から一週間以内に冒険者ギルドで合流。で、合流後に依頼人と一緒にガンダス峡谷に向かう予定。ちよつと時間空いちちゃったのはまあ、それまで各自自由行動つてことで、適当に觀光するなりなんなりしてて。ひとまず明日のところは、オレはギルドに顔出して色々手続きしたりしてくる」

「なら今の内にお土産でも買っておこうかしら。宿の主人に聞いた話だとガンダス峡谷名物、木彫り竜！とかいうのがこの街で売ってるらしいのよね。カザネちゃんも一緒にどう？」

「私はあまりそういうのに興味は無いんだがな……」

各々部屋で一休みしてから、夕飯を食べに集まった食堂で今後の予定を話し合うオレたち。

わりとのんびり進んで来たつもりだったが、それでもオレたちの進行に魔物との遭遇による時間のロスというのがほとんど無かった為通常かかると思われる日数を大幅に上回って進んでしまい、依頼人

と待ち合わせた日まで少し時間が空いてしまったのだ。

依頼人次第ではあるが、最短で一日、最長一週間ほどの街に滞在することになるので、とりあえず明日をどう過ごすかを話し合っていた。

オレはギルドに到着したことの報告やらの手続き。女性陣は、明日のところは買い物をして過ごすことに決まりつつあるようで、あまり興味無さげなカザネをナーディアさんがぐいぐい押ししている。

待ち合わせに一週間かけるとか、最初は正直正気の沙汰じゃない、くらいに思っていたのだけれど、互いに何か問題が発生した場合に備え、遠方の地で人と待ち合わせる時は大体これくらいの猶予を見るのが普通だという。

携帯電話とかで相手の状況をすぐに把握できて、それに合わせて行動できていた記憶のあるオレとしては、色々と新鮮な感覚だった。

とは言え、相手も待ち合わせた日に合わせて向かうので、一週間も待たされることはそうそう無いらしいけど、一日や二日の遅れなどは当たり前によくあることらしいので、二、三日はこの街に滞在するつもりでいた方が良さそうだ。

色々と覚悟完了したところで、カザネたちの方もナーディアさんがカザネを押し切った形で決着がついたらしく。

土産の他にもこのあたりの地域の服がどうのこうの、武器の点検がどうのこうのと、明日の予定について話し合ってる彼女達を尻目に、黙々と夕飯に出された肉の骨を甘噛みしていたジンの方を見る。

「……んで、ジンはどうするよ？」

声をかけられ、オレたちの会話に興味無さそうに寝そべりながら骨を噛んでいたのを止めて、こちらを仰ぎ見て、次いでカザネたちの方を見るジン。

しばらくそれぞれを交互に見ていたジンだったが、やがて尻尾でオレの方を指す。　オレについてくるらしい。

「特に何かあるわけでもないし、ここで待っててもいいんだぜ？」

本当にギルド行って到着したこと報告して手続きとかするだけだし。面白いことなんもない、という意味を込めてそう告げると、変わらず尻尾でオレを指したままのジン。

「わかった。したらジンはオレと一緒にギルドな」

着いて来られて困ることもなし、オレの方についてきてくれるというジンに頷いて承諾する。

久しぶりのジンと二人きりの一日になりそうだし、こっちはこっちで用事が終わったら久々に散歩でもしようかな、などと考える。

「少年達も用事が終わったら一緒に観光しない？　見回るところ多そうだから合流した後でも色々回れるでしょうし」

「いや、いつ用事が終わるかわからないし、たまには女同士で楽しんできてよ。荷物持ち代わりにバッグ貸すからさ」

楽しむ目的の女性の買い物というのは、わりと男性にとっては忍耐の時間になることが多いんだ。

体の良い言い訳があることを盾に、やんわりとナーディアさんのお誘いを退けることに成功したオレ。

そんなこんなで各々の明日の予定が決まり、今日のところは終了。

今日という日を逃したら次は何時になるかわからないので、この日の晩は色々頑張った。

具体的には、三部屋借りたにも関わらず三人で使用した部屋は一部屋。

旅行中にナーディアさんの教えでも受けたのか、カザネがスキルアップしてるのに驚かされた晩だった。

明けて翌日。

旅の疲れやら諸々の疲れやらで昼過ぎ頃に目を覚ましたオレたちは宿と一緒に朝食兼昼食を摂ってからそれぞれの目的を果たしに外出起きた直後は腰回りがやけに重そうだったカザネとナーディアさんだったが、出かける時にはめちゃくちゃうれうれとした様子で足取り軽く出て行った。

カザネなんて最初はそんなに乗り気じゃなさそうだったのに、女性の活力すげえ。

「よし。オレたちも行くか、ジン……」

「……………」

メシ食って出かける準備を整えて、ジンと共に出発しようとするオレを、大丈夫かお前。みたいな目で見てくるジン。

くそう、太陽がやけに眩しく感じる。

正直腹も膨れたこともあり、部屋に戻ってもう一眠りしたい気分だったけど、やるべきことはやらねばなるまい。

…次がいつになるかわからないからといって、流石に調子に乗り過ぎたことを反省するオレ。

というか、眠る頃には微妙に外の景色が白んでたのに、あそこまで回復してる二人の方がおかしいんだ。いつもだったら夕方まで就寝コースだったのをあそこまで回復させるとか、女性の底力というのを目の当たりにした気がする。

行き場の無いやりきれなさを感じながら、今にも底を尽きそうなる気を振り絞り、ギルドへ向かうオレとジンだった。

「ジン、一生に一度のお願いがある」

「……………?」

「ギルドまで運んで」

……………。

運んでもらった。

そんなわけでジンの背に寝そべりながらギルドまで辿り着いたオレ。道中やたらと通行人から奇異の視線を向けられたが、人の視線にはアセナル王国で充分慣れていたので、あまり気にすることなく休むことが出来た。

目的地であるギルドに着く頃には体調も大分回復し、ジンの背中から降りてギルドの中へと。

ギルドでの手続きは思ったよりも早く終わり、今回の依頼でオレたちが目的地に着いたことへの報告やらなんやらを済ませ、ついでに依頼人の方がこの街に辿り着いているかを尋ねてみたところ、どうやらそちらはまだ到着していない　　というかギルドには来ていないらしい。

到着されてても今日は完全にフリーの気分だったので、急遽予定変更、などといったことにならずに少しほっとした気分ではある。

対応してくれた受付の人に、また明日も来ることを伝えてからギルドを出て、さてこれからどうするか。とギルドの外でジンと顔を突き合わせる。

「　最初は、久々に二人で街の外へ散歩にでも出かけようかな、と思ってただけだ」

オレの顔をじっと見詰めるジン。尻尾がゆらゆら揺れている。

「正直眠い」

ピタ。と尻尾の動きが止まる。
その様子にやや後ろめたさを感じながらも、自身の意見を提案してみよう。

「ので、今日のところはやっぱり宿に戻って寝直そうかなあ……と」
自分の欲求を包み隠さずストレートに伝えると、そんなオレの元へとそのそと近付いてきて、

がぶり、と。

おもいつきり襟首を噛まれた。甘噛みではあったけど。
何をやる気だろう、と様子を窺っていると、そのままオレを引き摺って歩き始める。

勿論宿の方 ではなく、街の外へ出る門の方に。

どうやら力尽くでも散歩に出かけさせる心算のよう。 外套にめっちゃ牙が食い込んでる。

「わかった！わかったから！行く！ ちゃんと散歩行くからそれはやめろ！」

単純な力ではジンに敵わない というか、抵抗するならこのまま肉齧ると言わんばかりにちくちくと歯を地肌に触れさせてくるジンの強攻策に、素直に白旗を揚げるオレ。
いやマジでやめてくれ。 周囲の人も見てるし！なんか微妙に心配そうにしてるあたり、憲兵とか呼ばれそうな雰囲気なのが心配だ。
数歩オレを引き摺りながら歩いたところで、こちらの全面降伏っぷりに満足したのか、大きく首を下から上へと振るい、宙にオレを放り投げるジン。

「ッ、よ…っと。いや、悪かったってジン。久々の散歩だしな。行こう行こう」

空中で一回転して、ジンの背中へと跨る。

オレの降伏に納得したとはいえ、未だ微妙に怒っているのか、尻尾でオレの背中を叩いてくるジンの背を撫でて謝りながら、門の方へと向かうオレら。

「……あのう、大丈夫なんですか？」

「あ、はい。大丈夫です。ちょっとじゃれ合ってただけなんで、はい。ご心配無く！」

こちらを心配して声をかけてくる周囲の人々の誤解を解きつつ、そんな周囲の様子をわかってるだろうに意に介さずんずん進むジンの機嫌をとりつつ。

街を出るまで非常に忙しない時間を過ごすことになった。

お陰ですっかり目が覚めたけどさ。

街の門番をしている兵たちすら無視して、さっさと外に出ようとす
るジンをどうにか宥めてすかして、門の外へと出る手続きを執り行
い、街の外へと出たオレたち。

しばらくはのんびりと、ゆったりとした歩調で歩いていたオレたち

だったが、やがて充分に街から距離を取ったあたりで、周囲に人の姿が無いことを確認してから、ジンに声をかける。

「よし。そろそろ行くか、ジン。あ、ちょっと待て」

歩みを止めて、よしや、とばかりに尻尾を立てて、今にも走り出しそうなジンを制止して、身体全体に魔力を行き渡らせる。

今日は杖を持ってきていないので、単純にオレ自身から、世界に魔力を浸透させ

「アームド」

全身に魔力障壁を纏わせる。

常時魔力を放出していなければならない、魔力消費が激しい為、魔物相手の戦闘ですら早々使わないこの魔法。

それを何故、たかが散歩如きで使うか、という。

「改めて　よし。行け、ジン！」

オレの合図に一声鳴いて返事を返し、縮こまるように全身を撓めて四肢に力を込め始めるジン。

その様子に、こちらも合わせて腿に力を入れ直す。

次の瞬間。

「グルアアアア　！！」

咆哮と共に、ぐん、と一気に身体の前面にかかる強烈なG。

これに備えていたとはいえ、久々だったせいか思いつきり身体が後方に流されそうになり、慌ててジンの背の体毛を握り締める。

「く、は　　！　　久々だとやっぱキツ……！」

歯を食い縛り、身を屈めることで僅かでも空気の抵抗を減じさせ、少しでも負担を和らげながら久々の散歩に半笑いを浮かべる。

散歩、と聞き心地は柔らかく言っても、その散歩する相手はそこらへんの愛玩用のペットなんかではなく、この世界でも有数の、賢獣最強の王天虎。しかもその成獣。

そこらへんをちよろつと歩き回ってはい終了。などというわけはなく。そりゃあもうがつつり走り回るのだ。全力で。

普段や戦闘時なんかは周囲のことや、乗り手であるオレのことも考えて、状況に合わせた速度で動いてくれるのだが、散歩の時だけは別。この時はかりはおもいつきり身体を動かすことだけを考えて走り回るので、乗り手であるオレへの負担を全く考慮してくれない。空気ってというのは酸素やらが寄り集まった壁なんだなあ、とジンの散歩に付き合う度に感じる。風圧で障壁が軋む軋む。

大気の壁をぶち破っていくかのようなジンの全力疾走は、身体中に障壁を張り巡らせておいてなお、障壁越しに風の圧力というのをひしひしと感じさせる。

おもいつきり走り回りたいただけなら、一人で走り回って来りゃいいじゃん……！

ジンが大きくなるにつれ、こいつとの散歩にしんどさを感じて何度かそう言ったことがあるのだけねど。

小さい頃から長年連れ添ってきた所為なのか知らないが、一人で走り回るよりもオレを乗せて走り回る方が良いらしく、たまにこうして一緒に走り回ってやらないと非常に機嫌が悪くなる。

これはじーさんとグルの間でもそうだったようで、じーさんが歳をとってからはグルの方が自重してくれるようになったらしいが、若い頃はそれこそ首根っこひっ捕まえたままでも一緒に走り回ろうとしていたらしい。

意地でも拒否しようとすると思地でも連れまわそうとするので、諦めて定期的につき合ってやれ、とじーさんには伝えられていた。

……が、王都に来てからこれまで、ちよくちよくギルドの依頼による魔物の戦闘などでおもいきり身体を動かすことはあっても、思いきり走り回ることをさせてやれず。

やばいなー、散歩させてやらないとなー。とは思っていたものの、なんだかんだでずるずるとここまで散歩する機会が延びてしまっていた。

完全にこちらの都合なのにも関わらず、ジンもオレの状況を慮って不貞腐れることもなく我慢してくれていたから、今日は一日中だろーと散歩に付き合っつてやろー、と当初は考えていた。

考えていたのだけれども

「やっぱ別の日にしてもらえばよかったあああああ!!!」

ほとんど駆ける、というよりも跳躍を連続で繰り返しているようなジンに騎乗するということは、凄まじい縦揺れの繰り返しであり、ちよろつとジンが茶目っ気を出してジグザグに走ったりなんざした時には、その縦揺れに横揺れまでもが加わる。

人っつていうの基本的に振動に弱く、強い揺れ動きに晒され続けると三半規管が刺激されて自律神経の失調を起こしやすい。

所謂乗り物酔い、というやつだ。

この乗り物酔いには、更に乗り物酔いが起こり易い状況、というものが
あり。

以前聞きかじった知識によると、睡眠不足や、疲労が溜まっている
時、食事をした後などは余計に乗り物酔いが起こり易くなるらしい。

つまり今のオレ！

久しぶりの散歩とはいえ、普段の調子ならばこの段階で気分が悪く
なることは無いのだけれど、今日のオレは既にしてやや気分が悪く
なっている。

まずいなあ。ここでこの調子だと間違い無く身が持たない。

このままの状況が延々と続くだけならば何とか耐えられるかもしれ
ないが、こいつはその上

「ッグ!?」

陸上の二次元だけでなく三次元、空をも駆け回る王天虎なんだ。

不意に空へと駆け上がるジンの跳躍に、身体の中身全てが押し潰さ
れるような重力が加えられ、脳に血液が行き渡らなくなったのか、
ジンにしがみつくとオレの視界が一瞬暗くなる。

思わず身体から力が抜けて、ジンの背から振り落されそうにな
る身体に慌てて力を入れ直すもの。そこから始まる縦×横×高
さ、つまり三次元を全力で疾駆するジンの動きにオレの具合の悪さ
が素晴らしい勢いで増していく。

……こいつの成長っぷりを考えるに、遊びだからと後回しにしてた
けれどそろそろ対Gの魔法とか考えた方がいいかもしれない。

速さという点ではグルの方が上だったけど、空飛ばない分あいつの
方が楽だったなあちくしょう！

身体が上を向いたり下を向いたり横を向いたり。重力が横を向いたり上を向いたり下を向いたり。

凄まじい揺れの繰り返しに加え、あっちこっちに偏っては戻され、戻されては偏っては繰り返すオレの血流に脳が悲鳴をあげているのか、警鐘を鳴らすかのように視界が暗くなったり赤くなったりを繰り返す。

ああ、これは徐々に灰色と赤色の壁を超えて、ブラックアウトまで行くかもしれないなあ。でも、そうすればこの気持ち悪さとはおさらばできるのか……などと、徐々に遠のいていく意識の中で、気を失うことをよしと考え始めたあたりで。

「ッ!? うぶっ」

不意に、急激な制動がかかる。

身体だけでなくその中身までもが一気に前のめりになり、ジンの上から飛び出しそうになるのを口を閉じて堪える。

唐突に止んだ抗力に、どこかへと飛びそうだった意識は戻って来たもの。代わりに散歩中は気にする余裕の無かった、血液の偏りによる頭痛やら眩暈やらが一気に押し寄せてくる。

更にヒートアップするオレの具合の悪さ。

走り回るのに満足でもない限り、こいつはオレが振り落された、とかで無い以上オレの体調を気遣って足を止める、なんてことは考えられないので。ジンが足を止めたということは、こいつの足を止めるに足る現象がジンの視界に収まった、ということだろう。

もしこれでやっぱり何も無くてまた走り出す、とかしやがったらこいつの自慢の毛皮汚してやる…!

…が、何が起きたにしても、今だけは勘弁して欲しいなあ……。

切にそんなことを思いながら、オレはゆっくりと、閉じかけていた
目を開いていった。

第35話 虎も乗り物

「…………つ。急に、なんだよ、休憩なら全然歓迎だけど…………」

今にも胸元から込み上げてきそうな具合の悪さを堪え、ゆっくりと目を開く。

未だに脳内を駆け巡る血液が正常な流れを取り戻していないのか、視界の明滅が酷くて周囲の光景がろくに見えない。が、眼下に広がる木々の姿を見るに、どうやらオレたちは走り回っているうちにかなり遠くまで来てしまったらしい。

ダフの街の近くに森なんて無かったし。

……遥か遠くに微妙に山だか谷っぽいシルエットが見えるあたり、もしかしたらガンダス峡谷の近くまで来てしまっているのかもしれない。

ちゃんとこいつ帰り道覚えてんだろうなあ……

既にオレはここがどこかはおろか、どこをどうやってこんなところに来たのかすらわからん。

広大な森の端っこまで見えるような遥か上空で、大気を掴んで悠然と空に立つジンの背中を一頻り睨んでからそんな不安が頭を過ぎる。

もしこいつが帰り道覚えてなかったりしたらどうしてくれようか
ひっそりそんなことを考えながら、地上を見下ろすジンに声をかけるオレ。

「ごめん。こっからじゃ何もわからん」

ジンの上から身を乗り出し、こいつが見下ろす先を見てみるものの、依然視界は明滅したままで、完全に回復するのにはもうしばらくの時間がかかりそうだった。

薄ぼんやりと暗くなつて見える視界の中では、視線の先には森があるっぽい、ということ以外何もわからず、目を凝らす行為さえ今はしんどく感じる為、ジンの頭に手を置いて、さっさと答えを教えるようジんに促す。

そんなオレの姿を振り返り眺めてから、ゆっくりと高度を下げているジンの。

丁度今いる場所から真下の森目掛けて、螺旋階段を下るかのようにくるぐると円を描いて高度を下げていくので、ちょっと目が回りそうになる。

急降下したら辛いだろうからって気を遣つてこうして下りてくれたんだらうけど、こっちはこっちで視界の回転が地味に身体に響いて辛い。

「ジン。もうちょい、…あー、半径広げて」

ジンの頭の上に顎を乗せ、目の前で片手をぐるんぐるん回して意図を告げると、鬱陶しそうに顔を振るいオレの腕を払い除けながらも、言った通り描く円を広げて、回転を緩やかなものにしてくれるジン。これによってようやく気分の悪さが緩和されてきたので、ジンの頭に顎を乗せた体勢はそのままに身体の力を抜いて、しばらく体調を回復させるのに努めるオレ。

欲を言えばこのままの姿勢でゆっくり垂直に移動するのが一番オレの身体にとつちや楽なんだけど、こいつ空も地面代わりに使えるっただけで、自在に空を飛べるわけじゃないからなあ。

垂直に移動して欲しいとか言い出したら、自由落下かオレの身体ごと下向きに移動とかやられそうなので、これ以上要求するのは止め

て、ジンが発見した何かを確認できる高度に下がるまで黙っていることにする。

「あ、急いだ方が良さそうなことなら、急いで向かって構わないぞ」

体を休めることに専念しようと目を閉じかけた瞬間、ふとそんなことが頭に浮かんだので、念のために告げておく。

こいつのことだから本当に急を要するような事態なら、オレが何か言わずとも急いで向かうだろうし、一応といった感じでそう言っと、歩みはそのままに視線を下の方へと向けるジン。

首ごと下を向いたので、自然オレの顔も下を向く。

……相変わらず何も見えねえ。

オレとジンの体調の差を考慮しても、こんな高所から一面木と葉っぱだらけの森の異常を察知できるのは、体調の差以上に性能の差とこのを感じる。

流石賢獣最強種の一角王天虎ってことか。種族自体が最強なんて呼ばれるような種族は、元々備わっている性能からして他の種族とは違うっばい。

今までちゃんと測ったことはなかったけれど、今度どこまで見えるのか確かめてみようかなあ、こいつの眼。

「……………」

「どうした？やっぱ急いだ方がいいん？」

オレが内心でこいつの視力に感心している間も、ずっと下を見詰めたままのジン。

オレからは何が起きているのか全く把握できないので、こいつの判

断に任せるしかないのだけれども　こいつ自身どうにも判断しかねているのか、オレが声をかけても下を注視したまま、けれど歩みを速めることもなくゆっくりと高度を下げていく。

今まで自分のことで頭がいっぱいだったけど、なんかこいつの様子を見てると少しずつ下で何が起きているのか気になってきたな。いったい森の下で何が起きてんだらう。

散歩中の全力疾走しているジンの注意を引きつけるような、それでいてオレの体調を気にしてゆっくり向かっていく余裕があっても注意は続けなければいけないような事態？

……全く予想がつかん。

果たしてオレとジンの真下で何が起きているのか、想像を膨らませている間も結局ジンが足を速めることは無く、真下から注意を逸らすこともなく。

お陰でこっちもそんな悩むならいつそ急いで向かって　いやしかし今急降下したら身体が…！などと考え始めてしまい、数分ほどそんな悶々とした時間を過ごしてようやく、オレの肉眼でも森の中の状況が確認できるような高度まで下がってきた。

さて、ジンのやつは一体何を見つけたんだか。

気になりすぎて多少わくわくしたものすら感じてしまいながら、改

めてジンの視線の先、真下の森の中へと視線を凝らして見てみると

そこに、傾くほどの衝撃を発しながら大木にぶち当たる、一人の男の姿が映った。

「　　ちよ！？ジン！おまつ！」

冒険者然とした出で立ちの、革鎧を身につけ、片手に剣を握っているその男。

大木にぶつかつた衝撃で意識を失ったのか、男は木に背中を預けたまま、ずるずると崩れ落ち、握っていた剣も地に転がる。

身につけた革鎧の、胸当ての部分が大槌でも叩きつけられたかのようにつべっこりと凹んでいる。最悪胸まで陥没してんじゃねえのか、あれ。

うっそ。何呑気に歩いてんのこいつ！？めっちゃ緊急事態じゃん！？なんかあのヤバそうじゃん！？

確認した状況に、気分が悪さも忘れてバシバシとジンの頭を叩いて急かすオレ。

急げ急げ！明らかに魔物にやられる寸前だろあの人！寸前っつーか既に手遅れだったりしないのかあれ！？

頭を叩かれ続けて急かされているにも関わらず、一度足を止めて何か言いたげにこちらを見てくるジン。

だから、その余裕はなんなんだ……！！

「いやいや急げって！ありゃヤバいだろ間違い無く！見殺しとかや

だぞオレ！」

ちよつと乗り物酔いで気分悪かったので、知らない冒険者の人を見殺しにしました。

なんてことになるのはいくらなんでも後味悪すぎる　！

そんなオレの慌てきつた様子に、やつと急ぐ気になったのか、崩れ落ちた男性の下目掛けて駆け足程度の速度で駆け降りていくジン。

なんでこいつこんな余裕を持って眺めてたんだ。見ず知らずの人とはいえ、明らかに急を要しそうな事態じゃねえか。

知らん人の生き死にかはわりとどうでも良いとかだったりするんだろつか。いやまあオレも知らないところで知らない人が死ぬのはどうでもいいっていうか気にしてもしょうがないとは思っけど！　流石にこんなあからさまな見殺しは具合が悪いだろう…！

くっそ、こういう時会話ができないのがめっちゃくちやもどかしく感じるな　！

なんとも煮え切らない思いを感じながらも、降下しながら意識を研ぎ澄まし、片手を崩れ落ちた男性の下へと向けるオレ。

こつからじゃあの男を吹っ飛ばした存在の姿は見えないが、もし止めを刺そうと近寄ってきたならばいつでも魔力砲を放てるよう、片手に魔力を集めておく。

が、止めを刺したと思っているのか、そんなことに興味が無いのかどうかはわからないが、男の近くにそいつが近付いてくることはなく、片手に魔力を集めたままの姿勢で、木々の枝葉を散らして森の中へと突入するオレとジン。

そのまま座り込む男を庇うように前に立ち、男が吹っ飛ばされてきた方向、男をこんな状態にした存在がいると思われる方向へと振り向いて

そこに、綺麗な放物線を描きながらこちら目掛けて飛び込んでくる、新たな男の姿と、

拳を突き出したままの姿勢で、驚いたように目を見開いてこちらの姿を見詰める、女の姿を見た。

「……………ああん？」

こちら目掛けて飛んでくる男を、払い除けるわけにもいかず、ジンに跨ったまま両手を使って受け止める。

「……………っと」

冗談みたいに綺麗な放物線を描いて飛んできたその男は、見た目に反して勢いは非常に強く、ジンの上という不安定な立ち位置で受け止めることになったオレは思わずよろめいてしまう。

それでもなんとか受け止めきって男の姿を確認すると、こちらも身に纏った鉄製の鎧の腹部のあたりがべっこりとへこんでいる。

周囲を見ても魔物の姿は無く、今の状況をオレが見たものをそのまま信じて理解しようとする、この男の腹をべっこりへこませたのも、後ろで崩れ落ちている男の胸部をべっこりへこませたのも、ど

ちらもこの、拳を突き出したままの姿勢でこちらを見詰めている女がやったってことになる……んだけれども。

「……………」

受け止めた男を、とりあえずジンの背中に布団干しのようにひっかけて、女の方へと目を向ける。

長い金髪に、青い瞳。白銀を基調とした軽装鎧を身に纏い、更にもの上からオレの持つてる外套では及びもつかない豪華なマントを身に纏っている。

背は女にしては高く　170は超えてるんじゃないかなろうか。

あのマントを着てるから、ってわけじゃないが、どことなく高貴そうな印象を受ける。全身から滲み出るオーラというかなんというか。そこの凡人が普通に暮らしていたんじゃない、例えば同じ服を着て頑張ってるようにしてもこの雰囲気は出ないだろう。以前王城で出会ったマルグリット王女みたいな、いや、どちらかというアセナル王の方に近い威厳みたいなものを全身から自然に発している、そんな女だった。

……しばらく互いに黙したまま見詰めあい、やがて女の方が、突き出したままにしていた拳を引いた。

「そいつらの仲間　というわけではなさそうだが。　何者だ貴様」

白銀の手甲に包まれた両手を胸の下で組み、そいつら、と視線でオレが受け止めた男達を指して問い掛けてくる女。

どうにも状況が掴めず、こいつらが何でぶっ飛ばされてんのか、眼の前の女がなんでこいつらをぶっ飛ばしたのかがまるで想像がつかない為、女に対して多少警戒しながら口を開くオレ。

「近くを散歩してた冒険者だよ。散歩の途中でこいつがこの騒ぎを嗅ぎ付けたみたいでさ、駆け付けてみたら　って感じ。この人らとは全く面識無いけど……興味本位で事情を聞いてもいい？」

ジンの頭に手を添えながらこの場に現れた経緯を説明すると、ジンの方を一瞥してからふん、と鼻を鳴らす女。

「その虎、賢獣か魔獣の類いか。　この私に寸前まで気配を掴ませぬとは、中々の獣を従えているようだな」

……あれ、この人に気付かれないように近付いてたのお前？

そんな意図を込めてジンの面を見ると、うん、とばかりにこちらの顔を見返してくるジン。

なんでそんなことしてんのお前。そう尋ねたかったオレだけど、その疑問をジンに向ける前に、女の方が更に言葉を続ける。

「まあ、よい。　その男たちはな、この私に不貞をはたらこうとしたからとつちめてやった」

「うっそ！」

助ける必要無いじゃんこいつら！

受け止める必要が無かったことを知らされ、ジンの背中に引っ掛けていた男を蹴り落とすオレ。

こんな人気の無いところで女襲おうとしたとか最低だなこいつら。受け止めずに叩き落すべきだったのか……！　ジンも悪党が返り討ちに遭ってるだけの現場だから急いで助けに行こうとはしなかったのか、とジンの行動に納得するオレ。

「ああ、嘘だ」

「はああ!？」

蹴落とされ、地面に転がる男を見詰めてから、しれっと前言撤回する女。

何この人わけわかんない。今の発言でオレの予想を全て覆されたし、ジンが動かなかつた理由もまたわけが分からなくなった。

地面に落つことされた男が小さく呻き声を上げるのに僅かに罪悪感を感じつつ、女の方を睨みつけていると、ふう、と息を吐きながら肩を竦める女。

「本当はな。ちょっととした交渉をしていたんだが、話をしているうちにお互い熱くなってしまったな……」。

互いに口だけでなく手まで出てしまって、この結果というわけだ」
「本当かなあ……」

一瞬前にさらっと嘘を吐かれた方の身としては、彼女の発言をそのまま鵜呑みにするのはとても難しい。

できるなら男達の言い分も聞いてみたいところだけど、二人共完全に気を失っているみたいで、しばらく眼を覚ますことはなさそうだった。

「こちらとしては貴様が信じようと信じまいとどちらでも構わないがな。別にこれ以上その男たちをどうこうするつもりもない、貴様の好きにするがいいさ」

「手が出るほど熱くなるような交渉してたんじゃないの?」

「その件については既に解決した。…こいつらは貴様に任せて良さそうだし、もう行っていいか？人を待たせているのでな」

後の処理をオレに任せる気満々の女。

くっそ、首突っ込んだらにはほったらかすわけにもいかなえし、この女にやらせるのもこのまま放置しそうで不安だしなあ…

…！

オレがやるしかないのかこれ。

「……まあ、ジンもいることだし、こいつら街まで運ぶくらいはやつても構わないけどさ。そっちは街に戻らねえの？」

「待たせてる相手は街にいるわけじゃないのでな」

そう言ってもう用は無い、と言わんばかりに背を向ける女。

この辺で街に戻る以外の行き先って 上空からちよろつと見えたガンダス峡谷のあたりしか無いような気がすんだけど、もしかして

「もしかしてガンダス峡谷に行くん？ 選定戦やりには？」

「……。中々に耳聡いな。いや、この辺を生業にしている冒険者ならば知っていて当然か」

既に歩き出していた足を止め、顔だけ振り向かせてこちらを見ている女。

言外の肯定に得心しつつ、とりあえずぶっ倒れてる男を運ぶ為に一度ジンの背中から降りて、先ほど蹴落とした男を担ぎ上げるオレ。

……あー、やっぱりまだ乗り物酔いが残ってたのかな。立っていると平衡感覚がしゃんとしない。

「いや、オレこの辺の冒険者じゃないぜ、同じく選定戦を受けにこちに来たクチ」

「……ほう。貴様も今年の選定戦を受けるのか」

女と会話を続けながらジンの足元で転がってる方の男を肩に担ぎ上げる。

鎧来た男ってめちゃくちゃ重いなオイ。これはジンが一緒じゃなかったらほったらかしてたかもしれない。

「まあね。つっても竜に何か用があるわけじゃなくて、竜に用がある依頼人の依頼を受けて、って形だけとき。あんたも物好きだよな。何言っても突っ撥ねるって噂の竜と話をする為に、こんなとこまで来るとかさ」

そこらへんの話も聞いてみたいけれど、ただここで出会っただけの関係でそこらの話まで聞こうというのは、やかましいわといった感じだろう。

人それぞれ色々あるんだろうな、などと考えることにしていると、女の方が意外にも会話を続けてきた。

「物好き、か。……確かに物好きなのだろうな。今更あのものに何かを求めるなどという行いをするのは。」

……だが、いかな物好きと思われるようと、私は今回どうしてもあの谷の主に会わねばならぬのだ」

「ふうん……色々事情があるもんなんだな。ま、お互い頑張ろうぜ、オレも依頼を受けた以上、依頼人を竜の下に送り届けるのに全力を尽くさざるを得ないし」

「ふむ。貴様も私と同じく、観光紛いの興味本位の参戦　とい
うわけではないのだな」

「そりゃまあ。なんたって仕事として参戦する　」

わけだし。

そう言おうとして　　言えなかった。

不意に背後から放たれた殺意に、振り返るのに一瞬。

視界の端で捉えた銀光の閃きに、振り返りながら首を反らすのに、
また一瞬。

首を反らすのとほぼ同時、反らす前に首があつた場所を刈り取るよ
うに銀の光が難いで行くのを視界が捉えるのに、更に一瞬。

締めて数瞬の合間に行われたこの出来事。

その数瞬の後には、オレが肩に担いでいた筈の男の重みが無くなっ
ていて。

そしてオレの眼の前に　　先ほどまで離れたところで背を向けてい
た筈の、女の姿があつた。

「……………おい」

「……………ほっ」

睨みつけるオレの視線にも、まるで悪びれた様子も無く、女は不敵

な笑みを浮かべるのだった。

第36話 遭遇

鼻先がひりひりとする。

避けきつたと思っていたけれど、掠ってたのか。

指の腹で鼻先を擦りながら、眼の前の女から注意は逸らさぬままに周囲を窺うと、少し離れたところにオレが寸前まで担いでいた、冒険者風の男が転がってるのが見えた。

血が流れたりしている様子は無いことから、どうやら今さっきのオレは殴られるか蹴られるかしたつぽい。

眼の前の女の方も先ほどと変わらず無手だし、何より改めて見て気付いたが、こいつ帯剣してないしな。

「急になにすんだよ」

「今のを避けるか。確実に仕留めるつもりだったのだがな……」

世はまだまだ広い。などと言いながら感心した風に頷いている女。いやだから、そんな風に感心されてもつつーか。

「質問に答えろよ。急に何してくれてんだって　　うおっ!?!」

「骨の2、3本バキつといくだけだ、すぐ終わる」

閃く銀の光。

大気を削るかのように風切り音を鳴らして迫るそれを、再び仰け反ってかわし。

「ちょ、お前ほんとに　　いい!?!」

振り向き様だったさつきとは違って、今度はちゃんと見える。

放たれたのは、顔面狙いの右フック。首から上を引っこ抜こうとでもしてるかのように、とんでもない速度で振るわれるそれを避け、いい加減声に怒気を孕ませ相手に文句を言おうとしたところで、拳を振るった勢いのまま背を向けた女が、その勢いを緩めずぐるんと一回転し。

続けて放たれる、鎧の重さなんてまるで感じさせない鮮やかな廻し蹴り！

「つく、の　！」

後方に退いた首から上とは異なり、残されていた胴体目掛けて放たれるそれを、思い切り地を蹴り飛ばしバク転することで回避する。

マジでいきなりなにすんだこいつ　！

地面に手を着きながら着地したところで、いい加減段々と腹が立つてくる。

剣だなんだと使ってないからって、あんな硬そうな籠手や脚甲にあの速度でぶつかったら、人なんてただじゃ済まないだろ。

なんだろう。何かした覚えは無いけれど、これはケン力売られてんのかオレ。

問答の余地をまるで見せない相手に、いい加減無理矢理にでも話をしたくなってもらおうと拳を握り締め。

「うぐっ」

途端、ぐにやり、と視界が歪む。

身体がふらついて、ぐるぐると体内を渦巻いて込み上げてくる吐き気に、咄嗟に口元をおさえるオレ。

やばい、吐きそう。

状況が状況だったからすっかり忘れていたけれど、まだ乗り物酔い収まってなかったのかよ……！

全身から一気に脂汗が滲み出てくるのがわかる。うわー、しゃがみこみたい。今動いたらなんか色々終わりそう。

俯きながらも、なんとか気持ち悪さを抑え込もうと地面と睨みあいながら悪戦苦闘していると、そんなオレの視界に、黒い影が入り込んでくる。

「余所見とは、大した余裕だな」

声に反応して、顔を上げると同時、

だあん！！

と、地面が爆ぜた。

追撃か、とオレの脳裏に過ぎった憶測は過ちで、それは鎧の女が単に地面を踏み砕いたことによる結末だった。

大地が陥没し、突風が巻き起こるほどの震脚。

強固に固定された足腰を発射台に、腰の奥深くにまで溜め込まれた拳が、今にも突き放たれんとしているのを確認し、それに込められているであろう威力を推測して顔が引き攣る。

流星に、この状況でこれは、ちよっと……

「ッ、ちよ、タンマ」

無論、今まで散々こつちの話を見殺しして襲い掛かってきた相手が、ことここに至ってオレの制止を容れるわけもなく。

いつそ痛快なほどに微塵の躊躇いもない、凄まじい威を内包した拳がオレに向かって突き放たれる。

「　　ツツー！」

「　　ツツー！」

先の震脚に勝る音と衝撃が、響き渡った。

「……………ほう」

出会った時と同じく、拳を突き出したままの姿勢で両目を見開き声をあげる、鎧の女。

その声音はただ単に驚きを露わにしたものであるというのに、どこか下のものを称え感心している風に聞こえるのは、こいつの纏っている尊大な雰囲気の所為だろう。

喋っているだけで勝手に上下関係が構築されてしまいそうな、圧倒的な覇気を身に纏いながら、鎧の女は口を開く。

「あの瞬間に、私の突きを受け止めるほどの障壁を作るとはな。魔法使いだっただのか、貴様」

障壁との衝突に耐え切れなかったのか、砕け散った籠手の中から露わになった手の甲を見下ろしながら、鎧の女が尋ねてくる。

対照的に、額に汗を滲ませながら、片手を自身の口元に、もう一方の掌で女の拳を受け止め、興味深そうにこちらを見詰めている女を睨みつける、オレ。

「……ちよつと、待って、言っただろうが……！！」

信じらんねえ、こいつ。

杖無し、無詠唱、緊急展開って要素があるとはいえ、オレが全力で張った障壁をぶち破って拳を届かせやがった。

威力こそそのほとんどを障壁と相殺されてはいたものの、それでも女の拳を受け止めたオレの掌は、障壁によって減衰された突きを受け止めてじんじんと痺れている。

最早脂汗なのか冷や汗なのかよく分からない汗を流しながら女の拳を押し返すと、鎧の女はそれに逆らわず数歩後ろに下がり、露わになった片手を握っては開きしながら、その拳を見下ろした。

「ふむ。面白い。あるいは貴様ならば」

「……だから、ちよつと待って、人の話を、聞け……！！」

何事か呟いている女に向かって、込み上げる吐き気を堪えながらどうにか喋る。

が、相対する女は最早こつちの言葉が聞こえてないんじゃないかという次元で、オレの言葉にまるで聞く耳を持たない。あれ、殴りかかってくる前までは会話通じてたよな、などと自分の記憶を疑いだ

したあたりで、己の手から目を離れた女が、こちらを見てようやく返事らしいものを返してきた。

「敵対した相手と語る言葉など無い。 ああ、言い残したいことがあるのなら手短にな」

「やめよう」

考えうる限り手短に言うオレ。

ずん、と一歩踏み出し半身に構える女。

「手短に言ったのに無視かよ!?! 待てよ!?!」

本当に見てて気持ちいいくらい徹底してるなあこの女!

敵と定めたらケリが着くまで問答無用か。でも制限付きとはいえない残したい言葉は聞いてくれるあたり、一握りの情けというかそんなはありそうな あれ、こいつ最初骨2、3本へし折るだけって言ってなかったっけ?

気分の悪さを誤魔化すように益体もないことを高速で思考していると、今にも戦闘を再開させようとしていた女が、唐突に拳を下ろす。しょうがないから色々みつももないことになるのを覚悟の上でやり合ってやるう、と意を決しかけていた最中のことだったので、その仕草に目がきよとんとなるオレ。

「……………時間切れか」

「あん?」

女の様子を訝しく思っていると、軽く嘆息をもらしながら視線を横

に向ける鎧の女。

「この場での決着はあわよくば、程度のものでしかないからな」

女の視線の先を追うと、そこにはのっそり構えて女を見詰めている、ジンの姿があった。

これ以上やるつもりならば、と言わんばかりにじっと見詰めているジンの姿を一瞥してから、マントを翻して背を向ける鎧の女。どうやらジンを交えてまでやり合うつもりは無いらしい。

時間切れつてのは、仕掛けてからジンが介入してくるまでの時間が切れた、ってことが。

こつちから仕掛けてくるなどと考えていないのか、考えた上であえて晒しているのかどうかはわからないが、この無防備な背中を見る限り、宣言通りもうこれ以上やり合う気は無さそうに見える。

とはいえ、先ほどの状態から不意打ちをくらったばかりなので、未だ気を張ったままでいるオレにまるで頓着せず、女はそのまま歩き出す。

「忠告しておく。選定戦は棄権することだ」

「……………」

「彼の地で再び出会ったならば、次は骨の2、3本では済まぬぞ」

「……………」

言い返したいことが山ほどあるつてのに、言い返せないこのもどかしさ。

そろそろピークに達しそうな具合の悪さに、今は立っているのが精

一杯で、女が視界に納まつてる内は意地でも、としゃがみ込むのだけは堪えながら、言葉を残して歩き去っていく女の後姿を睨むように見送る。

ジンがいいの？と尋ねるかのようにはこちらを見ているけれど、それに答える余裕すら今は無い。

「ではな。二度と会わぬことを願う」

そのまま、女の後姿が見えなくなったあたりで。
オレはぶっ倒れるように地面に寝転がった。

「うあー……だつる……」

女の姿が見えなくなつてから、かれこれ三十分以上、乗り物酔いが醒めるまで動く気も起き上がる気もせず地面に寝そべつたままごろごろと転がっていたオレ。

気がつくと空がにわかになくなってきている。街出たの昏過ぎだもんなあ。

傍で一緒に寝そべっていたジンの尻尾を手繰り寄せ、ごろごろ転がりながら首に巻きつける。

「ぐえ」

締め付けられた。

尻尾で遊ぶな、とばかりに尾の先で頬を叩いてくるので、諦めて枕代わりにするのみとする。

「で、結局お前、なんでここにこっそり近寄ってたの？」

そろそろ幾らか気分も落ち着いてきたので、気になっていたことをジンに尋ねるオレ。

鎧の女が私に気配を悟らせぬとはとかなんだとか言ってたし、なんでそんなことをしたのか少し気になる。

問われたジンは、こちらの顔を見つめたあと、つい、と視線を他所へと向ける。視線の先を追いかけてみると、そこには依然気を失ったままの、冒険者っぽい男達の姿。

「……あ」

彼らのことすっかり忘れてた。

そついやあの人達一向に目を覚まさないけど、大丈夫なんだろうか。どれ、ちよつと様子見てみよう、と上体を起こしたところで、ジンが次に鎧の女が去っていった方角を見る。

うん？彼らと、さっきの女が？

「あの人らとさっきの女が」

どうしたんだ、という意味を込めて、声に出すオレ。

するとジンは、オレの元に視線を戻し、逡巡するように視線を惑わせた後、

猫ばんち。

……。
……。
……。

「…………ケンカしていた？」

顔に当てられたジンの手を除けながら、ジェスチャーの意味を図り、
答えを予想する。

ちなみにこんなでかい猫科の生き物がすると、猫はんちも全然可愛
いものじゃない。

ぺし、というより、のしっ、て感じ。

痛くはないけど、ずしりと重い。

ともあれ。どうやらオレの予想は正解だったようで、頷くかのよう
に首を縦に小さく揺らすと、地面に寝そべるジン。

いやいや待て待て。

「で？ 争つてたからなんだよ」

それがなんでこっそり近付くなんてことに繋がるんだ。

そこらへんの説明を求めるも、どうやらこいつ的には理由の説明は
今でおしまいのようで、以降はなんとも要領を得ない対応ばかり
だった。

くそう、マークスとかいりゃわかるんだけどなあ。

魔物と戦ってるわけでもなかったからとか、人同士のケンカっぽか
ったから様子見しながらだったとか、その辺かなあ、と自分の中で
適当に答えを出しつつ、掛け声一つ上げて立ち上がるオレ。

「よっ、…と」

よし、大丈夫。もう気持ち悪くない。
身体の調子が復調しているのを確認し、軽く伸びをしながら、改めて鎧の女が去っていった方角を見る。

選定戦を棄権しろ　なあ。

参加すると聞いたただけでああまで潰しにかかってくるとか、一体どれだけの気概で選定戦に臨んでいるんだろう。
少なくとも、竜に特に用は無いけれど、依頼なんで頑張つて優勝するつもりです。つてな具合のオレとは比べ物にならない覚悟で挑んでるんだろうな。

あの女がそこまでの覚悟で峡谷に棲む竜と会いたい理由なんてのは、つい最近ガンダス峡谷つてところがあると知った程度の知識しかないオレには、まるで予想がつかない。
が。

だからと言って、あちらの気概に免じて選定戦を棄権する。というわけにもいかないわけで。

こっちだつてたかが依頼、されど依頼だ。他に選定戦受ける人がすごい気合入ってるみたいなんで、なんて理由で棄権するとか、勝ちを譲ろうとか考えるのは間違ってるだろう。

あつちが竜と会わないと世界が滅んでしまっ！とか言つのなら流石に考えるけれど、そこまでのことじゃないと思っし。

「それに、やられっ放しは気に食わないしなあ」

一男子のプライド的に。

あそこまで好き放題殴られて　殴られてないけど、やられて引き下がるのはどうにもすわりが悪くなりそうだ。

次やり合う時が来たら、あっちになんなんだこいつは、と思わせてやる。

そんなことを考えながら、転がってる男たちの下へと向かうオレ。

意識を失ったままの男二人は、ざっと見たところ鎧の女に殴られた胸や腹あたりの鎧がへこんでる以外は目立った外傷は無く、呼吸が穏やかな様子から見てもとりあえず命に別状は無さそうだった。まああの女の攻撃手段が徒手空拳だったので、目に見えないところにダメージがあったり、鎧がへこんでるとこあたりの骨が折れてたり、罅が入ってたりはするのかもしれないけれど、ぱっと見ただけじゃよくわからん。

とりあえず生きてるっぽいことを確認して、二人を順に担いでジンの背中に乗せるオレ。

おもいつきり怪我したところに負担がかかりそうな、布団干しみたいな乗せ方だけでも、移動手段がこれしかないので仕方ない。

「よし。そろそろ帰ろうぜ、ジン」

一声鳴いて起き上がるジン。その背中に飛び乗って、数歩歩いたところで気付く。

「ちなみに、帰り道はゆっくりで頼むな」

オレの為以上に、他に乗ってる二人の為にも。

そう言うと、わかってる、とばかりに耳を揺らして、要望通りゆったりとした速度で空を駆け上って行く。

その様子に安心しながら、オレは乗せた二人が落っこちないよう、手でおさえてジンの背に固定しつつ、ダフの街へと帰って行くのだった。

わりと軽い気持ちで受けた依頼だったけど、今回の依頼も色々ありそうだなあ。

空へと駆け上り、遠く見えるガンダス峡谷の方へと振り返りながら、正直ちょっとしたイベントに参加する程度の気分だった気持ちを変更するオレだった。

第37話 なんちゃって会議

意識不明の男二人を載せてえっちらおっちらと、ダフの街まで戻ったオレとジン。

道中、載せた二人が何度か目を覚ましかけたものの、起きたかな、と声をかけようとするともた気を失うので、無理に起こしても何かできるわけでなし、そのまま放って置くことに。

なるべく怪我をしてる二人に負担がかからないようにとゆっくり戻って来たせいで、街に戻る頃にはすっかり陽が落ちており、街の門も閉じられようとしていたそんな時間に怪我人二人を運んで来たオレたちは、門番の衛兵に軽く警戒されながら事情を問われたものの、散歩中にこの状態の二人を見かけたから連れてきた、とギルドカードの提示と共に素直に事情を話すと割合あっさり納得してくれた。これは話の信憑性云々よりも、オレがBランクの冒険者だつてことが説得力に繋がったと思われる。門番の人がオレのランク見て、うお、つてなつてたし。身分つて馬鹿にできねえ。

あの鎧の女のことも話すべきかなあ、と少し思っただけれど、オレはこの人らと鎧の女が結局何故やりあつたのかはよくわからないままなので、そちらの方は黙っておくことに。

その後は、衛兵の一人に街医者 of 所まで案内してもらい、怪我人二人を運んできたジンを見てビビる老年の街医者に二人を預けてオレのやること終了。

二人を診た医者 of 話によると、とりあえず二人共命に別状は無いらしい。腹部べっこりの方 of 人は内臓痛めてるっぽかったり、胸部べっこりの人 of 方は骨が罅入ってるか折れてるかかしてるっぽいらしい

が、運んでる間ずっと気を失ったままだったのが少し気になった。オレとしては、物凄い重体というわけではなくてほっとした。ここまで運んだ手前、念のため彼らが目を覚ますまでは様子を見ておこうかな、と一度は考えたのだけれど、よくよく考えてみると彼らが目を覚ましたところで、鎧の女の話聞いてオレがどうこうできるわけでもなし、どうこうする気もなし。

更には彼らから謝礼をふんだくってやるうという気も無かったので、あとのことは医者に任せて宿に戻ることにしたオレとジン。

宿に戻った頃にはすっかり月が真上に昇っていて、とっくに宿に戻っていた力ザネやナーディアさんに何かあったのかと心配された。携帯つてめちゃくちや便利だったんだなあ、とふと昔の記憶を思い出したりしながら、とりあえずは、とメシも食わずに待っていた二人と一緒に遅めの晩飯を食べつつ、今日の出来事を話すことに。

「そして今に至る…と。大体こんな感じかな」

晩飯の煮物を突付きながら説明を終えるオレ。

オレの話聞き終えて、テーブルに載せられた飯に手を付けることもなく、話を聞くのに集中していた二人が揃って大きく息を吐く。

「何をしているのかと思っていたら…全く。ギルドに行くだけと聞いていたから、心配したぞ」

「少年だけでなく虎ちゃんもいるんだし、二人の身に何かがあることは無いと思ってたけど…もう。虎ちゃんの散歩に行くなら行くって言うてよね」

「いやごめん、流石にこんな遅くなるとは思わなくて」

そういや散歩に行くこと伝えて無かったなあ、と思い出しつつ、二人共心底心配してくれてた様子だったので、素直に謝るオレ。色々不安にさせられた所為か、多少不機嫌そうな二人だったが、こちらの謝罪を聞いてひとまず落ち着いたのか、再度大きく息を吐いて、遅まきながら晩飯に手をつけ始める。

「カザネちゃんと買い物してる時に、どこかで騒ぎがーって話は聞かなかつたし、いったい二人共何してるのかしらと思ったら…まさか街の外に出てたとはね」

「こちらから探しに行くべきかとも考えていたんだが、待っていて正解だったな。街の外じゃ見つけようが無い」

「オレも探しに行かれる前に戻って来れて良かったよ」

もしオレが戻った時に二人がいなかったら、今度はオレが二人を探しに行くことになってただろうし、そうなってたらそれなりに大きな街だから合流するのにどれだけ時間がかかってたことやらわらん。

「それにしてもアベルの障壁を破れる人間がいるとはな。一撃だけならば“爆心地”並みなんじゃないか？アベルが遭遇した相手は」

「ゲオルグさんか。確かにそれくらいはあつたかもしれないなあ…」

ゲオルグさんのハンマーは実際受けたわけではないが、確かに他に障壁をぶち抜けそうな人となると、知ってる限りでは彼しか思い浮かばない。

そんなオレとカザネの会話を聞いて、食事の手を止めて驚いたよう

に目を開くナーディアさん。

「魔力障壁の強度って術者本人の魔力に比例するらしいけど……一人前の魔法使いで流れ矢を防げる程度って聞いたことあるわよ？」

「らしいな。盾として使うには心許無いから、大抵の魔法使いは避けるか攻撃魔法で迎撃することを選択するとか」

「それがAランクの冒険者がやつと壊せる程の強度って、少年の魔力ってどれだけ……」

改めて呆れた、といった風にこちらを見てくるナーディアさん。

普通の障壁ってそんなもんなのか。

今まで比較対象がジーさんくらいしかいなかったからなあ。ナーディアさんが驚いてる様子を見ても今一ピンと来ない。

…ああでも、マリスやケイムスさんが魔力障壁使ってることを全然見なかったのはそういう理由か。

成る程なあ、と一人納得してるオレを他所に、カザネと会話を続けていたナーディアさんがうん？と首を傾げる。

「規格外の少年の障壁を壊せそうなのが、バリエッタのリーダーくらい……ってことは、その森であった女の人って、つまりAランク並みの実力者ってこと？」

「問題はそこだな。聞く限りじゃ並々ならぬ思いで選定戦に参加しているようだし、選定戦は単純な力比べになるとも限らない。思った以上に難しい依頼になるかもしれないな、今回の依頼は」

「だよな、オレも気持ちを入れなおそうと思ってたこと」

本気で参加する人なんてほとんどいないって聞いてたんだけどなあ。めっちゃくちやガチで参加してるやつが居るじゃねえか。しかも実力者ときた。

なんか、今回の依頼にじわじわと嫌な予感がしてきたオレ。あの女の参戦が唯一の、ほとんどに含まれない例外だといいなあ。

「開催前から参戦予定の人をのしちゃうくらいなものねえ。お陰様で興味本位で参加してみようかしらって気持ちはさっぱり無くなっただけど」

「そんなことを考えてたのか」

「どつちにしろ参加しなかったでしょうけどね。ほんのすこーしだけ、ね」

「そっぴやそんなことも言ってたなあ」

開催地が竜の住処って聞いた時点でほとんどその気は無かったようだけど、今回の件で完全に参加する気が失せたらしいナーディアさん。

もし今日の件が無かったら、或いはナーディアさん達が選定戦に参戦してたのかもしれない、と考えると、ああいう人物が参戦すると早いうちに知れてよかったのかもしれない。

そう考えると今日の出来事も悪いことばかりじゃないのか。面倒なことになったとばかり思っていたけれど、この場合はこの場合で早めに知れて良かったと思ひ直すことにしたオレ。

「というわけで私たちは大人しく応援に回ることにするけど、気をつけてね少年。その女性がそこまで本気で参加するからには、タッ

グを組む人だつて並大抵の人物じゃ無いでしょうし」

「こちらの依頼人がどの程度の力量の持ち主かわからない以上、最悪一人でAランクの冒険者二人を相手取るくらいの気持ちでいた方がいいかもしれないな」

「あー、確かに、それくらいの気持ちでいたほうがいいのか」

Aランクつつーと、身近なところではやはり、ゲオルグさんか。

Aランク並を二人……ゲオルグさんとケイムスさんの二人をまとめて相手にするような感じかな。

少し頭の中で想像してみるオレ。

……。

想像してみるときつついなあ！

実力では負けると思わないが、戦いつてのは単純な戦闘能力だけでカタが付くようなもんじゃないだろう。

相手の方が力量が上と感じたならば、それを覆す為に知恵を振り絞ってくるだろうし、加えてオレは対人の戦闘経験がじーさんくらいしか無い。

そりゃ全力で魔法をぶっぱなせば問答無用でケリをつけることが出来るかもしれないが、そんなことをしたらオレはまず間違い無く人殺しだ。

散々魔物は殺してきておいて何を今更って感じだけど、それでもオレは意思の疎通が出来る相手は極力殺したくない。

となると必然、オレは相手を殺さないよう、加減　　というか、少なくとも魔法の使い方は考えて戦わなければいけないわけで。

そういった諸々の要素を考えると、中々キツいなあ、と思う。今回

の選定戦は。

「いっそ完全な敵ならば割り切れるかもしれないが、この敵対関係は恐らく、選定戦の期間のみの一時的なものだろうし。」

「じーさん相手に使ってたレベルの魔法を使うのは間違い無くアウトだろうから、どの程度まで力を絞れば良いのかわからないのが痛い。王都に居た時に魔法を交えた模擬戦とかやるときゃ良かったと今更ながらに思う。ゲオルグさんとか下手に加減すると魔法無視してぶん殴ってきそうだし。」

「気持ちを入れなおしたつもりだったけど、それも見込みが甘かったかもしれない」

わしわしと乱雑に頭をかくオレに頷くカザネ。

「そうだな。いかにアベルと言えどAランクの冒険者二人を相手に勝つというのはな」

「いや、それもまあ、あるんだけどさ」

「言いよどむオレに不思議そうな顔をするカザネとナーディアさん。」

「他にも何かあるのか？」

「？」

二人の表情を見て、多少言い難さを感じつつ口を開くオレ。

「すげえ嫌味に聞こえるかもしれないんだけど ……どこまで絞ったものかと。魔法とか」

瞬間、二人揃って何言っただこいつ、といった風な表情を浮かべ。

「…………… ああ」

「はあ？」

オレの悩みのタネに、やや考えて、得心したといった感じのカザネと、対照的に更に不思議そうな顔をするナーディアさん
この反応の差は実際にオレの魔法を見てるか見てないかの差なんだろう。特にカザネは、一応オレの全力時の魔法も遠目ながら見ているし。

「成る程な。確かに魔物領の時に使っていたような魔法を使うのは、ちよつとな。…かといって下手に加減するところが危うい、と」

「だよなあ」

「ちよつとちよつと、二人で納得してないですよ。え、何？Aランクの冒険者二人相手に加減？ 手を抜くってこと？」

「手加減するってわけじゃないんだけどさ」

何て言えばいいんだろう。的確な表現が見当たらなくて、天井を見上げて考え込むオレ。

「真剣勝負とはいえ、御前試合などでは剣の刃引きはしておくものだろう。それに近い感じだろうな」

「ああ、そんな感じかも」

頷くオレと、まだわけがわからないといった風なナーディアさん。

「？ それは、刃引きすればいいんじゃないのかしら？」

「……いや。あれは実際に見てみないと理解し難いとは思うが…多
少刃引きしたところで意味がないというか、斬れ過ぎてしまうんだ。
だからと言ってなまぐらの剣に持ち替えると、今度はその剣ごと叩
き折られそうな相手だというのが、な」

「そうなんだよなあ」

「いつそじーさん並みの相手ならばこっちも気にせずやり合えるんだ
けどな。」

相手の力量はまだ未知数だけれど、だからこそゲオルグさん以上、
じーさん以下という一番やり難い相手を想定しておくべきだろう。
力を抑えすぎるとこっちがやられるし、全く抑えないとこっちが嫌
な思いをする。

「元々魔法と言うのはそれほど加減のきくものではないからな。ア
ベルほど魔力が高いと尚更か」

「魔物領で少年がやったことは聞いてたけど……そこまでの？少
年の魔法って」

「伝え聞くヨーゼフの伝説そのままだったな、あれは」

「……ヨーゼフの伝説」

少し考えて、
うわあ……といった顔をするナーディアさん。

「それはちょっと…人相手に使うのは、ね」

「だよなあ」

「だな」

どうしたものかと、揃って考え込むオレたち。
しばらくジンが毛繕いをする音だけが流れた後、やがてカザネが肩を竦めながら口を開く。

「……まあ、まだアベルが組む依頼人の力量もわからない上、相手が本当にそこまでの手合いともわかってはいないんだ。選定戦で競う内容もな。今は心に留めて置くくらいでいいんじゃないか？」

「それしかないわよねえ」

「……そだな」

これもまた、今のうちに知ることが出来てよかったという類いの案件だろう。

特に今できることがあるわけではないけれど、そういう事態を事前に想定できるかできないかってだけでも、結構大きな違いだし。今後はこういう事態も起こり得る、と考えながら依頼を進めることにして、よし、と一息吐いて気持ちを切り替えるオレ。

「そしたら、今のところはそついうこともあるかもしれない、と頭の隅に置いておく感じで。どうするかは依頼人と選定戦の内容次第

か

「問題が問題なだけに手伝えることは少なそうだが、頑張ってくれ。また何かあったら相談くらいは乗れる」

「私も応援くらいはするわよ」

「うん、頼りにしてる」

真摯にこちらを見詰めるカザネと、握り拳を作るナーディアさんに頷く。

色々面倒くさい事態を想定してしまっただが、杖持ってて体調万全なら余裕だった、なんて慢心するよか何倍もいだろう。

そう考えて、これまでの思考を隅に置き、途中だった食事を再開するオレ。

それから後は話題を変えて、ナーディアさんたちの買い物話を聞いたりなんたり。

どこそこの土産物を買ったとか、どこそこの焼き菓子が美味しかったとか。

こちらとは違って平穩無事な、充実した一日だったようで。楽しそうに話す二人の話は聞いてとても良い気分転換になった。

オレやジンの分も土産物を買ってきてくれたというので、部屋に戻った後に返されたバッグの中身を見ると、中には竜を象った置物やら、竜を象ったクッションやらクッキーやら。中には竜ジャーキーなどという、明らかに名前だけ取っ付けたような代物まで

いくら竜の住処が近いからって、何でもあやかればいいってもんじ

やねえよなあ、と思いつつも。

置物の中々の出来のよさに、ジンにジャーキーをやりながらテンションが上がってしまうのを抑え切れなかったオレだった。

第38話 曖昧模糊とした色々

寝不足気味だったこともあり、昼を過ぎても姿を見せないオレの様子を見に来たナーディアさんに起こされて翌日。

寝惚けた頭でナーディアさんの言いなりに動いていたら、意識が覚醒した頃には腹が膨れて身支度も整っていたので、ジンとナーディアさんに見送られながらカザネと一緒にダフの街のギルドへと。

あれで というのもただけど、あれで意外とナーディアさんは世話焼きで、規則正しい生活を好むというか、健全な肉体にはなんとやら、的な考えでもあるのか、可能な限りオレに折り目正しい生活をさせたがる傾向がある。

彼女いわく、そこそこ力をつけてきた冒険者つてのはその時点では金回りとか相当良くなるのだが、そこで調子に乗って身体を鍛えることを止め、遊び倒したりして不摂生な生活を続けた結果、若くして身体を壊し冒険者を引退せざるを得なくなった者が結構いるらしく。

そんな前例を知っていて見過ごすわけにはいかぬとばかりに、前日夜遅くまで依頼で動き回ってたなど、特に理由が無い限りは朝に、理由があっても昼頃には起こされる。

オレは怠けることができる環境ならばどこまでも怠けてしまいそうな人間なので、これは普通にありがたいと考えるべきなのだろう。起こし方もただ乱暴に毛布を引っぺがす、とかじゃなくて色々工夫してくれてるし。うん。

が、同時にダメな人間への道をすごい勢いで突き進んでしまっている気もするオレ。

このままの生活を送っていると、私生活は完全に人におんぶにだっ

こ状態になる気がする。

いやまあ、最終的にオレが目指したいのはそういう生活だから、既に目標を叶えつつある、とも言えるのかもれないけどさ。

しかしよくよく考えてみると、好みの女の子侍らせて世話させて、左団扇でうひゃひゃ、みたいな生活ってぱっと見た感じ非常に素晴らしい生活に思えるけど、端から見ると相当ダメっていうか、腐ったというかなんとというか、マイナスなイメージが持たれやすそうな生活だよな。

別にあくどいことして稼いだ金じゃなかつと、汗水垂らして得た金でそんなことをした人間であつても、実際そんなうつつひゃつひゃしてるヤツを見たら、オレはきつとなんだこのわかりやすい小悪党は、というイメージをまず最初に抱くと思う。

ここがダメ、というところを挙げられるわけじゃないんだけど、むしろ全く問題無い気がするんだけど、それでもこういう感覚を抱いてしまうのは、なんでなんだろう。

なんかこういうのを表す言葉があつた気がするな。偉いやつはその偉さに見合うだけの義務を負わねばならない。みたいな。そんな。

だけど、そういうのって確か貴族とかそういうた立場にある人に対する言葉だつた気もするしなあ。オレの想像してる状況に重ねる言葉としてはちょっと違う気がする。いや、違わないのか？

仮に違わないと考えると、つまりこれは頑張つて自身の目標を達成して頑張り終えた後も、引き続き頑張り続けなきゃいけない。ってことになるのか、もしかして。

それは中々……いや、かなりしんどいな。

できるできない以前に、やる気が持たない気がする。

人が頑張れるのは、ここまで頑張る。という目標というかゴールがあるから頑張れるのであつて、ゴールテープを切つた後も走り続けるなんて言われても、オレは絶対途中で歩くか休む。

お前まだ走れるだろ、とか言われても、そういう問題じゃなく、走りたい、走らなくちゃいけないから走っていたのであつて、走る必

要が感じられなくなったら、まず間違い無く今までのようなペースで走り続けることはできないだろう。

わっはっは。な生活をする為に走って来たのに、その生活が出来るようになっても、わっはっはな生活を我慢してまで走り続けなければいけないとか、なんなんだろう、このよくわからない感じは。

周りなんて気にしなれば問題無い話　というわけでもないしなあ。オレが気にしなくとも、周りがオレを放っておいてくれないというの、ここ数ヶ月の王都での生活で実感した。

少なくとも、アセナル王国に住む人々は今後オレの行動に対してこそ注目してくるだろうし、オレがこれから冒険者としてずっとバリバリ働くと思ってる人が多いだろう。

そんな人々の前で、じゃ、オレもう充分稼いだんであとはただらだら遊んで暮らします。みたいなことを言ったら……………。

……………ううん。都合の良い想像が全然できねえ。

今までわりと適当に考えてやってきたけれど、どうしたもんかな、これは。

どうしたって良くも悪くも目立たずにはいられない、オレとジンというペアについて、先手を打つつもりでさっさと自ら世に名前を広めたはいいけれど、それって実際何の問題の解決にもなっていないんだよな。わかっちゃいたけど。

こそこそ隠れるように生きるよか、問題の表面化がしやすくなって早めの対処もしやすくなるだろう。というだけで、起こり得る問題を未然に防げるような、そんなスマートな手段というわけでは、ない。

ひっそり目立たずなんて冒険者生活はオレとジンじゃ無理だろうし、次善の手としてあの時は最良の手段だったと思えた、今も別に、あの時の選択を後悔してるわけではない　が。

こういう問題もあったのか、と考えさせられることが多くて、多少

陰鬱な気分になってくるオレ。

他人の物語じゃないんだから、アベル・アルベルトは有名になってお金持ちになりました。綺麗な人もいっぱい困ったみたいです。完とはいかないんだ。

目標を達成したあとも、オレの人生は続いていくわけで、目標を達成して手に入れた欲しかったものだけでなく、その過程で手に入れた手に入れてしまったものも、その後のオレにはついてくる。それはおいそれと自分の意思で捨てられるものだけじゃないだろうし、捨てたつもりでも勝手についてきてしまうものもあるだろう。目標としたゴールテープなんて所詮、自分で勝手に定めた目標であって、実際のところは生きていく以上ゴールなんて無いのかもしれない。

オレはゴールしたつもりでも、周りにはそんなゴールテープなぞ見えておらず、走れるんだから走れよ、というよりはまだゴールしてねえんだから立ち止まるなよ、的な感じなのかもしれないなあ。周囲には終わってるように見えないのに、本人は終わった気分で放蕩生活送ってるから、マイナスなイメージがあるのかな。オレの目標とする生活は。

仮にそうだと仮定すると、この問題の解決手段は大雑把に二通り。つまり、周りにオレが走り終わったと認識させるか、周りの認識に沿って走り続けるか。

方法についてはまた色々あるんだろうけど、大別してしまうとこの二択になるのだと思う。

周りに走り終わったと認識させる場合の例としては、じーさんのようなパターンになるんだろうなあ。

世間のしがらみを完全に断ち切って、強制終了。

人々の前から完全に姿を消してしまえば、じーさんに何かを期待しなくとも、やってもらおうにも、当の本人がいないわけで、どうし

ようもない。

じーさんが走っているのか立ち止まっているのか、はたまた歩いて
いるのかもわからないから、其々各々、自分なりに答えを出して、
じーさんの物語を終わらせたことだろう。

この方法は、何もかも面倒くせえ！となった場合は悪くないのかも
しれないけど、基本的に人から距離を取るやり方だから、なるべく
選びたくはないなあ。

頑張つて有名になりました！お金も稼いだ！

色々面倒くさくなったので隠遁します！有名になったの意味ねえ！
稼いだお金も使い道ねえ！

みたいなことになりかねないし。

ならばやっぱり、周りの期待に応えながら走り続けるべき、なんか
な。

稼ぐだけたつぷり稼いだけど、周りの期待もあるから以後も頑張つ
て働きます。みたいな生き方が。

……まあ、稼ぐ過程で色んな人に世話になったりなんだりといった
こともあるだろうし、目標を達成したからと自分の都合だけで進退
を決めるのは勝手な意見だよな、とも思う。

しかしそういう情義は大事だと思うけど、人間……というかオレは、
情義だけで生きていける人間だとも思えないわけで。

何かしらオレにもメリットとか、遣り甲斐みたいなのが欲しいんだ
よな。

自分の為でなく人の為、ひたすら頑張ります。なんて聖人みたいな、
無私の精神なんて持ち合わせられる気がしないオレ。

目標を達成した　　してしまつたあと、どう生きるか。

結果どうするにせよ、その時が来た際に自分で納得できる答えを用
意しておかないといけない、と思う。

自分で納得がいかない生き方なんて、絶対ろくなことにならんだろ

うし。

「 どうしたもんかなあ」

「 アベルにどうにかできないことなんてあるのか？」

思わず呟いたオレに、隣を歩いてきたカザネが声をかけてくる。

完全に自分の思考の中に沈殿していたので、少し驚いてしまうオレ。

「 やたら長い考え事だったな。…いや、まだ解決してないようだから、だった、というのはおかしいか」

間の抜けた顔でカザネを見るオレを他所に、自分の言い回しを反芻して確かめているカザネ。

そんなカザネの様子を見てから周囲に目を向けてみると、思考に没頭していたせいで気付かなかったが、既に宿から結構な距離を歩いていることに気付く。

「 オレそんなに考え込んでた？」

「 何考えてるんだろうな、と気になるくらいにはね」

周りの建物を見る限り、数分程度では無さそうだなあ。

最初はわりとどうでもいいことを考えていた気がするのに、何でこんな深く考え込んでんだオレ。

「 なんかごめん。うっかり考え事に溺れてた」

「 いや、構わないが……何をそこまで考えていたのか聞いても？」

「あー」

言いよどむ。

わざわざ人に話すようなことでもないだろうけど、他に話のネタがあるわけでもなし。まあいいか。

「カザネってさ、以前世界を見て回りたいてって言ったじゃん？」

「？ ああ」

「でさ。世界を見回ったあとのこととか、考えたことある？」

「……ふむ」

顎に手を添えて考え込むカザネ。

「世界を見て回るといっのは、漠然とした指標であって、何をもちて終わりとするか考えていたわけではないからな。世界を見終わったあと、なんてことは正直考えたことが無いな」

確かになあ。

一言で世界を見て回るといっても、その中身はなんとも曖昧なものだ。

世界の何を見るのか、どこまで回るのか、これと決まった終わり方がない。

さっきのオレの例えで言えば、ずらーっと眼の前に無数にあるゴールテープを切りながら走ってるようなもんだらうか。

いつでもゴールだけど、いつまでも続けることもできる。

「だがまあ、仮に私が世界を見終わったと満足する時が来たら……」

その時はやりたいことを新しく探すんじゃないかな。おそろく」

「新しく」

反芻する。

カザネとオレの目標は全く異なるものだから、同じことのように考えるわけにはいかないが。

それでも目標を達成した後には新しい目標を見つける、というのは悪くない考えに思える。

新しい目標が出来れば、既に達成した目標を楽しみつつ、次の目標の為に色々我慢したり頑張ったりもし易くなるだろうし。

「やりたいことをやり終えたあと、何をするか。考えていたのはそういうことかい？」

「まあ、そんな感じ」

頷く。

そんなオレの様子を見て、呆れたように肩を竦めるカザネ。

「何を考えているのかと思えば。それは海も見えてないのに船を用意するようなものじゃないのか」

「いやでもさあ、その時になつてうだうだ思い悩むより、考えられることは早いうちに考えておいた方がよくな？」

確かにまだ何も成し遂げていない今のオレが考えたところで、取らぬ狸の皮算用ってやつではあるけれど。

先のことに対して行き当たりばったりでいくよりは、こうなったらこうしよう、とある程度指針を立てておいた方が良く思うん

だけどな。

「それもそうだが、あまり深く考えるようなことでもあるまい」

「そりゃわかってるけどさ」

「こうと決めてかかっていると痛い目を見るというのは、いつぞやのフーカスで充分思い知ったと思っていたんだがな」

「ぐ」

痛いところを突かれてうめくオレ。

フーカスというのは、アセナル王国を中心に流行っている、ポーカーのようなカードゲームで、揃えた図柄の強さを競うという、シンプルなゲームである。

基本的に賭け事として行われていて、以前バリエッタの面々が遊んでいたのに興味を引かれて一緒にやったことがあるのだが。

まあカモられたカモられた。

ギャンブルをするのがとても久しぶりということもあって、夢中になって遊んでいたら、気付いたら質の良い剣一本買えるくらいの金額をすっぱ抜かれていた。

そろそろ運が回ってくる、きつと来る。絶対来る。と泣きの何十回戦目かくらいで、いつまで経っても帰って来ないオレの様子を見に来たカザネの、冷やかな視線は今でも忘れられない。
めちゃくちやぞくぞくした。

「先のことを考えるのはいいが、その所為で今の判断を見誤っては元も子もない。重きを置くべきところを間違えないでくれよ」

「勿論。わかってるぞ」

先のことを考えすぎて、今抱えてる問題を失敗するとかダメ過ぎる。カザネも念のためといった程度の忠告だったのだろう。オレの様子を見て、一つ頷くと足を止める。ギルドに着いた。

さて、と頭を切り替えて、カザネと共にギルドの中へと入るオレ。
一応、今日が依頼人との待ち合わせの日になるわけだけど、果たして到着してるのかな、依頼人は。

第39話 ギャップ萎え

依頼人の方が予定通り今日着いたとしても、依頼人がギルドに顔を出したのと同じタイミングでオレたちがギルドに到着する、なんてことはそう有り得ることじゃないだろうし、今日が顔合わせになる可能性よりも、入れ違いになる可能性の方が高いだろうなあ、と。実のところオレは、思考を切り替えたとか言っておきながら、そんなことを考えていたのだけだ。

「あ、ちょうどよかった。あちらの、今いらっしやった方が依頼を受けた冒険者の方になります」

ギルドの建物の中に入るや否や、そんな声がオレの耳に届く。屋内に入った途端のことだったので、驚いて思わず足を止めてしまっただけだ。

念のため周囲を確認してみるも、今ギルドの中に入った人物はオレたち以外にはおらず、声が聞こえた方に目を向けて見れば、そこには昨日オレが手続きを交わしたギルドの職員の姿。

職員の女性が手で指し示しているのがオレであることを確認して、やっぱオレか、と理解し、続いて職員の女性が話している人物に目を向ける。

ついさっきこの街に辿り着いた、と言わんばかりの、よれよれの外套とズボンに、つばの欠けた帽子。背に負った背囊は許容量以上のものを詰め込んでいるのか、ぱんぱんに膨れ上がっており、収まりきらなかった荷物が背囊の隙間からはみ出ている。

身体付きは細く、後ろから見ると膨れ上がった背囊に隠れて胸が見えない。が、肩幅や尻の形などを見るに、どうやら男のようだった。

そしてもう一人。

こちらにも実用性一辺倒といった感じの洒落つ気の無い、獣皮を中心とした丈夫そうな衣服に身を包み、肩からポーチを提げ、頭にはヘツドギアのような皮の帽子を被っている。

背丈は背囊の男の胸のあたりに届くかどうかといったところで、この世界は外見と年齢が比例しない人も多いので断言は出来ないが、ぱっと見では年端もいかない少女に見える。

こちらの視線に気付いたのか、職員の声に促されてなのかはわからないが、少女の方がこちらへと振り返り、オレと目が合う。

「ッ。……………」

「……………」

瞬間、だっ、と音が聞こえそうなほどの勢いで、背囊の人物の陰に隠れてしまう少女。

何もしてないのにそこまで警戒した風にされると、こちらに非が無いとわかっていても何か悪いことしたかな、って考えちゃうなあ。

「……………おいおい、何をされたわけでもあるまいに。…いやあ、悪いね。こいつ、すっげえ人見知りなもんでさ。気を悪くしないでくれ」

少女の頭に手を置きながら、背囊の男が振り返る。

気さくそうな笑みを浮かべて、旧知の間柄のように親しげに、彼は声をかけてきた。

「はじめまして。 あんたらが依頼を受けてくれた冒険者か。僕の名前はアルフレート。こっちは妹のニムニ。短い間だけど、よろし

くな」

……正直、会っても何のメリットも無さそうなドラゴンに、高い金を払って依頼までして会おうとする、酔狂な依頼の依頼人だからして、今回の依頼人は相当アクの強い人だったりするんじゃないかなあ、と心のどこかで考えて、身構えていたオレにとつて。

眼の前の依頼人は、オレの予想を大幅に越えて、普通というかなんというか、少し肩透かしを食わされた気分になるほど、まともそうな依頼人だった。

アルフレートさん　アル、と呼ぶよう言われた今回の依頼人である彼は、その資格好からわかるとおり、今さっきダフの街に着いたばかりらしく。

ここに来るまでの旅の疲れもあるだろうということと、その日は軽くその場での自己紹介だけにして、選定戦の打ち合わせなど、依頼の細かい話については翌日に行うことに。

そんなわけで、この日は顔合わせのみで終わって、翌日。

待ち合わせの場所である、ギルド近くの酒場にて、少し早めにやってきたオレとジン、そしてカザネとナーディアさんは、ちびちびと紅茶やコーヒーを啜りながら、アルさんたちがくるのをのんびり待っていた。

「宿で待っていてくれてもよかったのに」

「まあ、話に口出しするつもりも無いし、待ってても良かったんでしょうけどね。でも、少しの間とは言え一緒に旅をすることになるんだし、顔合わせは早いうちにした方が良いと思って」

「二人が行くのに私一人だけ行かない、というのもなんだしな」

近所のおねーさん、といった感じの普段着姿のナーディアさんと、外套のフードを目深にかぶったカザネがそれぞれの理由を語る。

そんな感じの理由らしい。ジンもジンで当たり前のようについてきたが、こいつの場合は顔合わせをしようとかって理由じゃなくて、ただ単に一人で待っててもつまらないから、とかそんな理由だろうか。

ジン同伴で屋内に入るのも憚られたので、テラス席で行き交う人の流れなどを眺めつつ、のんびリアルさんらを待つオレら。

こういった地方の街では、元々人目に触れる機会の少ない賢獣であるジンという存在は、ダフの街の人々の関心を非常に良く惹く対象であるらしく。

こちらが街の人々を観察する以上に、あちらがこちらを観察する視線というのを強く感じる。

なんじゃありゃあ、とあからさまに驚きを露わにする人もいれば、気にしていない風を装いつつも気にせずにはいられない、といったようちらちらと見てくる人もいて、人によって全く反応が違って少し面白い。

基本的に大概の人々は、こちらに興味を抱きつつも後ろ髪を引かれるようにしてそのまま通りを歩き去っていくのだけれど、

好奇心旺盛な子供達の一部は、なんだろう。恐れを知らないというか遠慮を知らないというのか、きらきらと目を輝かせて、欄干を隔てたところからオレの椅子の後ろで丸くなっているジンの姿を見つ

めている。

オレやカザネ、ナーディアさんのことを一切気にする様子も無く、わあ、とか、すげー、とか声をあげてはしゃぐ姿は中々に微笑ましいもので、カザネやナーディアさんなんかはそんな子供達の姿を目を細めて見守っていたりするのだけれど。

オレとしてはこう、動物園の見世物の一部にでもなつたかのようにも感じてしまい、なんとも複雑な気分になる。

当の本人であるジンは、猫族の人らで耐性でも出来ているのか、まるで気にしていないかのように目を瞑っていて、子供達に構ってあげる気は無さそうなものの、邪険にするつもりも無さそうな辺り、本当によくできた虎だよなあ、こいつ。

人の視線なんて気にならないのか、こつちに気を遣ってくれてるのか、それともグルにでも人社会での心得みたいなのを教わってきたのかどうかはわからないが、森を出てからこつち、ジンが対人関係で問題を起こしたことは一度も無い。

まあ、元々気性が激しいわけでもないし、敵意を向けられない限りはそんなもんなのかもしれないが、確かに文字通り、賢い獣だよなとは森を出てから改めて思った。

いくばくかの感謝の念を抱きながらジンを見て、次いで子供達の方に視線を移すと、今も新たに群れの中に加わった、帽子を被った女の子がジンに向けて猫じゃらしを突き出しているのが見えた。

アルさんたちが来るまでに、この子供の群れはどこまで膨れ上がるのかなあ。

特に内密な話をするわけじゃないと思うけど、あんまり騒がしくなるようなら場所移した方がいいのかな。これ。

「……………ん？」

そのまま子供達から目を切って、コーヒーの入ったカップを手にと

り、口につけようとしたところで、気付く。
なんか今の子供、見覚えがあるような気が。

「……………」

再び子供達に目を向けるオレ。

「…………ツ。…………ッ」

欄干の段差から、めいっばい背を伸ばして、手を伸ばして、ジンの興味を引こうと猫じゃらしを振りたくる、ヘッドギアのような帽子を被った女の子。

なんか見覚えがあるというか、昨日見覚えたばかりの子供だった。

「なあ、アベル」

どうやらカザネも気付いたらしい。

オレと同じく、帽子の女の子に目を向けている。

オレとカザネが視線を注ぐ女の子、今回の依頼人の妹さんである、ニムニと紹介されたその子は、こちらに気付いていないのか、気付いている上でのことなのかはわからないが、オレたちのことを見向きもせずにジンにアピールを続けている。

「ニムニちゃん　　だなあ」

「……………だな」

何と言っているものかわからず、ニムニちゃんを眺めながら事実の確認だけを行うオレら。

「ニムニちゃんって、昨日言ってた依頼人の妹さん？」

「うん。そう……なん、だけど……」

何でこの子一人だけなんだろう。

尋ねてくるナーディアさんに頷きながら、彼女の兄、アルさんの姿を探すオレ。

はぐれたりでもしたのかなあ。なんかもうめちゃくちゃ一生懸命ジンの注意を惹こうと頑張っている彼女に、事情を聞いた方がいいのか、これは。

ニムニちゃんの様子がオレから見てもかなり微笑ましい姿だったということもあり、彼女の邪魔をするのはなんとなく気が引けて、そこらへんにいたりしないかな、と一先ずはとばかりに通りを見渡している。

「にiiiiiiiiむうにiiiiiiiiiiiiiiii!!」

遠くから、そんな声が聞こえてきた。

声の元を辿ると、通りの端から、すさまじい勢いで走ってくる人の姿。

その人　　というか、そのアルフレートさんは、こちらへと向けて一直線に駆け寄ってくると、相変わらずジンに夢中なニムニちゃんに後ろから飛び掛った。否、抱きついた。

昨日と同じ、つばの欠けた帽子に、外套の代わりかどうかはわからないが、何でか知らんが白衣姿の、アルさん。

その奇行は、オレたちどころかジンを眺めていた子供たちの注目も

纏めて搔っ攫い、周囲全ての人間がアルさんとニムニちゃんに注目する中で、彼はニムニちゃんを抱き締めたまま、後ろ頭に頬を擦りつけ。

「ニムニいいい！心配したぞ、ニムニ！知らない街で勝手にほつき歩いちゃダメだろう。こわい人たちに絡まれたりしてるんじゃないかってもう、心配して街中駆けずり回っちゃったじゃないか！お前みたいな超可愛い子が一人で街中うろついたりなんかしたら、世の中の男なんて涎垂らして襲い掛かってきちゃうんだから、おれの傍を離れないようにいつも言ってるだろうに！ああもう、何かある前に見つかって本当に良かった。無事でよかったよおお。ニムニー！」

……………。

色々と思うことはあつたけど、突発的に嘔き出てしまいそうなその全てを胸の内に抑え込む。

「…………アル、苦しい」

「おっと、悪い悪い。で、こんなところで何やってたんだニムニ。今日は昨日の冒険者の人と会って言っただろ。あちらさんも待ってるだろうし、道草食ってるわけにはいかないだって」

「…………とら」

「とらあ？　こんな街中に虎なんているわけないだろ。こんなとこにいたらそりゃもうとんでもないことに　　虎あ！？」

今までニムニちゃんにばかり気が入って、ジン、というか周囲のこ

とに気が回っていないかつたらしい。
丸くなって寝そべっているジンの姿に気付き、とんでもないことになるアルさん。

「うおお、でけえ！虎なのに虎よりでけえ！　なんでこんなところに虎がいんの！？大丈夫なのかこれ、……あ、あれか！もしかして賢獣かこの虎！　うわこんなでけえ賢獣初めて見た！白い虎で賢獣つつたら雷虎か流虎か王天虎か！　王天虎は流石にないだろうけど、どっちにしてもすげえ！まさかこんなところで見れるとは！」

ジンの姿に興奮した様子のアルさん。言葉に籠る熱量が尋常じゃない。

ニムニちゃんを抱き抱えたまま、しばしうわあうわあ、と熱い眼差しをジンに送っていたアルさんだったが、やがてニムニちゃんから手を離すと、欄干に手をかけ、足をかける。

「見るよニムニあの姿を。強大な存在ってのは見ただけでそれとわかるもんなんだな！ただ丸まっているだけだというのに、この威風！尊厳！」

ジンを見詰めたまま、欄干を飛び越えジンに近付いていくアルさん。間違い無く彼の視界の中にオレの姿は入っているだろうに、まるでこちらに気付く様子が無い。

「かあー！たまらん！このさらっさらの毛皮が熟練の剣士の刃も通さない、鉄壁の鎧なのか……！間近で見ても全く信じられねえ。こんな柔らかかそうなのに！抱きついたら絶対気持ちいいだろ、これ！」

確かに気持ちいいなあ。ジンの毛皮。

彼の言葉に心中で同意しつつ、いい加減そろそろ声をかけようかと

迷っている合間に、アルさんは更にジンへと、歩みを進めて。

「今まで見てきた魔物の毛皮なんかとは比べ物にならないな、これは。一体どんな手触りなんだ」

その身体に触れようと、アルさんがジンの背に向け手を伸ばし、

「ろ、っ、ぬぐっ」

まさに白い体毛に触れようとしたところで、ジンの尻尾がするりと伸びて先端をアルさんの額に当てがい、至近まで来ていた彼の身体を、ジンに触れられない位置まで押し戻す。

「……ぬぐぐぐ……！」

額に押し当てられた尻尾を潜り抜け、なんとかジンの身体に触れようとすするアルさん。

が、相当巧く重心を移動させているのか、ぴたりと額に押し当てられた尻尾はそこから離れることはなく、力の方もジンの尻尾の方が圧倒的に上なようで、歯を食い縛って懸命に近付こうとするアルさんの身体を、丸まったまままるで力んだ様子も無く押さえつけるジン。

そのまま数十秒ほど両者の攻防戦が続いたところで、ぼふっ、という音がジンの方から聞こえる。

「あああああ！ずるいぞニムニ！」

いつのまにか欄干を超えてこちら側まで来ていたニムニちゃんが、ジンの横腹に抱きついていた。

心地良さそうに目を閉じて、ジンの身体に頬を擦りつけるニムニちやんと、その様子に心底うらやましげな声をあげる、アルさん。

「ちよ、なんでニムニは良くて僕はダメなの！？ちよつとだけ、ちよつと触るだけでいいんだって本当に！何も変なことしないから！…あ、そうだ！肉、肉とかどう？ちよつと触らせてくれたら、御礼に美味しいお肉ご馳走するから！

くそおおおお！？　なあニムニ、とても気持ち良さそうだけど、抱き心地ってどんな感じ！？」

「……………気持ちいい」

「聞いたところで何にもわかんねえー！」

ほんの少しいじるだけで、相当危険な発言に聞こえてしまいそうなことを言うアルさん。

この混沌とした状況に、カザネはフードを更に深く被って完全に守りを固めており、ナーディアさんの方は、色々乗り越したのか、面白そうな様子で彼らを眺めている。

そんな二人の姿を見て、状況を打開しうる存在が自分しかいないことを確認したオレは、これ以上アルさんへの印象が残念なことになる前に、彼へと向けて、声をかけるのだった。

第40話 鎧の女対策

明けて翌日。

「いやあ、でもまさかアベルくんが賢獣使いだったとはね。どんな人が僕の依頼を受けたのか、ここに来るまで不安がないわけじゃなかったんだけど、安心したよ。あれほどの賢獣を従えているんだ。それを従えるアベルくんの力量も推して知るべしっってもんだろっね、これは」

ダフの街を出て数時間、といったところで御者台に腰掛け話し合っているオレとアルさん。

結局昨日は、アルさんを落ち着かせた後も、先陣を切って抱きついたニムニちゃんに続けとばかりに、ジンを眺めていた子供達がジんに飛びつき始め。

子供なんて一口で飲み込んでしまいそうな虎に群がる子供たちを見た、彼らの両親が卒倒、悲鳴をあげるなどして騒ぎが拡大。

最終的に街の衛兵が出動するに至り、彼らに事情を説明してる内に陽が暮れた。

最早まともな会話が出来る雰囲気ではなかったため、その日は解散。選定戦の日まで日数に余裕があるわけでもないことから、細かい打ち合わせについては開催地に向かう途上で行うことになった。

「求められるものがどんなものになるのか、確定したわけではないのでなんとも言えませんけど……まあ、最善を尽くすつもりです」

そんなわけで現在、女性陣は幌の中で、男性陣は御者台にて、互い

の距離を締め合っているオレたち。

アルさんとニムニちゃんは大福の街まで乗り合い馬車や商隊に随伴したりといった方法でやってきたらしく、自前の移動手段は持っていないとのことなので、オレたちの馬車と一緒に乗ることに。やっぱ大きめの馬車にしといて良かった。

「そんな気を張らなくても大丈夫だよ。…ま、僕の募集した内容が内容だし。気負ってしまうのもわかるけどな。けれどあれは念には念を入れてやってやつで、近年じゃ選定戦にBランク以上の実力者が参加することなんて滅多に無いからまあ、気を抜かず真面目に取り組んでくれれば、僕達が大本命なのは間違い無いと思うよ」

雑談混じりに選定戦について話すアルさんは、昨日の騒動など無かったかの如く朗らかな様子。

こちらとしても突っ込んでみても藪蛇な気がしたので、全会一致で昨日のことは流すことに。

これから一緒に仕事をする相手なんだし、多少程度の気になることは受け流すのが大人の対処ってもんだらう。

「そういえばその、オレたちが本命って件なんですけどね」

最近じゃ近くの若い冒険者の腕試し、肝試し的な扱いになっているらしい、と更に言葉を連ねるアルさんに、割ってはいるように口を挿むオレ。

うん？と首を傾げる彼へと、一昨日出会った鎧の女のことを告げる。

「今年はどうやら、その滅多に無いことが起きてるみたいですよ」

「……………」

一昨日の、鎧の女との顛末を簡潔にアルさんへと伝える。

あの日オレが運んだ二人の冒険者は、それぞれ単独でCランクの冒険者だった。

そんな二人を不意打ち気味とは言え容易くノしてしまつような人物なのだから、少なくとも鎧の女はBランク以上の冒険者並みの力を持つている、と考えた方が良いだろう。

選定戦への意気込みを見るに相手の方も適当なそこらの馬の骨を選ぶとは思えないし、少なくとも一組、チームでBとまではわからないが、個人でBランク相当の人物が、選定戦に参加するようだ、ということをお話すと。

「……………うっそ」

と一言呟いたまま、固まつてしまつアルフレートさん。

フリーズがあまりに長いので、一旦アルさんから目を逸らし、馬車の前方へと視線を戻す。

ダフの街を出てからここまで、それなりに魔物とのエンカウントはあったものの、今のところ目視できる範囲に魔物の気配は無し。

耳の方も背後の幌の中から聞こえる、女性陣の声以外何も聞こえてこないのを確認してから、再びアルさんへと目を向ける。

そうして見てみると、顎に手を添えて、額に一筋の汗を流しなげやら考え込んでいる様子のアルさん。

その真剣な様子に、しばらく放つておいた方がいいのかな、と考え始めたあたりでようやく、彼が口を開く。

「……………アベルくん」

「はい」

「知ってるかもしれないけど、僕、アベルくんと同じ冒険者なんだ」

「……はい」

「チームにこそ所属してはいないけど、これでも個人でCランク。

世間一般の認識で言うと一人前の冒険者ってやつなんだけど」

「……。」

何が言いたいんだろう。とアルさんの意図を図りかねて、眉根を寄せて彼を見てしまうオレ。

「……なんだけどさあ、実は僕、冒険者の方は副業っていうか、路銀稼ぎの為にやってるようなもんでね？」

「はあ」

「本業は学者　　というと学者の人らに失礼かな？　えーと、色々調べたり探したりしてる人なんだ」

「……。。　つまり？」

だから白衣なんて着てるんだろうか、と学者という言葉にどこか納得しつつ。

じわじわと、外堀を埋めてくような回りくどい口調のアルさんに、ちゃっっちゃと自分で結論を言うよう促すオレ。

そんなオレの言葉に、一瞬躊躇うように視線を泳がせてから、意を決したように真面目くさった顔で、彼は言う。

「僕に戦闘面の期待をするな」

「……………」

言葉も無いオレ。

「その厄介そうな組の相手は任せた。他にも手強そうな相手がいたらお願い」

「……………」

「その他にも荒事は基本全て君に任せる。僕のことばまるで……そう、まるで超絶可愛くて儂くか弱い、そんな妹を庇護するかのようになり抜き、選定戦を勝ち抜いてくれ」

「……………」

「よろしく頼んだよ、おにいちゃん」

「うるせえシスコン」

なんだそのタッグどころか一人と一人ですらない、共闘関係は。守ることまで考えろとか、むしろ足かせになってんじゃないかねえか。

「おいおい、結論を急がせたのはそっちだろうに、なんだいその言い草は。僕はシスコンじゃないよ」

大きく肩を竦めて、やれやれと言わんばかりのアルさん。
あれ、なんでオレが窘められる感じになってんの？

「いやいや、そっちこそなんですかその他力本願。Ｃランクになれ

るくらいの実力があるんだったら、自分の身くらいは自分で守って下さいよ。それと絶対シスコンでしょ、アルさん」

「そう言うと思ったから順を追って説明してたんだよ。全く、いいかい、今度はちゃんと聞いてくれよ？ さっきの続きだけど、僕は冒険者だが、荒事が得意ってわけじゃないんだ。むしろ得意不得意で言えば後者に分類されるだろう。真っ向からやり合えば格下の冒険者にすら負ける。それくらい腕っぷしには自信が無い」

生徒に講義でもするかのような口調で語るアルさん。

ここまで堂々と自身の弱さを語られると、それじゃあ仕方ないな、と思ってしまうそうなのが困る。

「そして僕はニムニを妹として非常に大事に思ってるだけで、別に恋愛感情を持ってるわけじゃあない」

だからシスコンじゃない、と続けて言い張る、彼。

流したかと思っただけど……拘るなあ。

「……いやまあ、そこまで言うなら、前言撤回しますけどね。でもそれならそれで、よくここまで上がってこれましたね。一応試験みたいなものもあるっていうのに」

心底納得したわけではなかったけれど、頑としてシスコンであることとを否定するアルさんの言を、とりあえず受け入れて、目先の疑問に話題を集約させるオレ。

このまま言い続けると、話の主題がそっちに向かってしまいそうだ。

荒事に自信が無いというのなら、一体彼はどうやってCランクにまで上がってきたのか、そんなオレの疑問に、彼はなんでそんなこと

を聞くのかわからない、といったような不思議そうな顔で答える。

「いやいや、ハウンドドッグの群れやらレッドベアーやら、あんなの縄張りに毒入りの肉でも置いとけば勝手に死ぬじゃん」

「……………」

「そういう罠仕掛けてる間に襲われたら逃げるしかないし、もしかしたら逃げ切れなくて僕がやつらのエサになっちゃうかもしれないけどさ。討伐系の依頼は大体事前にどういう魔物を相手にするかはわかってるんだし、そいつらに合わせてちゃんと準備すれば誰にでも、どうとでも出来るもんだよ。Ｃランクくらいの依頼なら」

「……………あー」

言われてみれば確かに、何も必ず真っ向から殴り合って倒さなくちゃいけない、なんて決まりはないわけだし、そういう倒し方もアリなのか。

そのやり方なら、アルさんの言う通り自分自身が強くなくても魔物の討伐は可能だろう。

……………とは言え、大したことじゃない、みたいな言い方でめっちゃくちゃおっかないこと平然と言うな、この人。

ちよつとでも相手の魔物が予定外の動きしたら、即絶体絶命じゃねえか。

「とまあ、そんな感じだね。足りない部分はこつちと小細工で補ってきたんだけど、まさか選定戦に参加する人たちを毒殺するわけにもいかないし、そんなことをしてる時間も無いだろうし」

「……………まあ、そうですね」

こっち、と自分の頭を指差しながらのアルさんに、おざなりに頷きながら同意する。
まるで時間があつたら毒殺もやむなし、みたいな言い方なのが恐ろしい。
価値観の違いを感じるなあ。

「同級のまともな冒険者を一発で倒しちゃうような人、僕なんて指先一つで事足りるだろうし。だからもし選定戦の最中にその鎧の女性と戦わなきゃいけないような事になった場合、僕、ほとんど役に立たないと思うから、その時は頼んだぜ、アベルくん。　　ってわけだよ」

「事情はわかりました」

納得したかはともかくとして。

くそう、なんか情報が開示される度に条件が悪くなつてくくなあ、今回の依頼。

ここまで念を押しつつてことは、本当に戦闘面に関しては期待しない方がいいんだろう。

まあ、見栄を張られて土壇場で明かされるよりは断然良いし、その点に関しては潔く自身の短所を明かすアルさんには好感が持てる。けれど、選定戦の勝敗にアルさんに対する好感度は関係無いわけで。

「一度受けた依頼ですし、出来る限り頑張りますけど、あんまり過度な期待はしないで下さいよ。こっちは単純な戦闘に関してはそこそこ自信がありますが、魔物退治一辺倒で誰かを守りながらの対人戦なんてやったこと無いんで、出し抜かれることも有り得るでしょうし」

一応そう断りを入れておく。

ただ戦うのと誰かを守りながら戦うのでは、わけが違つたろうし、
そうでなくとも選定戦の内容次第ではオレだけ強くても意味が無い、
ということもあるだろう。

荒事全般任されても、どうしようもないこともある。という旨を告
げると、洪そうに顔を顰めるアルさん。

「……だよねえ。ああああ、くっそ、この依頼受けてくれた人がい
ると聞いた時は、これで勝つたと思つただけだなあ…！」

ふざけたことをのたまいながらも、頼んだことの難しさは彼も自覚
していたようで。

悔しそうにうめきながら、背もたれに背中を預けて空を見上げるア
ルさん。

「なんつで今年に限つてそんな人が参加するかなー！ ……ううん。
その鎧の人って、交渉して今年は諦めてもらうとか出来ないかな」

「難しいかと。むしろオレ、選定戦諦めろつて交渉持ちかけられま
したし」

拳による交渉だったけど。

「駄目か。買収なんかも難しいかな」

「そういうのに応じそうな感じじゃ無かったですね」

「駄目か。なら選定戦が始まる前に闇討ちするってのは？」

「誰がするんですか」

「アベルくん」

「……暗殺は得意じゃないので」

「駄目か。なら何か弱みを握って、それをネタに交渉の席に着かせる」

「誰がするんですか」

「アベルくん」

「……情報収集はそんな得意じゃないので」

「駄目か。なら色仕掛けて筆絡」

「誰が」

「アベルくん」

「やかましい。……そういうのも得意じゃないので」

「女性二人も侍らせてるくせに」

「それとこれとは別問題でしょう。アルさんが口説くってのはどうですか？」

「なんで僕がニムニ以外の女性を口説かなきゃいけないの？」

「ちよいちよいちよい」

「うん？」

「妹に恋愛感情無かったんじゃないんですか」

「無いよ？」

「なのに妹以外口説きたくないとか、なんですかそれ」

「ああ、別にニムニを口説きたい、とかじゃなくてね？ あれだけ可愛い異性が妹として身近にいと、そこらの女性なんて口説く気にもならないっていうか」

「……はあ」

「その人がニムニ以上に可愛い女性なら口説く気にもなるかもしれないけど、そんなことは有り得ないだろうし。そんな気の無い状態で口説いても、ねえ？」

「オレやるよう言われたんですけど、それ」

「ニムニ以外も大丈夫なアベルくんなら、口説いてるうちにその気になるかもしれないじゃん。僕なんていくら女性とそういう雰囲気になっても、勃つだけで全然その気にならないし」

「診てもらった方がいいですよそれ」

「直接見られても何とも思わないんだよなあ」

「……やっぱりシスコンなんじゃないですかね、アルさん」

「いやいやそんなことないって」

気付けば途方も無い方向に脱線していた、オレたちの話題は。元の話題に戻したところでろくな対策を練れるわけでもないこともあって、たまに真面目な話題に戻しても、互いの情報を交換し合う程度で、すぐにまたくだらない話題に道を外れていった。

おかげで日が暮れる頃には変な気遣いも無くなり、言いたいこと言える程度には互いの距離間も縮まったが、鎧の女については、何かあったらオレ頑張れのまま。アルさんはシスコンを認めないまま。アルさんと打ち合わせの皮を被った雑談ばかりしていた所為で、ニムニちゃんには相変わらず人見知りされたままの状態。

オレたちは選定戦の開催地、ガンダス峡谷に住まう竜たちからもっとも近い場所にある村。

ガルタ村へと、辿り着いたのだった。

第41話 申し込み

「 選定戦の開催地とはいえ……ぱつと見、そこらの村と変わらないように見えますね。ガルタ村」

「そうねえ。聞いてた話からして、竜が見れる観光地！みたいなイメージがあっただけれど……普通の村ね。たまに竜だか魔物だかの鳴き声が聞こえる以外は」

「観光客らしき人の姿もちらほら見えるがな。…だがまあ、選定戦や竜を、村の売り物として売り出しているわけではないのだろうな」

村についたオレたちが最初に抱いた村への心象というのは、大体そんな感じだった。

それというのも、これからこの村主催で選定戦が始まるというのに、そういった催し物が始まる直前の騒々しさというのはまるでなく、むしろ本当に開催されるのか不安になってくるくらい、のどかな村の雰囲気。

着いて早々村の人に馬車を預けた折、オレたちが選定戦の参加者だということも告げて、村の人は皆、へえ、やら、そうなんだ、などといった淡泊な反応ばかりで。

頑張っつね、などとおざなりに声はかけてくれるものの、村を観光地として盛り立てて行こうといった風には思えないリアクションばかりだった。

とは言えオレたちが嫌がられて、というわけでもないみたいで、賢獣連れての宿なら何処がいい、とか選定戦の手続きはどこでやればいいのかなどの情報は丁寧に教えてくれるものの、なんだろう…

そういつた諸々の印象を合わせて、普通の村に来た、という印象を抱いたオレら。

一般的な村に比べれば宿や酒場などといった、外向けの施設は多いのだけど、もっとこう、おいでませガルタ村！君もガルタ村で竜と握手！くらいのノリがあってもおかしくないと思っただけに、竜をプッシュする様子がまるで見えない村の姿には、少し違和感すら覚える。

「村の人々にとって竜は信仰の対象。崇め奉る神聖な存在であって、見世物や売り物にするようなものじゃないんだろうね。勝手に来る分には村の収入にもなるし構わないけど、こっちから人を集めるようなことはしない、ってところかな」

オレたち同様、実際に村に来るのはこれが初めて、というアルさんが村を見回しながらそう語る。

ざっと見た感じ、ダフの街ではやたらと売ってた、竜関連のグッズなんかも全然売ってないしな。

アルさんの言う通り、この村の人々にとっては竜を売り物にするなんてとんでもない。といった感じなのかもしれない。

「百年以上続いている行事だっていうのに、今まで一度も聞いたこと無かったのが不思議だったけど、少し納得したわ」

「広めようとしていないなら、広まらないのも当然か」

「選定戦の成り立ちから考えるに、彼らが選定戦を盛り上げるのに意欲的になるというのも、不自然な話だしね」

「成り立ち……、ああ」

アルさんの発言に、少し考えてから納得するオレ。

元々竜にわんさか会いに来る人の数を減らそうと始まったのが選定戦なのだから、ガルタ村の人々にとっては信奉している竜に手間をかけさせる選定戦の参加者なんて、歓迎すべき存在じゃないのかもしれない。

「言われてみれば確かにねえ……むしろ敵視されてもおかしくないわね、私たち」

「そこらへんはまあ、色々な事情が絡まって今の状況に落ち着いているんだろうね。売りにしていないとはいえ、村の収入源であることは違いないだろうし。昔は国のお偉いさんなんかも選定戦をやりに来てたって言うし」

「百年以上続いてる行事だもんなあ……」

いまや村を経営する為の重要な歯車になってるっぽいしな。選定戦の参加者やら竜見物の観光者やら。

竜に手間かけさせるやつらが来るのは嫌だけど、来なくなっても困ってしまう。来るなと言っても来るやつは来るのだろうし、一介の村程度じゃ来るなと言えない連中もたまに来る。

そういった複雑な事情や感情が年月を重ねて熟成された結果が、今の消極的歓迎というか、そんな感じの村人たちの反応なのかもしれない。そんな風に考えていると、オレと同じように何か得心したような表情でナーディアさんが、うんうんと頷く。

「……つまり、お土産はダフの街で買って置いて正解だったということね」

「……そうだな」

「突っ込みを諦めんなよ、カザネ」

腰に手をあてそう言うナーディアさんに、何か言いよどむように口を動かしてから、溜息交じりに同意するカザネ。

いやまあ、実際問題となるのはそれくらいかもしれないけどさあ。

「王都のママにお土産買ってくるって言っちゃったのよね。あそこで買わなかったら買う機会が無かったかもしれないと考えると、我ながら素晴らしい判断だったと思うわ」

「別に選定戦が終わってから、帰りに寄って買っても良かったんじゃないかね？」

「何言ってるのよ。お土産買うぞー、って純粋な気持ちで買うのと、ご当地で売ってなかったから仕方なく、帰りにお土産売ってる街に寄って買うかー、って気分で購入のどじゃ、全然違うじゃない」

「……違うの？」

「……らしいな」

「この話を知ってからダフの街でお土産を選んだんじゃ、きつとお土産選びもおざなりになって、あの彫り物には巡り合えなかったわ」

「ダフの竜の彫り物、どれも一緒なようで実際ピンキリだからねえ」

「アルさんも買ったんですか」

アルさんとナーディアさんから、お土産選びのコツなぞというもの

の話が聞かされつつ。
やがてオレたち一行は、これから数日を過ごすことになる、ガルタ村の宿へと辿り着いた。

村の人に指示された、賢獣連れならここがいいよ、という宿は、これを宿と言っているのかどうなのか。

伝えられた場所にあったのは一軒の家屋で、宿として機能しているどころか、人が住んですらいらない空家だったので、近くをほっつき歩いていた村人に事情を説明したところ、すぐ近くの、空家の管理をしている人の家にまで案内してもらえた。

てつきりオレは改めて宿に案内し直してもらえると想像していたのだが、どうやらオレたちの宿は最初に辿り着いた空家で相違無いみたいで。

管理人の人の話によると、ジンのこともさることながら、オレたちの人数が人数なので、普通の宿に泊まるよりも、こっちの空家にまとめて泊まった方が都合がいいと考えてこっちへ案内されたんじゃないかとのこと。

普通の宿と違って家を借りるだけなので、炊事洗濯などの自分の世話は自分で、ということになるが。色々気兼ねせずに済みそうなのは非常に楽だと思ったので、こちらは了承。アルさんたちも了承。

そんなわけで、選定戦の期間中のみ、という限られた期間ではあるが、オレはじーさんの家を出てから初めて、宿屋でも野宿でもない、「家」という空間で数日を過ごすことになるのだった。

……だからといって特に何がどう、ということはないのだけれど、

なんだか少し、感慨深いものがあつた。

「正直、旅行中は私の出番なんてほとんど無いだろうなあ……」と思つていただけれど、ここにきてこんな役目が巡つてくるとはねえ。よし、少年、炊事洗濯は任せなさい」

「正直すげえ助かる」

「旅の途中、魔物退治とかお金稼ぎとか全て少年やカザネちゃん任せだったしね、雇われの身で遊んでばつかというのも多少心苦しいものがあるし、やることがあつてむしろ助かつたわよ、こちらとしても」

「そんなもん？」

わりとそういうの気にしないイメージが勝手にあつただけだな、ナーディアさんって。

「そんなもんよ。というか、人が何かやってるの見て、何も気にしないでいられる人って、そうはいないんじゃないかしら」

「それは……確かに」

何かやるかどうかはともかくとして、色々気にはしてしまつな、オシは。

得心するオシに、それに……と馬車から持ってきた荷物を片付けている、アルさんやニムニちゃんの方を見るナーディアさん。

「ニムニちゃんくらいの年頃の子が、あんまり外食や野外食ばかりつていうのもどうかと思つてたのよねえ。旅先だろうがなんだろう

が、お兄さん全然料理しないらしいし」

ニムニちゃんが言ってた、とジト目でアルさんの方を見ながらナーディアさん。

そんな視線に晒されて、困ったように笑いながら帽子の後ろ頭を抑えるアルさん。

「いやあ、料理とか全然駄目でね」

「……………。まあ、男手一つで育ててるみたいだし、仕方の無いことなのかもしれないけどね。でも丁度いいから、少年たちが選定戦やつてる間、こっちはこっちでカザネちゃんと一緒にニムニちゃんに、多少の家事を仕込んでおくことにするわ」

「…、ああ、構わないが」

「……………っ。」

同じく荷解きをしていたカザネが、話を振られて少し意外そうに頷き、ちまちまアルさんの手伝いをしていたニムニちゃんが、ぐ、と拳を握ってナーディアさんを見る。

なんかやる気っぽいな、ニムニちゃん。

というかすっかり打ち解けてんだなあ、女同士。オレに対しては未だに人見知りバリバリだったのに、ニムニちゃん。

「…ニムニがやる気なら、いいかな。それじゃ、短い間だけどニムニのことをよろしくお願いします。お二人共」

そんなニムニちゃんの様子を見て、僅かに目を細めたアルさんは、カザネとナーディアさんに向けて深く頭を下げる。

それに対してどん、豊かな胸に手をあてるナーディアさん。

「任せといて。選定戦が終わる頃には、手料理の一つは作れるくらいにしといてあげるわよ」

「うわそれすごい楽しみ！」

きらっきら目を輝かせるアルさんに、なんかもうほんと、この人安心してしまうくらい、妹以外興味無いんだろうなあ、と思うオレだった。

さして時間もかからず荷解きが終わり、夕飯にするにはまだ早い時間だったので、オレとアルさんは選定戦の主催者である、ガルタ村の村長の家へと挨拶しに行くことに。
選定戦の手続きもそちらで行っているということなので、あわよくば纏めて済ませてしまおう、という心積もり。

「にしてもニムニがあんなに打ち解けるとはなあ。選定戦中ニムニのことどうしようか迷ってたんだけど、助かったよ。彼女達と一緒に僕も安心だ」

「……ちなみに、もしオレたちが安心できない人たちだったら、どうするつもりだったんですか？」

アルさんと共に村長宅へと向かって歩きながら、先ほどの出来事について話すオレら。

そういう可能性も充分　　というか、そういう可能性の方が高かったと思うんだけど。

オレの質問に対して、帽子のつばを弄りながら、少し上向き加減にアルさん。

「安心できない加減にもよるけれど……とりあえず、宿を別けるのは当然として」

「はあ」

まあ、それくらいはするよな。

「あとは部屋からなるべく出ないように言いつけて、待っててもらうつもりだったけど……」

「成る程」

実際それくらいしかないもんなあ。聞くだけ愚問ってやつか。

「……でも、どうしても不安な場合は、主催者に相談して一緒に参加出来るように頼むつもりだったよ」

「そこまで心配ですか」

仮に許可が下りたとしても、危険度は参加した場合の方が高い気がするんだけどなあ。

勝ち抜ける可能性も低くなるし。

「いや、ニムニが心配ってのも当然あるけどね。……でもそれだけでなく、正直、預ける相手が安心できようができませんが、できるだ

けニムニから目を離したくはないんだよねえ」

「…うん？」

アルさんの何か含むような口調に疑問を感じて、それについて尋ねよう　とする寸前早く、アルさんが声をあげる。

「　お、周りの家より一回り大きな、赤い屋根の家。　あれが村長さんじゃない？」

「あ、本当だ」

村の人に伝えられていた、村長宅にまんま合致する家が視界の先に見えてきて、オレとアルさんの話題と意識はそちらへと移る。

見えてきた村長さんちは、なんかもうえらい目立つ家だった。

他の家より大きな家、というのもさることながら、真っ赤な屋根に非常に視線を惹かれる。

他の屋根が地の素材の色のままの、素朴な感じなのに対して、村長さんちだけ、塗料を塗りたくったかのように真っ赤だった。

目印としては間違えようのない、とてもわかりやすい目印ではあるが、牧歌的な周囲の中、その家は派手過ぎて目立っているというよりは浮いている。

他に伝えられていた特徴と合致する家は無いし、おかげであれが間違い無く村長さんの家だと判断することが出来たけど……。

……　一体あれは余所者に対する親切心からの目印なのか、家主の趣味なのか。

ほぼ間違い無く前者だとは思っけど、もしも後者だったら　この村の村長は相当愉快な人だろうなあ、と思う。

「……どつちが聞く？」

「……。そういうのはもうちょっと、子供の頃にたしなむ遊びだと思えます」

アルさんもオレと同じ感想を抱いたのか、少しわくわくした雰囲気ですんな提案をしてくる彼を、押し止める。

答えがどつちだろうが、それ聞いたら絶対気まずくなるじゃねえか。自ら人間関係に波風を立てるようなことはしたくなかったので、屋根についての疑問は流す方向で話を纏め、ごく普通に村長宅を訪ねるオレら。

出迎えてくれたのは、四十過ぎたくらいの穏やかそうな女性で、村長の奥さんだと言う。

オレたちが選定戦の参加希望者だということを知ると、とても驚いたかのように目を見開き、それから部屋の中へと招いてくれた。その反応に少なからず疑問を抱いたオレとアルさんだったが、とうの奥さんが居間っぽい部屋にオレたちを案内すると、さつさと村長を呼びに部屋を出て行ってしまったので、それについては聞けずじまい。

アルさんと二人、テーブルの席について顔を見合わせ、先ほどの奥さんの反応は一体どういうことなのか考えてみるも、たったこれだけの情報で答えなんて出る筈も無く。

村長さんが来た時に機を窺って聞いてみよう、ということでは話が纏まったあたりで、村長さんが部屋にやってきた。

村長さんは大柄で、髭の生えた、威厳のある中年といった感じの人で、特にアクが強そうな感じはしない人だった。

より具体的に言えば、屋根の色は他所者への目印として使ってそんな感じの、そんな人。
その村長さんも、部屋に入って早々、オレたちの姿を確認して、少し驚いたように顔を強張らせる。

「……………本当だったのか」

「？」

「？」

何が本当だったのか。言葉の意味が分からず首を傾げるオレとアルさん。

そんなオレたちの様子を見て、僅か呆然としていた村長さんは、気を取り直すように咳払いを一つ。

「おほん。いきなりすまない。あー、私がガルタ村の長をしているグンタだ。まずはようこそ、ガルタ村へ」

「冒険者をやっているアルフレートです」

「同じくアベルです」

席を立ち、互いに軽く自己紹介するオレら。
それぞれ握手を交わした後、椅子に座り直して早々、グンタさんが神妙そうな顔で口を開く。

「早速なんだが……………君たちは本当に、選定戦に参加するつもりかい？」

「……そのつもりですが」

アルさんが答える。

答えたアルさんの表情を見て、次いでオレにも意思を確認するように視線を向けてくるグンタさん。

それに対して首肯すると、そうか……とグンタさんは重々しく頷く。

「…何か問題が？」

なんとも重たげな村長さんの反応に、率直にそう訪ねるアルさん。

村長さんは、思い悩むようにあごひげを撫でた後、ゆっくりと口を開く。

「むしろ何か問題があったのか聞きたいのはこちらの方なんですが…

…その様子だと、君たちは何も知らないのか？」

「オレたちが？」

顔を見合わせるオレとアルさん。

問題と言われても、思い当たる節がまるでない。

しばし探り合うように黙りこくっていたオレたちだったが、やがてグンタさんが大きく息を吐くと、テーブルの上で手を組みながら重々しく口を開く

「……そうだな。まずこちらから話そうか」

「お願いします」

「とはいえ、順を追って話さねばならないような複雑な話でもないのだがな。率直に言ってしまうと、だ」

「はい」

「はい」

グンタさんは、多分な戸惑いを声音に含ませて、彼らの事情を話す。

「今年の選定戦参加者がね。異常に少ないんだよ。いや、少ない、というのは少し違うな。確かに例年に比べると参加者も少ないのだが、それ以上に参加表明をしても、辞退するものが続出している。もうまもなく選定戦が始まるというのに、今年の参加者は現在、君たちを含めても三組しかいないんだ」

……。

……。

あー、成る程。

第42話 村事情

グンタさんの話によると、毎年なんだかんだ余裕で十組以上の参加者が集まるといふ、選定戦。

それが今年は十組以下どころか片手で足りる数、しかも参加する者が少ないどころか参加を表明してから辞退する者までいるといふのだから、信奉する竜に手間をかけさせようとする者が減るといふ、村としてはむしろ歓迎するべき事態とはいえ、原因がまるであつた今回の異常事態に、長年選定戦の進行役をこなしてきたグンタさんは大いに戸惑ったといふ

参加しようとしてやってくる者が減っているのはまあ、いいとしても、わざわざこんな辺境の村までやってきて、参加表明までしてから選定戦が始まる前に棄権などという、わけのわからない行為。

そんなわけのわからないことをする理由を、棄権することを告げにきた者たちに聞いたらしいのだが、これがまたなんとも釈然としない理由ばかりだったらしく。

急用が出来た。体調が悪い。寝惚けて階段から転んで骨折れた。

選定戦は、昨今では興味本位、腕試し的な意味合いで参加する者が多いので、それらの理由もなくはない、といった程度に信憑性はあつたらしいのだけど、それも一組二組くらいまでのこと。

棄権することを告げに来た五組が立て続けにそんな、とつてつめたような理由で棄権すると言われたことで、流石にこれはちよつとおかしい、と考え始めるグンタさん。

とはいえ、何かがおかしい、と気付いた頃には棄権した者達は既に

村を去っていて詳しい話は聞けず。

ならば未だに参加の意志を表している者達に、何か変わったことは起きてないか聞こうと彼らが宿泊している宿を訪ねたところ、その彼らも二組を残して既に皆村から去っていったことを、訪ねた宿の主に告げられたという。

「話によると、彼らはまるで逃げ去るように夜に去っていったみたいでな、村には選定戦の参加者の他に竜観光に来た者などもあるから、村の者はまだこの事態に気付いていない者が多いが……小さい村だからね、このことはすぐに村中に広まるだろう。いたずらに話が広がって村の者達が困惑する前に原因を突き止めたのだが、残った者も何もおかしなことは起きていないと言っし……」

「……はあ」

派手にやってんなあ。

生返事をしながら思うオレ。

グンタさんの言う、参加者が棄権したり夜逃げ紛いに去っていくという事態は、十中八九先日会った鎧の女が原因だと思っただけど、これって言った方がいいんかな。

村で実際に例のこーしょーをしているところを見たわけではないから、絶対にそう、と言い切れないのがなんとまあ。

万が一冤罪だったら、多少申し訳無くはあるし。

「来たばかりの君たちに聞いても仕方ないとはわかっているが……内の理由はともかく、外の理由でもいいんだ。ここに来るまで、何かおかしなことがあったりはしなかったかね」

内？外？

首を傾げて ああ、参加者が棄権したのとは別に、村に来る参加

者自体が少ないことについてか、と思い至る。
どっちも原因は同じだと思っただが……さて。

どうしたもんか、と首を傾げたままにアルさんへと目を向けると、
アルさんは考え込むように顎に手を添えながら、グンタさんへと口
を開く。

「おかしなこと……と言われても、…ああ、他所の街道より、ダフ
からここに来るまで魔物と遭遇することが多かったんですが、それ
はそういうものなんですよね」

「うむ。この地は峡谷より向こうは魔物領となるからな。他所より
も魔物と遭う頻度は高いだろう。とはいえ、強力な魔物 君たち
が言うところの、一人で相手をする場合のCランク以上の魔物は、
ガルムベルドさまの眷属たちが払ってくださるから、高位の魔物と
は早々出くわすことはない筈だが……そういった魔物を見かけでも
したかい？」

「いえ、そういったことはありませんでした」

「……ガルムベルドさま？」

誰それ。

今まで聞いたことが無い単語が出てきたので、思わず口を挟んでし
まうオレ。

「ガンダス峡谷に棲む竜たちの主のことだよ。 白竜ガルムベル
ド。かの竜がガンダス峡谷に降り立った際に、自らそう名乗ったと
言われている」

「うむ」

「…成る程」

オレの疑問に答えてくれるアルさんと、それを肯定するグンタさんへえ、名前なんてあったのか。

…いやまあ、人と対話できるほどの知性があるなら、名前くらいあるか。

「……と、すみません。急に口挟んだりして」

「いや。……まあ、ともあれ。君たちがここに来るまでに、特にこれといった異変はなかったということだな」

「そうですね。ここに来るまでに、来たくなくなるような噂が回ったりということはありませんでした。とりあえず、僕たちが通ってきた範囲では」

「そうか…。わかった。ありがとう」

竜の名前に納得していたオレだが、そこからさらっと会話を終わらせたアルさんに視線を向ける。

アルさんにもオレが鎧の女に襲撃くらったことは話しておいたし、棄権者続出の原因が鎧の女にあるだろうことはアルさんも見当ついていると思うんだけど　話さないのか。

依頼主であるアルさんが話すつもりが無い以上、オレも言わない方がいいだろうな。

そう考えて、鎧の女のことには黙っておくことを決めるオレ。

こちらがそんな考えに行き着いている間にも、アルさんとグンタさ

んの会話は進行し、会話は選定戦に関する異変の話から、選定戦そのものへと移り変わっていく。

「……………では、選定戦は予定通り行われるんですね」

「うむ。参加者の多い少ないも、我々村の者の疑問も、選定戦自体には関係の無いことだからな。ガルムベルドさまの貴重な時間を割いていただく選定戦なのだ。我々の都合でガルムベルドさまをお待たせするわけにはいかん」

棄権者続出の原因がわからなかつと、選定戦参加者がどれだけ少なかつと、選定戦自体は予定通り行つというグンタさん。

自分達は二の次で、とにかく優先すべきは竜の都合とか、見上げた信仰心だと思つ。

百人届くかどうかの村程度の規模とはいえ、特に何かするわけではないのにそんだけの信望を集めるとか、グンタさんたちが崇める峡谷に棲む竜の主つて一体、どんな存在なんだろう。

「……………では、当初の予定通り選定戦は三日後に開催、ということですね」

「うむ。それまでに参加者が増えよつが減つが、雨だつが晴れだつが、開催日時については変わり無いな」

アルさんの問いかけに頷き答えるグンタさん。

……………が、だが、と更に、グンタさんは言葉を重ね。

「今この村でこついつた事態が起きている、ということはお覚えておいて欲しい。そして、もし君たちも選定戦を棄権したくなるよつ

な事に遭遇した場合は、出来れば村を去る時に棄権する本当の理由を教えてくれないか。その時はそれなりの謝礼も用意する」

「それは……構いませんが」

「すまないね。我々としてはあまり喜ばしいことではないのだが、今や選定戦に参加する為に村にやってくる者達は、我が村の貴重な収入源となっているのでな。こうまで急に参加者が減るのも問題になる」

いずれは無くしたいけれど、今急に参加者がやってこなくなるのも困る。

アルさんの言った通り、びつみよーなバランスでやってんだなあ、この村。

なんかもういつそ開き直って選定戦を村の売りにしちゃえばいいのに、とオレは簡単に思ってしまうんだけどな。

オレたちの白竜さまってこんなに凄いんだぜ！って広める感じに。

ああでも、そんなことしたら白竜の方が嫌がるのか。

いやもう、ほんとに、大した信仰心だ。

「了解です。では、選定戦開始までに何かありましたらそのように」

「よろしく頼む。…さて、こちらの話はこれで終わりだが そちらは何か聞きたいことはあるかね？」

無いならこれでお開きだ、とばかりに、グンタさんが一つ息を吐き、それを皮切りに真面目な話し合いの雰囲気が弛緩する。

問われて、一つ間を置いてから口を開くアルさん。

「あとは　ああ、選定戦で何を行うかは決まってるんですか？」

「　と、そうだ。言い忘れていたな。今回の選定戦で競う内容については、予想していた組数を大幅に下回ったこともあり内容を変更することにした。最初は近くの森に隠した木彫り物を一番最初に持ってきた者の勝ち、といった内容にする予定だったのだがな。下手すると三組以下で競うことになる今回の選定戦では、あの広大な森を探し回っていたらどれだけ時間がかかるかわからん」

森ってーとジンと散歩した時の、あの森か。

上空から見てもめちゃくちゃ広がったなあ、あの森。

「あの森を、ですか……」

うわあ、って顔を顰めてしてオレが言うと、うむ、と頷きグンタさん。

「以前何度かやったことがあるのだがな、なんだかんだで毎回一週間以内に誰かしらが探し当ててきたぞ。　　が、まあ、それも二十人とか三十人とかで探した場合だからな。十人以下の選定戦の内容としては不適切だろう」

「……ですね」

頬を引き攣らせながら同意するアルさん。

一週間以上も森の中で探し物とか、すっげえイライラするんだろうなあ。

しかも探してる最中に魔物出るわ、夜になったら暗くて何も見えんわ、探す範囲が広すぎて運の要素が強いわで、本気で勝ちを狙ってる人ほどストレスが凄まじいことになりそうな内容だ。

そんな内容の選定戦に勝つとか、正直Aランクの冒険者二人相手に戦って勝つより確実性が乏しい気がするので、これを取り止めになったのはこちらとしてもありがたい。

もしもオレがそんなことすることになっていたら、きっとオレは途中でイライラし過ぎて周囲の森を消し飛ばしただろう自信がある。

この件に関しては鎧の女に感謝　　だな。うん。

「新しい内容については、選定戦当日　つまり三日後、参加者皆が集まった場で発表する。誰かに内容を先に教える、などということとはしないので、安心して当日を待つといい」

「了解です」

「了解です」

頷くオレら。

「選定戦の内容については以上だ。　他には何かあるかね？」

「僕は無いです。　アベルくんは？」

「オレも特には……、……あ。選定戦とは全然関係無いんですけど、一ついいですか？」

「なにかね？」

「グンタさんたちがそこまで信奉する、峡谷の主、白竜ガルムベルド　　さまって、どんな竜なんですか？」

呼び捨てにしようとして、グンタさんに軽く睨まれたので、慌てて言い直すオレ。

完全に興味本位な質問に、そんな問いを向けられるとは予想していなかったのか、グンタさんは僅かに目を見開き、それから誇らしいものを自慢するように、笑みを浮かべながら言った。

「選定戦を勝ち抜き、直にお会いすればわかる。真に強大な存在というのは、どんな言葉で飾っても言い尽くせないものなのだと、三十年前、選定戦を勝ち抜きガルドさまと出会って私は感じたよ」

この村の人間はそんな者ばかりだ、とグンタさんは楽しげに言った。

……ああ、だからちょっと散歩したら魔物と遭遇するような村に、この村の人々は住んでられるのか。

グンタさんの家からおいとまして、アルさんと共に帰り道。
話す話題はやはり、選定戦のことについてで。

「……鎧の女のこと、話さなかったんですね」

「……僕はむしろ、アベルくんが話すかな、と思ってただけど、まあ、どっちでもって感じ。言っても言わなくても」

「アルさんが言うつもりなさそうだったんで。この村でやらかしてるとこ見たわけでもありませんし」

「既に棄権した人たちが村を去っている以上、確かめようもないしねえ。それにあの口振りからして本当に原因が知りたいだけ、って感じで、鎧の女性のことを話したところで彼女の組を失格にー、とかってことも出来無さそうだしね」

「 ああ、確かに」

オレたちに対しても棄権するのは構わないから理由だけ教えてけ、って感じだったなあ、グンタさん。
参加するしないはどっちでもよさそうだった。

「最悪、原因がわかったグンタさんたちが、今年彼女を竜に会わせるときや来年からは元通りってことで、今年の選定戦の勝者は彼女の組に なんてことを考えられても困るし。そう考えると話さない方が良かったのかな」

「無茶苦茶な話ですけど、無い。と言い切れないのがなあ……」

有り得そうな話だから困る。

予定されていた選定戦の内容からしてアレな感じだし、ぶっちゃけ竜に会わせるやつを一組に絞れば村側としてはその一組が誰でも構わないんだろうな、とは思う。

村のことを考えると、選定戦を荒らしてるやつをさっさと会わせてやって問題解決、というのは無いどころか十分有りな考えじゃなからうか。

「信奉する白竜が定めた選定戦を、それが始まる前から荒らし回っ

てるんだし、そんなやつは失格だー、つてしてくれる可能性もあったらうけどね。話しててそこらへん、あの村長さんがどう動くのか読みきれなかったから、とりあえず保留にしといた感じ」

「成る程」

話しながら意外と色々考えてたんだな、この人。

色々冗談めいたふざけたことを言う人だけど、選定戦を是が非でも勝ち抜くって気持ちは本気みたいだな、とアルさんに対する認識を改めるオレ。

オレに鎧の女たらしこめとか、確実にふざけてると思ったけれど、あれも実は本気で言ってたんだらうか、この人。

「でもまあ アベルくんから話を聞いていたけれど、まさかここまでやる人だとはなあ…その鎧の女性。ライバルを減らしてくれたのはこちらとしてもありがたいけど、それだけにあちらさんの本気具合もわかってしまうのが、ね」

「ですね。ここまでしている以上、優勝譲る気なんてこれっぽっちも無いんでしょうね。あちらさん」

「だよねえ。これで鎧の人の相方がへっぽこ なんてことは先ず無いだらうし。うん、かなり分が悪いね、今回」

どうしたもんかなあ、と首筋を撫で擦りながらぼやくアルさん。

状況の不利さは理解していても、だからといって諦める様子がまるで無いあたり、すごいな、この人。

正直今年は諦めたらどうですか、と言いたい気分だったが、その言葉を口に出すのは、止める。

依頼主が諦めていないなら、オレもなんとかして勝ち抜く手段を考

えないとな。

「……せめて事前に選定戦の中身がわかっていたら、対策を考えたりとか出来るんですけどね」

「そうなんだよね……！ まともな腕比べじゃこっちが不利だろうし、そういったところで小細工するしかないのになあー！」

うあー、と天を仰いでわめくアルさん。

「これならまだ、最初の予定だった森の中で探し物の方が良かったかもしれない……！」

聞いた時はすつげえ嫌そうな顔をしてた話すら惜しみだすアルさんの様子に苦笑いしながら、オレもどうしたものか、なにかしかを考え始めよう。としたところで、オレの視界の端に、きらきらと煌く何かが映る。

「……………ん？」

何となく気にかかってそちらの目を向けると、視界に映ったのは、輝くような光沢を放つ、金色の長髪。の、長身の女性の後姿。腰まで届くほどのその長い金髪に、何か既視感を覚えてじつと凝視していると、すらっとしたズボンにシャツといったラフな姿をしたその女性は、こちらの視線を感じたのか、オレの方へと向き直る。

「……………ん？」

「……………ん？」

見詰め合うオレとその女性。

「……………」

「……………」

互いに視線を交し合ったまま、沈黙。

いや、いるとはわかってたけどさ。

顔見た瞬間色々わかったけどさ。

「……………うん？」

無言のまま見詰め合うオレとその女性の様子に、遅ればせながら気付いたアルさんが、怪訝そうな声をあげる。

それでも、オレと女性は互いから視線を外すことなく。

やがて数秒ほどの間を置いて、女性の方が肩を落とすように疎めながら溜息を吐き、視線を一度足元へ。

そして再び　オレの方を見たときには、

「……………私は棄権しろ。と言った筈だがな。やはり言うだけだな

く、しっかり躡ておくべきだったか」

「　　よう。数日振り。随分無茶苦茶やってるみたいだな、あんな」

鎧を着ていない鎧の女が、射抜くように鋭い目つきで睨みつけていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4585t/>

オレが異世界で獣とランページ

2011年11月21日23時35分発行